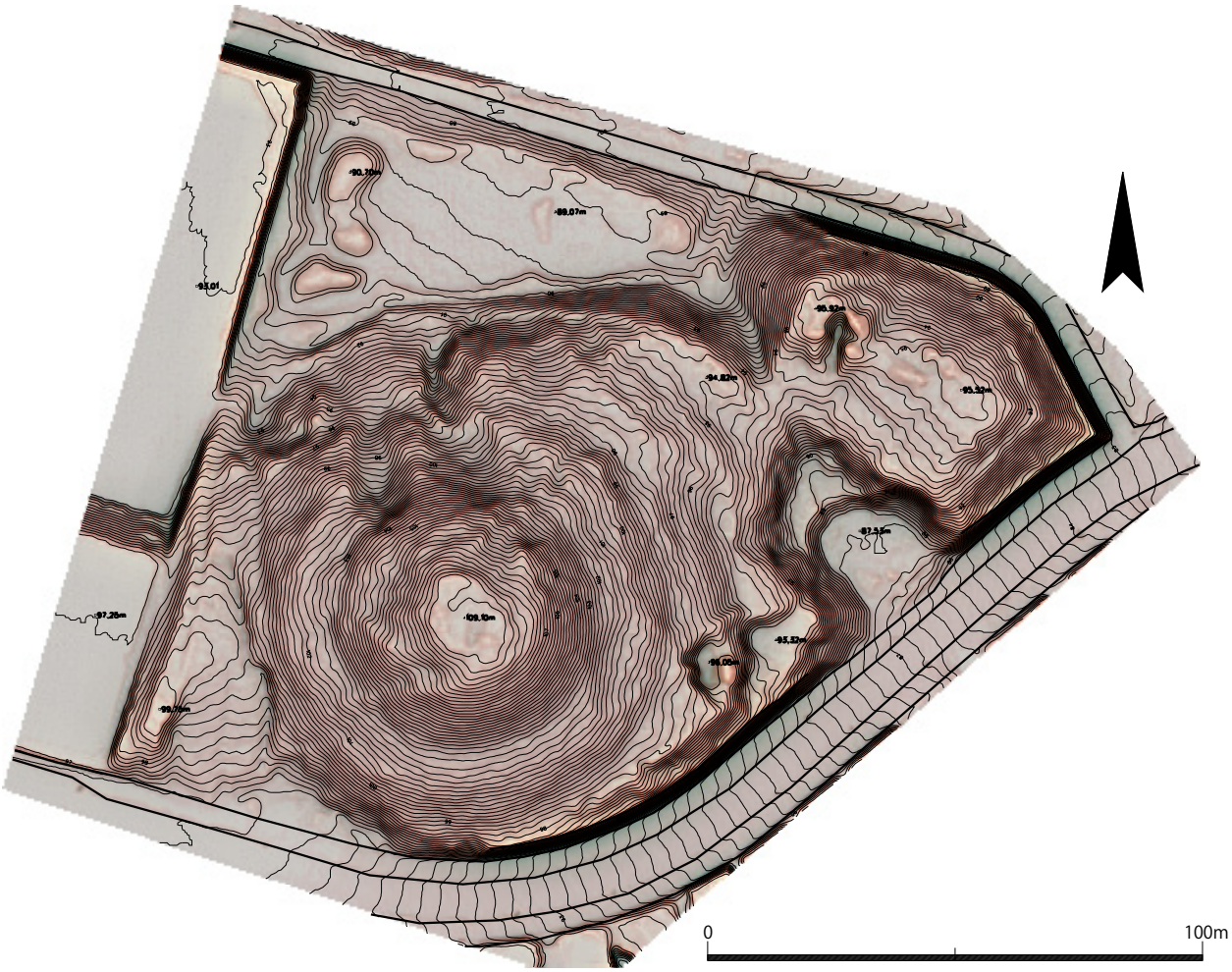
奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 30（2018）年度

奈良市教育委員会

2021

口絵１　菅原東遺跡１～３号埴輪窯と宝来山古墳（垂仁天皇陵古墳）（北東から）
菅原東遺跡埴輪窯跡群・平城京跡（右京三条二坊十五坪）の調査　　HJ第371次（本文10～21頁）



口絵２　富雄丸山古墳等高線図(1 ／ 1,500)　　富雄丸山古墳の調査　TOM 第１次(本文 56 ～ 65 頁)

口絵３　富雄丸山古墳立体画像(南東から)　　富雄丸山古墳の調査　TOM 第１次(本文 56 ～ 65 頁)

口絵４　富雄丸山古墳　造出し北東斜面の葺石と埴輪列（北から）　富雄丸山古墳の調査　TOM 第３次　E 発掘区（本文 56 ～ 65 頁）

口絵５　富雄丸山古墳　後円部埋葬施設の副葬品　　富雄丸山古墳の調査　TOM 第２・３次　A 発掘区出土（本文 56 ～ 65 頁）

口絵６　軒丸瓦　　（平城京跡(右京四条四坊十二坪)・平松廃寺の調査　HJ 第 731 次出土）（本文３～９頁）

口絵７　平松廃寺Ａ群の瓦（HJ 第 129・705 次出土）（本文３～９頁）

口絵８　平松廃寺Ｂ群の瓦（ＨＪ第 129・705・731 次出土）（本文 ３～９頁）

口絵９　平松廃寺Ｃ群の瓦（HJ 第 705・731 次出土）（本文３～９頁）

口絵 10　発掘区第 3 区全景（北東から）　　平城京跡（左京九条三坊五・六坪）の調査　　HJ 第 727 次（本文 38 ～ 48 頁）

例　言

1．本書は平成 30（2018）年度に奈良市教育委員会が主として埋蔵文化財調査センターで実施した埋蔵文化財の発掘調査・保存活用・学習推進事業の概要と研究成果を、その後の遺物整理等の成果を加え、収録したものである。

2．平成 30（2018）年度～令和２（2020）年度の埋蔵文化財に係る事業は、下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局　教育部（平成 30 年度は教育総務部）

文化財課

課　　長　　松浦五輪美（平成 30 年度は課長補佐）
　　立石堅志（平成 30 年度）

記念物係

係　　長　　池田裕英
主　　任　　久保邦江
主　　務　　原田香織
再任用職員　篠原豊一

埋蔵文化財調査センター

所　　長　　鐘方正樹（平成 30 年度・令和元年度は所長補佐、平成 30 年度は管理係長兼務）
　　三好美穂（平成 30 年度・令和元年度）
所長補佐　　中島和彦（平成 30 年度・令和元年度は調査係長）

管 理 係

係　　長　　奥和田佳邦（令和元年度から）
主　　任　　松村健次
主　　務　　山前智敬　　新井信介（平成 30 年度・令和元年度）

調 査 係

係　　長　　森下浩行（平成 30 年度・令和元年度は主任）
主　　任　　秋山成人　　安井宣也
主　　務　　吉田朋史
主　　事　　村瀬　陸
技 術 員　　髙岡桃子　　桑原一徳（平成 30 年度）

活 用 係

係　　長　　原田憲二郎
主　　務　　永野智子　　大窪淳司（平成 30 年度・令和元年度）

3．事業を実施するにあたっては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4．奈良市教育委員会が実施する発掘調査は、本調査では、遺跡ごとの略記号と通算番号（調査次数）を、小規模調査・試掘調査では、年度ごとに番号を付して整理している。本書で報告する遺跡は、平城京跡（略記号ＨＪ）、史跡大安寺旧境内（同 DA）、西大寺旧境内（同 SD）、新薬師寺旧境内（同 SY）、富雄丸山古墳（同 TOM）、奈良町遺跡である（奈良町遺跡は、前述の遺跡と重複するため、略記号は付していない）。

5．平成 30（2018）年度に実施した発掘調査は 15 件、小規模調査・試掘調査は 8 件である。それぞれ一覧表と位置図に示したとおりである。

6．平成 30（2018）年度に実施した調査のうち、平城京跡第 722 次調査、同第 726 次調査、同第 729 次調査は、本書では報告しない。また、西大寺旧境内第 41 次調査は、平成 29（2017）年度に実施した同第 40 次調査と合わせて報告済である。

平成 8（1997）年度に実施した平城京跡第 371 次調査、平成 30（2018）年度～令和元（2019）年度に実施した平城京跡第 727 次調査は、本書で報告する。

富雄丸山古墳については、平成 29（2017）年度に実施した第 1 次調査（測量調査）、令和元年度に実施した第 3 次調査をあわせて本書で報告する。

7．本書に掲載した調査地位置図については、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を、発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」（1/2,500）を使用している。

8．奈良市内では、奈良市教育委員会以外の他機関も発掘調査を実施しており、これを区別するため、本書では下記の機関が実施した調査について、機関の略記号と調査次数・番号または調査年を組み合わせて表記している。

奈良市教育委員会	―	市　次数
独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所）	―	国　次数
奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所	―	県　番号または調査年

9．本書で使用した遺構番号は、特に示さない限り、調査ごとに付した仮番号である。遺構の種別を示す以下の記号と番号を組み合わせて表記している。

SA（柱列・塀）　SB（建物・門・橋）　SD（溝・濠・溝状遺構・暗渠）　SE（井戸）
SF（道路）　SK（土坑）　SX（その他）

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

10．本書で使用する遺物名・形式・型式は、特に示さない限り、下記の刊行物に準拠している。

奈良時代　軒　瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会　1996
土　器：『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』奈良国立文化財研究所　1976
『平城宮発掘調査報告書ＸＩ』国立文化財研究所　1982
古墳時代　須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
弥生時代　土　器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所　2003

11．本書では、遺構等の位置を平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）の数値で示した。表・図では、単位（m）を省略している。

12．調査に関する記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

13．本書の作成は、令和２（2020）年度に埋蔵文化財調査センター所長　鐘方正樹の指導のもとで行い、埋蔵文化財調査センター職員全員が分担した。文責は各文末に記した。所長補佐　中島和彦の校閲のもと、編集は、森下浩行・秋山成人が担当した。

平成 30（2018）年度実施　埋蔵文化財発掘調査一覧

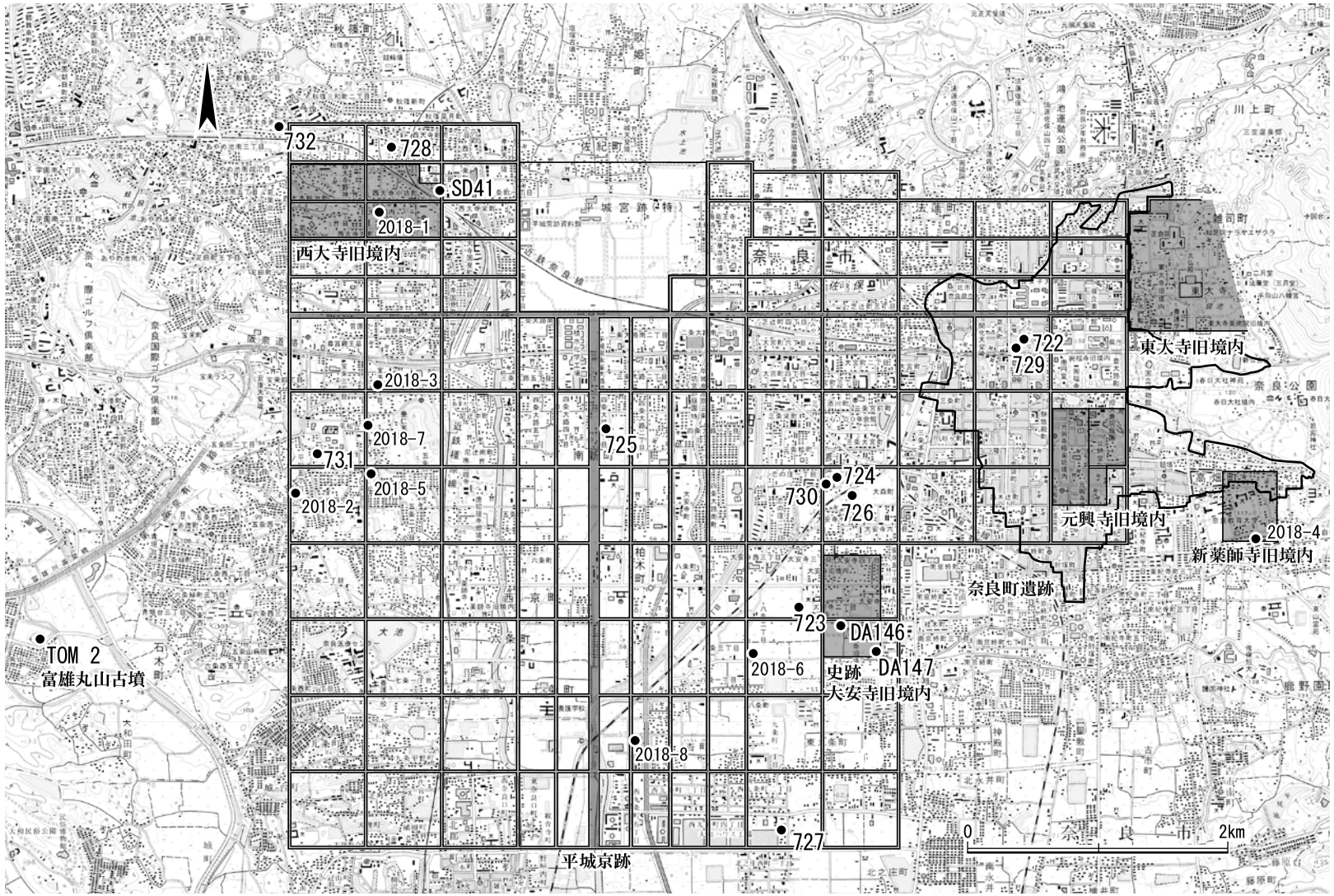
調査記号		遺跡名	調査地	調査期間	調査面積㎡	調査担当者	調査原因･事業内容／届出者･申請者等	事業区分	届出等受理年度･番号
1	HJ722	平城京跡(左-3-6-10)、奈良町遺跡	中筋町35番3	2018.4.16～4.27	49	中島	共同住宅新築／個人	緊急･原因者	H29.3438
2	HJ723	平城京跡(左-6-3-12)	大安寺二丁目48-1番地、他	2018.4.23～5.22	348	吉田	宅地造成／やまと不動産	原因者	H30.3540
3	HJ724	平城京跡(左-5-4-1)	大森西町187-2、他4筆	2018.5.30～7.2	218	安井･髙岡	JR奈良駅南特定土地区画整理事業／奈良市長	公共	H12.3145
4	HJ725	平城京跡(左-4-1-2･四条条間路)	四条大路三丁目979番1	2018.6.11～6.22	200	中島･桑原	宅地造成／(株)日本ハウスホールディングス	原因者	H30.3017
5	HJ726	平城京跡(左-5-4-7)	大安寺七丁目671-1、他12筆	2018.7.18～11.9	1,204	安井･髙岡	JR奈良駅南特定土地区画整理事業／奈良市長	公共	H12.3145
6	HJ727	平城京跡(左-9-3-5･6)	西九条町四丁目1番地の11、他2筆	2018.7.23～2019.5.17	8,273	吉田･桑原	研修センター新築／大和ハウス工業(株)	原因者	H30.3487
7	HJ728	平城京跡(右-北辺-3-6)	西大寺北町一丁目387-2、他4筆	2018.10.2～10.10	120	中島	共同住宅新築／(株)プラチナステージ	原因者	H30.3094
8	HJ729	平城京跡(左-3-6-10)、奈良町遺跡	西御門町15-1	2018.10.15～11.16	100	中島	店舗新築／大和情報サービス(株)	原因者	H30.3186
9	HJ730	平城京跡(左-5-4-1)	大森西町191-1	2018.12.12～12.26	85	安井	JR奈良駅南特定土地区画整理事業／奈良市長	公共	H12.3145
10	HJ731	平城京跡(右-4-4-12)、平松廃寺	平松三丁目657番の一部、他7筆	2018.12.20～12.26	90	中島･森下･髙岡	宅地造成／(株)八州エイジェント	原因者	H30.3293
11	HJ732	平城京跡(右-北辺坊･西四坊大路)	西大寺赤田町二丁目812-1、他	2019.2.25～2019.3.15	120	安井	大和中央道街路整備単独事業／奈良市長	公共	H24.3045
12	DA146	史跡大安寺旧境内	東九条町1301-1、1302-1、1564-1	2018.9.5～11.15	207	原田	範囲確認調査／奈良市教育委員会教育長	緊急	H30.1010
13	DA147	史跡大安寺旧境内	東九条町1417番	2018.10.1～10.22	118	森下･秋山	個人住宅新築／個人	緊急	H30.1065
14	SD41	西大寺旧境内･平城京跡(右-1-3-2)	西大寺本町229番1、他2筆	2019.1.15～2.8	240	髙岡	店舗新築／プレステ(株)	原因者	H30.3339
15	TOM2	富雄丸山古墳	丸山一丁目1079番地の239	2018.12.3～2019.1.31	242.5	永野･村瀬	範囲確認調査／奈良市長	緊急	H30:1077

※平城京跡に付している(○-○-○-○)は、○京○条○坊○坪の略である。

平成 30（2018）年度実施　小規模調査・試掘調査一覧

2018-1	西大寺旧境内	西大寺新田町541番1	2018.6.7、8、14	58	森下･秋山･吉田･桑原	個人住宅新築／個人	原因者	H29.3289
	調査結果：遺構確認されず。							
2018-2	平城京跡(右-5-4-15･16)	五条畑一丁目600-1　他	2018.7.10	28	森下･吉田･桑原	宅地造成･賃貸住宅新築／(株)エターナル	原因者	H30:3110
	調査結果：遺構確認されず。							
2018-3	三条大路、兵庫山古墳隣接地	宝来二丁目801-6	2018.7.30	1	中島･森下	個人住宅新築／個人	緊急	H30.3196
	調査結果：室町時代の溝を確認。							
2018-4	新薬師寺旧境内	高畑町181番4	2018.8.2、3	90	中島･森下･秋山	宅地造成／(株)日本中央住販	原因者	H30:3141
	調査結果：遺構確認されず。							
2018-5	平城京跡(右-5-3-16)	平松二丁目224番1の一部	2018.10.3～5	30	鐘方･髙岡	宅地造成／(株)レーブ	原因者	H30:3245
	調査結果：遺構確認されず。							
2018-6	平城京跡(左-7-3-2)	八条二丁目88番1、他3筆	2019.2.14	30	森下･秋山･髙岡	保育園新設／(福)バルツァ事業会	緊急	H30:3281
	調査結果：奈良時代の柱穴、溝を確認。							
2018-7	平城京跡(右-4-3-14)	平松一丁目835番1、836番1、836番2の各一部	2018.3.6、7	66	鐘方･中島･髙岡	個人住宅新築／積水ハウス(株)	原因者	H31.3521
	調査結果：奈良時代の柱穴、近代の達磨窯3基を確認。							
2018-8	東一坊坊間路	杏町216-4、216-2、223-1、217-1	2019.3.20	67	森下･安井･髙岡	物流倉庫新築／五条運輸(株)	原因者	H31.3522
	調査結果：奈良時代の路面及び側溝を確認。							

※平城京跡に付している(○-○-○-○)は、○京○条○坊○坪の略である。



平成 30 年度 調査地位置図

目　次

第１章　　平成 30（2018）年度　埋蔵文化財発掘調査概要報告

１．平城京跡（右京四条四坊十二坪）・平松廃寺の調査　　第 731 次…… 3
２．菅原東遺跡埴輪窯跡群・平城京跡（右京三条二坊十五坪）の調査　　第 371 次 ……10
３．平城京跡（右京北辺三坊六坪）の調査　　第 728 次 ……22
４．平城京跡（右京北辺坊・西四坊大路）の調査　　第 732 次 ……24
５．平城京跡（左京六条三坊十二坪）の調査　　第 723 次 ……27
６．平城京跡（左京四条条間路）の調査　　第 725 次 ……32
７．平城京跡（左京五条四坊一坪）の調査　　第 724・第 730 次 ……34
８．平城京跡（左京九条三坊五・六坪）の調査　　第 727 次 ……38
９．史跡大安寺旧境内の調査 ……49
（１）　塔院北門・六条大路の調査　　DA 第 146 次……50
（２）　寺域東辺・花園院推定地の調査　DA 第 147・148 次 ……54
10．富雄丸山古墳の調査　　TOM 第１・２・３次……56
11．平成 30 年度実施　遺跡有無確認踏査一覧……66
12．平成 30 年度実施　工事立会一覧……66

第２章　　平成 30（2018）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告 ……75

第３章　　資 料 報 告

１．平城京出土の刺突痕がある土製品 ……89
２．菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器 ……97

第1章　　平成30(2018)年度 埋蔵文化財発掘調査概要報告

1．平城京跡（右京四条四坊十二坪）・平松廃寺の調査　第 731 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 30 年 12 月 20 日～ 12 月 26 日
届出者名　株式会社　八州エイジェント	調 査 面 積　93㎡
調 査 地　平松三丁目６５７番の一部　他７筆	調査担当者　中島和彦　森下浩行　髙岡桃子

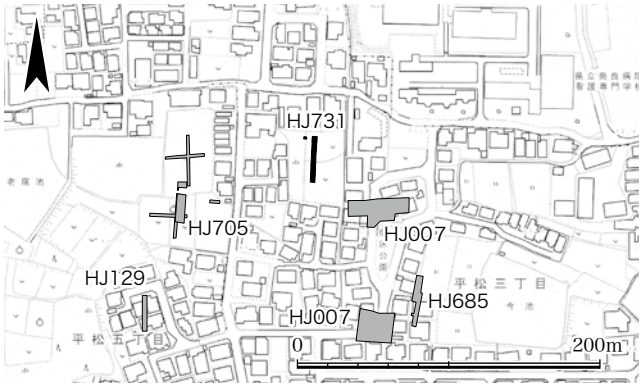
Ⅰ．はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によれば右京四条四坊十二坪の北東部にあたる。また周辺では従来古瓦が採取されており、当坪内に平松廃寺が推定されている。

十二坪内の発掘調査は、平成 28 年度に奈良市が調査地西側で実施しており、瓦が多量に出土する溝を検出し、周辺に平松廃寺に関する遺構が存在することが推定された（HJ 第 705 次調査）。

今回の調査は、調査地の北側に想定されている四条条間南小路の検出及び、平松廃寺関連遺構の有無の確認を目的に、道路建設部分に東西３m、南北 30 mの発掘区（東発掘区）と東西 2.0 m、南北 1.5 mの発掘区（西発掘区）を設定して実施した。発掘調査後、下水管埋設部分の立会調査（H30.3293）を行い、整地層の西側への広がりを確認した。

さらに令和２年度には、発掘調査隣接地の建物建築に伴う発掘届が順次提出された。西側隣接地の届出地（R02.3425）においては、試掘調査（試掘 20–05）を実施して遺構面の残存状況を確認し、建物の基礎構造を遺構面に影響ないものとした。この届出に伴う切土工事に際しては、立会調査を実施し記録を作成した。以下これらの調査成果をまとめて報告する。

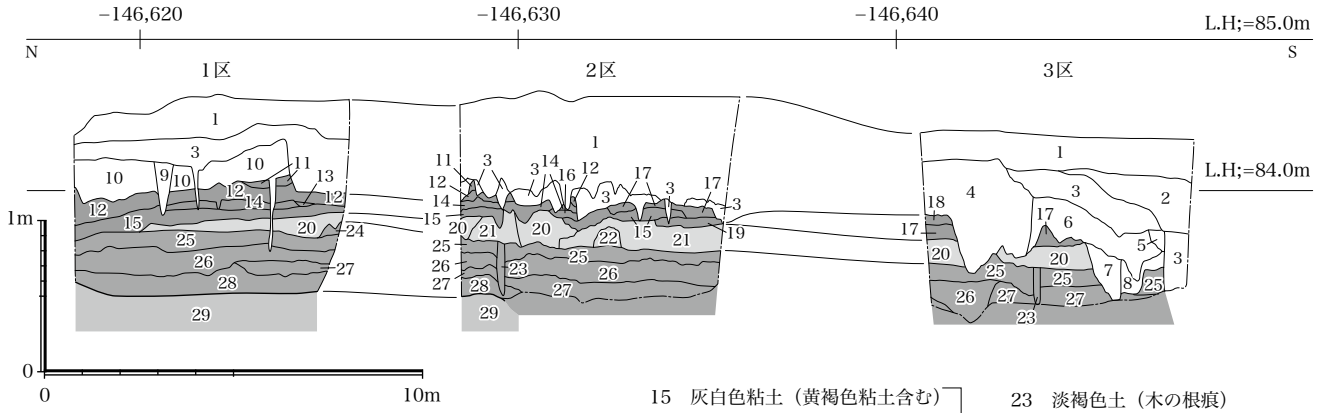


HJ 第 731 次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅱ．基本層序

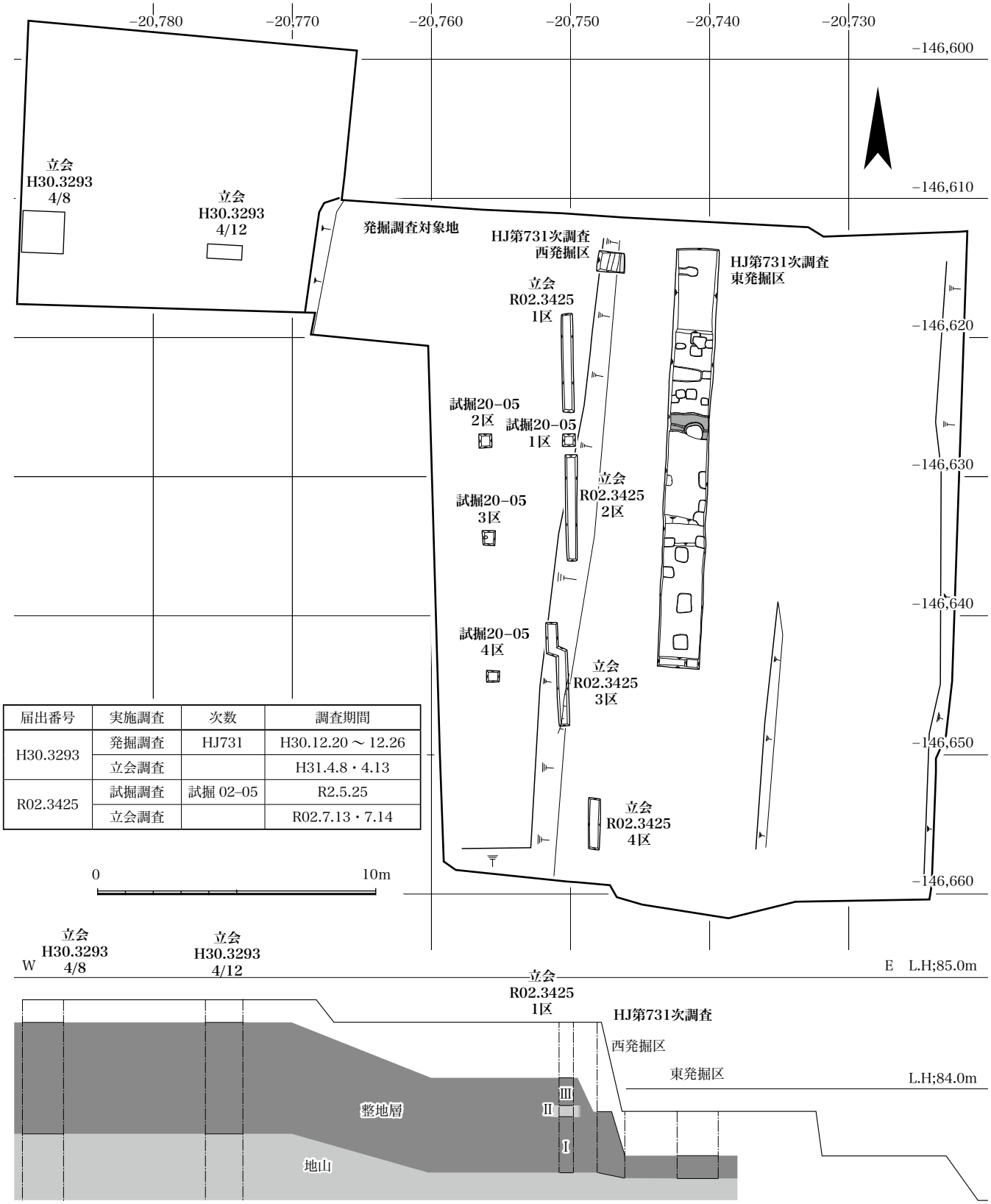
調査地は西から東へのびる丘陵の南側にあたり、調査前は北西から南東方向に雛壇状に下降する宅地と耕作地であった。敷地は大きく東西方向に４筆に分かれ、東西の地表面の標高は、西から 84.8m、84.6m、83.8m、83.4m あり調査地中央の段差が 0.8m と最も大きい。

調査地内のおおよその層位は、地表下 0.2 ～ 0.5 mで奈良時代の整地層となり、その下で地山となる。地山面の標高は調査地西端で 83.6 m、発掘区北端で 83.2 m、発掘区南端で 81.7 mと約２mの比高差がある。地山面の下降に合わせて整地層の厚さも、西端で 1.0 m、発掘区北端で 0.2 m、発掘区南端で 1.4 mと変化する。



1　盛土
2　地盤改良土
3　耕作土
4　耕作土
5　明黄灰色砂質土
6　淡茶褐色土（耕作土含む）
7　耕作土（木根多く含む）
8　黄灰色土
9　オリーブ褐色砂質土
10　黄褐色砂質土
11　茶褐色粘質土（黄白色粘土含む）
12　明茶褐色粘質土
13　黄褐色砂質土
14　淡茶褐色土（灰白色土含む）
（整地層Ⅲ）
15　灰白色粘土（黄褐色粘土含む）
16　淡茶褐色土
17　黄褐色粘質土
18　明黄褐色粘質土
19　明黄褐色粘土（白色粘土含む）
（整地層Ⅲ）
20　白色粘土（赤褐色粘土含む）
21　淡赤褐色粘土（白色粘土含む）
22　白色粘土（黄褐色土含む）
（整地層Ⅱ）
23　淡褐色土（木の根痕）
24　黄褐色粘土
25　茶褐色土
26　淡茶褐色土
27　褐色土
28　明茶褐色土
（整地層Ⅰ）
29　灰白色粘土（黄褐色土含む）

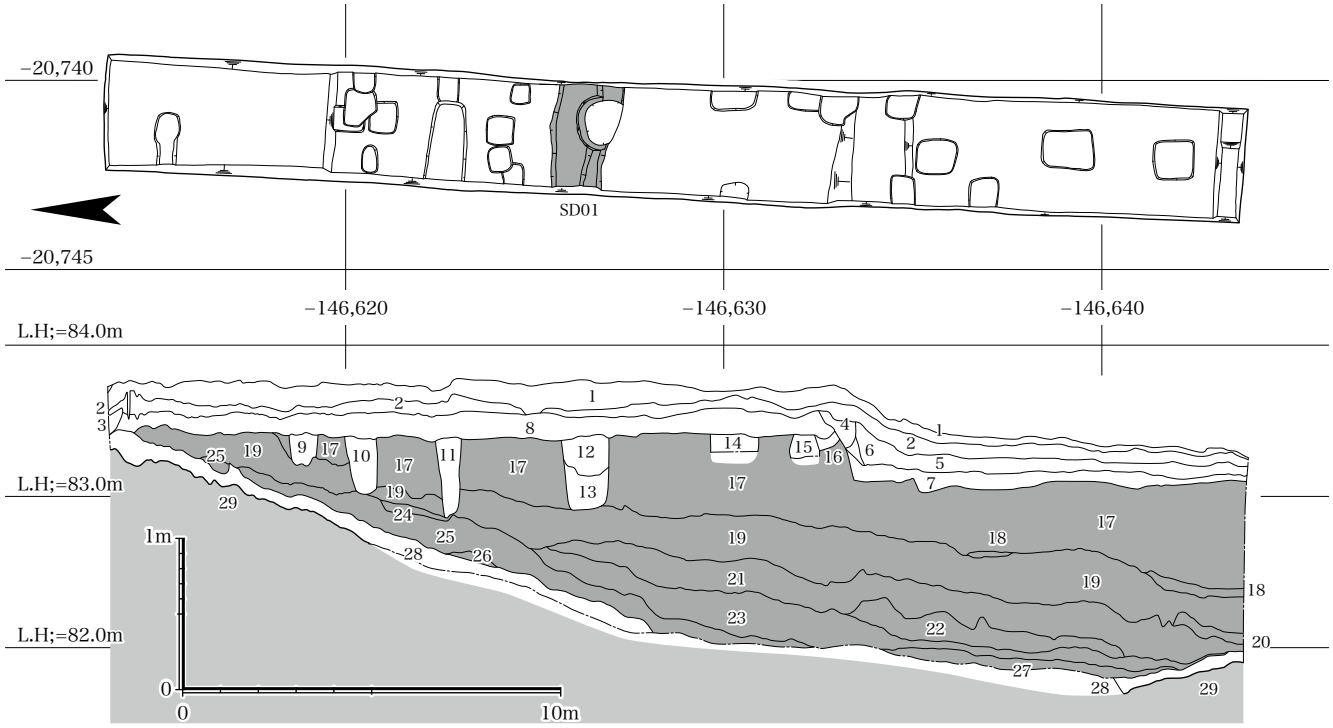
立会調査 R02.3425　西壁土層図（縦：1/50・横：1/200、南北を反転して図示）



届出番号	実施調査	次数	調査期間
H30.3293	発掘調査	HJ731	H30.12.20 ～ 12.26
	立会調査		H31.4.8・4.13
R02.3425	試掘調査	試掘 02−05	R2.5.25
	立会調査		R02.7.13・7.14

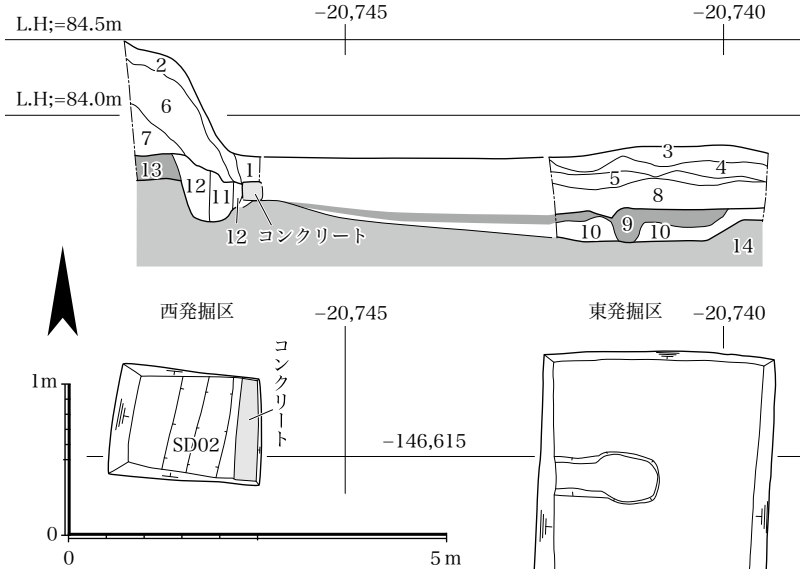
HJ 第 731 次調査　発掘区配置図（1/400）・東西土層概念図（縦：1/50・横：1/400）

立会調査 R02.3425 では、整地層が大きくⅠ～Ⅲの 3 層に分かれることが確認できた。一番下の整地層Ⅰは、厚さ 0.1 m程の均質な茶褐色系の土が数層堆積し、地山が南へ下降するに従い整地層の厚さも増してゆく。整地層Ⅱは白色粘土を主体とした層で、厚さは約 0.1 mありほぼ水平に堆積する。整地層Ⅲは、白色粘土を含む黄褐色系の土の薄い層が幾層も複雑に堆積する。版築とまでは言えないが、比較的丁寧な地業が想定できる。



1　黒褐色砂質土（耕作土）
2　灰褐色砂質土
3　暗茶褐色砂質土
4　明茶褐色砂質土
5　茶褐色砂質土
6　暗茶褐色砂質土
7　暗褐色砂質土
8　茶褐色砂質土
9　明褐色砂質土　（柱穴？）
10　茶褐色砂質土　（柱穴？）
11　茶褐色シルト　（柱穴？）
12　暗茶褐色砂質土（SD01）
13　茶褐色砂質土　（SD01）
14　茶褐色シルト　（柱穴？）
15　茶褐色シルト　（柱穴？）
13　茶褐色砂質土　（柱穴？）
17　褐色砂質土
18　暗褐色シルト
19　明黄褐色シルト
20　明褐色シルト
21　暗褐色シルト
22　茶褐色シルト
23　明茶褐色シルト
24　茶褐色シルト
整地層
25　明茶褐色シルト
26　暗褐色シルト
27　オリーブ黄色シルト
整地層
28　暗茶褐色シルト（旧表土層）
29　明茶褐色砂質土（地山）

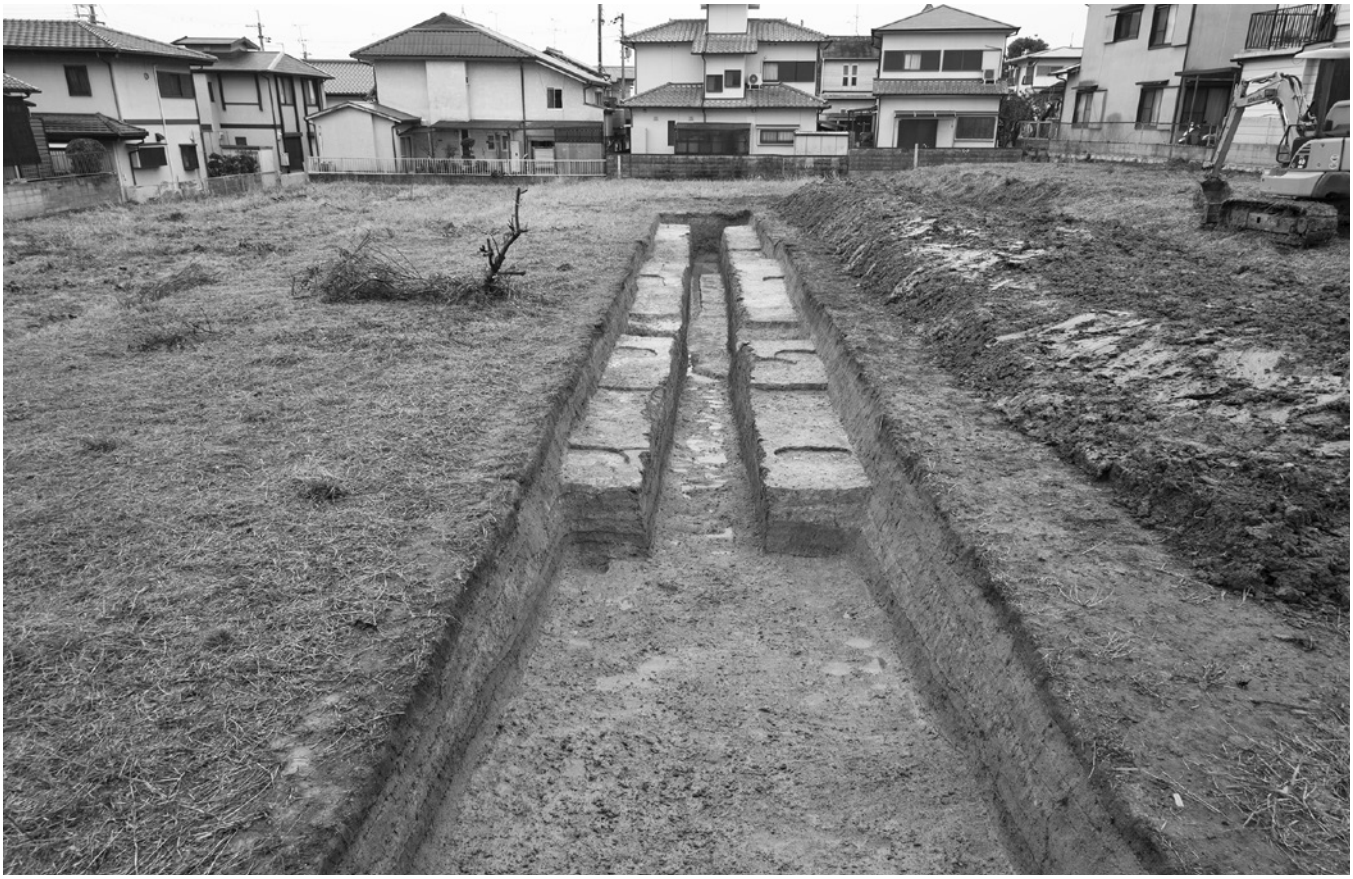
HJ 第 731 次調査　東発掘区平面図（1/200）・東壁土層図（縦：1/50・横：1/200）



1　黒褐色砂質土（耕作土）
2　黒褐色砂質土（耕作土）
3　茶褐色砂質土（耕作土）
4　黒褐色砂質土（耕作土）
5　灰褐色砂質土
6　黄褐色砂質土
7　黄褐色粘質土（瓦多量に含む）
8　暗茶褐色砂質土
9　明黄褐色シルト
10　暗茶褐色シルト（旧表土層）
11　黄褐色シルト（SD02）
12　褐灰色シルト（SD02）
13　黄褐色シルト
14　明茶褐色砂質土（地山）

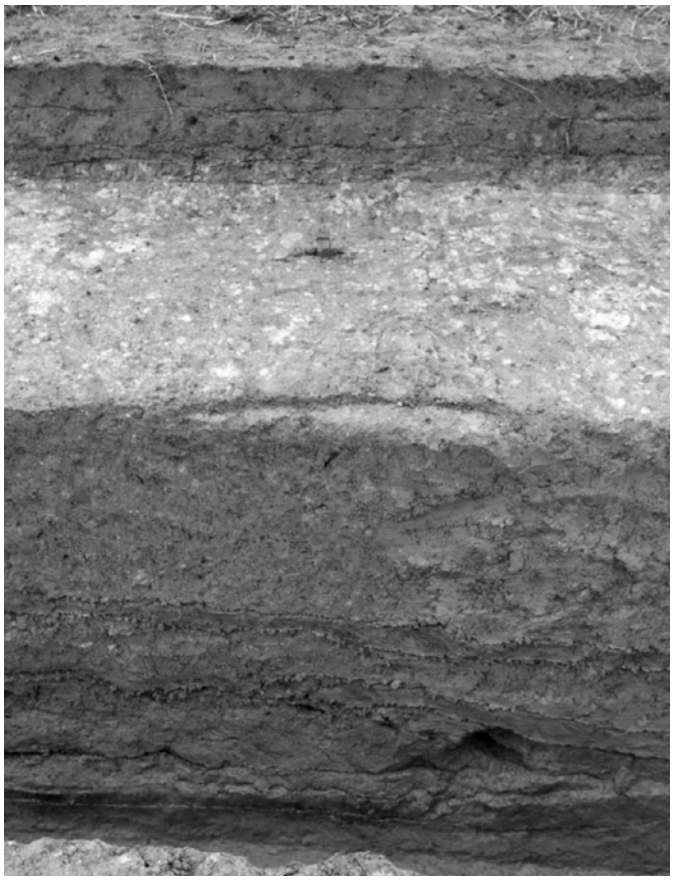
HJ 第 731 次調査　発掘区平面図（1/100）・北壁土層図（縦：1/50・横：1/100）

HJ 第 731 次調査　西発掘区全景（南西から）



HJ 第 731 次調査　東発掘区全景（北から）

HJ 第 731 次調査　東発掘区全景（南から）



HJ 第 731 次調査　東発掘区南端部東壁土層断面（西から）

発掘調査区で確認した整地層は、その特徴から立会調査の整地層Ⅰに当たるものと考えられる。整地層Ⅱ・Ⅲが発掘区内まで及んでいたかは比高的に不明であるが、発掘区内で検出された奈良時代の溝等の遺構の残存状況から、調査地中央の南北の段差部分で途切れることも考えられる。いずれにせよ、もともと傾斜地であった当地に、大規模な造成が行われたことは明らかである。なおこの整地層の下層からは、後述する橿原市田中廃寺軒丸瓦 IA・IB が出土している。

発掘調査は、整地土層の上面で遺構検出を行った後、さらに幅約 1.0m の範囲で整地土を掘り下げ地山上面でも行った。

Ⅲ．検出遺構

検出した遺構には、整地土層の上面で奈良時代の溝 1 条（SD01）と他に柱穴・土坑と考えられるものが数基あるが、調査範囲が狭く建物になるかは不明である。地山上面では調査範囲が狭く、遺構は確認できなかった。

また試掘・立会調査においても、顕著な遺構は検出できなかった。

SD01　幅約 1.2 m、長さ 4 m以上、深さ約 0.5 mの東西方向の溝で、東発掘区外東西へ続く。奈良時代の土器と共に、軒丸瓦 6345 型式 A 種（B 群）、丸瓦、平瓦が多数出土した。平松廃寺造営後の遺構と考えられる。

SD02　西発掘区中央の段差の裾にある、幅約 0.8 m、長さ 1 m以上、深さ約 0.4 mの南北方向の溝。土層断面から掘り直しが確認できるが、時期は不明。

（中島　和彦）

Ⅳ．出土遺物

遺物整理箱で 7 箱分の遺物（土器類 1 箱･瓦塼類 6 箱）が出土した。大半は瓦類で､奈良時代の土器が少量ある。

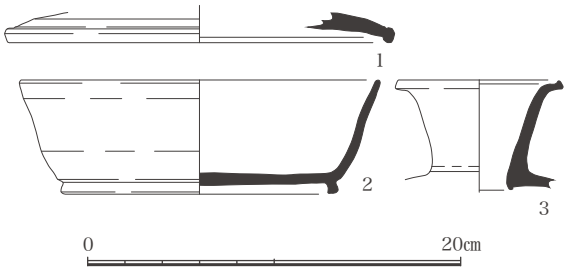
土器類　土器の多くは破片で、図示できるものは少ない。SD01 からは土師器杯・蓋、須恵器杯 B・蓋（1・2）等が、発掘区内の整地層からは、土師器杯、須恵器杯・壺（3）等が出土している。　（中島　和彦）

瓦塼類　大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦 3 点、軒平瓦 3 点がある。

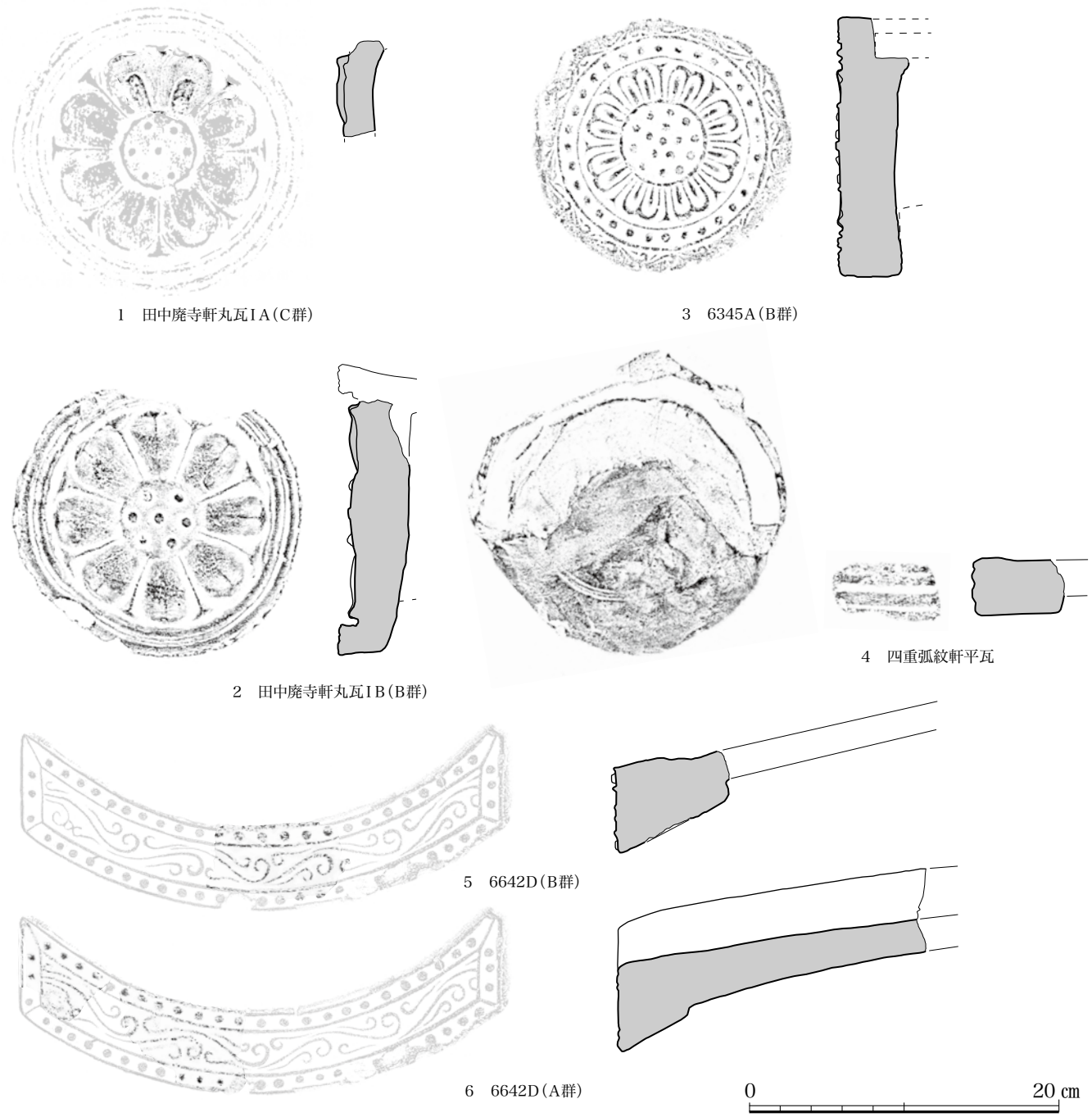
平松廃寺出土瓦類は色調・胎土・焼成具合から、表面が黒色で内部は淡褐色を呈し、胎土は緻密、焼成軟質のA群（口絵 7）と、灰色を呈し、胎土に多量の白色砂粒が含まれ、焼成が硬質のB群（口絵 8）に大別でき、A群が平松廃寺創建瓦で、B群が橿原市田中廃寺から運ばれた瓦であることが判明している[1)]。今回の出土瓦類の検討から、表面が淡褐色、内部は黒色で、胎土は緻密、焼成軟質のC群が含まれることが判明した（口絵 9）。

立会調査 R02.3425　掘削箇所全景（北から）

立会調査 R02.3425　1 区西壁土層断面（東から）



HJ 第 731 次調査　出土土器（1/ 4）



HJ 第 731 次調査　出土瓦類（1/ 4）

１は外区に圏線を巡らす有子葉単弁蓮華紋の小片であるが、７世紀中頃の田中廃寺創建軒丸瓦であるＩＡ種[2)]と実物照合の結果、弁の位置関係が一致し、同笵とわかった。Ｃ群の瓦である。田中廃寺出土品では調整時のハケ目が明瞭に残ることが特徴的だが、全体的に摩滅が著しく、瓦当裏面に接合線に沿うナデしか確認できない。胎土・焼成・色調は田中廃寺出土品と同じである。

２は外区に圏線を巡らす無子葉単弁蓮華紋軒丸瓦である（口絵 6）。田中廃寺軒丸瓦ＩＢ種との実物照合の結果、間弁端から、外区の立ち上がりにかけての笵傷が一致し、同笵であることがわかった。田中廃寺軒丸瓦 IB 種は、田中廃寺が藤原京に取り込まれた際の伽藍再整備期の瓦とみられている。Ｂ群の瓦である。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。丸瓦の剥離部分の観察から、接合される丸瓦は、凹面側をカットしているとみられる。瓦当裏面下半部には回転ナデとみられる痕跡が一部に残り、指による押圧の後、粗いナデを施す。瓦当側面下半部はヨコナデを施す。胎土・焼成・色調は田中廃寺出土品と同じである。

３は内区に複弁八弁蓮華紋を飾り、外区内縁に珠紋を、

外区外縁には偏行唐草紋を巡らす軒丸瓦 6345 型式Ａ種である。平松廃寺ではこれまでＡ群の 6345 型式Ａ種しかみつかっていなかったが、本品はＢ群である。瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦を接合する。瓦当側面・瓦当裏面は摩滅のため調整不明である。なお、田中廃寺でも 6345 型式Ａ種は出土しており、本品と同じＢ群である[3]。

４は四重弧紋軒平瓦である。上から一つ目の弧線は他の弧線と比べて細く、田中廃寺軒平瓦ⅡＢ種と同じ施紋原体によるものとみられる。顎の断面形態は段顎である。胎土は粗く、表面が橙灰色、内部が茶灰色を呈し、軟質である。

５・６は内区に左方から右方へと偏行する唐草紋を飾り、外区には珠紋を巡らす軒平瓦 6642 型式Ｄ種であるが、５はＢ群、６はＡ群である。両者とも顎貼り付け削り出しの段顎で、凹面側瓦当付近をヨコケズリする。６の凹面平瓦部には、横方向に２条の粘土の合わせ目が確認でき、粘土紐巻きつけ技法による成形とわかる。

丸瓦は 74 点（12.841kg）、平瓦は 263 点（45.011kg）、丸瓦･平瓦いずれか不明の瓦 40 点（0.133kg）があるが、いずれも小片である。これらは胎土・焼成・色調から、Ａ群とみられる丸瓦 63 点、平瓦 188 点、Ｂ群とみられる丸瓦 11 点、平瓦 62 点、Ｃ群とみられる平瓦１点に分類できる。（原田　憲二郎）

Ⅴ．調査所見

今回の調査によって、十二坪北西部分では傾斜地を大規模に整地して平坦面を造成していることが明らかになった。整地の時期は奈良時代と考えられ、平松廃寺造営の一端が判明した。しかしながら、明瞭な建物遺構等は確認できず、平松廃寺内の様相については依然として不明である。今後の周辺の開発においてはさらに十分な注意を払う必要がある。

また平松廃寺出土瓦は、Ａ・Ｂ・Ｃ３群に大別することができた。Ａ群の瓦が最も出土量が多く、８世紀初頭の平松廃寺創建瓦である。Ｂ群とＣ群はＡ群に比べ出土量が少なく、Ｂ群は７世紀後半の田中廃寺伽藍整備期の瓦、Ｃ群は７世紀中頃の瓦で田中廃寺創建瓦とみてよく、田中廃寺から運ばれて来たとみられることから、平松廃寺の前身寺院が田中廃寺であったと考える。

（中島和彦・原田憲二郎）

補記　平松廃寺では、古くから瓦が採集されてきた。それら採集瓦のひとつに名古屋市博物館所蔵資料がある（田辺 1981・名古屋市博物館 2006）。平成 29 年に、それらの採集者である山前陽氏から、採集地点等をご教示頂く機会を得たので、その内容について紹介する[4]。

平松廃寺の位置と瓦採集地点（1/5,000）

山前氏によれば、県立奈良病院の南側部分の擁壁設置工事中に採集したとのことで、その場所は図の位置となる。この場所は平松廃寺の寺院地と想定されてきた左京四条四坊十二坪ではなく、北側の十一坪の北辺にあたる。ただし、採集された軒丸瓦５種 12 点、軒平瓦２種２点（名古屋市博物館 2006）は、これまで平松廃寺の発掘調査で出土した軒瓦とは異なる。

このようなことから、２通りの考え方ができる。ひとつは平松廃寺寺院地が十一・十二坪の２町占地であったとの考えである。この場合、十二坪は金堂院、十一坪が講堂院というように、軒瓦の違いは建物の違いに起因するものかもしれない。いまひとつは、十一坪にも別の寺院が存在したとの見方である。特に採集瓦の中には、平松廃寺・田中廃寺に同笵例がみつかっていない７世紀後半の軒丸瓦があることは、この考えを補強する。

いずれにせよ、十一坪に遺構が残る可能性があり、留意すべきであろう。（原田　憲二郎）

註

1）奈良市教育委員会 2019 「２. 平城京跡（右京四条四坊十二坪）・平松廃寺の調査　第 705 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 28（2016）年度』

2）以下文中の田中廃寺の型式番号は、竹田政敬 1995「平松廃寺―前身寺院は飛鳥に―」『シンポジウム古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所に拠る。

3）橿原市教育委員会による田中廃寺出土品を実見し確認した。田中廃寺出土軒瓦との実物照合にあたっては、橿原市教育委員会の松井一晃氏のご協力を得た。

4）山前陽氏のご子息である、当センター職員山前智敬を通じてご教示頂いた。

参考・引用文献（刊行順）

田辺征夫 1981「遺跡遺物からみた原始古代の伏見町」伏見町史刊行委員会『伏見町史』

名古屋市博物館 2006『名古屋市博物館収蔵大和古瓦図版目録』

2．菅原東遺跡埴輪窯跡群・平城京跡（右京三条二坊十五坪）の調査　第371次

事 業 名　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	調 査 期 間　平成９年１月７日～３月31日
通知者名　奈良市長	調 査 面 積　174㎡
調 査 地　奈良市西大寺国見町三丁目９	調査担当者　鐘方正樹　原田香織

Ⅰ．はじめに

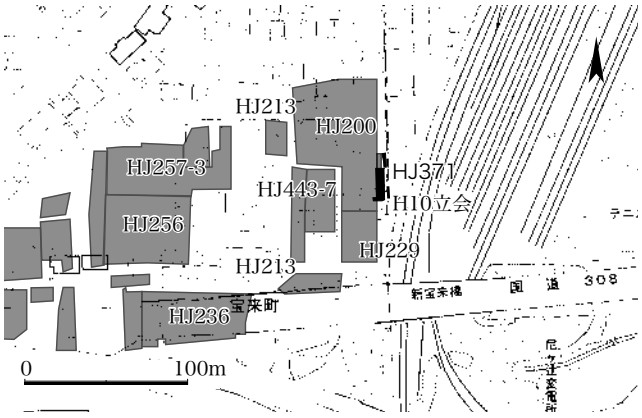
奈良市では昭和63年度から近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う発掘調査を開始し、平成29年度をもって30年間継続した調査をようやく終えることができた。事業範囲は総面積約32万㎡におよび、全域が平城京跡に相当する。そこで新設の区画道路位置に拘わらず、条坊遺構と各坪内の宅地利用状態を確認することを目的として全域を調査対象とする発掘計画が立てられた。

平成２年６月21日から右京三条二坊十五坪内の西半部で発掘調査を始めたところ、平城京造営時に削平されながらも下層に埴輪窯が残存しているのを確認できた。平城京の調査を終えて10月中頃から埴輪窯の調査に着手し、１～３号窯[1]とその灰原を鐘方・安井、４～６号窯とその灰原を中島・宮崎が担当して調査を進めた。調査が進展する中で遺跡の重要性が認識され遺構保存の協議が必要となったため、遺構を完掘せずに土層観察用あぜを残したまま平成３年２月で一旦調査を終了した。

調査後、遺跡保存の範囲や方法等について協議が行われ、市が窯跡群の一部を土地購入して街区公園を整備し、遺構表示施設を設けて公開することになった。ただし、土地の換地の都合で１～３・６号窯の位置に計画されていた区画道路の位置を変えることができなかったため、やむを得ずそれら４基の窯跡は切り取って公園内に移設保存することが決まった。この移設工事に伴う発掘調査が平成９年１月７日～３月31日に実施した平城京第371次調査である。調査終了後、遺跡保存整備報告と併せて調査報告書を作成する計画であったが諸般の事情で叶わず、これまで調査の内容は全く未報告のままである。調査から20年以上が経過し、区画整理事業も終了してしまったが、薄れゆく記憶を辿りながらここに調査の概要を記しておきたい。

Ⅱ．調査の経過

移設工事で壊される範囲の遺構を再検出することから始め、６号窯の灰原調査をまず行って移設工事に備えた。併行して、４基の窯跡の移設先である東発掘区及び４号窯東横における窯跡の有無を確認するための北発掘区を設定して調査した。１～３号窯は現地保存される可能性を考えて、第200次調査では上層整地土上面までで掘

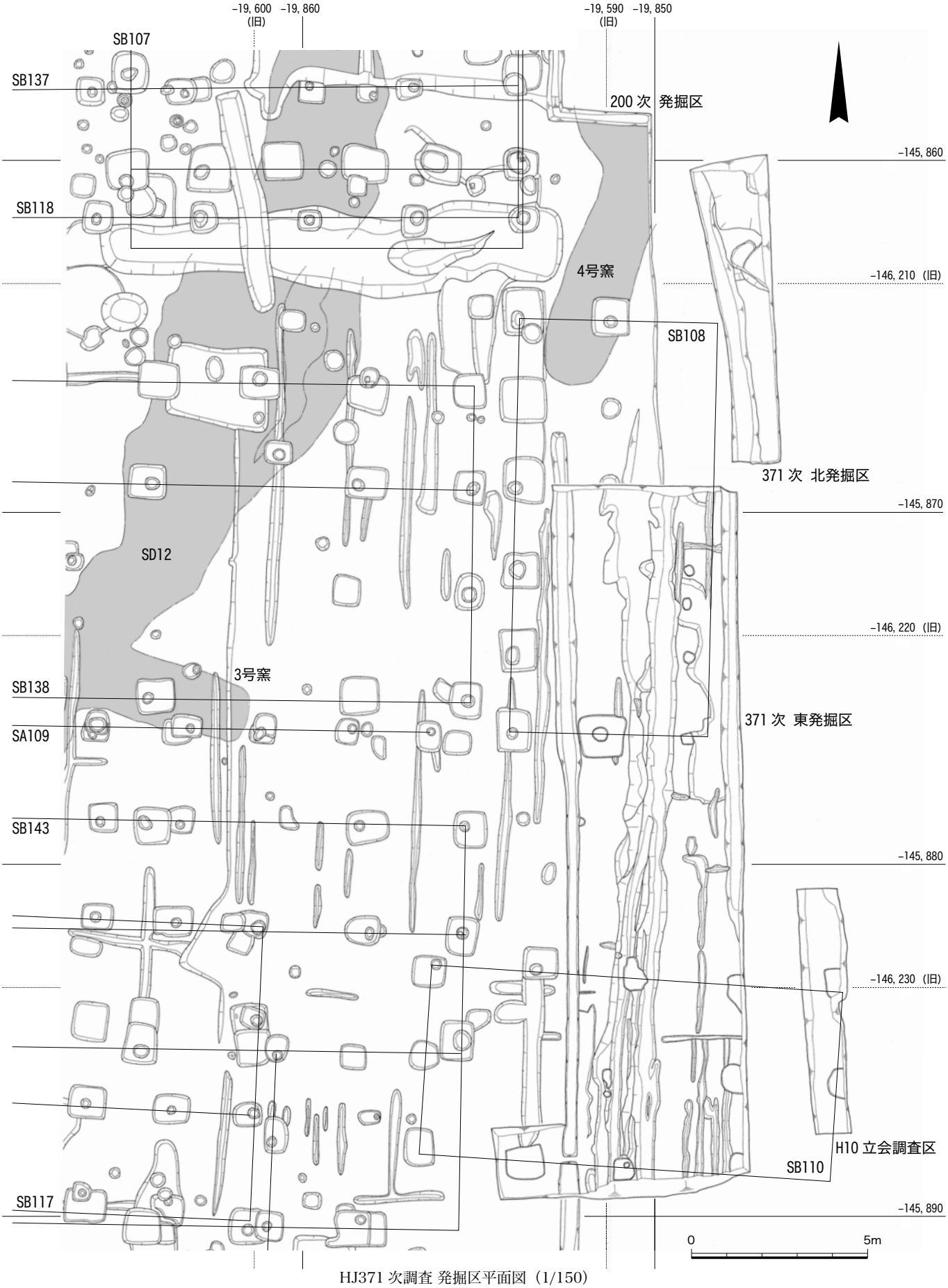


HJ第371次調査 発掘区位置図（1/5,000）

削を止めて記録を作成していたので、まず下層整地土上面まで掘削して10㎝コンタによる平面図を作成した。そして、１～３号窯の灰原に設定した土層観察用あぜを改めて観察して各土層の由来をできるだけ再確認しながら、各層ごとに掘削して遺物を取り上げた。下層整地土上面で全景写真撮影と平面図作成を行った後、下層整地土を掘り下げて、１～３号窯構築以前のSD12の状態を検出した。最後にSD12埋土を掘削してその構築時の形状を確認した。なお、１～３・６号窯内については移設保存するために新たな発掘を行わず、発掘は各窯周囲の壊される範囲のみで実施した。

調査終了後、直ちに１～３・６号窯の移設工事に着手した。各窯の周囲を幅１ｍほど掘削し、鉄骨で囲んで補強して発砲ウレタンで表面を包み込み、下に鉄板を挿し込んで遺構を切り離してクレーンで吊り上げ、あらかじめ設置しておいた公園内地下のコンクリートボックス内に安置した。そして、現地見学ができるように３号

移設工事中の２・３号窯（南西から）



HJ371 次調査 発掘区平面図（1/150）

窯のみ覆屋を設けて露出展示し、その西側に型取りした作業面の敷設と剥ぎ取りした灰原土層を貼り付けて立体的に見学できるよう復元した。移設した 1・2 号窯はそれぞれ公園内表示箇所の地下に、6 号窯は露出展示する 3 号窯の南側地下に埋設してある。

なお、菅原はにわ窯公園建設時に公園西面道路工事及び擁壁・側溝工事に伴って立会調査を実施している。前者の立会調査は平成 9 年 8 月 27 日に行い、土層断面を観察記録したにとどまる。一方、後者の立会調査は平成 10 年 12 月 15 日に行ったが、遺構を確認したのでその内容もここに併載しておきたい（H10 立会調査区）。

Ⅲ．調査の概要

A．東発掘区（104㎡）

3 号窯東側の未調査箇所に南北 20 m・東西 5 mの発掘区を設け、さらに南西隅を一部拡張して調査を行った。発掘区内の基本層序は、水田耕土の下に灰茶色土あるいは淡灰色土（厚さ 0.05 ～ 0.1 m）が堆積し、黄茶色砂質土あるいは黄灰色砂礫の地山となる。一段下がる東側には造成土（厚さ 0.65 m）を入れて、現地表を平坦に造成していた。

HJ 第 371 次調査 東発掘区全景（北から）

地山面は発掘区中央の南北溝を境にして東西で約 0.6 mの段差があり、水田造成時に東側が一段地下げされている。これに沿う南北溝は、水田耕作時の水路とみられる。地山面の標高は高い西側で 72.3 m、低い東側で 71.3 mである。南側で SB110 の南北側柱穴の一部、北側で SB108 の南妻柱穴とわずかに残る東側柱穴列を確認した。これによって SB108 が 2×5 間の南北棟建物で、桁行全長 12.0 m（柱間 2.4 m等間）・梁行全長 5.0 m（柱間 2.5 m等間）となることが判明した。

B．北発掘区（15㎡）

4 号窯の東側に南北 8.5 m・東西 1.5 ～ 2 mの発掘区を設けてさらに埴輪窯跡がないか調査した。発掘区内の層序は表土・造成土（厚さ 0.2 m）の下に旧耕土・淡灰色土（厚さ 0.25 m）が堆積して、茶色砂礫の地山となる。南半部は水田造成時に削平されて地山面は平坦であり、その標高は 71.7 mである。北側に北へ 1.1 m下がる傾斜面があり、これが 4 号窯構築面へと続いていくが、新たな窯跡は確認できなかった。

C．H 10 立会調査区（7㎡）

公園の東辺に沿って幅約 1 m掘削し擁壁と側溝敷設工事を行った際、公園南東隅付近で柱穴 2 基を新たに確認した。位置関係から SB110 の北東隅柱穴と東妻柱穴と考えられ、SB110 は 2×4 間の東西棟建物に復元できることが判明した。桁行全長 11.4 m（柱間 2.85 m等間）・梁行全長 5.4 m（柱間 2.7 m等間）となる。

HJ 第 371 次調査 北発掘区全景（南から）

D．１～３号窯灰原と下層遺構 SD12（約 45㎡）

公園西面道路工事及び移設工事によって壊れる１～３号窯の灰原とその下層遺構 SD12 を調査した。

１．SD12

西から東へ延びる低丘陵の先端に形成された東斜面（発掘区北側）とそこから西へ入り込む小さな谷地形（発掘区南側）との間を貫くように掘削された南北方向の溝であるが、低丘陵東斜面と接続すると北西へ、谷地形と接続すると南東側へ屈曲して方向を変える。１～３号窯周辺の標高が 72.5 mで最も高く、そこでの深さは 1.6 ～ 1.8 mである。１号窯の残存高が 0.5 mほどであるため、周辺地形はさらに１m以上高かったと推測できるので、本来は３m近い深さがあったとみられる。まさに低丘陵を切通し状に掘削して構築されている。３号窯より北側は最大幅４mもあって幅広く、底には 1.7 ～ 2.5 mの平坦面が認められる。一方、南側は幅 2.5 mと狭くなり、底面も 0.5 mほどしか認められないため、断面はＶ字形に近い形状となる。このような特徴からみて、主に北側からの出入りを目的とする通路として機能した可能性が考えられる。

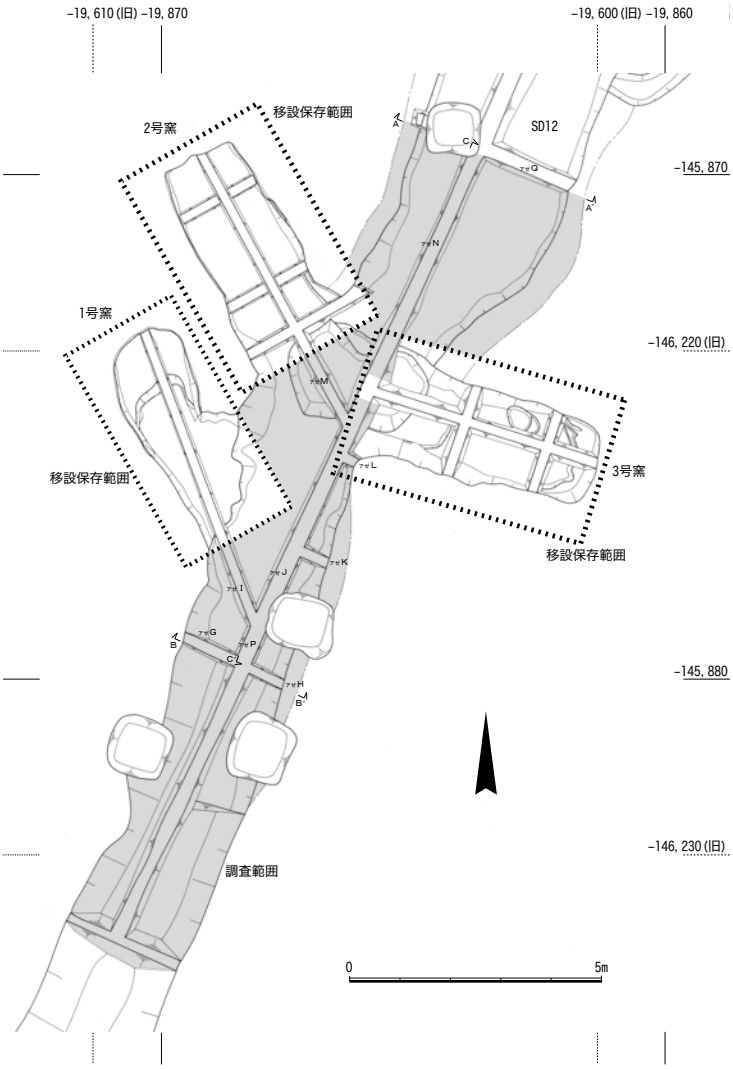
埴輪窯構築前の堆積土から布留式土器が出土するため、古墳時代前期の集落遺跡東限を区画する SD11 の外側（東約７mの位置）に並行して SD12 が掘削されたと考えられる。

２．１～３号窯灰原

１～３号窯は SD12 が 0.6 ～ 0.9 m埋没した時点でその溝壁面を利用し、地山を掘り抜いて構築されたと推定できる。焚口の高さがそれぞれ異なり、３号→２号→１号の順で高くなる点は SD12 内に形成された灰原の堆積過程と連動しているので、その構築順序を反映している。最初につくられた３号窯が焚口を北に向けるのは、４～６号窯と方向性を整合させたためと思われるが、その後につくられた１・２号窯は焚口を南向きに変え主軸を揃えている。

灰原の堆積土層を観察して判明した１～３号窯の構築と操業の過程は概ね以下のとおりである。

３号窯構築直前に堆積した埴輪片を包含する炭混じり



１～３号窯灰原の堆積土層図（1/150）

SD12 堆積土層（A － A′南から）

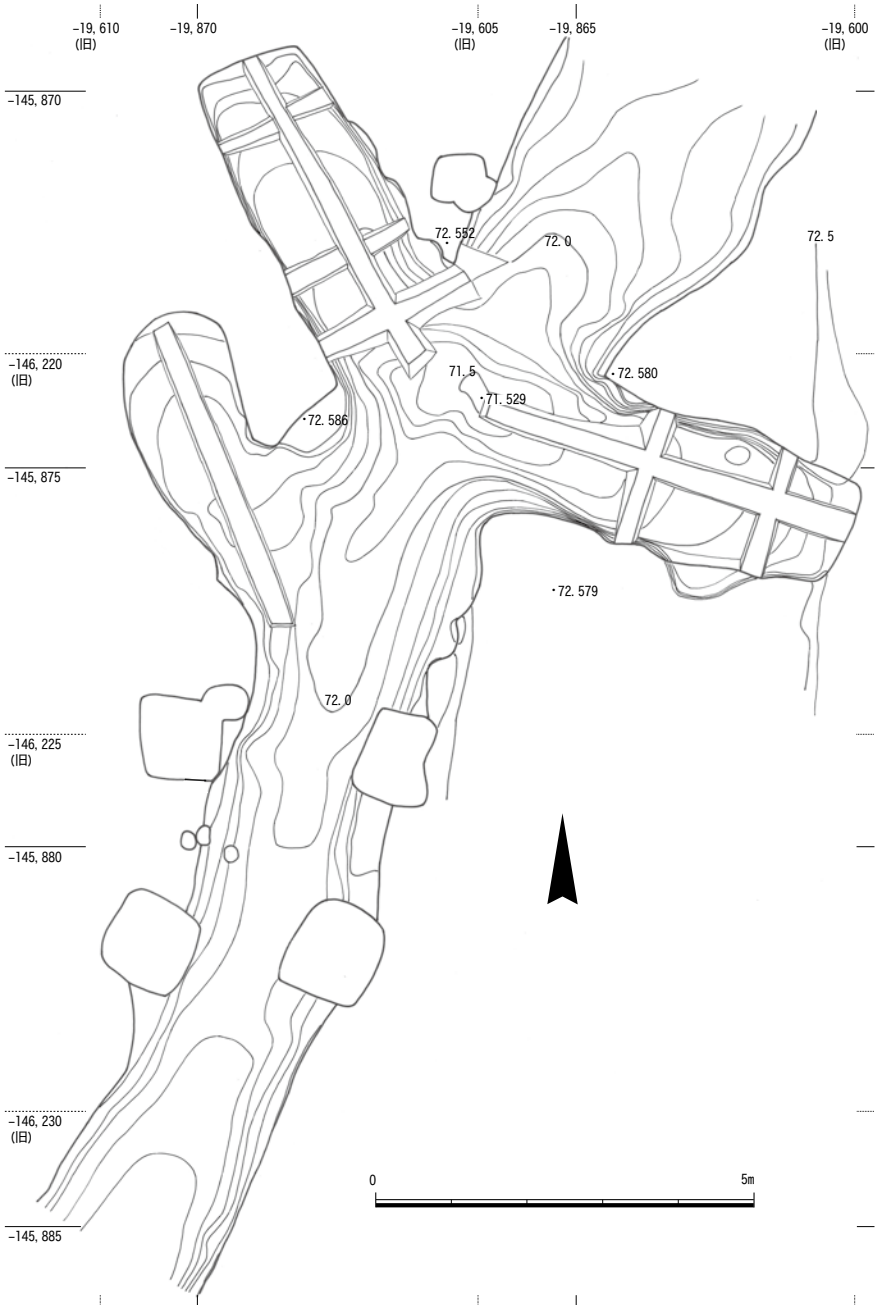
３号窯灰原（北西から）

灰色土（a層）が3号窯より北側だけに堆積し、3号窯構築時の整地土（b層）や3号窯操業当初（床面1）の灰原（c層）もやはり北側にのみ広がる点から考えて、当初の出入りはSD12機能時と同様に北側から行われていたと推測できる。この点は、4～6号窯のある低丘陵東斜面において埴輪窯を構築できる適所が不足したために、SD12の中へ入り込んで後から3号窯を構築したと考える想定と整合する。3号窯操業当初の灰原c層を詳細に観察すると、中央に窯壁焼土が混在する掻き出し層を挟んで上下2層に黒色炭層が分かれるのを確認できたので、操業回数が2回であったことが判明した。その時期は3号窯床面1操業直後に堆積した窯体内改修時排土（h層）出土の須恵器杯身（1・2）からMT15型式期と想定できる。

c層の上には2号窯構築時の整地土（d層）が堆積し、2・3号窯由来の灰原がその上に堆積する。したがって、3号窯操業中に2号窯が構築され、両窯で同時期に埴輪焼成が行われていたことがわかる。d層は3号窯の南側にも広がって堆積し、2号窯の焚口を南向きに変える点も勘案すれば、この時にSD12南側からも出入りができるよう整備されたと推測できる。2号窯当初の操業時（床面1・2）には3号窯床面2が併焼し、この時点で3号窯北側は灰原堆積層でほぼ満たされて出入りが困難な状態となる。

2・3号窯はともに床面3の時点で一度嵩上げ補修されており、その操業時から灰原は南へ大きく広がり始める。3号窯床面3からTK10型式期の須恵器杯蓋（3）が出土している。その後、両窯の床面4、2号窯床面6と3号窯床面5での併焼を確認できる。3号窯が先に閉窯し、2号窯床7以降は単窯での操業が行われたとみられる。これによって、2号窯焚口付近は灰原堆積層でほぼ埋没した。2号窯床7に対応する層位からTK10型式期の須恵器杯身（7）が出土している。

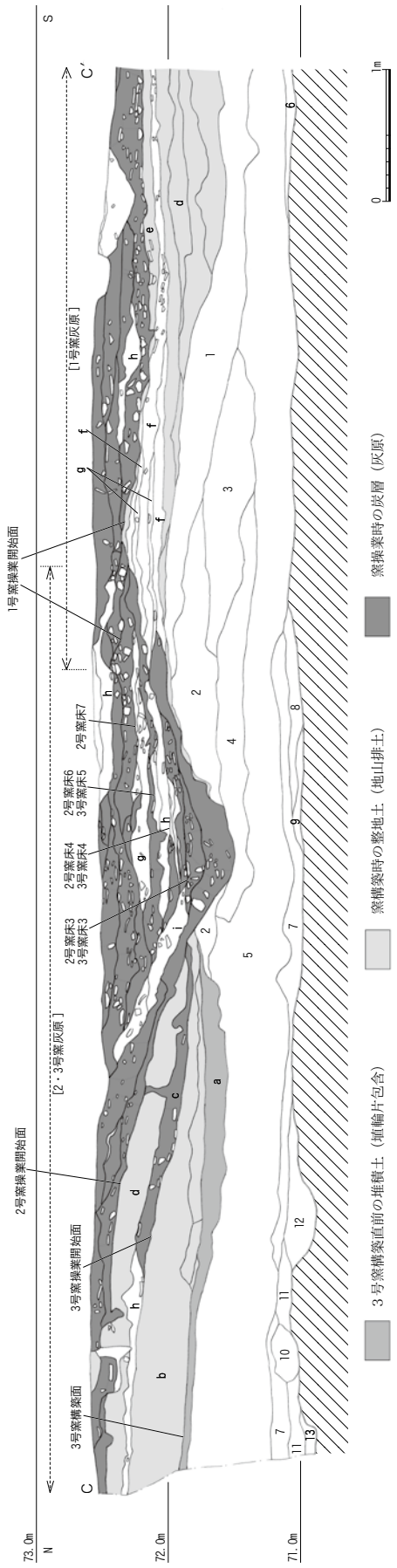
2号窯に代えて1号窯がそのすぐ南側に構築される。1号窯構築時の整地土（e層）が1号窯以南にのみ堆積し、1号窯由来の灰原堆積層のみがその上に堆積するので、1号窯は単独で操業されたと推定できる。1号窯の灰原堆積層は黄色土・焼土ブロック混合土（h層）によって上下に分かれるが、この層を窯体内改修時の整地土とみれば、床面3構築時の嵩上げ補修に対応する可能性がある。1号窯の灰原下層からTK10～MT85型式期の須恵器杯身（4・8）、灰原上層からMT85～TK43型式期の須恵器杯蓋（5・6）・杯身（10～12）・横瓶（14）、1号窯廃絶後のSD12堆積層からTK209～TK217型式期の須恵器杯身（9・13）が出土した。



2号窯操業開始面（d層上面）と1～3号窯床面1の形状図（1/100）

E．6号窯灰原とその下層（約10㎡）

6号窯の移設工事によって壊れる灰原部分を基盤層まで掘削し、遺構面の形成過程について調査した。また、5号窯と隣接す

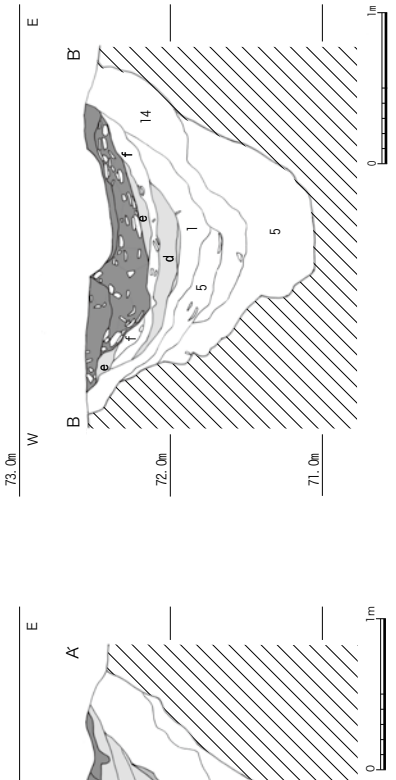


[1～3号窯関連の土層]

a. 炭混じり灰色土
b. 黄灰色粘土・シルトブロック及び褐色土（3号窯構築時の整地土）
c. 黒色炭層（3号窯操業当初の灰原）
d. 黄色粘土ブロック堆積土（2号窯構築時の整地土）
e. 褐黄色粘土ブロック堆積土（1号窯構築時の整地土）
f. 茶褐色土（埴輪多く含む）
g. 赤褐色土（焼土多く含む）
h. 黄色土・焼土ブロック混合土（窯体内改修時の排土）
i. 黒茶褐色土

[SD12 ほかの堆積土層]

1. 暗茶褐色土（布留式土器含み、埴輪含まない）
2. 黄灰褐色土
3. 黄褐色砂土
4. 黄白色シルト
5. 黄茶灰色土（布留式土器含む）
6. 茶灰色土
7. 黄灰色シルト混じり青灰色砂
8. 青灰色砂土
9. 黄灰色粗砂
10. 黄褐色粗砂（地山ブロック）
11. 灰色粘土・砂
12. 青灰色砂（布留式土器含む）
13. 黄灰色砂
14. 茶褐色土
15. 炭混じり黄色土（柱穴埋土）
16. 黄灰色シルト混じり黄灰色砂
17. 青灰色砂礫
18. 明黄茶色砂

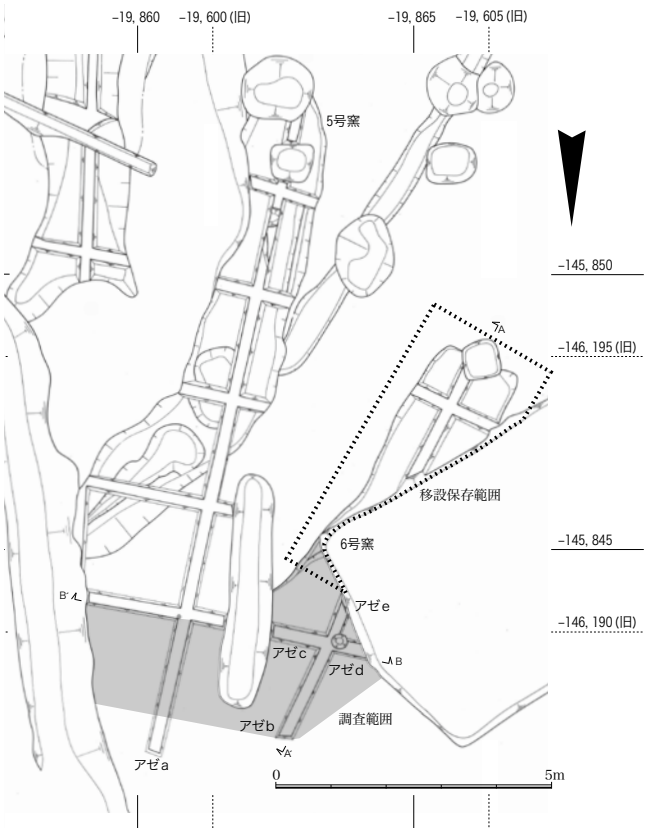


1～3号窯灰原の堆積土層図（1/50）

るため、その灰原との層位的関係を検討するため、アゼcに沿って北側を約1.5 m幅で掘削した（網伏せ部分）。

6号窯の焚口周辺は攪乱で壊されており、窯体と灰原の層位関係を直接確認できない。窯体は地山を掘り込んで構築され、その排土を灰原が形成される低い場所に広げて整地している。これが窯構築時の整地土（ｊ）で、地山由来の黄色シルトブロックあるいは黄茶色砂礫ブロックで構成される。窯体北端にみられる床面1直上の黒色炭層が整地土（ｊ）直上の黒色炭層と対応する可能性はあるが、灰原の高さが床面よりも高くなる。整地土（ｊ）の下には布留式土器を多く含む茶褐色土（7層）、灰茶色砂質土（8層）、暗青灰色砂質土（9層）が堆積して地山となる。茶褐色土は、3号窯より南側のSD12内に堆積する整地土（D）直下の暗茶褐色土と特徴が共通する点から考えて、SD12の北端延長上に形成された同様の包含層とみられる。

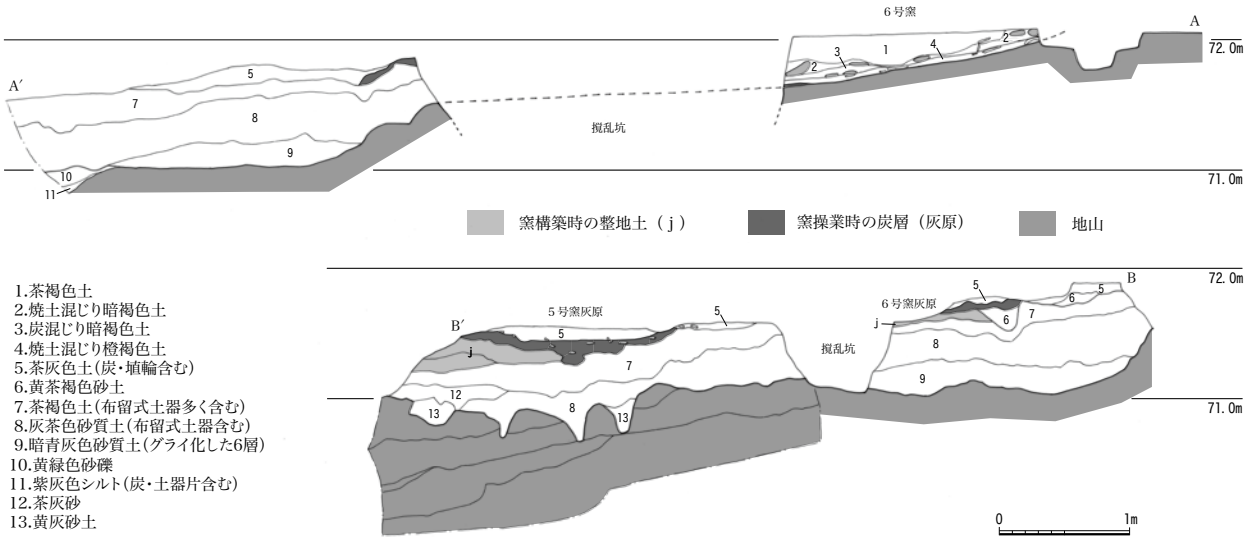
地山は幅1.5 m前後の平坦面をつけて2段に北へ下がっている。北端に堆積する最下層の紫灰色シルト（11



5・6号窯灰原の調査範囲と移設範囲図（1/150）

6号窯灰原と下層の堆積土層（南東から）

5号窯灰原と下層の堆積土層（北から）



6号窯灰原の堆積土層図（1/50）

層）には炭や土器細片（時期不明）が含まれる。

また、隣接する５号窯の灰原とも層位関係を直接確認できず、両窯の先後関係は不明である。ただし、５号窯灰原部分での層序も茶褐色土（7 層）⇒整地土（ｊ）⇒黒色炭層と同じであり、同時操業されていたと想定しても矛盾はない。整地土（ｊ）直下で TK23 型式期とみられる須恵器壺体部片（15）が出土しており、５号窯構築時期の上限を示す資料と考えられる。

Ⅳ．出土遺物

遺物整理箱で 48 箱出土した。ほとんどが灰原出土の埴輪であり、次いで古墳時代の土師器・須恵器がある。飛鳥時代以降の出土遺物は極めて少量である。遺物整理ができていないため、ここでは埴輪窯操業時期に関わる須恵器と１～３号窯灰原出土の形象埴輪の一部について記す。

須恵器　1・2 は３号窯床面１操業後に行われた改修時の排土（ｈ層）から出土したと考えている須恵器杯身である。1 は復元口径 11.3㎝、器高 4.6㎝で、約 1/3 を欠失する。2 は完形で、口径 12.0㎝、器高 5.3㎝。3 は３号窯床面３から出土したほぼ完形の須恵器杯蓋で、口径 15.0㎝、器高 5.0㎝。天井部と口縁部の境に稜線を残す。

4 は２号窯床７に対応する黒色炭層から出土した須恵器杯身で、直接接合しないが同一個体と認める２片より図上復元した。復元口径 12.4㎝、復元器高 4.9㎝前後となる。

7・8 は１号窯の灰原下層から出土した須恵器杯身である。7 は約 1/2 が残存し、口径 12.7㎝、復元器高 4.75㎝前後。8 は約 1/3 が残存し、復元口径 14.7㎝、復元器高 5.2㎝。

5・6 の須恵器杯蓋、10 ～ 12 の須恵器杯身、14 の横瓶は１号窯の灰原上層から出土した。5 は口縁部の約 1/6 が残存し、復元口径 13.1㎝、復元器高 3.8㎝前後。6 は口縁部の約 1/4 が残存し、復元口径 12.95㎝、復元器高 3.45㎝前後。10 は口縁部が約 1/4 残存し、復元口径 12.0㎝、復元器高 3.9㎝前後。11 は約 1/8 が残存し、復元口径 14.0㎝、復元器高 3.05㎝。12 は約 2/3 が残存し、口径 14.15㎝、器高 4.0㎝。14 は口縁部が約 1/2 残存し、口径 11.35㎝、残存高 3.5㎝。口縁部外面に「×」のヘラ記号があり、体部外面にカキメ、体部内面に青海波文の当て具痕が残る。

15 は５号窯構築時の整地土直下から出土した須恵器壺の肩部片で、肩部最大径は 14.0㎝に復元できる。体部下半にカキメ調整を行い、肩部との境に弱いヨコナデで２条の凹線をつけてその下に１条の波状文を入れる。約 1/3 の残存部分に穿孔を確認できないが、瓌の可能性もある。

形象埴輪　16 は家形埴輪の隅角部分で、外面タテハケ調整、内面ヨコナデ調整を行う。方形窓の一部が残り、その側面に沿って二条の線刻がある。２号窯床４・３号窯床４に対応するｈ層から出土した。

17 は靫形埴輪の鏃部である。鏃部を形成する粘土板を筒形の矢筒部に上から挿入し、下半を矢筒部及び左右の背負板と接合した後、端部を削って全体形状をつくり出し指ナデ調整する。表面に鏃６本と背負板の覆輪・連弧文様を線刻し、鏃線刻の下端に沿って４個の粘土粒を横一列に貼り付けている。１号窯灰原上層から出土した。

18 は盾形埴輪の側面端部である。周縁を二条の平行沈線で縁取りし、内部には１条の沈線で鋸歯文を描く。２号窯床4･3号窯床４に対応する黒色炭層から出土した。

19・20 は石見型埴輪の一部とみられる。19 は上方へ通常尖るように伸びる部分を切り取ったような形状をしている。表面中央付近に一つの刺突孔があるが、裏面まで貫通しない。20 は上方へ伸びる鰭状の破片で円筒形体部からの剥離面が残る。平行する横方向の二条の沈線を表面に描くが、端部まで達していない。19 は２号窯床６・３号窯床５に対応するｇ層、20 は１号窯灰原下層から出土した。

21 は人物埴輪の手の部分で、２号窯床３、３号窯床３に対応する黒色炭層から出土した。

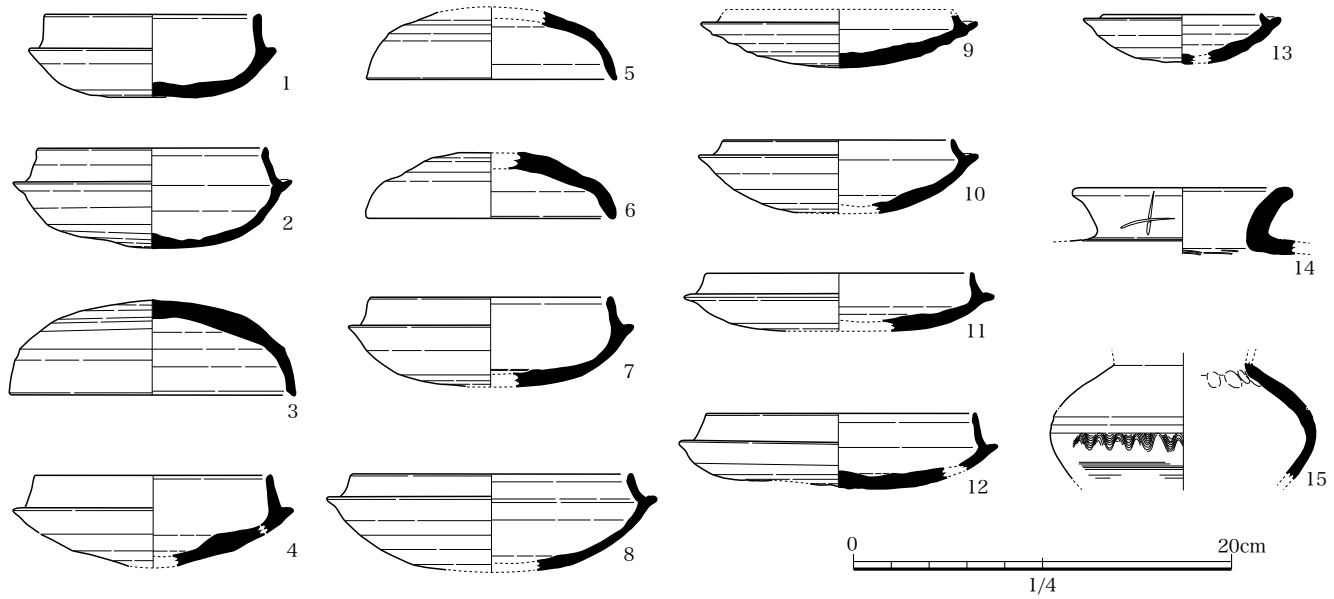
22 は盾形埴輪あるいは盾持人物埴輪の一部と思われる。表面の周縁を二条の平行沈線で縁取りする。１号窯構築時整地土下のｆ層から出土した。

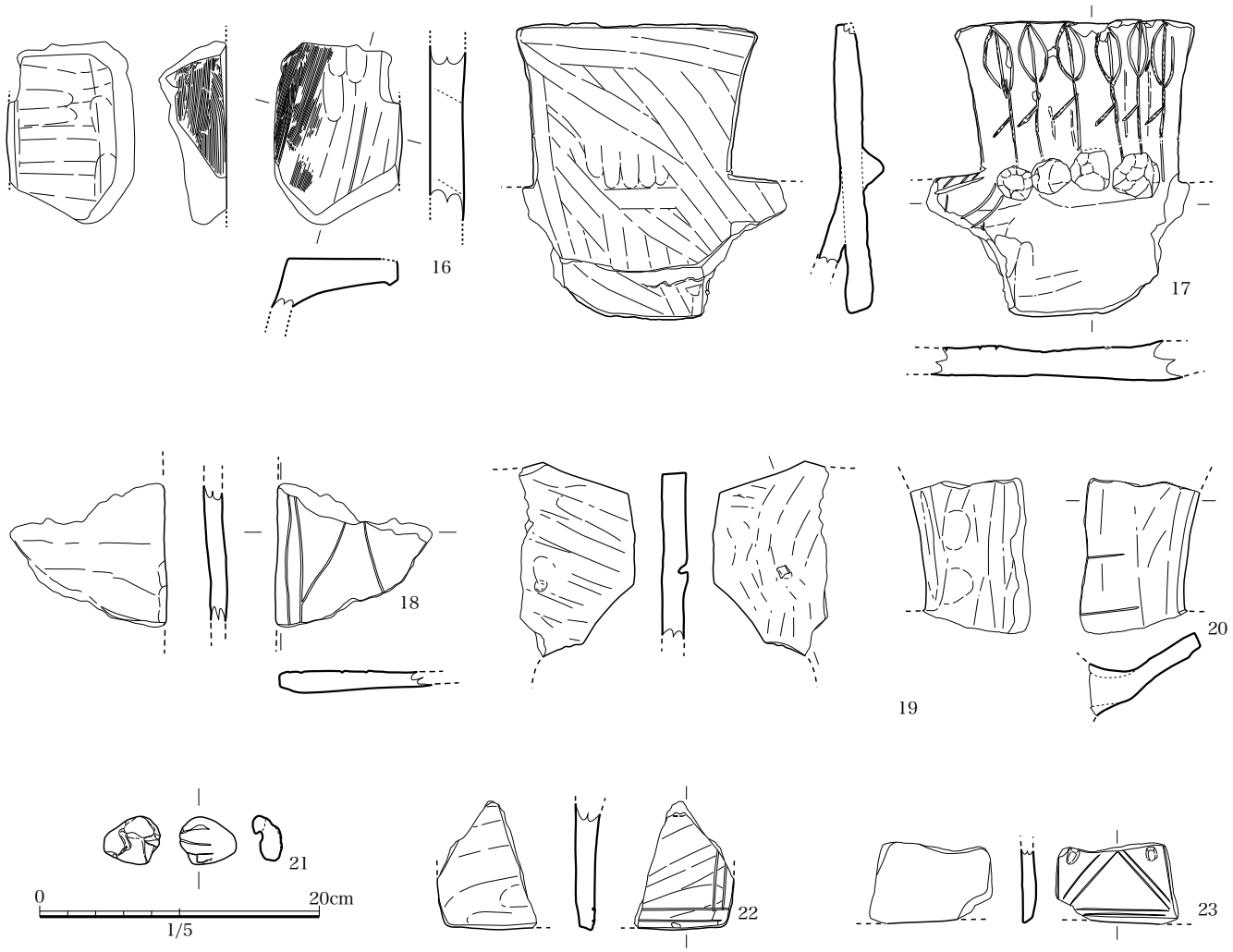
23 は不明形象埴輪の一部である。二条の平行沈線で文様を描き、文様内部の一部に粘土粒を貼り付ける。２号窯最終操業の床面９に対応する黒色炭層から出土した。

Ⅴ．調査所見

１～３・６号窯の移設保存工事に伴ってやむを得ず保存できない箇所を中心に発掘調査を実施し、埴輪窯跡群の構築順序や操業時期について再確認できた。低丘陵東斜面地の４～６号窯が造られた後、１～３号窯が SD12 の中に構築される。１～３号窯の構築順序と時期は、その灰原堆積土の層序や出土須恵器からみて、３号窯単独操業（MT15 型式期）⇒２・３号窯同時操業（TK10 型式期）⇒２号窯単独操業(TK10 型式期)⇒１号窯単独操業(TK10 ～ TK43 型式期）と推定できる。埴輪生産のピーク時は TK10 型式期であり、現在判明している供給先の天理市星塚古墳群や大和郡山市水晶塚古墳等へはまさにこの時期に搬出されている。奈良盆地中央の低地に築造される古墳群への埴輪供給を担うのが菅原東遺跡埴輪窯跡群の一つの役割であったと考えられる。　（鐘方　正樹）

註 1）本稿における遺構番号と各埴輪窯の床面番号は「菅原東遺跡の調査 第 200 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成３年度』（奈良市教育委員会 1992）の記載に従う。





HJ 第 200 次・371 次調査　出土土器・形象埴輪

1～3号窯　全景（北から）

1～3号窯　全景（南から）

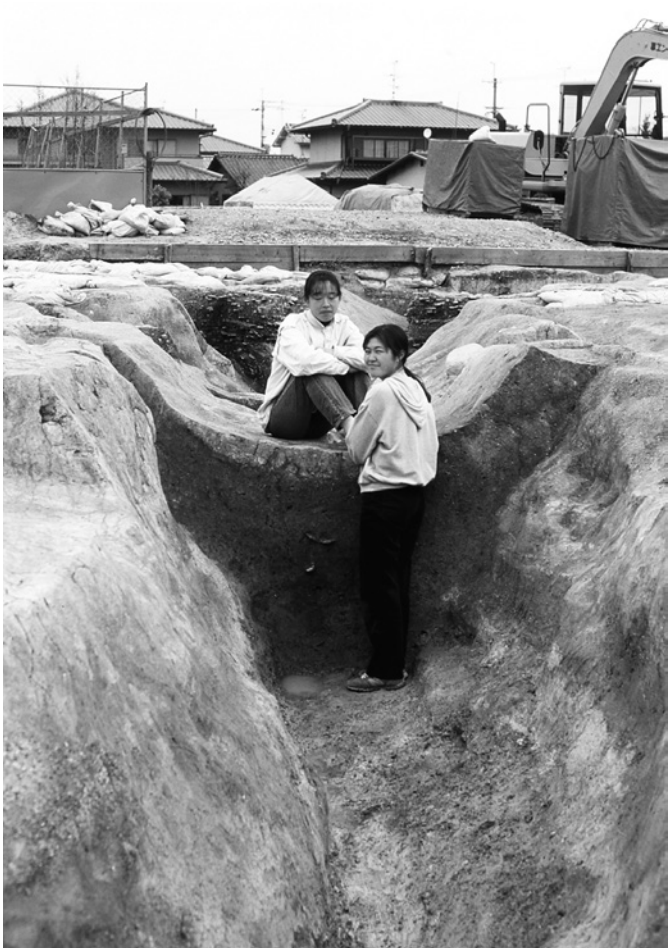
1～3号窯と SD12 完掘状態（北東から）

1～3号窯と SD12 完掘状態（南西から）

1 号窯（南東から）

2 号窯（南東から）

3 号窯（北西から）



SD12 と 2 号窯操業開始面（南西から）

5・6 号窯灰原下層調査区（東から）

3．平城京跡（右京北辺三坊六坪）の調査　第 728 次

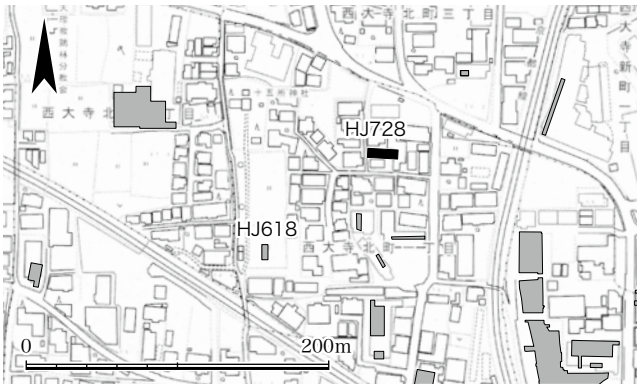
事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 30 年 10 月 2 日～ 10 月 10 日
届出者名　株式会社　プラチナステージ	調 査 面 積　120㎡
調 査 地　西大寺北町 1 丁目 387–2.–3–.4.–7–.8	調査担当者　中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると平城京右京北辺三坊六坪の北西隅にあたる。六坪内では、過去に発掘調査が４件行われている。市 HJ 第 618 次調査では奈良時代の柱穴と土坑を検出しているものの、その他の調査では顕著な遺構は確認されていない。今回の発掘調査は、六坪内での奈良時代の遺構の確認を目的として行った。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、発掘区西端で上から造成土（１）、耕作土（２）、灰色砂質土（３）、淡灰色粘土（６）、淡茶灰色粘土（７）とつづき、現地表下約 1.0 mで地山の明黄褐色粘土となる。地山面は東に向かい下降し、東端では現地表下約 1.6 mで明灰色粘土の地山となり、その上面に淡茶褐色粘土（８）と淡茶灰色粘土（９）が堆積する。地山上面の標高は、発掘区西端で 75.5 m、東端で 74.8 mである。遺構検出は地山上面で行った。



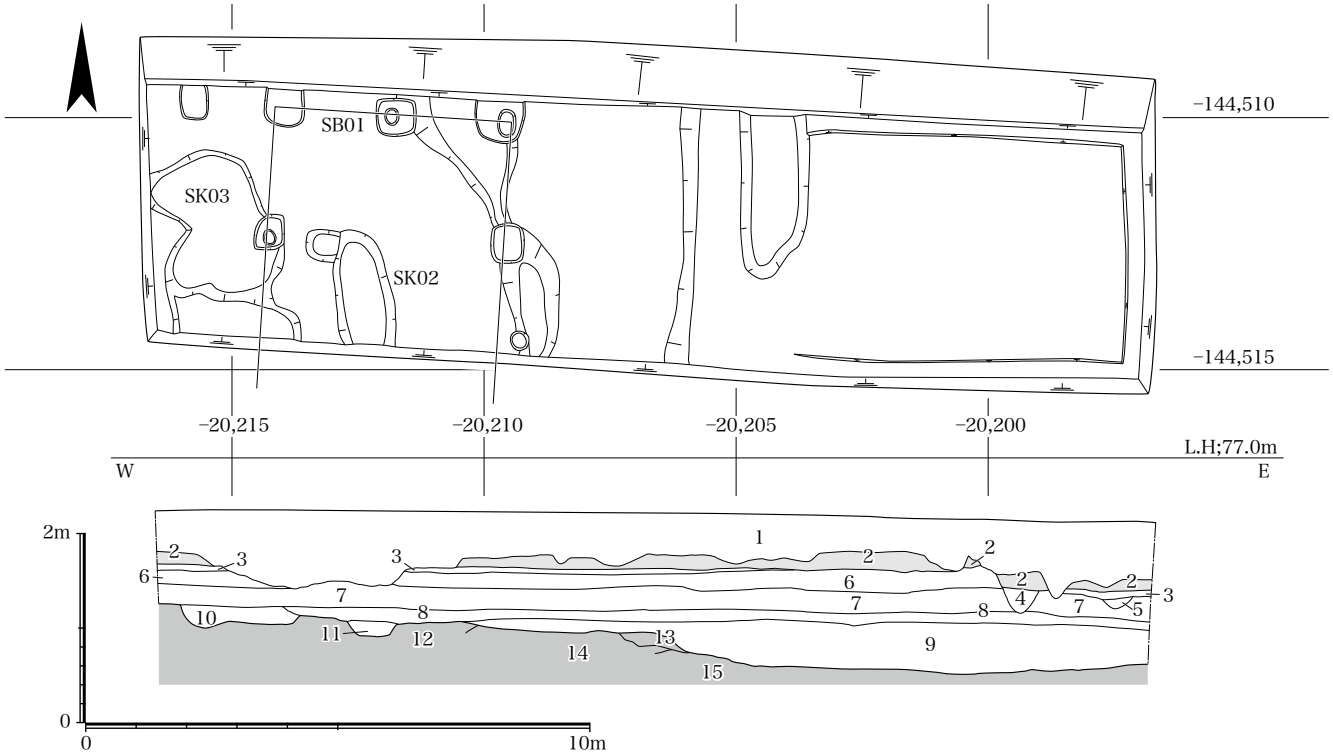
ＨＪ第 728 次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の掘立柱建物１棟と土坑２基がある。

SB01　梁行２間（4.8 m）、桁行２間以上（5.7 m以上）の南北棟掘立柱建物で、北側妻柱を確認し発掘区外南側につづく。

SK02　東西約 1.2 m、南北 2.3 m以上、深さ約 0.15



ＨＪ第 728 次調査　遺構平面図（1/150）・発掘区南壁土層図（横 1/150・縦 1/80、図面は東西を反転）

ＨＪ第 728 次調査　発掘区全景（東から）

mの平面長楕円形の土坑で、発掘区外南側につづく。奈良時代後半の土器と瓦とともに、製塩土器の破片がまとまって出土した。

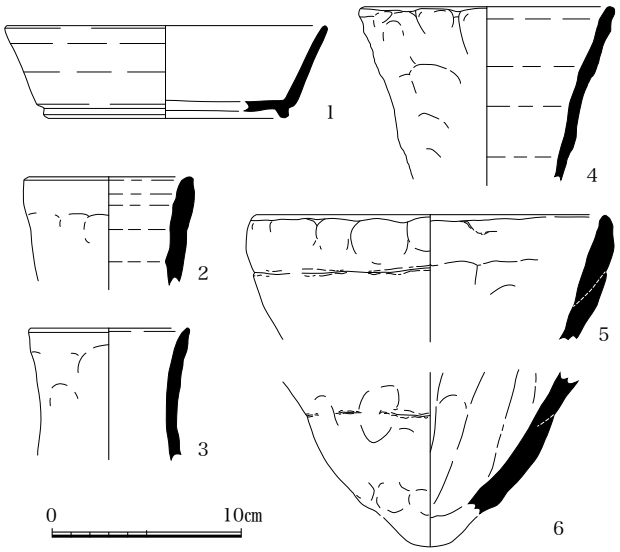
SK03　東西約 2.6 m、南北 3.7 m以上、深さ約 0.25 mの平面不整形の土坑で、発掘区外南側につづく。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱２箱分の土器類と瓦類がある。土器類は、奈良時代後半の土師器、須恵器、製塩土器で、瓦類は軒丸瓦１点（6236A）・軒平瓦１点（6691A）・丸瓦・平瓦である。土坑ＳＳＫＫ 02 出土資料を報告する。

SK02 からは、土師器椀・高杯・甕、須恵器杯・壺・甕が合計約 50 点、製塩土器が約 120 点（約 1.2kg）、軒丸瓦１点、丸瓦・平瓦が 24 点（約 2.4kg）出土した。

１は須恵器杯Ｂで、２～６は製塩土器である。製塩土器は小破片が多く、全形をうかがえるものは少ない。２～４は体部が筒形の器形で、２と４の内面はヨコナデ調整による凹凸がはげしい。５と６は鉢形の器形で、器壁が厚く内面は口縁部を除き縦方向のナデ調整である。いずれも外面は未調整で不規則な凹凸があり、粘土紐接合痕が残るものもある。この他内面に布目が残る内型作りのものが少量ある。



HJ 第 728 次調査　SK02 出土土器（1 / 4）

Ⅴ　調査所見

調査の結果、六坪内には奈良時代の遺構が存在することが確認された。建物の全容は不明なものの、出土遺物から奈良時代後半以降のものと考えられ、出土遺物には製塩土器の比率が高い特徴が指摘できる。（中島　和彦）

4．平城京跡（右京北辺坊・西四坊大路）の調査　第 732 次

事 業 名　大和中央道街路整備単独事業	調 査 期 間　平成 31 年 2 月 25 日～3 月 15 日
通知者名　奈良市長	調 査 面 積　120㎡
調 査 地　西大寺赤田町二丁目 812 － 1 他	調査担当者　安井宣也

Ⅰ．はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京北辺坊北西隅の西四坊大路とその西隣接地にあたる。また、京北条里の三条一里の南辺部で、鎌倉時代の「大和国添下郡京北条里班田図」（年代不詳、東京大学所蔵）や「西大寺与秋篠寺堺相論絵図」（1302 年、同所蔵）に描かれた「赤皮田池」がすぐ東方に推定される。地形的には秋篠川支流の赤田川の河谷内の低地及び丘陵裾の微高地に位置する。宅地化する前は水田で、「赤皮田池」の推定地付近では、河谷を北西から南東及び南北に横切る大畦畔に囲まれた範囲に 2 条の旧流路の名残が認められた。

調査地の約 50 m南東の右京北辺坊内では、平成 19 年度に市ＨＪ第 591 次調査を実施し、丘陵斜面が厚いシルト・砂互層で覆われた後に水田化することがわかった。河谷の対岸の丘陵斜面で実施した赤田横穴墓群の市第 1 ～ 3 次調査（昭和 58 年度､平成 22･23 年度）では、古墳時代後期～飛鳥時代の横穴墓を 16 基確認し、丘陵斜面では奈良～室町時代前半に形成された古土壌（森林を反映する可能性）の上が厚さ 1 mほどのシルト・砂互層の堆積層で覆われた後に水田化することがわかった。

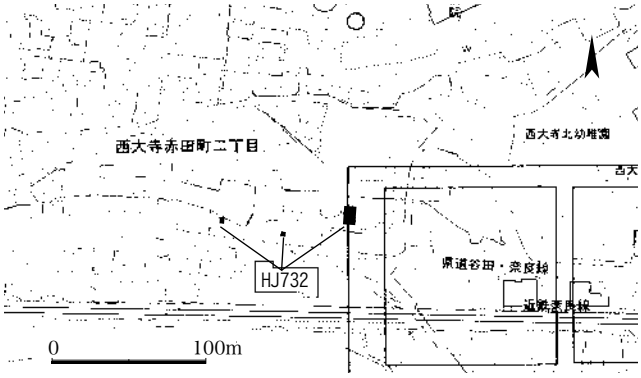
今回の調査は、右京北辺坊の北西隅及びその西隣接地の様相の確認を主な目的とし、道路予定地内の丘陵裾の微高地にＡ・Ｂ発掘区、低地にＣ発掘区の計 3 箇所の発掘区を設定して実施した。なお、Ｃ発掘区は西四坊大路の想定地、Ａ・Ｂ発掘区は京外である。

Ⅱ．基本層序・検出遺構

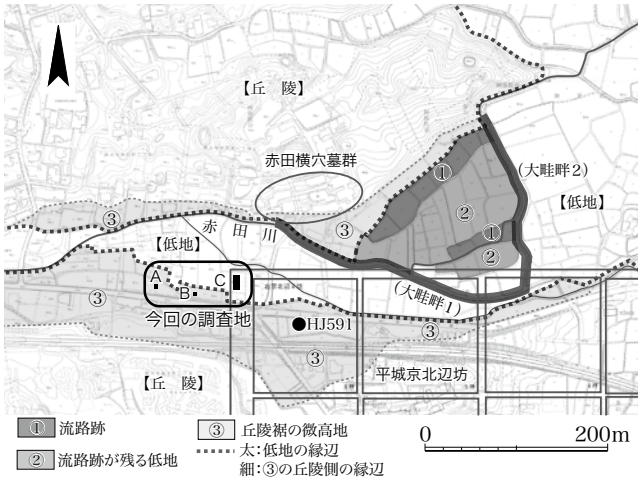
Ａ発掘区（12㎡）　現 GL-2.7 m（標高 88.8 m）まで掘り下げた。層序は、宅地の造成土（厚さ 0.1 m）の下に旧水田耕土・床土層（同 0.5 m）、丘陵裾の微高地の堆積層（同 1.6 m）があり、その下で沼沢地の堆積層（同 0.4 m）、流路か旧河川の堆積層となる。丘陵裾の微高地の堆積層はシルト・砂互層や砂・礫互層、沼沢地の堆積層はシルト層、旧河川の堆積層は砂層である。

検出遺構・出土遺物はない。

Ｂ発掘区（9㎡）　現 GL － 1.2 m（標高 88.4 m）まで掘り下げた。層序・層相はＡ発掘区とほぼ同様で、旧水田耕土・床土層（同 0.3 m）、丘陵裾の微高地の堆積層（同 0.7 m）があり､その下で沼沢地の堆積層（同 0.15 m）、旧河川の堆積層となる。



HJ 第 732 次調査　発掘区位置図（1/5,000）

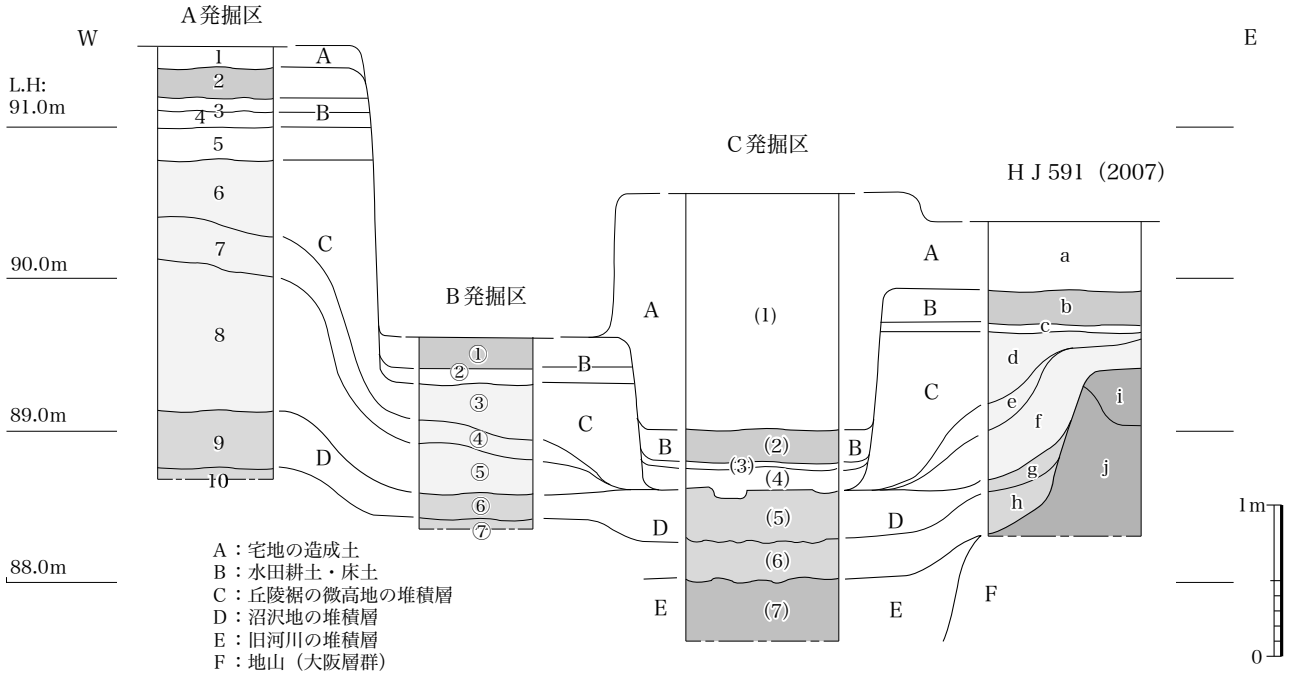


HJ 第 732 次調査　周辺の旧状と遺跡・調査地
（奈良文化財研究所作成地形図に加筆、1/8,000）

検出遺構・出土遺物はない。

Ｃ発掘区（99㎡）　発掘区の南半部で現 GL － 3.0 m（標高 87.5 m）、北半部で同－ 2.0 m（同 88.5 m）まで掘り下げた。層序は、宅地の造成土（厚さ 1.5 m）、旧水田耕土・床土層（同 0.4 m）の下に沼沢地の堆積層（同 0.3 m）､流路か旧河川の堆積層（同 0.3 m）があり、その下で低地の基盤層となる。沼沢地の堆積層は粘土・砂互層、旧河川の堆積層は礫混じり砂層である。低地の基盤層は粘土層である。

発掘区の南部分では検出遺構はない。北半部では、旧水田床土層の灰白色シルトブロック層（土層図（4）層）とその直下の灰白色シルト・砂互層（同（5）層）の各上面で遺構検出を行い、前者では耕作溝、後者では人の足跡らしい窪みを検出した。



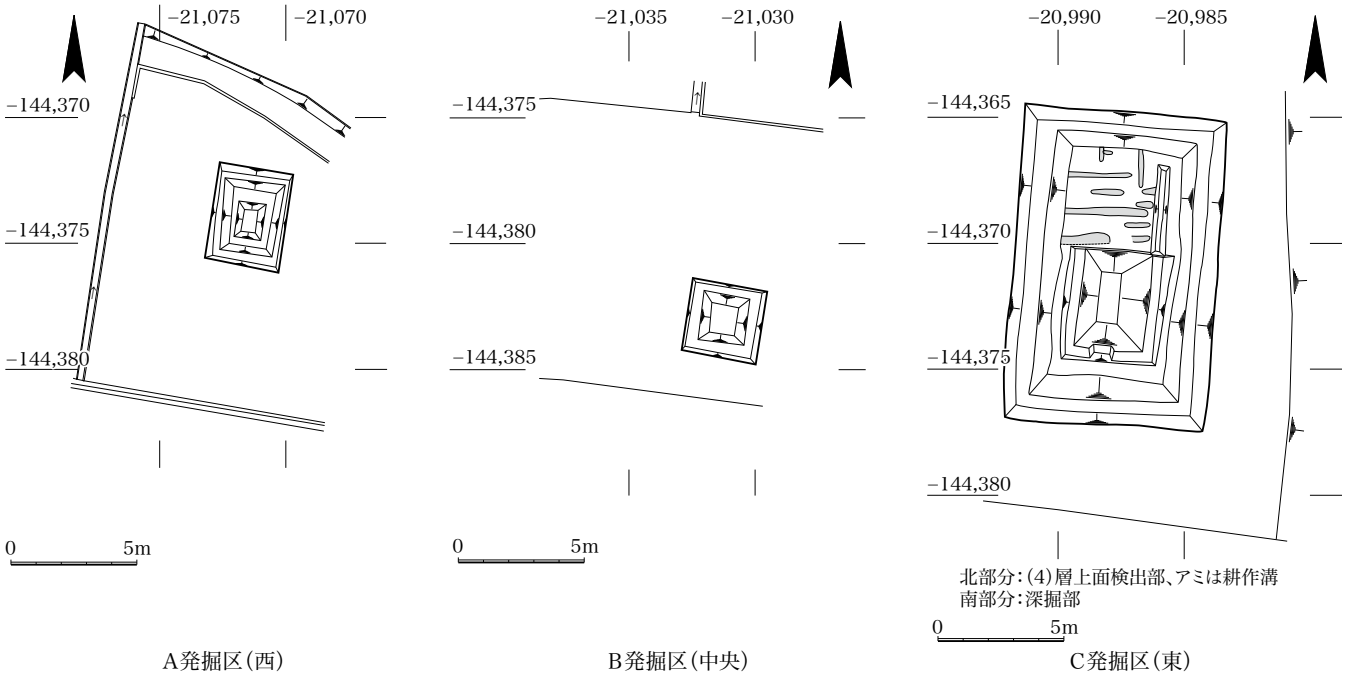
【A発掘区】
1　造成土
2　暗灰色シルト質砂
3　暗黄褐色シルトブロック
　＋浅黄色砂
4　にぶい黄色砂
5　灰白色粘土
6　灰色シルト混砂・砂互層
7　灰色砂・礫混じり砂互層
8　灰白色シルト・砂互層
9　灰白色シルト
10　灰白色砂

【B発掘区】
①　暗灰色シルト質砂
②　灰色シルト質砂
③　灰白色シルト・砂互層
④　灰白色砂・礫互層
⑤　灰白色砂・粘土互層
⑥　灰白色砂質粘土
⑦　淡黄色礫混じり砂

【C発掘区】
(1)　造成土
(2)　暗灰色シルト質砂
(3)　灰白色シルト質砂
(4)　灰白色粘土ブロック
(5)　灰白色粘土・砂互層
(6)　灰白色礫混じり砂
(7)　明緑灰色粘土

〈HJ591〉
a　造成土
b　暗灰色シルト質砂
c　淡灰色砂質土
d　青灰色粘土・シルト・砂互層
e　灰白色砂
f　青灰色粘土・灰白色砂互層
g　青灰色粘土
h　灰色砂
i　灰白茶色砂質土
j　灰白色粘土

HJ591・732 次調査　土層柱状図（縦：1/50）



HJ 第 732 次調査　発掘区平面図（1/300）

Ⅲ．出土遺物

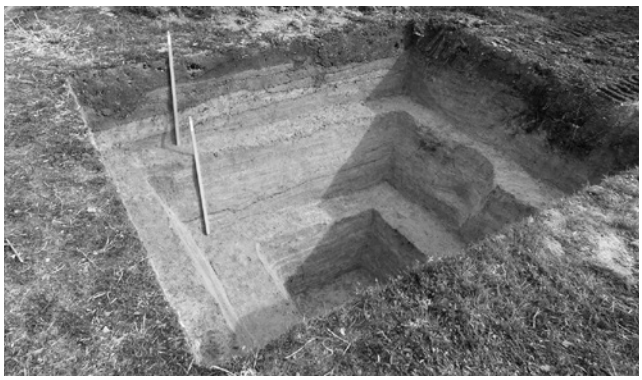
Ｃ発掘区の灰白色シルトブロック層（土層図（4）層）から、古墳時代後期の円筒埴輪片や時期不明の丸・平瓦片、17 世紀以降の肥前産磁器碗・信楽産摺鉢・土師器皿の破片が遺物整理箱で 1 箱分出土した。

Ⅳ．調査成果

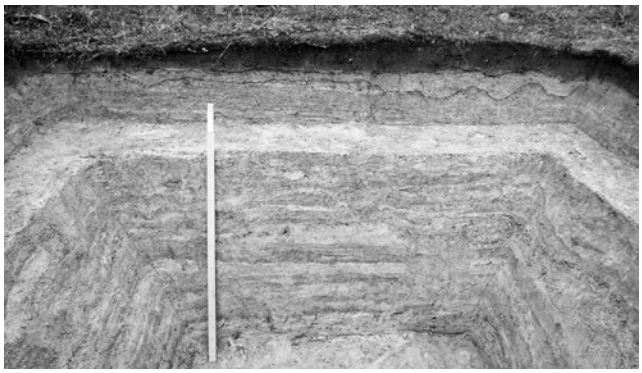
奈良時代の遺構はなかった。

調査地付近の丘陵斜面は厚いシルト・砂互層の堆積層で覆われ、丘陵裾の低地では沼沢地の堆積層上を覆って微高地を形成することが確認できた。同様の堆積層は河谷対岸の赤田横穴墓群のある丘陵にも認められ、奈良～室町時代前半の古土壌を覆うことから、室町時代の森林伐採に伴う土砂流出を反映する可能性がある。

低地の旧水田床土直下でみられる沼沢地の堆積層及びその下層の流路か旧河川の堆積層が鎌倉時代の「赤皮田池」と関連する可能性がある。宅地化前の水田は、西方の菖蒲下池を水源とする水利形態と一連で江戸時代にその原形が形成された可能性が高い。　（安井　宣也）



Ａ発掘区　上：全景（北から）、下：東壁土層断面（西から）



Ｂ発掘区　上：全景（西から）、下：西壁土層断面（東から）

Ｃ発掘区　南半部（南西から）

Ｃ発掘区　北半部検出遺構（東から）

Ｃ発掘区　深掘部東壁土層断面（北西から）

5．平城京跡（左京六条三坊十二坪）の調査　第 723 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 30 年 4 月 23 日～ 5 月 22 日
届出者名　株式会社やまと不動産	調 査 面 積　348㎡
調 査 地　大安寺二丁目 48–1 番地他	調査担当者　吉田朋史

Ⅰ．はじめに

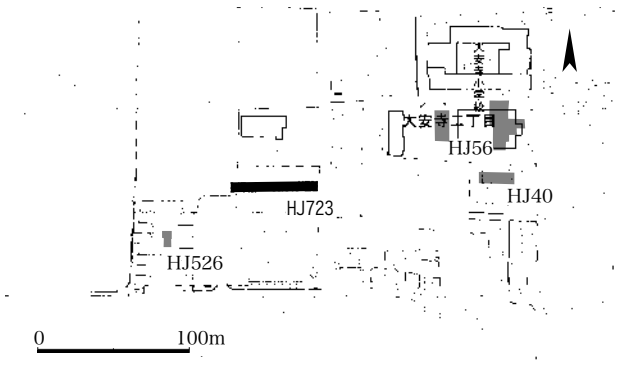
調査地は平城京の条坊復原では左京六条三坊十二坪中央の東側及び北側にあたり、約 150 m東側には大安寺が位置する。十二坪内中央には東堀河が南北に貫流しており、その遺存地割と東側接続地に相当する。調査地周辺での東堀河調査事例は、北側約 200 mの地点で実施した市 HJ 第 52 次調査（昭和 58 年）、北側約 160 m地点で実施した市ＨＪ第 141 次調査（昭和 62 年）があり、幅約 5.8 m・深さ 0.7 mであることが確認されている。今回の調査は、東堀河の確認とその東側に接続する宅地の様相解明を目的として、東西 58 m・南北 6 mの発掘区を設定し、調査を実施した。

Ⅱ．基本層序

発掘区内の基本層序は、上から順に黒褐色砂質土（耕作土、厚さ 0.2 m）、灰褐色砂質土（床土、厚さ約 0.1 m）、灰黄褐色砂質土（旧耕作土、厚さ約 0.2 m）、茶褐色砂質土（約 0.2 m）の順に堆積し、現地表下約 0.7 mで灰黄色砂･灰黄褐色砂質土の地山上面(標高 57.0 ～ 57.2 m）に至る。地山面は西側に向かって緩やかに傾斜している。

Ⅲ．検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、奈良時代～平安時代の掘立柱列４条（SA01 ～ 04)、掘立柱建物２棟（SB05・06)、東堀河と推定される南北方向の溝１条（SD07)、東西方向の溝４条（SD08 ～ 11)、井戸２基（SE12・13)、土坑１基（SK14)、舟入遺構１基（SX15）を検出した。以下、その概要について述べる。



HJ 第 723 次調査　発掘区位置図（1/5,000）

SA01　東西方向４間以上の掘立柱列である。柱間は 3.0 m等間で、西から１間目の柱穴は新しい土坑に壊されている。発掘区外東側に延びる可能性が高い。

SA02　東西方向４間の掘立柱列である。西端の柱間が広く見えるのは西から１間目の柱穴が残存しないためである。重複関係から SD08 より新しい。

SA03　東西方向２間の掘立柱列である。

SA04　東西方向３間の掘立柱列である。西から２間目の柱穴が SK14 に壊されている。

SB05　梁行２間の南北棟掘立柱建物で、発掘区外南側へ続くと考えられる。梁行柱間は 3.6 m等間。妻柱穴が SK14 に壊されている。

ＨＪ第 723 次調査　遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模（間） 桁行 × 梁行	全長（m）	柱間（m）	柱穴の深さ（m）	備考
SA01	東西	４間以上	12 以上	3.0 等間	0.2	西から１間目の柱穴は残存しない
SA02	東西	４間	10.3	西から 4.5–1.5–1.9–2.4	0.2 ～ 0.5	SD08 より新しい
SA03	東西	２間	6.5	西から 3.5–3.0	0.1 ～ 0.2	
SA04	東西	３間	8.6	西から 3.2–2.7–2.7	0.2	西から２間目の柱穴が SK14 で壊される
SB05	南北	１間以上 × ２間	不明	梁行 3.6 等間	0.1 ～ 0.2	SK14 より新しい
SB06	南北	２間 × ２間	3.3	桁行 1.8–1.5、梁行 1.3 等間	0.2 ～ 0.3	SD11 より古い

遺構番号	掘方等			井戸枠		時期	主な出土遺物
	平面形態	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法（m）		
SE12	楕円形	東西 2.6 南北 2.3	1.9 以上	抜取の為不明		８世紀後半	土師器・須恵器・奈良三彩小壺
SE13	不整形	東西 2.5 南北 2.2	1.5	方形横板組	一辺 0.6	10 世紀末～ 11 世紀初頭	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・瓦器、銅椀・曲物

HJ 第 723 次調査　SD07（南から）

SB06　梁行２間・桁行２間の南北棟掘立柱建物で、南西隅柱穴が残存しない。梁行柱間は 1.3 m等間、桁行柱間は北から 1.8–1.5 m。重複関係から SD11 より古い。

SD07　東堀河と考えられる南北方向の溝である。東岸から約 4.3 mまでを検出したが、西端は発掘区外のため全幅は不明である。検出面の標高は 56.6 mで、検出面から最深部底面までの深さは約 0.7 mである。東側より検出面が約 0.4 m低く後世に削平を受けていると判断され、本来は深さ 1.1 m前後あった可能性がある。断面形状は２段の逆台形で、河底はほぼ平坦である。河底の標高は 55.9 mで、市ＨＪ第 141 次調査で確認した河底標高と同じである。

堆積土層は、下層から順に灰色粗砂、灰色細砂、黒褐色粘質土、淡灰色細砂、暗灰色粗砂、灰色細砂となる。埋土から奈良～平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、軒丸瓦 (6225– A)、平瓦、丸瓦の他、墨書土器や土馬が出土した。

SX15　東堀河（SD07）の東側に接続し、船入に関わる遺構と推定される。北端が発掘区外へ続くものの、平面形は概ね東西に長い長方形である。規模は東西 17.0 m、南北 6.0 m以上、深さ 0.8 m。西端が幅 2.2 mまで狭まり少しくびれて東堀河と接続するが、接続箇所の底は 0.2 m前後高まる。東堀河底との高低差は 0.3 mである。埋土は上から茶褐色砂質土、暗褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、暗灰色粗砂で、底には部分的に粗砂が堆積する。８世紀後半の土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器杯・壺・甕・平瓶、墨書土器、軒平瓦（6663– F・6663–J)、軒丸瓦 (6314– A)、平瓦、丸瓦が出土した。

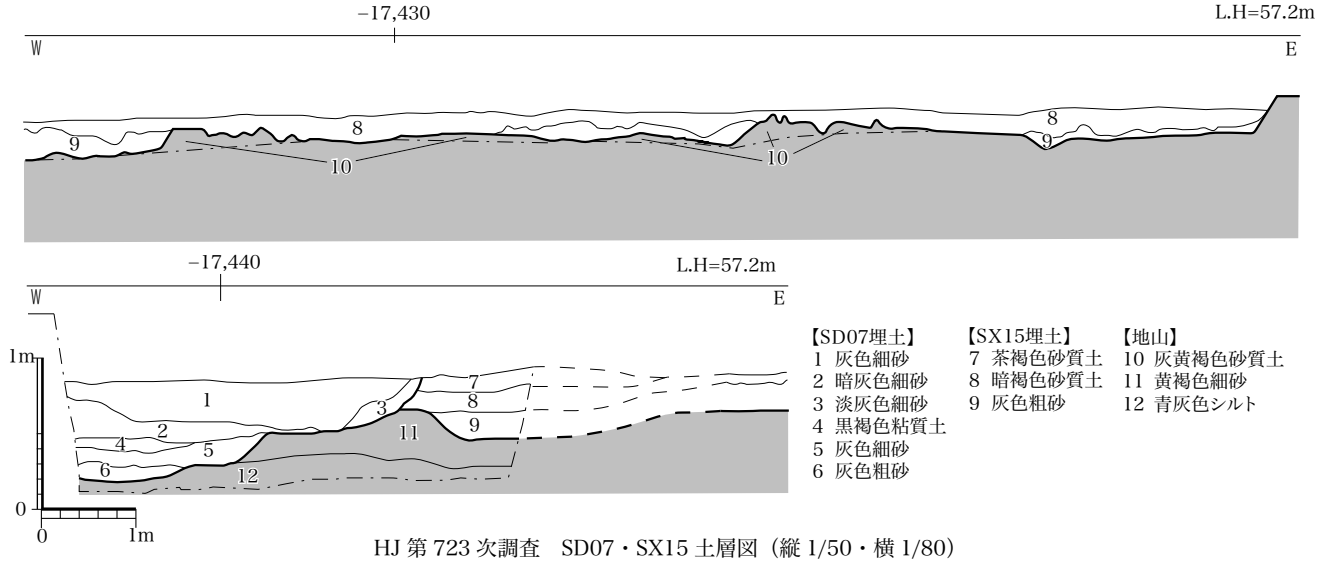
SD08　SX15 の北東側に接続する東西溝で、長さ 6.8 m、幅 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.1 m。重複関係から SA02・SD10 より古い。

SD09　SX15 の南東側に接続し、SD08 と併行する東西溝で、長さ 5.2 m以上、幅 0.55 ～ 0.9 m、深さ 0.1 m。SB05 北西隅柱穴で東端が壊されるが、SD08 と東端をほぼ揃えていたと考えられる。SD08 と SD09 の距離は心々で 3.0 ～ 3.1 mであり、この間に坪内通路を推定できる。重複関係から SD11 より古い。

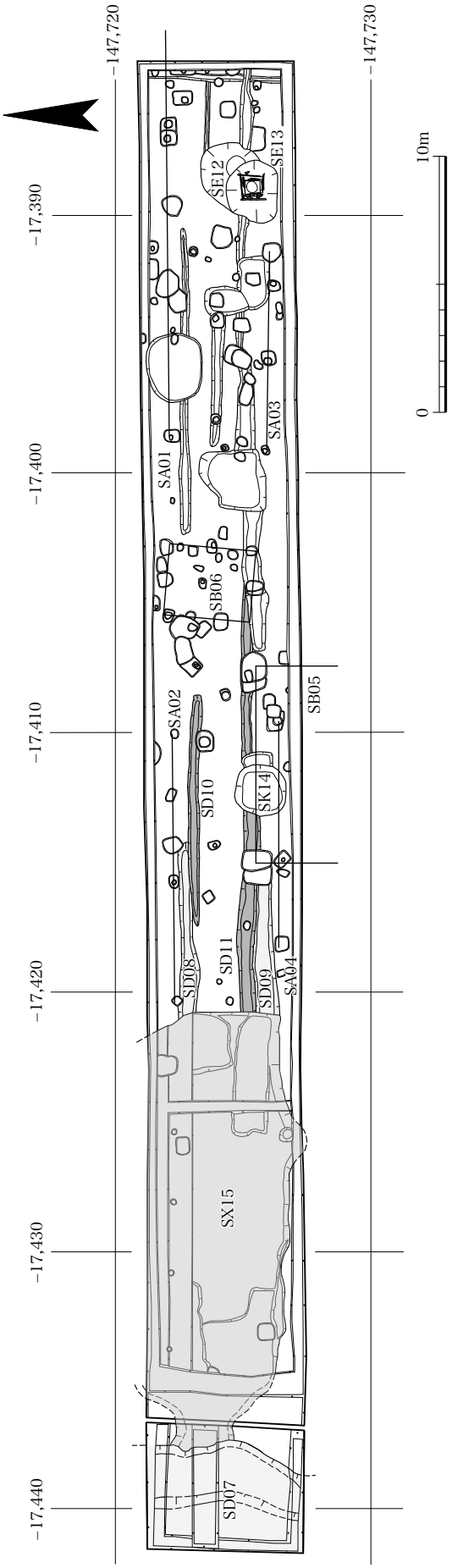
SD10　SD08 の南側に沿って併行する東西溝で、長さ 8.9 m、幅 0.4 m、深さ 0.05 mである。重複関係から SD08 より新しい。

SD11　SD09 の北側に沿って併行する東西溝で、長さ 16.5 m以上、幅 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.1 mである。重複関係から SD09 より新しい。SD10・11 は、SD08・09 の間に収まり併行することから、坪内通路の改修に伴う側溝と推定できる。両溝間の距離は、心々で 2.1 ～ 2.4 mである。

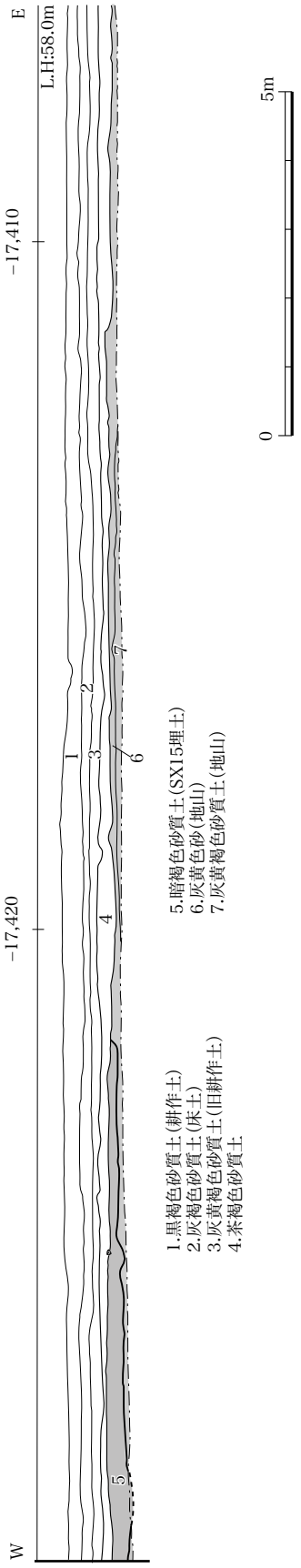
SE12　東西 2.6 m・南北 2.3 mの平面楕円形掘方で、深さ 1.9 m以上の井戸である。井戸枠は抜き取られており、完掘できなかったため井戸底の構造は不明である。埋土は、上から黄褐色砂質土･淡灰色粘質土が堆積する。検出面から約 0.3 m下の中央北東よりの黄褐色砂質土から完形の奈良三彩小壺１点が、８世紀後半の土師器、須恵器とともに無蓋で出土した。



HJ 第 723 次調査　SD07・SX15 土層図（縦 1/50・横 1/80）

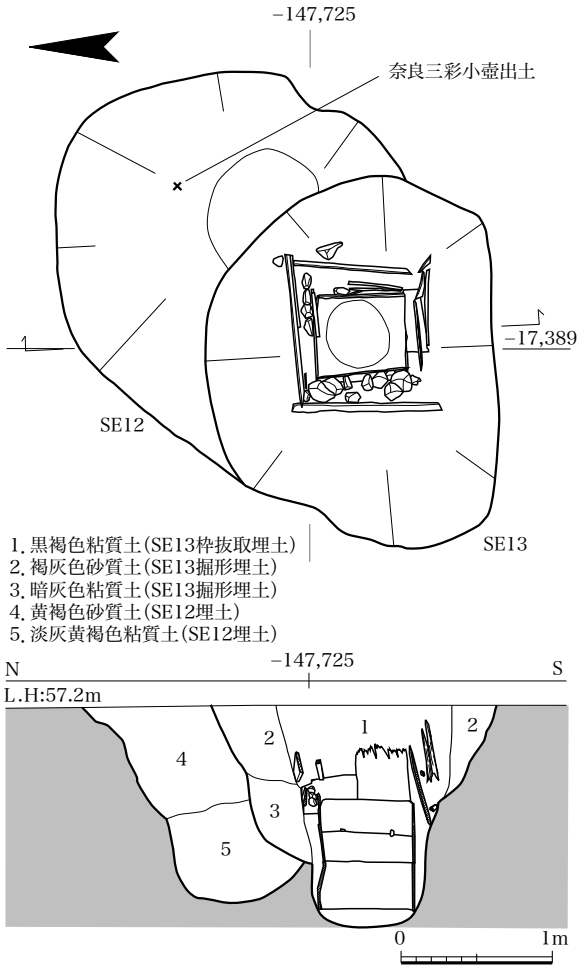


HJ 第 723 次調査　遺構平面図 (1/250)



1.黒褐色砂質土(耕作土)
2.灰褐色砂質土(床土)
3.灰黄褐色砂質土(旧耕作土)
4.茶褐色砂質土
5.暗褐色砂質土(SX15埋土)
6.灰黄色砂(地山)
7.灰黄褐色砂質土(地山)

HJ 第 723 次調査　北壁土層図 (1/100)



HJ 第 723 次調査　SE12・13 平面・立面図（1/50）

HJ 第 723 次調査　SE12・13（西から）

SE13　東西 2.5 m、南北 2.2 mの平面不整形掘方内に方形井戸枠を組んだ深さ 1.5 mの井戸である。重複関係から SE12 よりも新しい。井戸枠は２段構造になっている。下段は内法 0.6 m、高さ 0.72 mの方形横板組型で、１段目を目違枘組、２段目を相欠き組でつくる。上段は内法 0.9 mの方形横板組型であるが、腐朽が著しくて仕口構造等の詳細は不明。下段と上段の間に 0.15 mの平坦面を設けて段差をつくり、北側と西側に礫を敷くが、南側と東側には縦板を立てている。上段南面の横板の残存状態が悪い点からみて、縦板は補修時に追加された構造の可能性がある。枠内埋土は黒褐色粘質土で、10 世紀末～ 11 世紀初頭頃の土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦類の他、銅椀、曲物が出土した。

SK14　平面隅丸方形で、南北 1.8 m、東西 1.85 m、深さ 0.6 mの土坑である。重複関係から SA04・SB05・SD11 より新しい。８世紀後半頃の土師器が出土した。

Ⅳ．出土遺物

出土遺物は遺物整理箱で 31 箱分が出土したが、大半は SD07・SX15 出土遺物である。種別は、弥生土器、奈良時代の土師器・須恵器・奈良三彩小壺、軒丸瓦（6314–A・6225– A）・軒平瓦（6663–F・J）・丸瓦・平瓦・塼、平安時代の土師器・黒色土器・灰釉陶器、曲物、銅椀、釘、砥石などがある。

Ⅴ．調査所見

SD07（東堀河）と接続する SX15（船入遺構）を確認した。両遺構の堆積土層には重複関係があり、SX15 が８世紀後半に先に埋没した後、SD07 は 10 世紀頃まで存続して埋没することがわかる。しかし、SD07 及び SX15 の底には灰色粗砂が堆積しており、SD07 の水位が 0.5 mを上回ると SX15 に水が流れ込む構造となっていることから、８世紀後半以前の時期には同時に併存していたと推定できる。また、東堀河の下流にはその水位を調節するための施設がいくつかあったと仮定すれば、それと連動させて SX15 に水を入れることで舟を坪内へ引き込んで荷揚げを行うことは可能であったと推定できる。

また、SX15 の東端に SD08・09 あるいは SD10・11 とした２条の併行する東西溝が接続する。重複関係から SD10・11 は SD08・09 の内側に掘りなおした溝であり、SX15 から東へ延びる坪内通路の南北側溝とその補修溝と考えられる。この坪内通路は十二坪を南北に２分割する位置にあり、宅地分割の機能も有している。SA01 ～ 04 の掘立柱列は、この坪内通路に沿って認められることから、通路と宅地を区画するための塀跡と推定できる。

そして、SD11 埋没後につくられた SB05・06、SE12・13 は、８世紀後半以降に SX15 とこれに接続する坪内通路がなくなり、宅地に編入された様相を暗示する。

このような船入施設とこれに接続する通路によって水運の荷揚げ場所を推測できる遺構は、平城京で初めて確認されたものであり、物資の輸送方法を具体的に検討できる点で重要な調査成果といえる。　（吉田　朋史）

HJ 第 723 次調査　発掘区全景（東から）

HJ 第 723 次調査　SD07・SX15（南西から）

6. 平城京跡（左京四条条間路）の調査　第 725 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　平成 30 年 6 月 11 日～6 月 22 日
届出者名　日本ハウスホールディングス奈良支店	調 査 面 積　200㎡
調 査 地　四条大路三丁目９７９番１	調査担当者　中島和彦　桑原一徳

Ⅰ．はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によれば四条条間路にあたり、西側には朱雀大路が位置する。西側隣接地では、平成７年に平城京第 328 次調査を実施し、四条条間路の南北両側溝と朱雀大路東側溝が検出しされ、その交差状況が確認できた。四条条間路は溝芯々距離で幅約 8.4 mあり、朱雀大路との交差点部分では、東側溝上に架けられた幅約７mの橋を確認した。

また、弥生時代の溝や土坑も見つかっており、平城京跡と重複して弥生時代の遺跡が周囲に存在することが判明している。

今回の調査は、四条条間路の検出及び、奈良時代以前の遺構の有無の確認を目的に、道路建設部分に東西 40 m、南北５mの発掘区を設定し調査を実施した。

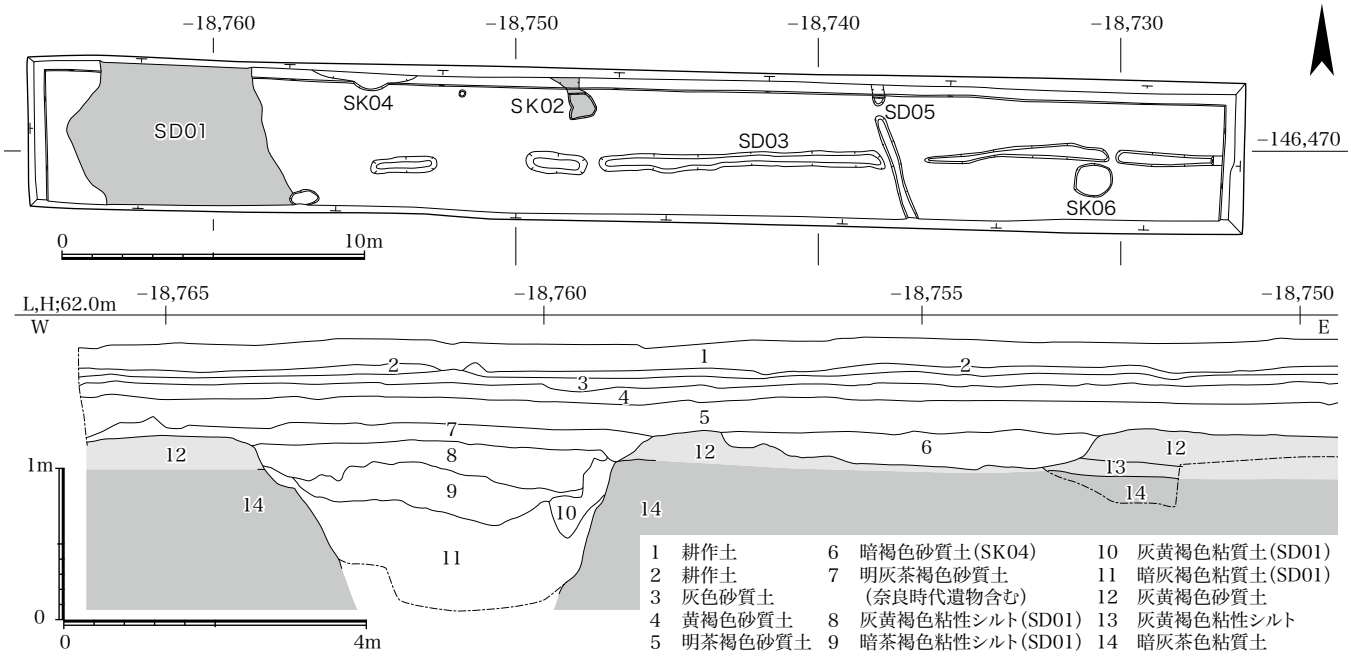
Ⅱ．基本層序

発掘区内の層序は、発掘区西側で耕作土（厚さ約 0.2 m、土層図１・２、以下同じ）の下に灰色砂質土（約 0.1 m、３）、黄褐色砂質土（約 0.1 m、４）、明茶褐色砂質土（約 0.2 m、５）、弥生時代中期～後期の遺物を含む灰黄褐色砂質土（約 0.2 m、12）と続き、現地表下約 0.8 mで暗茶褐色粘質土（14）の地山に至る。地山面の標高は発掘区西側で約 60.0 mである。発掘区東側では、明茶褐色砂質土の下に奈良時代以降の堆積土の暗茶褐色砂質土（約 0.07 ～ 0.2 m）がある。遺構検出は灰黄褐色砂質土の上面で行い、弥生時代後期、奈良時代以降の遺構を検出した。

HJ 第 725 次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅲ．検出遺構

検出した遺構は、弥生時代後期の溝１条と土坑１基、奈良時代以降と考えられる溝１条と土坑１基、時期不明の溝１条と土坑１基がある。



HJ 第 725 次調査　発掘区平面図（1/250）・北壁土層図（縦：1/50・横：1/100）

HJ 第 725 次調査　発掘区全景（西から）

弥生時代の遺構

SD01　東西幅 5.5 ～ 6.5 m、長さ 4.6 m以上の南北方向の溝で、発掘区外南北へ続く。検出面から約 1.1 m掘り下げたが、底には至らなかった。埋土は上から灰黄褐色粘性シルト、暗茶褐色粘性シルト、暗灰褐色粘質土で、弥生時代後期の土器片が少量出土した。

SK02　東西 0.5 ～ 1.0 m、南北約 1.4 m以上の不整形の土坑で、発掘区北側へ続く。検出面からの深さは、約0.1 mである。弥生時代後期の土器片が少量出土した。

奈良時代以降の遺構

SD03　幅 0.2 ～ 0.7 m、長さ 28.0 m以上の東西方向の溝で、発掘区外東西に続く。途中 4 か所ほど途切れているが、一連のものと考えられる。また西側の平城京第 328 次調査地内でも、同規模の溝がこの溝の延長上に存在しており、あるいは一連のものと考えられる。出土遺物が少量で、詳細な時期は不明である。

SK04　東西 5.0 m以上、南北 0.5 m以上の半円形の土坑で、大半が発掘区外へ続くため平面形状は不明である。深さは約 0.2 mあり、瓦が少量出土した。四条条間路の北側溝に近く、あるいはそのあふれ部分とも考えられる。

時期不明の遺構

SD05　幅 0.3 ～ 0.35 m、長さ 4.5 m以上の南北方向の溝で、発掘区外南北に続く。検出面からの深さは約 0.1 mで、北でやや西に振れる。遺物が出土せず詳細な時期は不明だが、主軸の方向が SD01 と同じであることから見て奈良時代以前のものと考えられる。

SK06　東西 1.3 m、南北 1.0 mで平面楕円形の土坑で、検出面からの深さは 0.2 mである。遺物は出土せず時期は不明。

Ⅳ．出土遺物

弥生時代中期～後期の弥生土器と奈良時代の土器（土師器・須恵器）、平瓦・丸瓦が、遺物整理箱で 1 箱分出土した。

Ⅴ．調査所見

今回の調査区は四条条間路の路面上に位置し、南北の側溝はいずれも発掘区外と考えられ、四条条間路の規模は確認できなかった。また、弥生時代後期の溝や土坑を検出し、周辺の調査と同様に同時期の遺構が存在することが明らかとなった。

（中島　和彦）

7．平城京跡（左京五条四坊一坪）の調査　第 724・730 次

事 業 名	JR 奈良駅南特定土地区画整理社会資本整備総合交付金事業	調 査 期 間	①　平成 30 年 5 月 30 日～ 7 月 2 日 ②　平成 30 年 12 月 12 日～ 12 月 26 日
通知者名	奈良市長	調 査 面 積	①　218㎡　　②　85㎡
調 査 地	①（第 724 次）大森西町 187 － 2 他 4 筆 ②（第 730 次）大森西町 191 － 1	調査担当者	①　安井宣也・髙岡桃子 ②　安井宣也

Ⅰ．はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京五条四坊一坪の西辺中央付近（第 724 次）及び南西隅（第 730 次）にあたる。地形的には能登川扇状地の扇端部で、東三坊大路の位置を踏襲して北から南に流れる菩提川の東側に位置する。旧状は条坊の遺存地割が残る水田で、堤防沿いの東西 30 ～ 50 mの範囲が東側の水田と段差を介して一段低い。現状は、第 724 次調査地北寄りと第 730 次調査地は盛土造成されており（前者：宅地、後者：空き地）、第 724 次調査地南寄りは休耕田である。

一坪内の発掘調査は、これまでに中央～東部分で実施しており、市ＨＪ第 626・666・667・668・680 次調査（平成 21 ～ 26 年度）では、水田面下 0.4 ～ 0.5 mの地山上面（標高 60.7 ～ 61.3 m）で奈良時代後半から平安時代前半にかけての宅地関連の遺構を検出した。[註)]

今回の調査は平城京の宅地関連の遺構の遺存状態や様相の確認を主な目的とし、第 724 次で 3 箇所（A～C、A・B は宅地、C は休耕田）、第 730 次で 1 箇所の発掘区を設定して実施した。

Ⅱ．基本層序

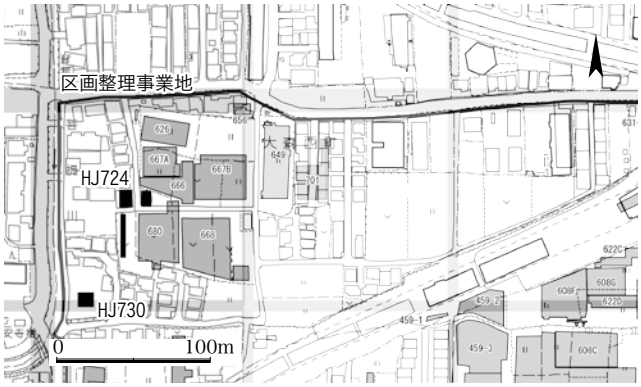
第 724 次調査地　A・B 発掘区では旧水田面上に宅地の造成土層があり、厚さは前者が 0.9 mで後者が 1.4 m。

A 発掘区と B・C 発掘区の東寄りは近接する第 680 次調査地と同じで、黒色シルト質砂の水田耕土層（厚さ 0.2 m）、黄灰色や褐灰色の粘質土やシルト質砂からなる同床土層（3 ～ 4 層あり、同 0.3 m）の下で黄褐色の粘質土や砂質シルトの地山上面（標高:60.6 m）となる。

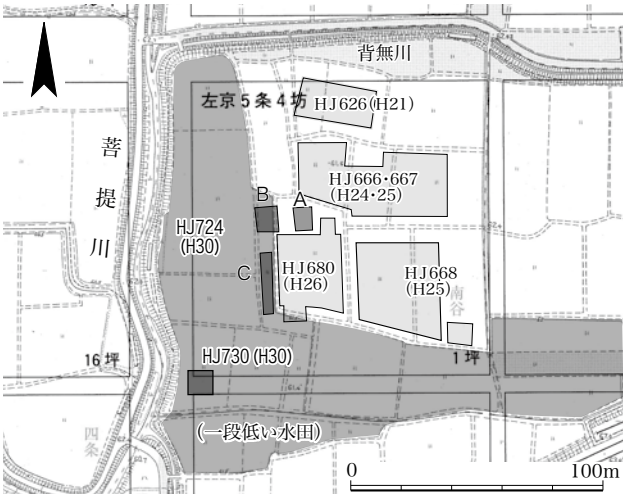
B 発掘区の西寄りと C 発掘区の西・南寄りは、オリーブ黒色シルト質砂の水田耕土層（厚さ 0.1 m）、褐灰色粘土混じりシルトからなる湿地堆積層（3 ～ 4 層あり、同 0.7 m）の下で明黄褐色砂質粘土～シルトの地山上面（標高：60.1 m）となる。湿地の堆積層は一段高い旧水田の形成後に堆積しており、地山上面は旧水田畦畔に沿う西落ちの段差を介して低くなる。

いずれも、地山上面が奈良時代の遺構面である。

第 730 次調査地　現地表下 3.8 m（標高 58.9 m）まで掘り下げた。層序は、造成土（厚さ 1.9 m）の下に黒褐色砂質シルトの水田耕土層（厚さ 0.6 m）、灰色や黒褐色の粘土からなる湿地堆積層(5 層あり、厚さ 1.4 m）があり、その下で菩提川の旧河道内に堆積する灰色砂礫層となる。灰色砂礫層上面の標高は 59.0 mで、前述の第 724 次調査地の地山上面より 1.1 ～ 1.6 m低い。



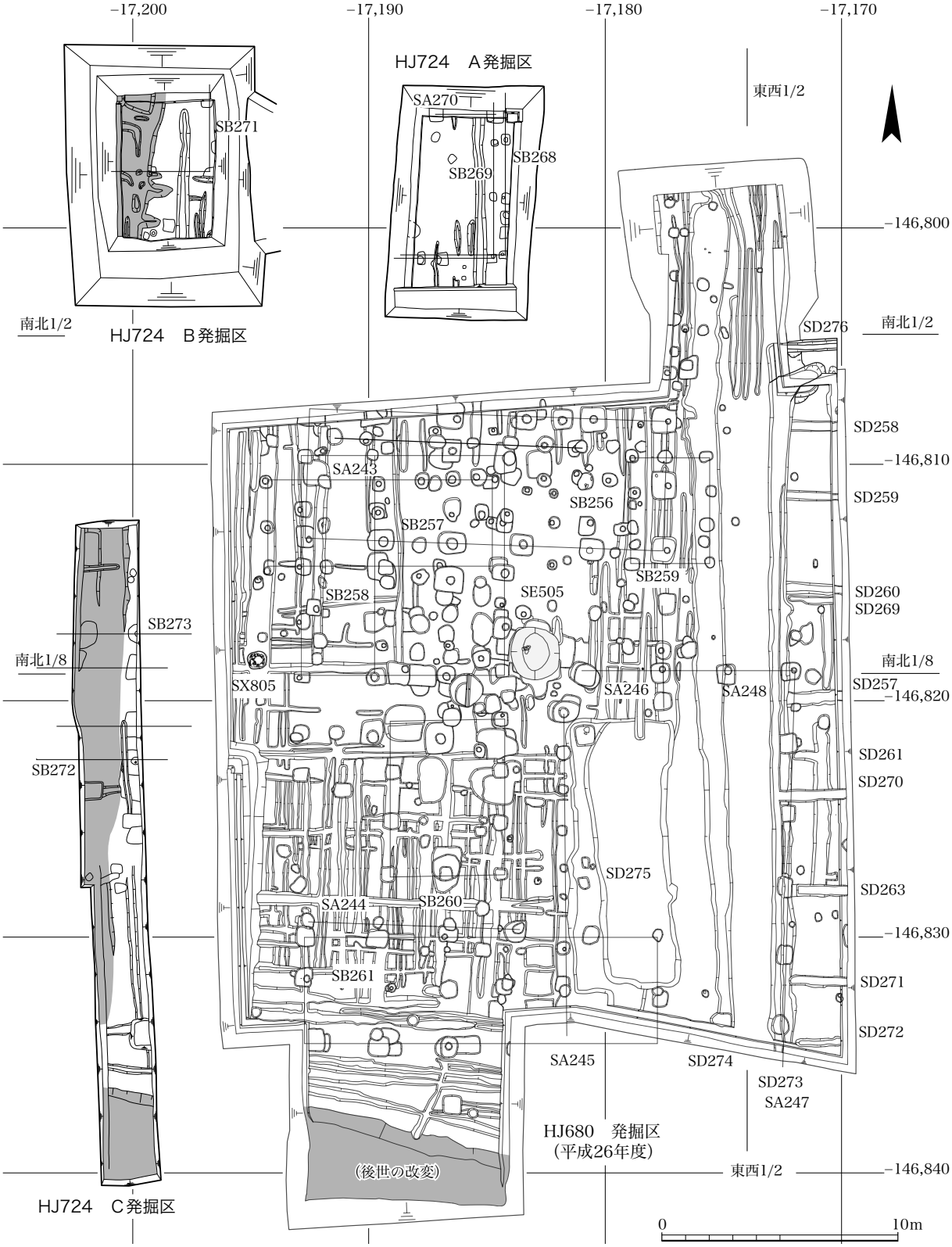
HJ 第 724・730 次調査　発掘区位置図（1/5,000）



HJ 第 724・730 次調査　調査地周辺の旧状（1/3,000）

Ⅲ．検出遺構

第 724 次調査地では、地山上面で奈良時代の掘立柱建物 5 棟（SB268、269、271 ～ 273)、掘立柱列 1 条（SA 272）を検出したが、第 730 次調査地では奈良時代の遺構はなかった。検出した遺構の概要は下記の通りで、遺構番号は坪ごとの通し番号である。

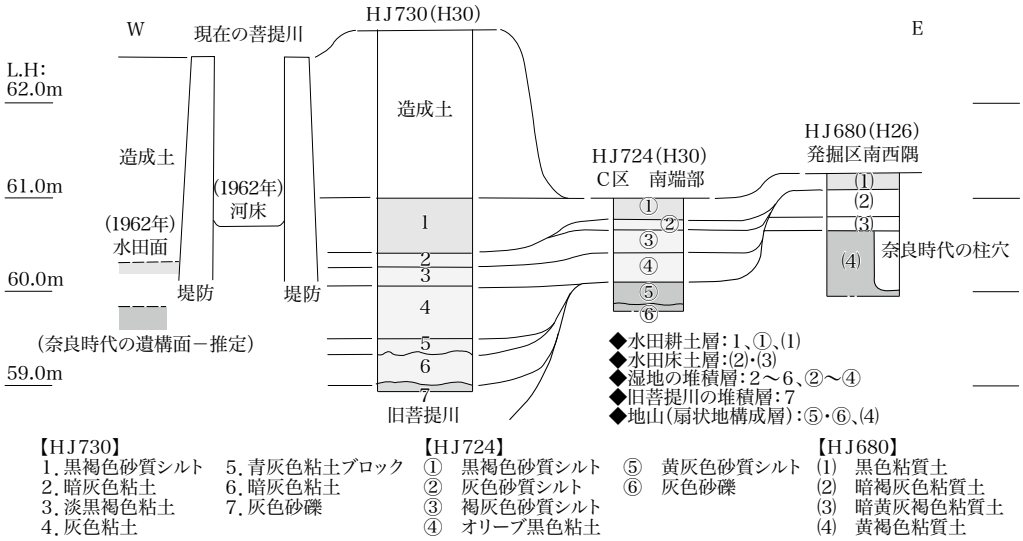


HJ 第 724 次調査　遺構平面図（1/250）

SB268・269　ともにA発掘区で検出した東西１間（2.4m）以上、南北２間（4.8 m、柱間：2.4 m等間）以上の建物の南東部分で、ほぼ同じ位置に重複することから建て替えとみるが、新旧関係は不明。SB268 と第 680 次調査地の SB258、SB269 と同 SB257 はともに東側柱の柱筋が揃う。

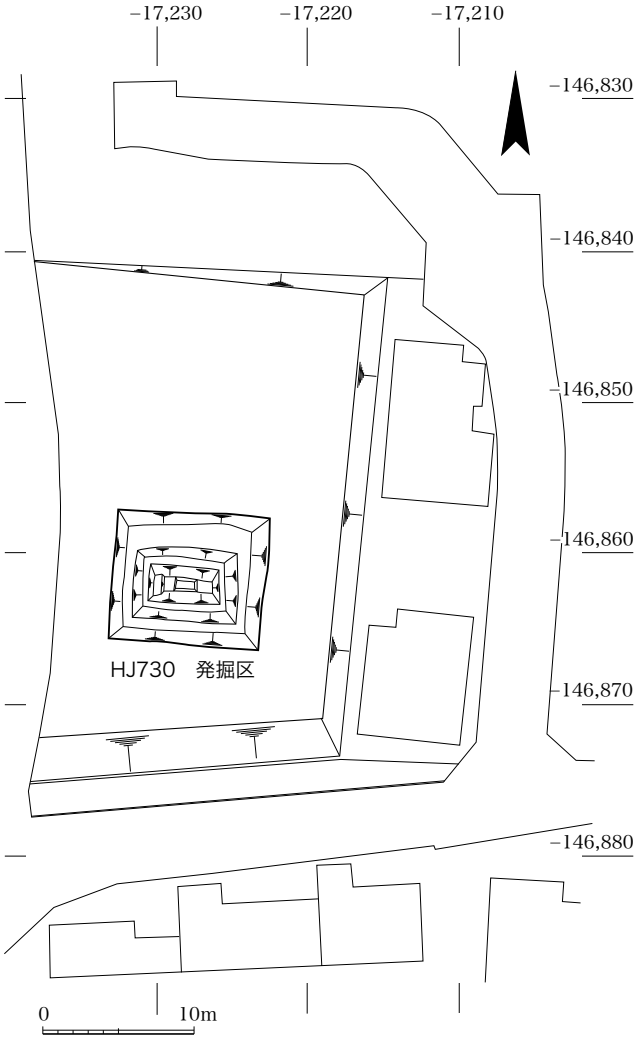
SA270　A発掘区で検出した東西１間（2.4 m）以上の柱列。SB268・269 と位置が重複し、これらとの同時併存はない。塀か建物の一部の可能性がある。

SB271　B発掘区で検出した東西１間（2.4 m）以上、



HJ724・730 次調査 土層断面模式図（縦：1/80）

HJ724 次調査　A～C発掘区
左段上：A発掘区全景（北から）
左段下：B発掘区全景（北東から）
右段上：C発掘区北部分（北から）
右段中：同上　中央部（北から）
右段下：同上　南部分（南から）



HJ 第 730 次調査　発掘区平面図（1/500）

HJ 第 730 次調査　発掘区全景（北から）

HJ 第 730 次調査　南壁土層断面（北から）

南北 1 間（3.0 m）以上の建物の南東部分。

SB272・273　C 発掘区の東辺北寄りに 4.2 m隔てて南北に並ぶ 2 基の柱穴が重複して 2 組あり、柱間寸法と配列から重複する 2 棟の東西棟建物の側柱列の一部（南：SB272、北：SB273）と推定した。柱筋が揃うことから建替えの可能性がある。

Ⅳ．出土遺物

第 724 次調査地　遺物整理箱で 9 箱分が出土した。大半が奈良時代の土器片（土師器・須恵器・製塩土器）で、他に奈良時代の瓦片、時期不明のサヌカイト片、室町時代以降の瓦質土器片や国産陶磁器片がある。柱穴の埋土やA発掘区の地山上面から奈良時代の土器片、B 発掘区の湿地堆積層の最下層から奈良時代の土器片とともに瓦質土器片と国産陶磁器片が出土している。

第 730 次調査地　湿地堆積層の下位の層（土層図 4 ～ 6 層）から遺物整理箱 1 箱分の土器片が出土した。全て土師器で磨耗が著しく、器種や時期は不明。

Ⅴ．調査所見

第 724 次調査地では、奈良時代の遺構面である地山上面が後世の改変を受けているものの、平城京の宅地関連の遺構は残存し、少なくとも 3 時期の変遷があることがわかった。また、第 730 次調査地は室町時代以前の菩提川の旧河道内で、埋没後に湿地となった後に水田化したことがわかった。

これらの調査地で確認した湿地堆積層は旧河道にあたる西寄りが厚く、最上層の上面が現菩提川を挟んで西側の水田面よりも高い。また、砂礫層を挟まないことから堆積の原因が破堤ではなく氾濫であることがわかる。現河道の形状と第 724 次調査地での出土遺物の時期を勘案すると、この湿地はもともと現菩提川東側に残った旧河道の窪地を活用した江戸時代の遊水池で、埋没した後に水田化したことが推察できる。　（安井　宣也）

註　奈良市教育委員会「平城京跡（左京五条四坊一坪）の調査　第 626・656・666 ～ 668・680 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 26（2014）年度』2017

8. 平城京跡（左京九条三坊五・六坪）の調査　第 727 次

事 業 名　研修センター新築	調 査 期 間　平成 30 年 7 月 23 日～令和元年 5 月 17 日
届出者名　大和ハウス工業株式会社	調 査 面 積　8,273㎡
調 査 地　西九条町四丁目 1 番 11 他 2 筆	調査担当者　中島和彦　吉田朋史　桑原一徳

Ⅰ．はじめに

調査地は、平城京南端の左京九条三坊五・六坪東半部分を占める。調査地内には九条条間南小路が想定され、南に九条大路、東側に東三坊坊間路、北側に九条条間路が隣接する。調査地東側の発掘調査（市 HJ 第 538 次調査）では、九条条間南小路・東三坊坊間東小路と南側の十二坪の宅地内の一端が明らかになっている。

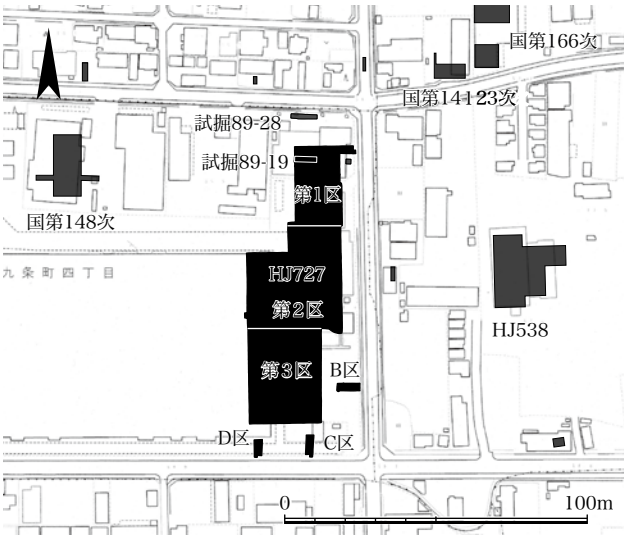
発掘調査は、調査区を北から第 1 ～ 3 区の 3 地区に分け実施した。また条坊遺構の確認のために小規模な発掘区（B ～ D 区）を設けた。

本調査は別に概要報告書を刊行予定のため、本年報では調査成果の概略を記すにとどめる。

Ⅱ．基本層序

調査地の基本的層序は、上から現代の造成土（厚さ 0.5 ～ 1.2m）、耕作土と床土（厚さ 0.2 ～ 0.3m）で、現地表下 0.9 ～ 1.5m で奈良時代の遺構面となる。発掘区中央部分には、奈良時代の遺物包含層（厚さ約 0.2m）が遺構面上に部分的に堆積する。奈良時代の遺構面は、北東部分が最も高く標高約 55.4m で、南に向かい下降し調査地南端では標高約 54.5m となり、約 0.9m の比高差がある。

遺構面を形成する土壌は、黄灰色砂・黄灰色粘質土等の水性堆積土から成り、複雑に重複した時期不明の数条の河川が遺構面下に存在する。古墳時代前期の溝が奈良時代と同じ遺構面上にあり、それ以前の堆積であることがわかる。



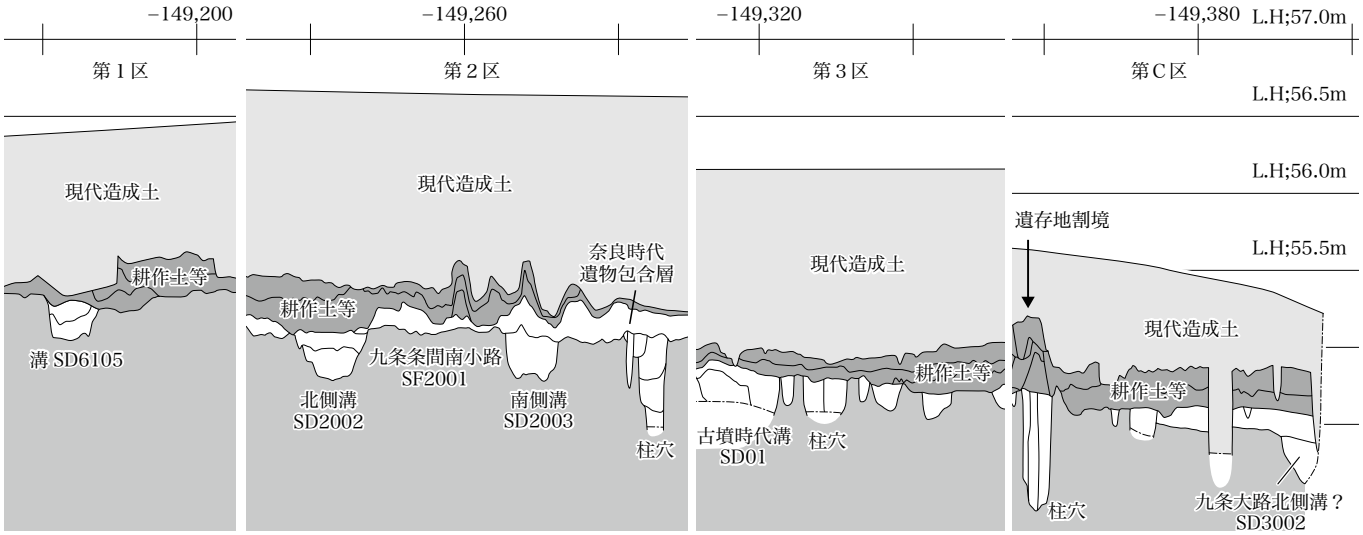
HJ 第 727 次調査　発掘区位置図（1/5,000）

Ⅲ．検出遺構

奈良・平安時代の九条条間南小路と南北両側溝、東三坊坊間小路西側溝、九条大路北側溝、掘立柱建物 89 棟、掘立柱列 8 条、井戸 20 基、溝 34 条、土坑 10 基他、古墳時代前期の溝 3 条を検出した。以下主要なものについて記す。

奈良時代の遺構　条坊関係

九条条間南小路（SF2001）　溝心々間距離で幅約 6.7m、路面幅は約 5.0m で、路面上は土のままで舗装等は確認し



HJ 第 727 次調査　発掘区東壁土層図（縦 1/50・横 1/250）

HJ 第 727 次調査　C 区全景（北から）

HJ 第 727 次調査　九条大路北側溝 SD3002（北東から）

ていない。南北両側溝（SD2002・2003）は幅約 1.7m、深さ約 0.4m で、いずれも宅地側の肩はしっかりしているが、道路側は大きくあふれ路面を侵食している。

九条大路北側溝（SD3002）　C・D 区南端で溝の北肩を検出したのみで、調査地南側に続き幅は 1.0m 以上、深さ 0.3m 以上である。

九条条間南小路心 X=−149,259.24 からそのまま 1 坪分の 375 大尺（約 133.2m）分南側の地点に九条大路心があると想定すると、その値はおおよそ X=−149,392.44 となる。九条大路北側溝と考えた SD3002 の北肩の座標 X=−149,382.8 との距離は、9.64m となり、これを 2 倍した値 19.28m が九条大路の最大幅と推定できる。近年の発掘調査成果から平城京内の大路の幅は 16m 余りと判明しており、九条大路の幅としてはおおよそ妥当なものと考えられ、SD3002 を北側溝として認識した。

東三坊坊間路（SF1001）　第 1 区と B 区で西側溝 SD1002 を検出した。路面上に舗装等は確認できない。西側溝 SD1002 は B 区で幅 2.0m、深さ約 0.35m あり、道

HJ 第 727 次調査　B 区全景（南西から）

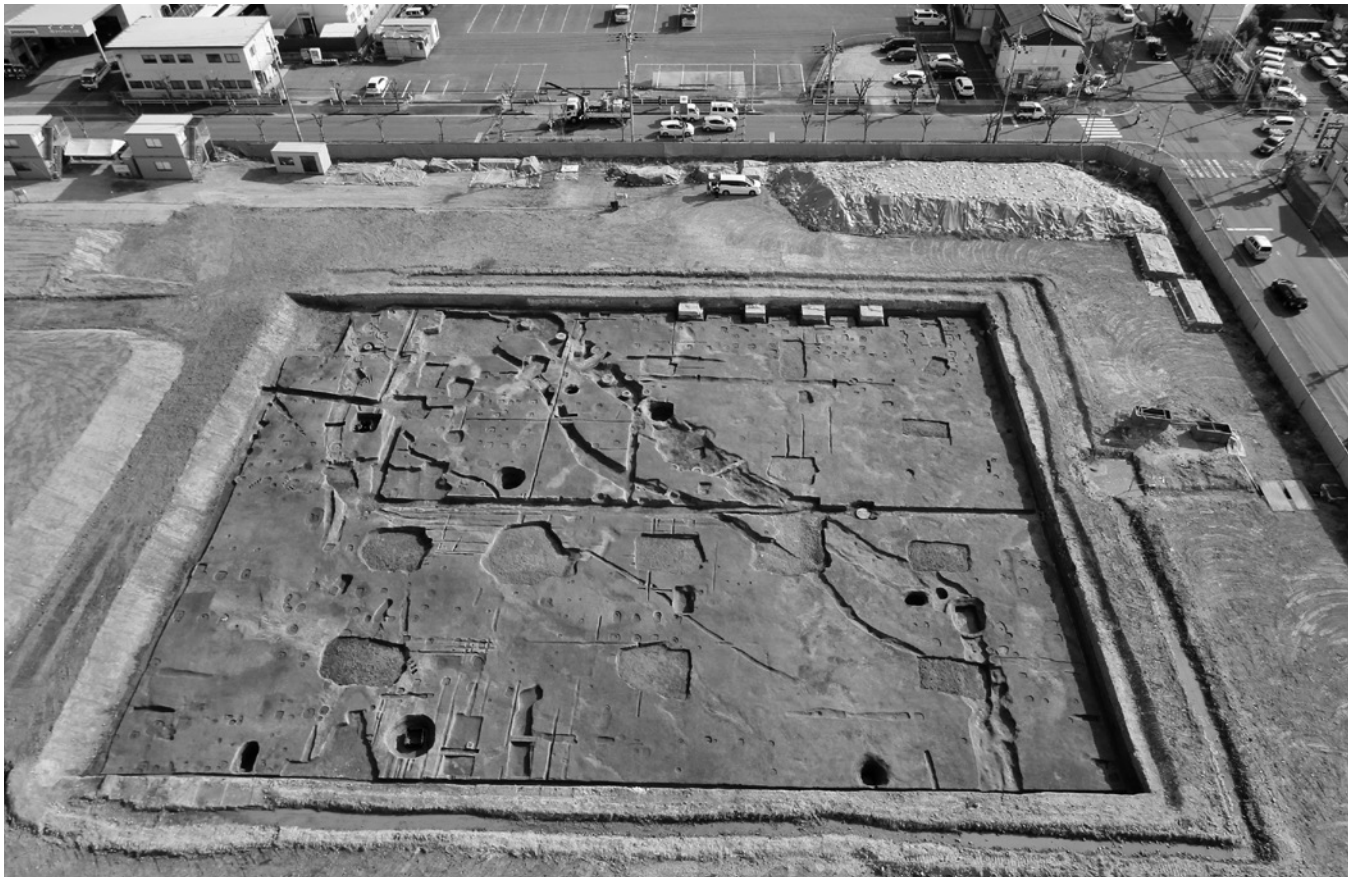
HJ 第 727 次調査　条坊関連遺構の座標値

遺構	遺構番号	X 座標	Y 座標	備考
九条条間南小路	SF2001	−149,259.24	−17,559.00	路面幅約 5.0m
九条条間南小路　北側溝	SD2002	−149,262.58	−17,559.00	
九条条間南小路　南側溝	SD2003	−149,255.90	−17,559.00	
九条大路　北側溝　北肩	SD3002	−149,382.80	−17,567.00	溝幅 1.0m 以上
東三坊坊間路	SF1001			道路幅推定 9.68m
東三坊坊間路　西側溝	SD1002	−149,337.00	−17,502.34	

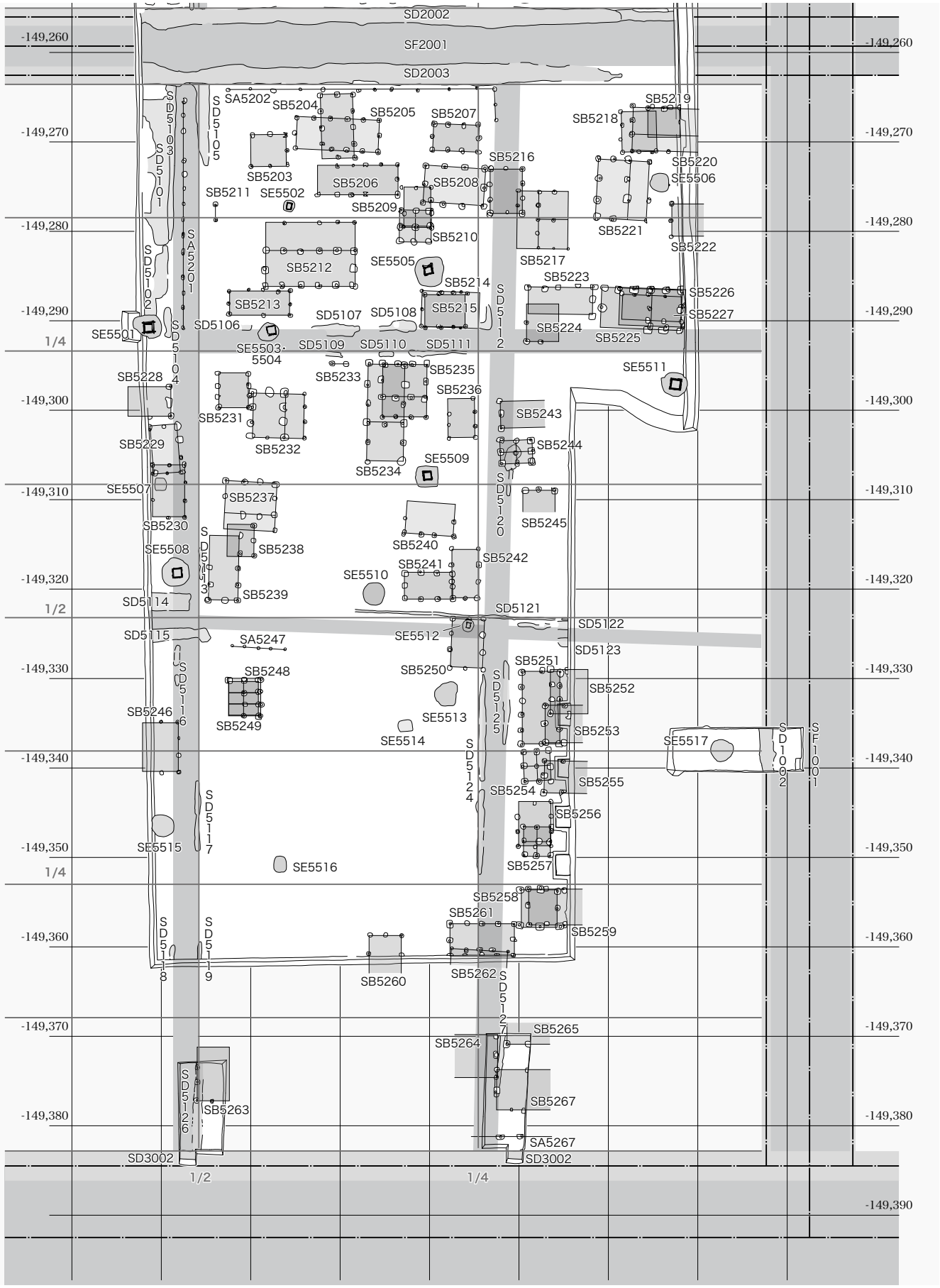
HJ 第 727 次調査　第 1 区全景（南西から）

HJ 第 727 次調査　第 2 区全景（西から）

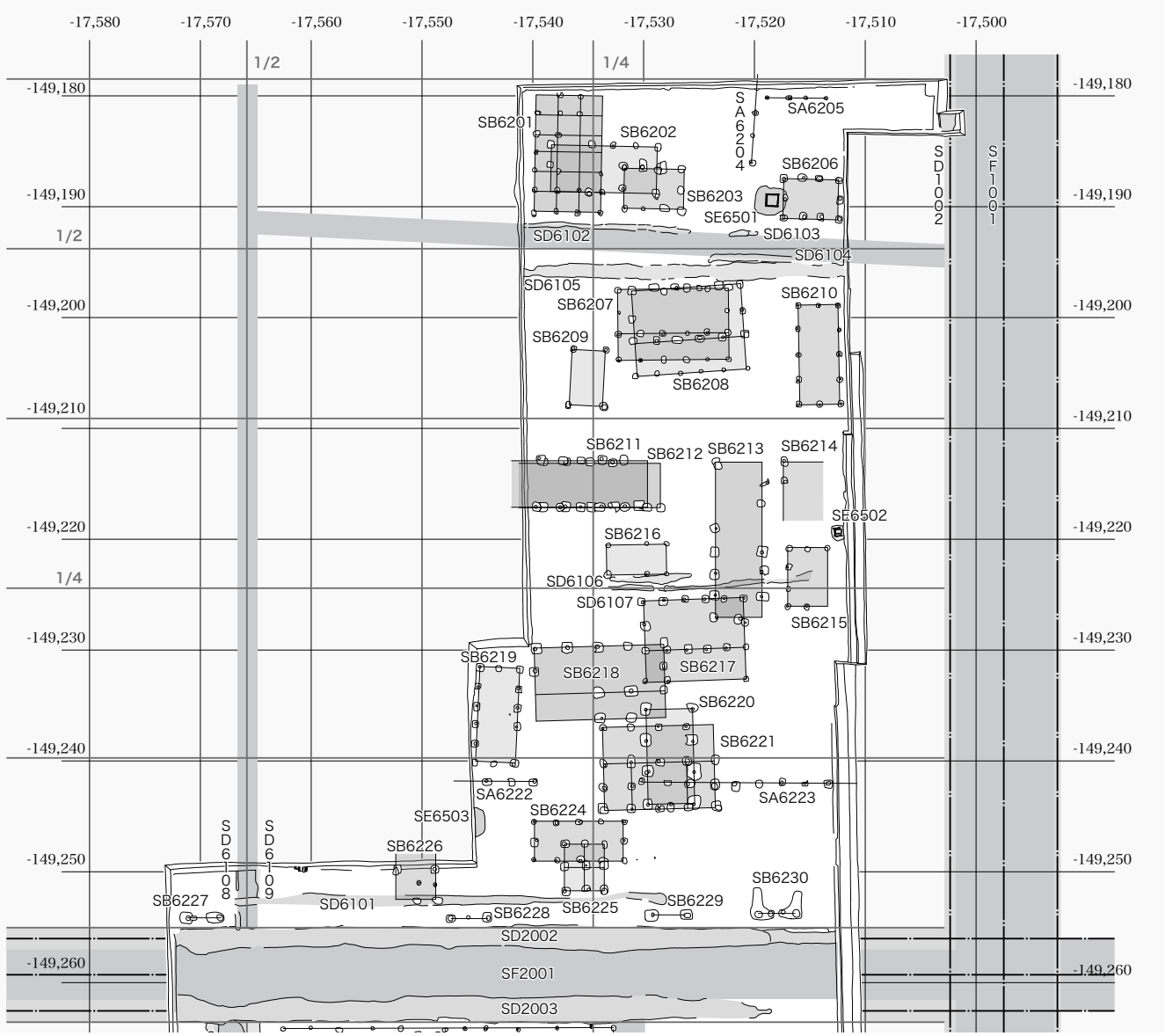
HJ 第 727 次調査　第２区全景（北東から）



HJ 第 727 次調査　第３区全景（西から）



HJ 第 727 次調査　五坪遺構配置図（1/600）



HJ 第 727 次調査　六坪遺構配置図（1/600）

路側はあふれで路面を侵食している。東側の HJ 第 538 次調査で東三坊坊間東小路心が判明しており、その調査成果から道路心を復原するとおおよそ Y=−17,497.50 となる。東三坊坊間路西側溝 SD1002 溝心の座標との距離は 4.84m で、この２倍の値 9.68m が道路幅と推定される。

奈良時代の遺構　五坪内の遺構

遺構の重複関係からは、大きく３時期の遺構変遷が追える。また坪内通路によって坪内を分割しており、さらに建物・井戸の分布から 1/16 町・1/32 町規模の小規模宅地の存在が明らかになった。特に五坪中央部の南北に列ぶ 1/16 町・1/32 町規模宅地については全域を調査し、小規模宅地内の建物配置が判明した点は大きな成果となる。

Ⅰ期　坪内通路で、五坪内を 1/16 町規模宅地に分割する。ただし、五坪東西中央ラインと南北 1/4 ラインの南側にあたる地点では坪内通路が確認できない。1/16 町規模の宅地はおおよそ東西 31.5m、南北 29.8m、面積 938.7 ㎡で、１宅地は３～４棟の中小規模の掘立柱建物と井戸１基で構成される。建物の方位は概ね真北方向である。

Ⅱ期　新たに五坪中央に南北方向の坪内通路が設置され、坪内を東西二分する。坪南北 1/2 ライン上に東西方向の細い溝があるのみで、南北の区画を示す明瞭な区画施設はない。しかし、井戸 SE5504・5510・5513 が 1/16 分割した推定宅地内の範囲に１つづつ分布すること、五坪北端の掘立柱塀 SA5202 の東端が坪の東西 1/4 ライン近くで南へ折れ曲がることから、1/16 町規模の宅地が復原できる。ただし南端の宅地７は、東西 1/4 ライン上に建物 SB5262 があり、1/8 町規模宅地とも考えられる。

進入路の関係上、坪中央の宅地５・６は入口を西側の坪内通路に面せざるをえず、宅地１～３の入口も隣接する条坊道路と限定される。

またこの時期の掘立建物の特徴として、建物の方位が北で東に傾く点があげられる。全般的に建物数が少なく、当該期の遺構を確認できない宅地もある（宅地２・３）。

Ⅲ期　Ⅱ期から引き続き、五坪中央には南北方向の坪内通路が存続し坪内を東西二分するが、南北の区画を示す遺構はない。しかしながら、ほぼ五坪内を1/32分割する区画内に井戸１基が収まっており、井戸１基が１宅地に配されると想定すると、1/32町規模宅地が復原できる。また1/32分割線をまたぐ掘立柱建物もほとんど無いことも、1/32町規模の宅地の存在を示していよう。

これらのことから、当該期は五坪中央を南北方向の坪内通路で東西二分し、さらに東半部を東西二分、南北八等分して小規模宅地を作り出していることが判明する。１つの小規模宅地の規模は東西31.5m、南北14.9m、面積469.35㎡である。南北の幅は、南側の九条大路北側溝北肩から北側の九条条間南小路南側溝南肩との間の距離を八等分した値となっている。

宅地が隣接し合うことから、五坪中央の宅地10～15は宅地内への入口を西側の坪内通路に開かざるを得ず、またその東に隣接する宅地２～８も入口を東に面する東三坊坊間路に開かざるを得ないこととなる。

建物の建替が一部の宅地であり、Ⅲ－１期とⅢ－２期の２時期に細分できる。Ⅲ－２期には宅地７と15、８と16がそれぞれ合わさり、1/16または1/８町規模の宅地となる。

宅地は中少規模の掘立柱建物２～３棟と井戸１基で構成される。建物には廂付建物や総柱建物もあり、桁行も２～５間と多種多様である。建物の方向はおおむね真北を向く。

宅地14は井戸SE5516を１基検出したのみで、建物跡を確認していない。

奈良時代の遺構　六坪内の遺構

遺構の重複関係から大きく３時期の遺構変遷が確認でき、また建物配置と溝の位置関係から1/4・1/8町規模の宅地が復原できる。

六坪の東西中央部の南端では、南北溝が２条平行してあり、この溝に挟まれた幅約1.5ｍの空間が、六坪内中央を南北に分割する坪内通路と考えられる。長さ約5.0ｍ分を検出したのみで消長は不明であるが、奈良・平安時代を通じて存在したと仮定して以下各時期ごとに記述する。

Ⅰ期　坪内南北1/２ライン上に東西方向の坪内通路があり、坪内を南北二分する。坪内通路は西で北に傾き、南北両側溝間で幅約1.6ｍある。通路北側に1/16町規模以上の宅地１が、南側に東西に長い1/８町規模の宅地２・３が南北に並ぶ。いずれも桁行５間の南廂付き東西棟建物SB6207・6217を、宅地中央北端に建て中心建物とする。

Ⅱ期　南北1/２ライン上の坪内通路は引き続き機能し、Ⅰ期の宅地配置を踏襲する。宅地２では東西棟建物SB6208がⅠ期のSB6207とほぼ同じ位置に同規模で建て替えられる。宅地３では九条条間南小路北側溝に沿って宅地南端に東西溝SD6101が掘られ、道路との間約1.9m間に遺構として残らない何らかの閉塞施設があったと考えられる。この部分には柱間２間以上の柱列（SB6228・6230）があり、道路に開く門と推定される。

Ⅲ期　坪内南北1/２ライン上にある東西通路が廃され、溝SD6105で南北の宅地を区画する。溝の北側には1/16町規模以上の宅地１が、南側には1/４町規模の宅地２がある。宅地２では建物の建替がありⅢ－１期とⅢ－２期に分かれる。Ⅲ－１期の宅地２では桁行５間の南廂付き東西棟建物SB6218と桁行５間以上の東西棟建物SB6212を、宅地中央に南北に並べ、東側に桁行７間の南北棟建物SB6213を配し「コ」字型の建物配置をとる。しかしながら、各建物の主軸や柱筋が不揃いで、やや整然さに欠ける。宅地南西部には、井戸SE6503があり、南端には門と考えられる柱列SB6229がある。　（中島　和彦）

Ⅳ．出土遺物

遺物整理箱106箱分の遺物が出土した。内訳は土器類が91箱、瓦類が10箱、木製品他が５箱である。大半は奈良・平安時代のもので、他に弥生・古墳時代、鎌倉時代以降のものが少量ある。

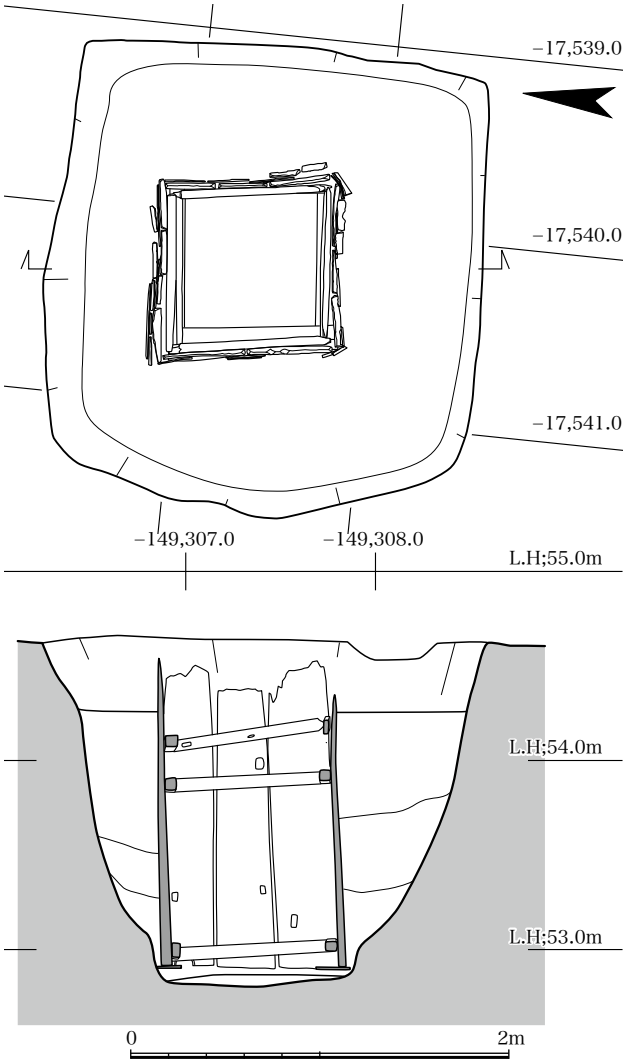
奈良・平安時代のものは、土師器、須恵器、黒色土器、奈良三彩、緑釉陶器、製塩土器、ミニチュア土器、土馬、陶硯、軒丸瓦（6229種別不明１点、6282D １点、型式不明３点）、軒平瓦（6691A １点、6721C １点、6802B １点、新型式１点）、刻印瓦（「里」）１点、丸瓦、平瓦、銭貨２点、鉄製品（刀子・釘）銅製品（鞘金具・釘）、鞴羽口、鉄滓、木製品（斎串、馬形、曲物、箸、横櫛等）、植物遺存体（桃種、瓢箪）、ガラス玉、ガラス坩堝、砥石、井戸枠（建築部材再利用品含む）がある。また弥生・古墳時代のものには、弥生土器、石包丁・石鏃（以上弥生）、土師器（古墳）がある。

新型式軒平瓦は左端部の小片で、左端の唐草が上方に巻き込み、上外・下外・脇区に杏仁形珠紋を巡らす。直線顎。凹凸面はタテナデ調整で、凹面の瓦頭付近をヨコナデ調整する。　（中島　和彦・原田　憲二郎）

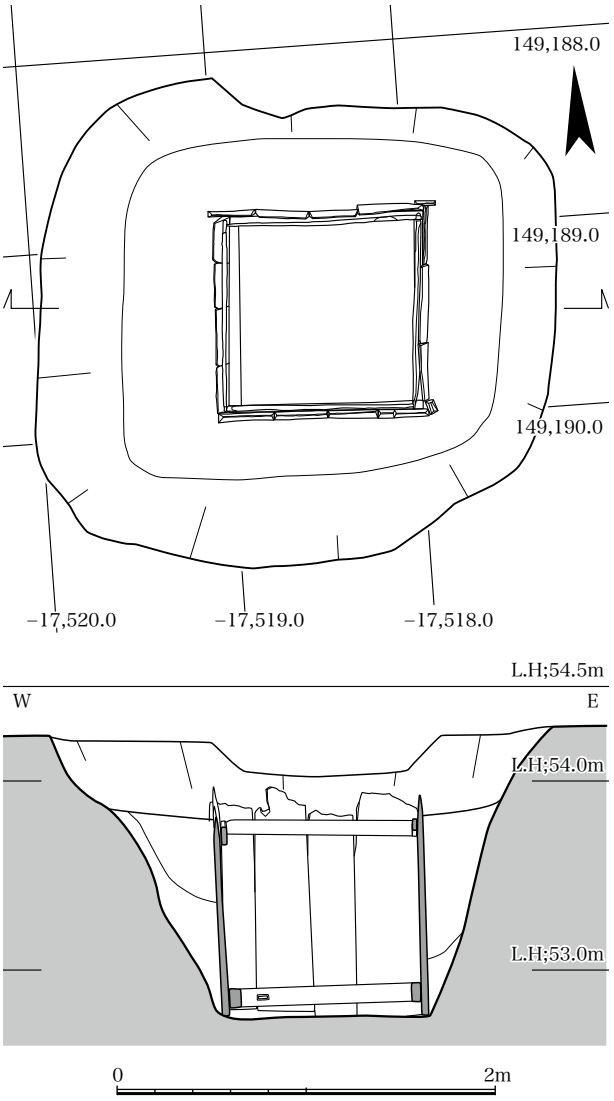
HJ第727次調査　新型式軒平瓦（1/４）

HJ 第 727 次調査　井戸 SE5509（西から）

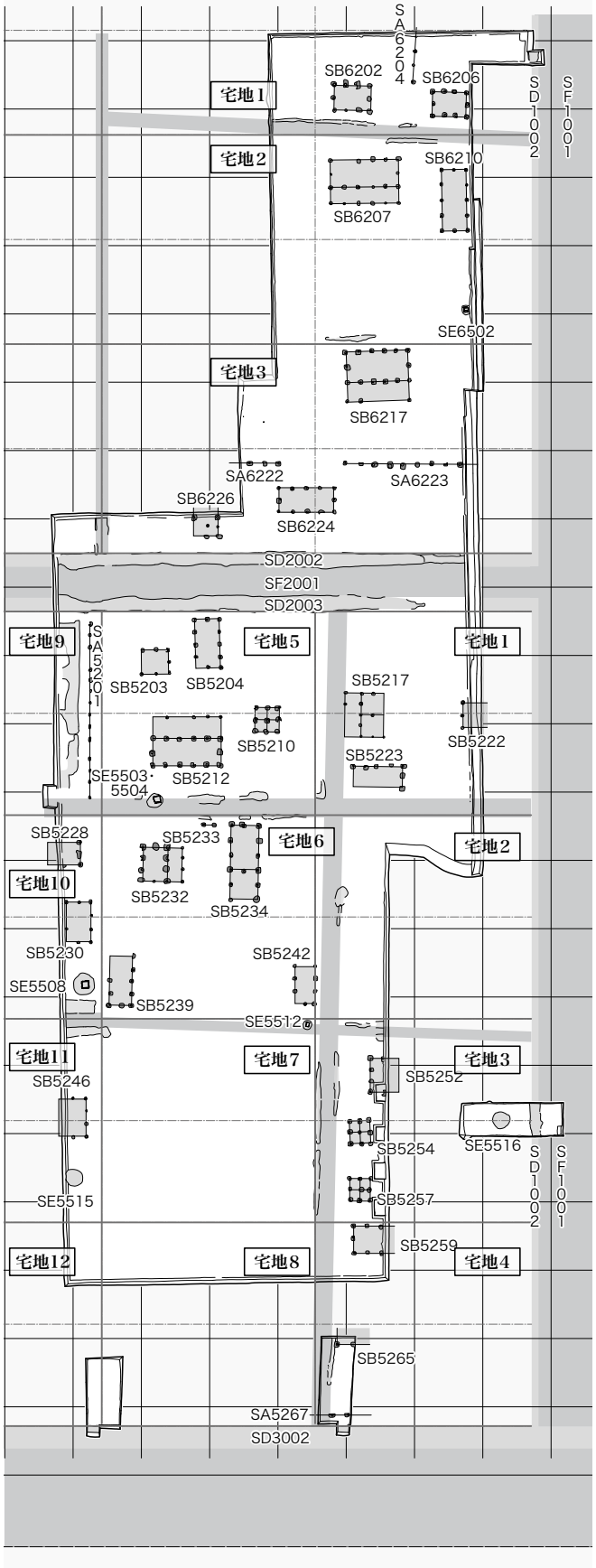
HJ 第 727 次調査　井戸 SE6501（南東から）



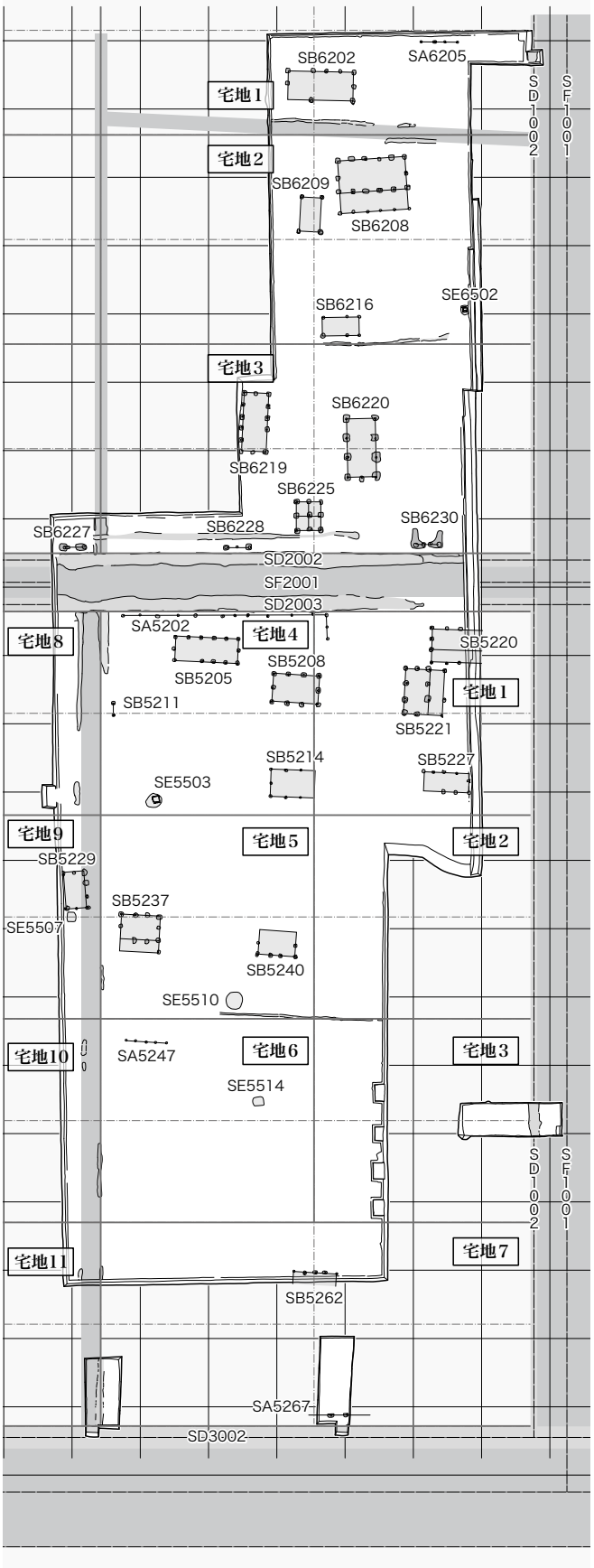
HJ 第 727 次調査　井戸 SE5509 平面図・立面図（1/50）



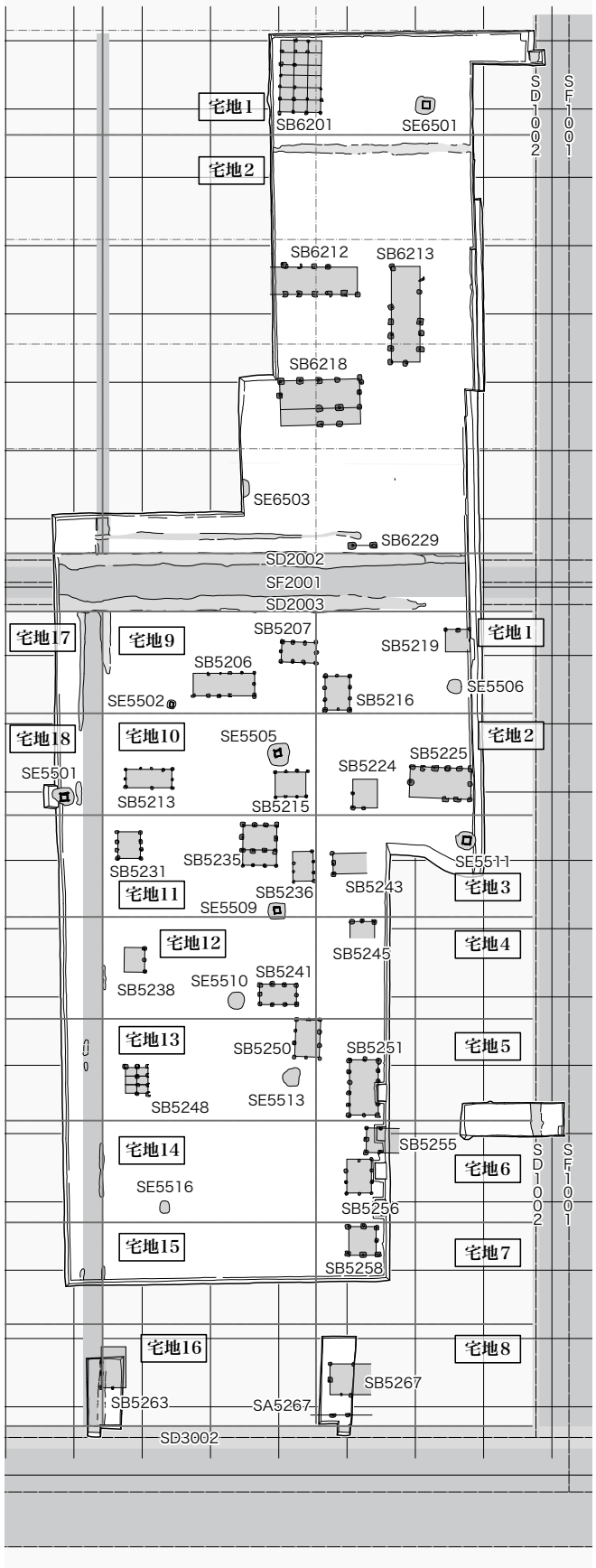
HJ 第 727 次調査　井戸 SE6501 平面図・立面図（1/50）



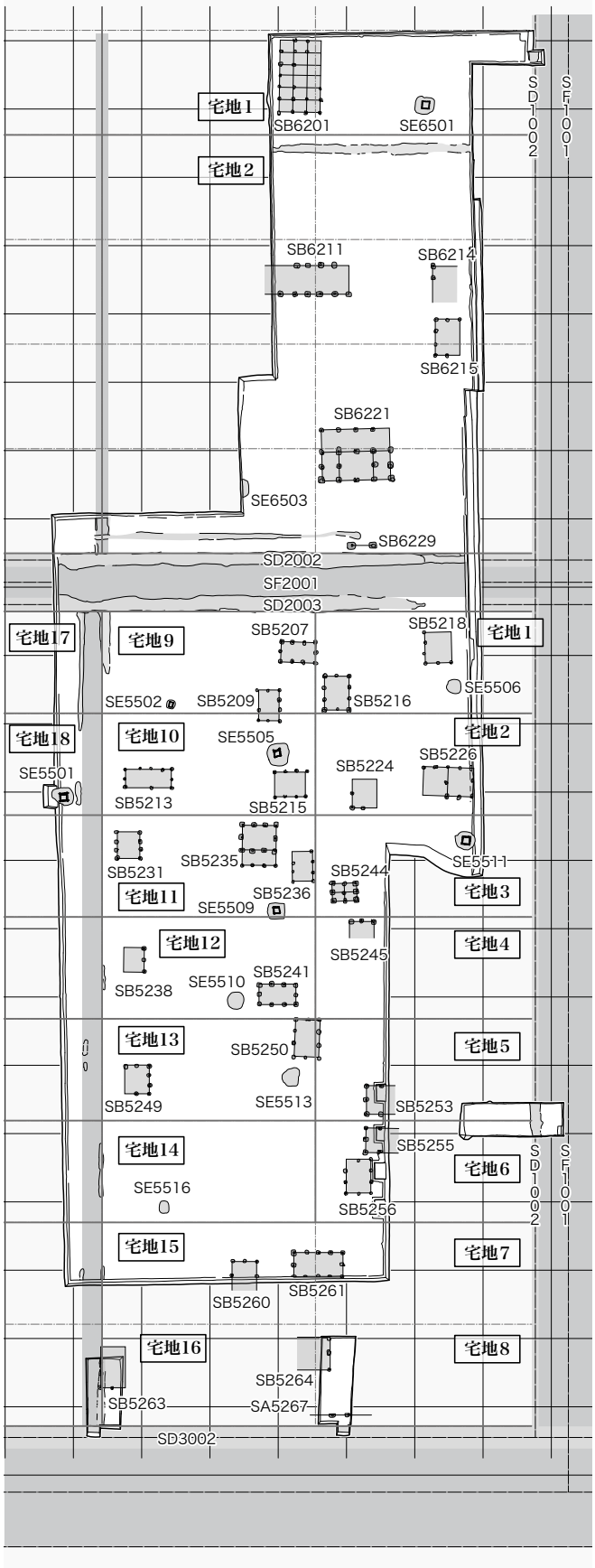
HJ 第 727 次調査　遺構変遷図（Ⅰ期）



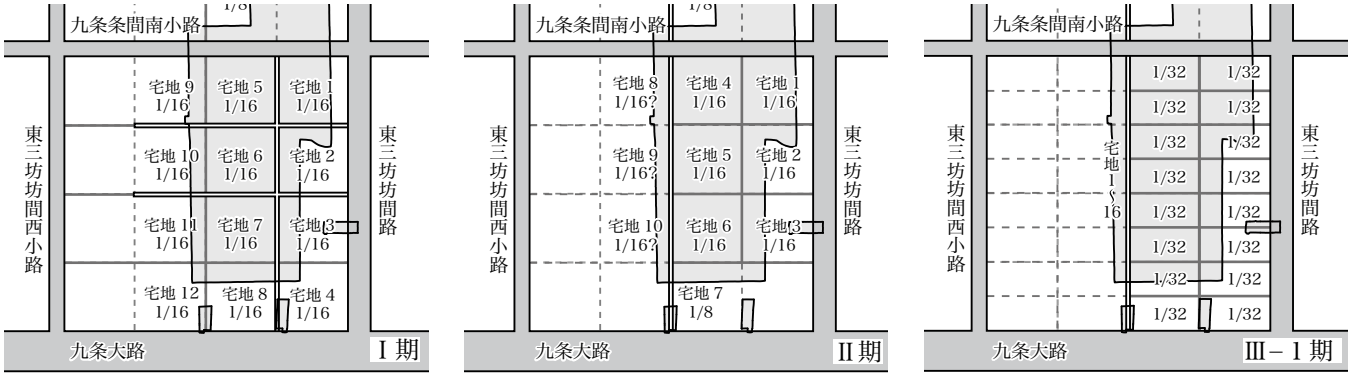
HJ 第 727 次調査　遺構変遷図（Ⅱ期）



HJ 第 727 次調査　遺構変遷図（Ⅲ－１期）



HJ 第 727 次調査　遺構変遷図（Ⅲ－２期）



HJ 第 727 次調査　五坪宅地割変遷図

Ⅴ．調査所見

今回の調査の成果として下記の２点があげられる。

１　平城京の南京極である九条大路の一部を確認し、その復原の資料を得た。

従来九条大路の南北側溝と考られる遺構は、数カ所の発掘調査で検出されていたが、大路の位置を確定するには至らなかった。今回の調査では九条条間南小路を検出し、平城京の条坊計画通りに小路が設置されていたことが判明した。条坊施工が通常通り行われているとすると、九条条間南小路から単純に１坪分（375 大尺＝133.2m）南に、九条大路が想定できる。C 区で検出した東西溝 SD3002 を九条大路北側溝とすると、九条大路の幅は 19.28m 以下となり、三条以南で確認されている大路幅（約 16m ＝ 45 大尺）と遜色のない値となることから､九条大路の復原としては妥当と考えられる。

また従来、九条大路跡と推定されていた東西方向の遺存地割は五坪の宅地内にあることがわかり、九条大路を反映したものでないものと考えられる。

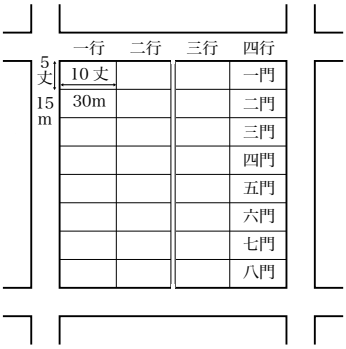
２　平城京内の小規模宅地の様相と変遷が判明した。

五坪東半部では、坪内通路と井戸の配置から１/16 ～１/32 町規模の小規模宅地が確認でき、奈良～平安時代にかけての変遷が明らかになった。

五坪内の宅地規模はおおよそ１/16 町→１/16 町→１/32 町と変遷する。宅地分割の方法は、坪内を東西南北に四等分して１/16 町規模宅地を創出し、これをさらに南北二等分して１/32 町規模宅地とする。

また、当初は坪内通路を東西南北方向の縦横に設け１/16 町規模の宅地を区画していたが、その後坪内中央の南北方向の坪内通路１条のみとして、通路両側に１/16 町規模の宅地を配し、さらにその後この宅地を南北二分し１/32 町規模の宅地とする。

坪内通路を南北方向の１条のみとすると、各宅地の出入口が南北通路または条坊道路に面した東西側に限定される一方、坪内の宅地利用可能面積は通路分が差し引



平安京四行八門制

かれることなく最大限に利用できる利点がある。奈良時代後半の平城京では小規模宅地の増加が指摘されており、人口増による宅地不足に対する宅地班給上の対策とも考えられる。この宅地配置形態は、平安京に見られる「四行八門制」と同形態といえよう。

文献資料には､平城京の小規模宅地を示す記述に｢十六分之半｣（１/32)､｢十六分之四一｣（１/64）との記述があり、宅地面積の基準として１/16 町が当てられている。これより当初１坪を 16 等分する宅地区画があり、時代が降るに従い細分化されたことがうかがえる。奈良時代の１/16 町規模宅地は、一辺１/ ４町四方の正方形の区画であることが原田憲二郎氏によって指摘されており、その後の発掘調査成果からも肯定できる。今回の調査では、この正方形の１/16 町規模宅地が南北に分割され１/32 町規模宅地に変化したことが明らかになった。

以上の点から五坪の宅地変遷をまとめると、

Ⅰ期　東西南北方向の坪内通路で区画された、奈良時代的な１/16 町規模宅地

Ⅱ期　四行四門制ともいえる宅地分割

Ⅲ期　四行八門制と同形態の宅地分割

となる。平城京内では同様の変遷が追えない調査例もあり一般化できないが、奈良から平安時代への小規模宅地の変化を考える一例として貴重な成果といえよう。

（中島　和彦）

9．史跡大安寺旧境内の調査

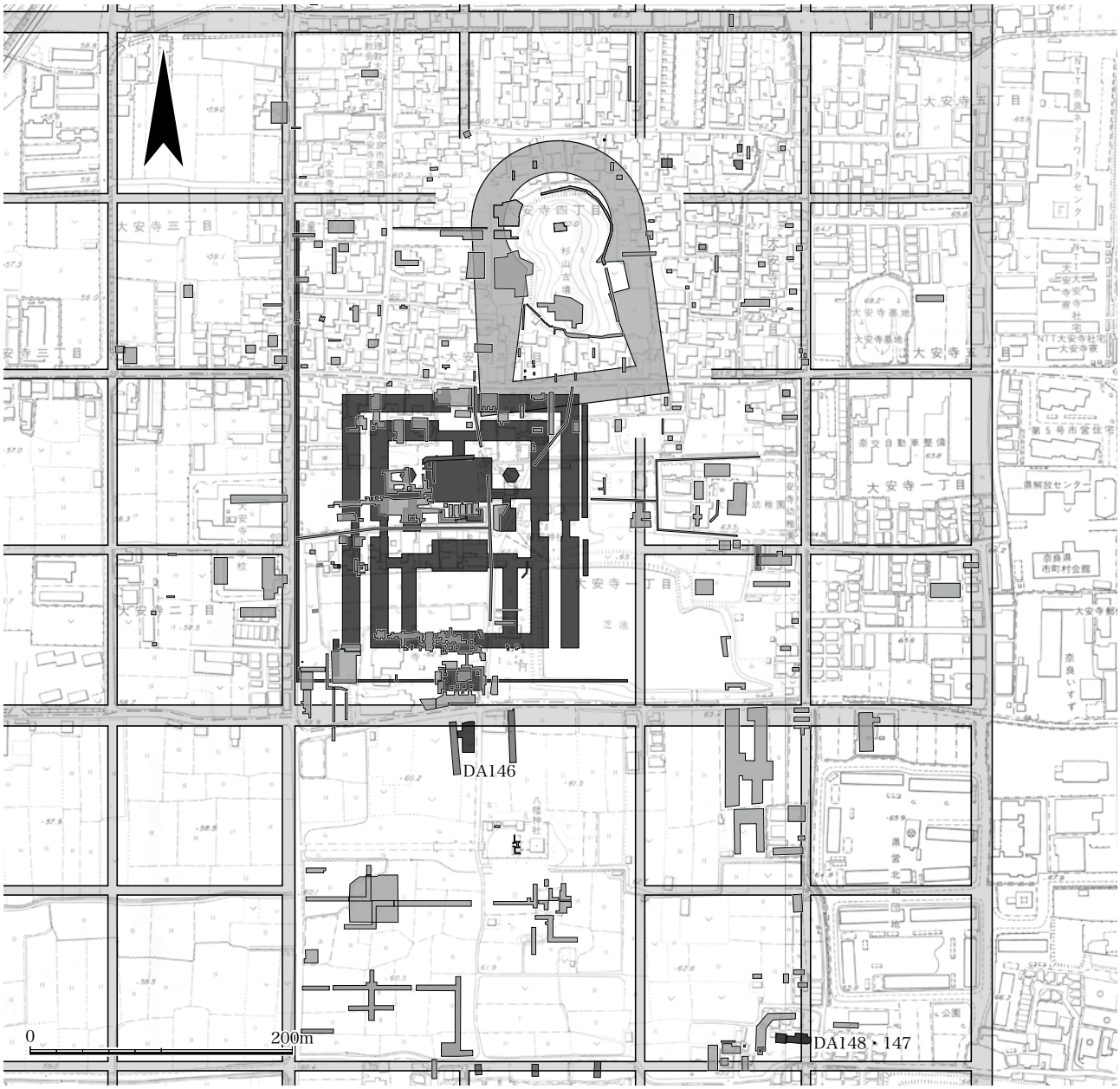
奈良市教育委員会では、平成 30 年度に史跡大安寺旧境内において 2 件の発掘調査を実施した。

第 146 次調査は、塔院の北辺を確認する範囲確認調査で、第 147 次調査は、住宅の新築にあたって、大安寺の東限の確認調査を実施した。

なお、平成 31 年度に実施した第 148 次調査は、第 147 次調査の西隣で遺構が両調査区にまたがるため、今回、まとめて報告する。

史跡大安寺旧境内　発掘調査一覧表（本書掲載分）

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA 第 146 次調査	範囲確認調査	東九条町 1301-1、1302-1、1564-1	2018.9.5 ～ 11.15	207 ㎡	原田憲二郎
DA 第 147 次調査	戸建て住宅の新築・地盤改良	東九条町 1417 番	2018.10.1 ～ 10.22	118 ㎡	森下・秋山
DA 第 148 次調査	戸建て住宅の新築・地盤改良	東九条町 1416 番、1417 番の一部	2019.4.12 ～ 4.25	56 ㎡	髙岡桃子



史跡大安寺旧境内　発掘調査位置図（1/5,000）

（1）塔院北門・六条大路の調査　DA 第 146 次

Ⅰ．はじめに

奈良市では史跡大安寺旧境内の範囲確認を主目的とした調査を、平成 28 年度から継続して実施しており、本年度で３回目の調査となる。

大安寺寺院地の復元案については、現在大きく２つの案[1)]があり、いずれか判断する手掛かりの一つとしては、まず六条大路の有無確認が必要と考えられる。

このため平成 28 年度は南大門の南西側で、六条大路南側溝の確認を目的として調査（市ＤＡ第 139 次調査）を行い、約２m間隔を空けて並行する東西方向の溝２条を確認し、いずれかが南側溝であることが推定された。平成 29 年度は、南大門の南東側で六条大路南北両側溝の確認を目的として調査（市ＤＡ第 143 次調査）を行い、３条の並行する東西方向の溝を確認し、北から北側溝・南側溝・築地塀の雨落溝と推定された。

これらの成果を受け、本年度はまず南大門南側に推定される塔院北門の検出を目的とし、その位置関係から六条大路南側溝を確定させ、ひいては六条大路の存在を確実にすることを主目的として調査を実施した。

Ⅱ．基本層序

調査区内の基本的な層序は、上から暗褐色土（耕土、厚さ約 0.1 m）、礫混じりの黄褐色土（造成土、厚さ約 0.6 m）、黒灰色土（旧耕土、厚さ約 0.2 m）、暗灰色土（厚さ約 0.2 m）と続き、地表下約 1.1 mで黄灰色粘土か黄灰色礫土の地山に至る。地山上面の標高は、概ね 60.3 mである。

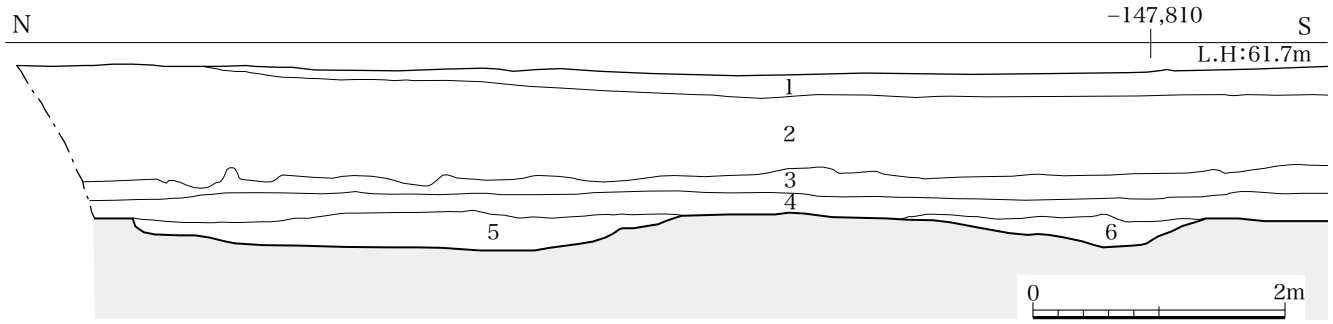
遺構検出は、基本的に地山上面で行なった。ただし調査区南半では整地層があり、ここでは、整地土上面と整地土除去後の地山上面の２面で遺構検出を行った。

Ⅲ．検出遺構

検出した主な遺構には、溝２条、門１棟、橋１梁がある。他に地盤を均すための整地を調査区南半で確認した。SD01 は調査区北辺で検出した東西方向の溝で幅は約 3.5 mである。東西長は約 7.0 m分を検出した。発掘区西辺では南肩の南側に広がるあふれを確認した。遺構検出面からの深さは発掘区東端で約 0.3 m、発掘区西端で約 0.45 mで、溝底は西方へ緩やかに下る。埋土は灰色砂礫で、南側にあふれた部分は灰色細砂を多く含む。溝内埋土からは瓦類が多く出土し、８世紀から 14 世紀中頃までの軒瓦を含む。溝心の座標値はＸ＝−147,803.800 m、Ｙ＝−17,103.000 mである。なお、溝 SD01 と一連の溝は平成 28 年度調査区でも確認しているが、平成 29 年度調査区には無く、今回の調査区東側で北に曲がるとみられる。

SD02 は溝 SD01 の約 2.2 m南側で検出した東西方向の溝で、幅約 2.0 m、東西長は約 10.5 m分を検出した。遺構検出面からの深さは約 0.2 mである。埋土は小さな礫を含む灰色砂で、溝 SD01 と同様に埋土から瓦類が多く出土したが、出土軒瓦の年代は８世紀から９世紀におさまる。溝心の座標値はＸ＝−147,810.600 m、Ｙ＝−17,103.000 mである。なお、溝 SD02 と一連とみられる溝は平成 28・29 両年度の調査区でも確認している。

SB03 は溝 SD02 の南約 1.2 m離れた場所で検出した東西２本の柱からなる門である。門柱跡は東西とも南北約 1.0 m、東西約 1.5 mの平面隅丸長方形であること、掘方内には拳大・人頭大の栗石とみられる川原石があることから、柱座だけではなく、扉の軸受けの穴や、方立穴を設けた唐居敷を用いた礎石建ちの門であったと考える。唐居敷を用いたとみると、門の東西１間の規模は 5.1 mとなる。２つの門柱跡の中央では、南北約 1.0 m、東西約 0.5 mの小穴を確認したが、これは扉の召し合わせ部分の留め、あるいは蹴放の土台となる礎石を据えたも



1　暗褐色土（耕土）　2　礫混じりの黄褐色土（造成土）　3　黒灰色土（旧耕土）
4　暗灰色土　5　灰色砂礫（ＳＤ01埋土）　6　灰色砂（ＳＤ02埋土）

DA 第 146 次調査　東壁土層図（1/60）

のとみられる。西側門柱跡と門柱跡中央の小穴の遺構検出面からの深さは約 0.15 mである。なお、西側門柱跡では礎石除去後、北東部が深く掘り下げられていた。栗石を採取する目的で掘削されたものとみられる。門柱跡から少量の土器が出土したが、細片の為、詳細な時期は不明である。

SB04 は梁行 1 間（5.7 m）、桁行は 1 間分（6.0 m）確認した。溝 SD01 との位置関係から、これに架かる南北方向の橋と考える。北側は発掘区外に延びるとみられるが、南側の柱跡は溝 SD01 の南肩から約 3.0 m南に位置しており、橋南端を示す親柱と考える。南東の親柱の掘方には栗石とみられる拳大の川原石が 6 つあり、礎石建ちと考える。溝 SD02 との重複関係から、溝 SD02 埋没後に橋 SB04 が架せられたとみることができる。

SX05 は発掘区南半部に広がる整地で、南北約 12.3 m分、東西 7.0 m分を検出した。整地土の厚さは 0.1 ～ 0.4 mで、埋土は灰褐色砂質土である。整地土を除去した底面は、概ね南方に向かって下るが、場所によって凹凸がある。整地層上面でも遺構検出を行なったが、顕著な遺構は無かった。なお、一連とみられる整地層は平成 28・29 両年度の調査区でも確認している。

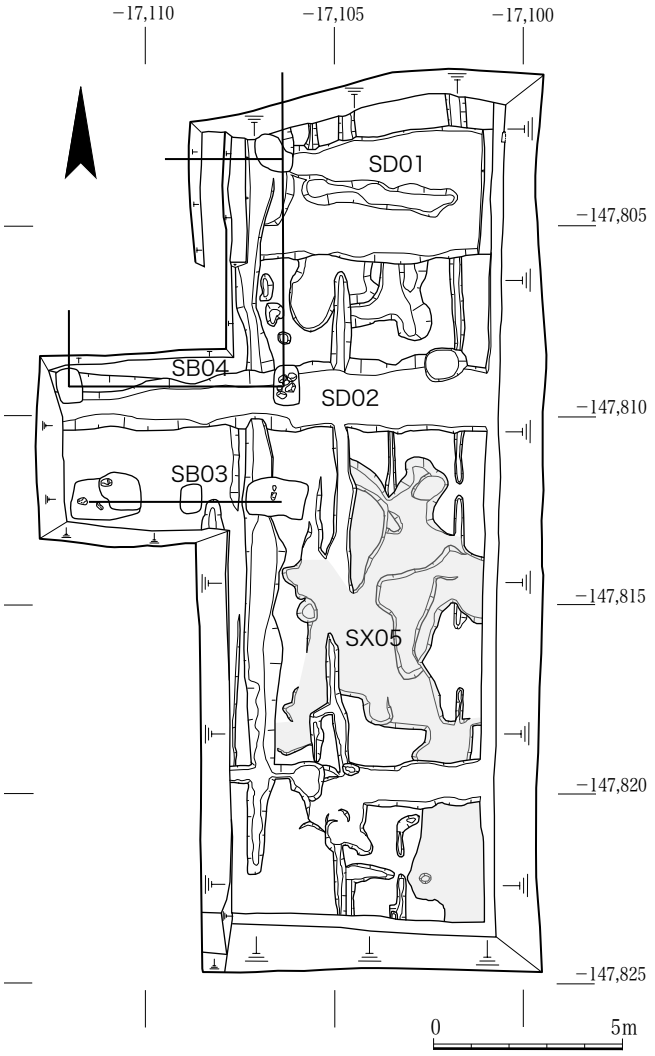
Ⅳ．出土遺物

出土した遺物は遺物整理箱で 63 箱分ある。出土遺物の大半は瓦類である。出土遺物には奈良時代の土師器・須恵器、軒丸瓦(6138Cb 2 点･6235I 1 点･6304D 5 点･型式不明 2 点)・軒平瓦（6661B 1 点・6712A 3 点・6712B 2 点・6717A 2 点・型式不明 3 点)・丸瓦・平瓦・熨斗瓦、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・青磁椀・白磁椀、軒丸瓦（大安寺 51Ad[2] 1 点・型式不明 1 点）・軒平瓦（大安寺 251A 2 点）・丸瓦・平瓦、鎌倉時代の瓦器椀、軒丸瓦（大安寺 111D 1 点･大安寺 173A 1 点･大安寺 175A 1 点）・軒平瓦（型式不明 1 点)、室町時代の瓦質土器、軒丸瓦（大安寺 88A 1 点）・軒平瓦（大安寺 241Aa 1 点・大安寺 248A 2 点・大安寺 250Ba 4 点)・丸瓦・平瓦がある。これらの出土遺物の大半は溝 SD01 から出土した。

Ⅴ．調査所見

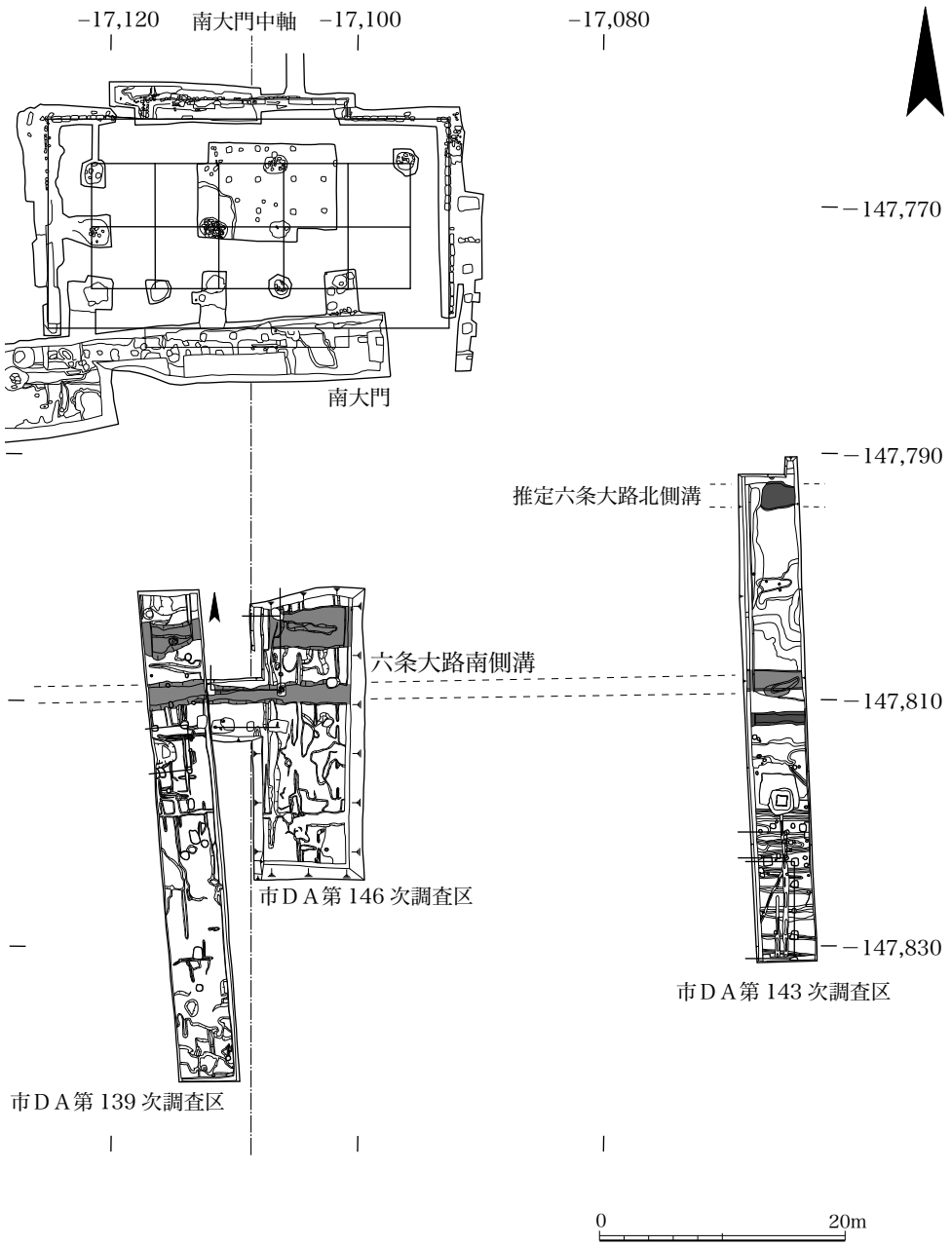
①門 SB03 の東西 1 間の規模 5.1 mという数値は、調査区北方に位置する南大門の柱間と同じである。また東西門柱跡の中間ラインが南大門東西中軸ラインに一致する。このようなことから、門 SB03 は塔院北門とみてよく、築地塀の棟通りに取り付く棟門と考える。

②平成 28・29 年度の調査ではいずれの調査区でも六条大路南側溝と推定される溝は検出されていたが、断定できるまでには至らなかった。今回の調査で塔院北門 SB03 を確認でき、その位置関係から六条大路南側溝は、塔院北門 SB03 から約 1.2 m北側に位置する溝 SD02 と考えるのが妥当である。溝 SD02 と一連の溝は、平成 28・29 年度の調査でも確認されており、今回の調査区東方では、ほぼ溝 SD02 の延長線上が、現在の水田あるいは宅地の境界線となっている。これが遺存地割とみられることから、東西に続くことも想定できる。



DA 第 146 次調査　遺構平面図（1/200）

③今回の調査区で溝 SD01 に架かる橋 SB04 を確認し、その重複関係から、六条大路南側溝 SD02 埋没後に架橋されたと判明したため、溝 SD01 の掘削も六条大路南側溝 SD02 埋没後とみられる。大安寺南大門は寛仁元年（1017）に焼失し、しばらく後の 13 世紀半ば頃に再建が始まったことが史料[3] と発掘調査[4] から明らかにされている。このようなことから、中世の南大門再建とその周辺整備の際に、溝 SD01 が掘削され、橋 SB04 が架橋されたと考えられる。　（原田　憲二郎）



六条大路に係る遺構平面図（1/600）

註

1）左京六条四坊二〜七・十〜十二坪と左京七条四坊一・二・七〜十坪の 15 町とみる考え（村田治郎 1954「薬師寺と大安寺の占地」『史迹と美術』240 号　史迹・美術同攷会）と、左京六条四坊一〜十一坪と左京七条四坊一・二・七・八坪の 15 町で、天平 19 年の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』勘録以降に、左京六条四坊十二坪が寺院地に加わったとみる考え（鐘方正樹 1997「大安寺寺地の復元に関する問題点の検討」『史跡大安寺旧境内Ⅰ杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告』奈良市教育委員会）の２案。なお、六条大路がみつかっていないこと等から、後者の案を疑問視する見方（石毛彩子 2001「平城京内寺院における雑舎群」『古代』第 110 号　早稲田大学考古学会）がある。

2）「大安寺」を付した軒瓦の型式番号と年代観は、原田憲二郎 2009「大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 18（2006）年度』奈良市教育委員会に拠る。

3）『最勝講問答記』紙背文書（大安寺史編集委員会 1984『大安寺史・史料』所収）

4）奈良市教育委員会 1990「史跡大安寺旧境内の調査　第 38 次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成元年度』

DA 第 146 次調査　発掘区全景（南から）

DA 第 146 次調査　発掘区全景（北から）

DA 第 146 次調査
六条大路南側溝 SD02・塔院北門 SB03（北東から）

(2) 寺域東辺・花園院推定地の調査　DA 第 147・148 次

Ⅰ．はじめに

調査地は史跡大安寺旧境内の南東隅にあたり、花園院と推定される地区である。周辺に過去の調査例はあるが、古い調査のため正確な発掘区の位置は不明である。

今回の調査は、奈良時代の大安寺の東辺を限る施設の確認を目的として行った。第 147 次調査は平成 30 年 10 月 1 日から 10 月 22 日まで 118㎡を、第 148 次調査は第 147 次調査の結果を踏まえ平成 31 年 4 月 12 日から 4 月 25 日まで 56㎡を調査した。

Ⅱ．基本層序

発掘区の基本層序は、上から黒色砂質土が約 0.2 m、灰色砂・灰茶褐色砂質土の床土が約 0.4 m堆積し、その下に灰色砂礫層が約 0.3 ～ 0.5 m堆積する。江戸時代に川の氾濫があり、砂礫の上に土を入れて耕作地としたことが地元で伝わっており、この灰色砂礫層は江戸時代の河川の氾濫による堆積とみられる。その下には土器片を含む灰色粘土質シルト層（15 層）が約 0.4 ～ 0.5 m堆積し、黄灰色粘土の地山に至る。

第 147 次調査区の東端では、江戸時代の堆積層である灰色砂礫層の下に淡灰色粘土質シルトが約 0.2 ～ 0.3 m、灰色砂土が 0.5 ～ 0.9 m、灰色砂（19 層）が厚いところで約 0.3 m堆積し、灰色砂礫の地山に至る。後述する SD01 の東肩は灰色砂（19 層）の上面から掘り込まれている。遺構検出は黄灰色粘土の地山面および灰色砂（19 層）上面で行った。

Ⅲ．検出遺構

検出した遺構には、南北方向の素掘溝 1 条（SD01）、掘立柱建物 1 棟（SB01）がある。

SD01　幅約 2 m、深さ約 0.25 mで、長さ 4 m分を検出した。溝の西肩は緑黄灰色粘土（地山）上面で検出したが、東肩は灰色砂（図 2–19 層）上面から掘り込まれていることを確認した。両肩ともにほぼ垂直に立ち上がっており、東肩が脆弱であるゆえ板等で護岸していた可能性があるが、板を留める杭跡は検出できなかった。埋土下層の暗灰色砂礫層から 8 世紀後半～ 9 世紀の土器が多く出土している。

検出位置からみて、大安寺の東を限る東四坊坊間東小路西側溝の可能性があるが、溝が掘り込まれる灰色砂（19 層）から平安時代の土師器が出土していることから、検出した SD01 は奈良時代当初のものではないと考えられる。溝心の座標値は X=–148,042.00 m、Y＝–16,845.46 mである。

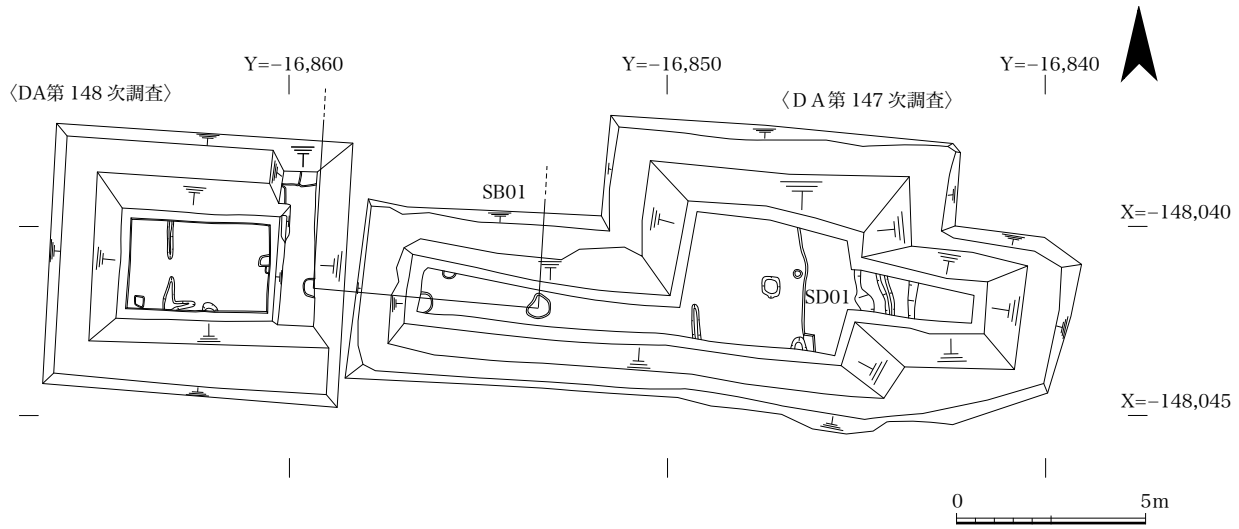
SB01　東西 2 間（6.0 m）、南北 1 間（3.0 m）以上の南北棟建物と考えられ、今回の調査では南妻柱列と西側柱列を検出した。

Ⅳ．出土遺物

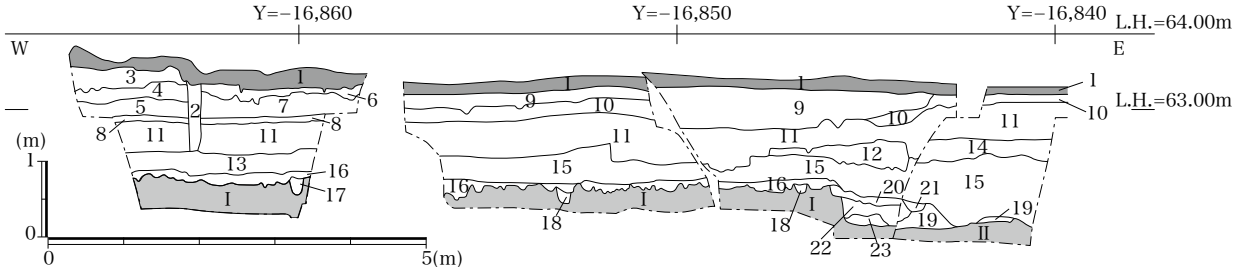
遺物整理箱 6 箱分が出土し、その大半が SD01 からである。8 世紀～ 9 世紀の土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、土馬、丸瓦、平瓦、15 世紀の土師器羽釜がある。

Ⅴ．調査所見

目的としていた奈良時代の大安寺の東辺を限る施設については、想定位置に南北溝 SD01 を検出することができたが、出土遺物からみて平安時代の遺構と考えられる。SD01 が掘り込まれている灰色砂層も、河川の氾濫で堆積したものとみられ、当初の溝が氾濫によって削平されたと考えられる。　（髙岡　桃子）



ＤＡ第 147・148 次調査　発掘区平面図（S ＝ 1/200）



1. 黒色砂質土
2. 灰褐色砂質土
3. 淡茶褐色砂質土
4. 茶褐色砂質土
5. 黄白色砂質土
6. 灰茶褐色砂質土
7. 暗褐色砂質土
8. 明褐色粘土質シルト
9. 礫混じりの灰色砂
10. 黄褐色土混じりの淡灰色砂土
11. 灰色砂礫
12. 灰色細砂
13. 灰色粘土質シルト
14. 淡灰色粘質土
15. 灰色砂土
16. 灰色砂質土
17. 暗灰色砂質土
18. 暗灰色土
19. 灰色砂
20. 暗茶褐色砂質土
21. 暗灰色土
22. 暗褐色土
23. 暗灰色砂礫

Ⅰ：黄灰色粘土
Ⅱ：灰色砂礫

（1：耕土　2：攪乱　3 ～ 10：床土　11・12：江戸時代の河川氾濫堆積層　13 ～ 16：15 世紀の河川氾濫堆積層　17・18：柱穴埋土　19：河川氾濫堆積層　20・21：SD01 埋没後の堆積層　22・23：SD01 埋土　Ⅰ・Ⅱ：地山）

DA 第 147・148 次調査　北壁土層図（縦：1/100 横：1/200）

DA 第 147 次調査　全景（南東から）

DA 第 148 次調査　全景（北西から）

DA 第 147 次調査　SD01（東から）

DA 第 148 次調査　柱穴検出時（北西から）

10. 富雄丸山古墳の調査　TOM 第１・２・３次

奈良市教育委員会では、平成 29 年より奈良市西部の文化財保存・活用の一環として、富雄丸山古墳の範囲確認発掘調査を計画した。これに先立ち、現状を把握する目的で航空レーザ測量（第１次調査）を実施し、その成果をもとに５年計画の発掘調査を実施している。ここでは、第１～３次調査について概要を報告する。

富雄丸山古墳の調査一覧表

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
TOM 第１次調査	富雄丸山古墳範囲確認発掘調査事業	丸山一丁目 1079–239	平成 29 年５月 22 日～８月 31 日	20,267㎡	鐘方
TOM 第２次調査			平成 30 年 12 月３日～平成 31 年１月 31 日	242.5㎡	永野・村瀬
TOM 第３次調査			令和元年 10 月 21 日～ 12 月 20 日	275㎡	森下・村瀬

Ⅰ．はじめに

富雄丸山古墳は、奈良市西部の矢田丘陵から派生する尾根上に位置する。すぐ東側には富雄川が流れ、その先には西の京丘陵が位置し、丘陵上には弥生時代後期の六条山遺跡がある。これを越えると奈良市街地となり、北東方向には宝来山古墳などの佐紀古墳群が広がる。

江戸時代には、富雄丸山古墳が河上陵（藤原帯子墓）とされていたことが『聖蹟図志』に記録されており、古くから墓として認識されてきた。明治時代には盗掘を受けたものの、その時出土した遺物が現在一括して京都国立博物館に所蔵（重要文化財）されている。

調査来歴は、1972 年に奈良県教育委員会が県第１次調査[1)] を行い、墳頂部で粘土槨を検出し多数の遺物が盗掘坑などから出土した。粘土槨は２段墓坑で１段目上端が南北 10.6 m、東西 6.4 mあり、犬走り部分には敷石を施していた。また、この時実施された測量調査によって、直径約 86 mの円墳であると報告された。

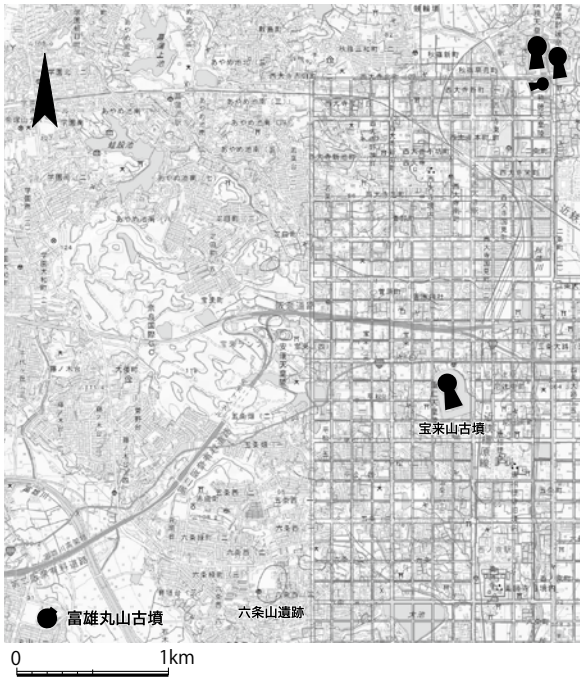
県第２次調査[2)] では、墳丘裾付近に発掘区が設けられ、墳丘北東部に造出しが取りつき、直径も約 102 mとなる可能性が指摘された。

その後、緑地公園として保存されてきたが、遺跡の重要性から、奈良市西部の文化財活用を図るべく、５ヶ年の範囲確認発掘調査を計画した。これに先立ち、調査活用計画策定のために航空レーザ測量を実施した。ここでは、航空レーザ測量（第１次調査）、発掘調査（２・３次調査）の概要を報告する。

Ⅱ．第１次調査

第１次調査は富雄丸山古墳の規模や形状を把握する目的で、航空レーザ測量を実施した。

調査の結果、これまで２段築成とされてきたが、３段築成の大型円墳であることが判明した。その規模は、直径約 110 mに復元でき、墳丘の北東側に造出しが取りつくことを再確認した。



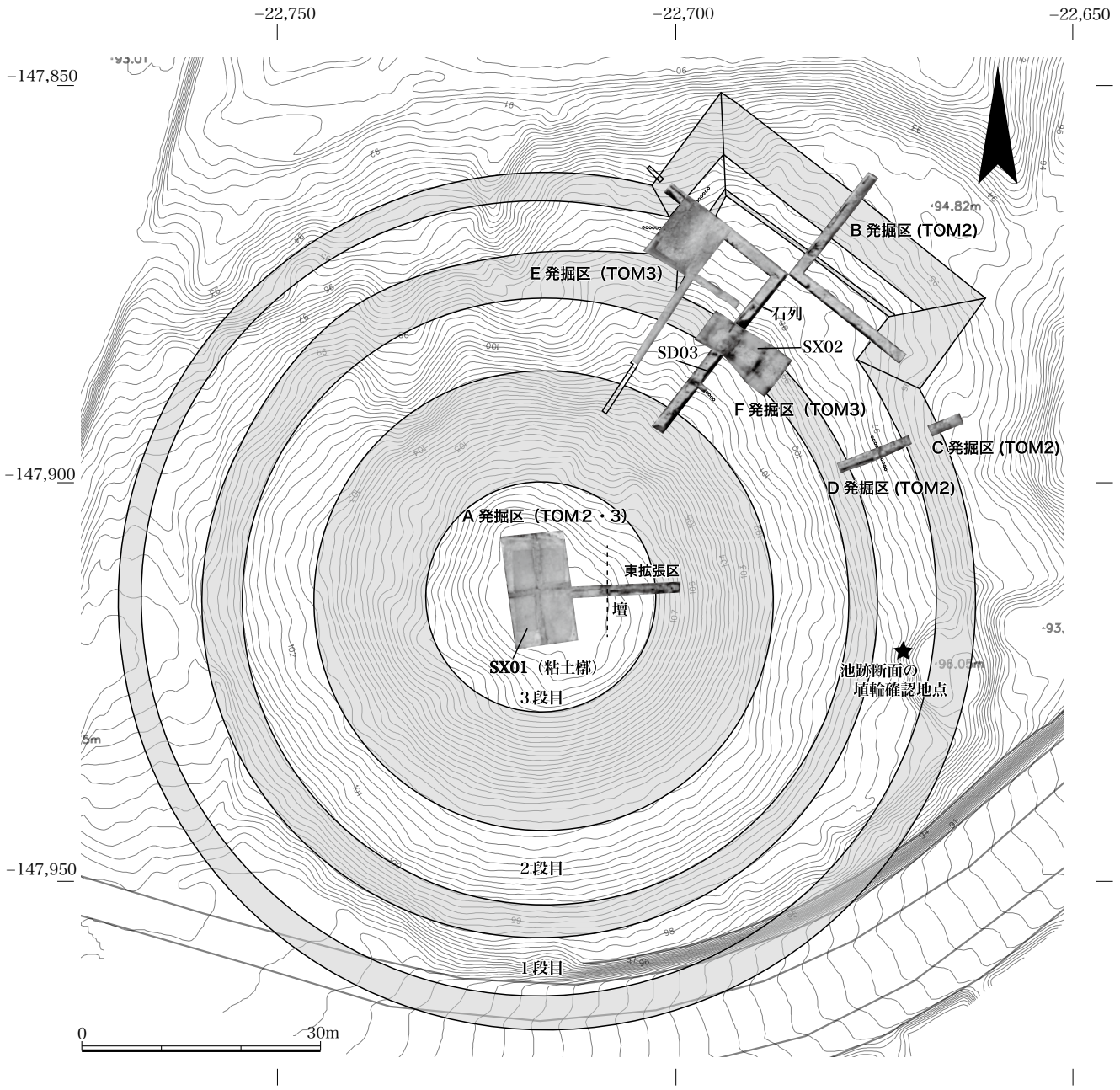
富雄丸山古墳の位置と周辺遺跡（1/50,000）

Ⅲ．第２・３次調査

第２次調査より、５年計画の範囲確認発掘調査事業として実施している。発掘区は第２次調査がＡ～Ｄ発掘区の４ヶ所、第３次調査がＡ・Ｅ・Ｆ発掘区の３ヶ所である。

Ａ発掘区（２・３次）　1972 年に奈良県が実施した埋葬施設の粘土槨 SX01 の再確認を行うために発掘区を設定した。掘削は、同時並行で実施した古墳学習事業に係り参加した一般市民等と共に行なった。２ヶ年で概ね現地表下約 0.4 mまで掘り下げが完了し、墓坑１段目の輪郭を検出した。一度掘削されているため、やや不整形であるが長さ約 10 m、幅約７mで、南東隅は盗掘坑により壊されているようである。

Ａ発掘区東拡張区　墳頂部の埴輪列や壇の有無を確認することを目的として、Ａ発掘区の東側に試掘トレンチを設定した。墳頂の中心から約 8.5 mの位置で高さ 0.8 m



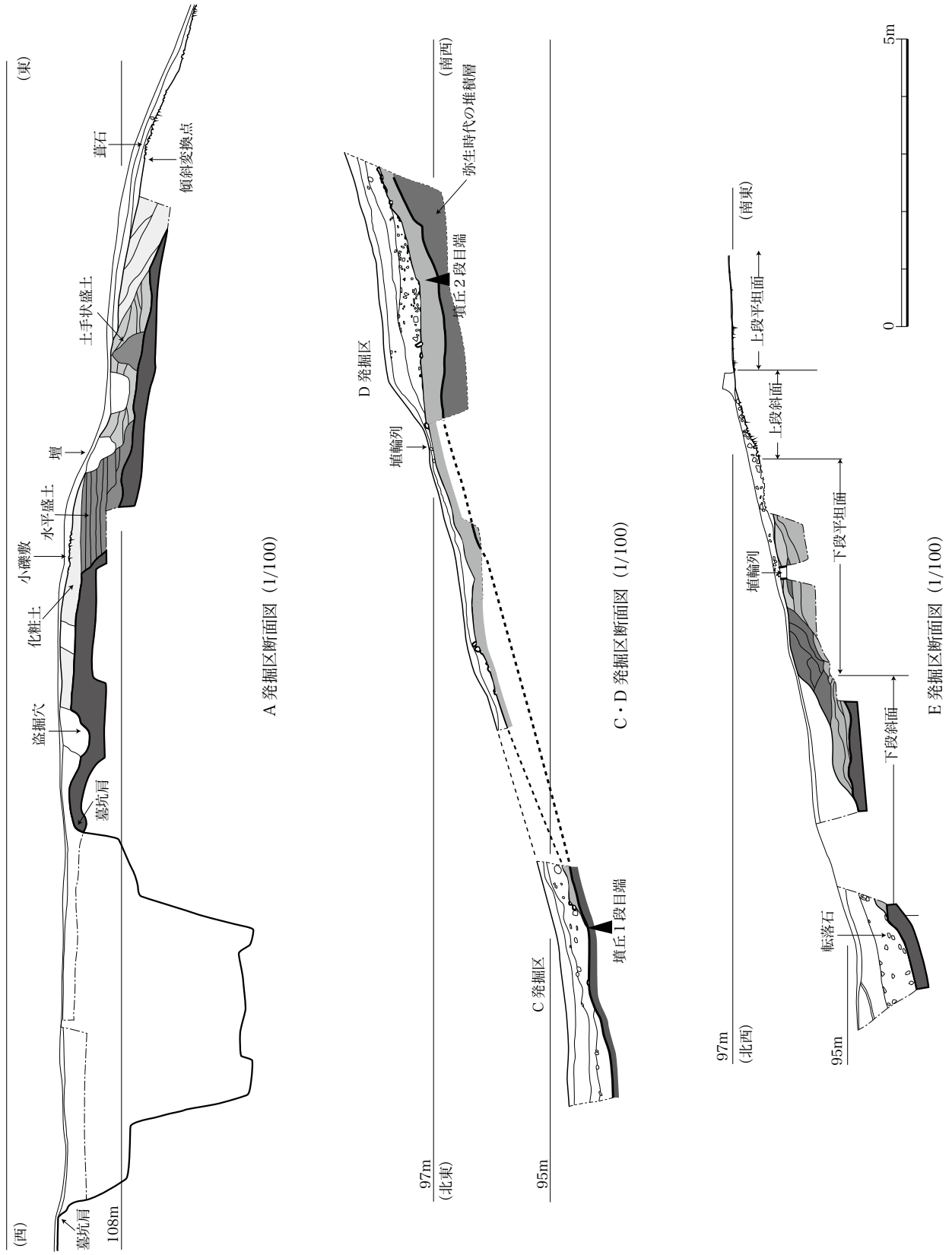
発掘区位置図（1/800）

の壇を確認した。壇部分では、砂質の地山を削り出し、その周縁に厚さ 0.1 mずつ水平に盛土して高まりをつくり出している。その上には厚さ 0.2 mの化粧土をおき、表面の一部で小礫敷を確認した。壇の斜面部分は、撹乱により壊されていたため形状は不明である。３段目の平坦面は地山上に高さ約 0.6 mの盛土を土手状にめぐらせながら成形している。

概ね現地形から推定した位置で３段目斜面との傾斜変換点、および斜面の葺石を検出した。墳頂部中心の埋葬施設に併設するような埋葬施設を東側では確認できない。

B 発掘区（２次）　推定される造出し中心部を基準に推定した主軸に沿って四分法で発掘区を設定した。造り出し部分は橙色土の地山を成形した後、厚さ約 0.5 mの白色粘土ブロック混じりの黄褐色土で盛土が行われている。造り出し中心部から墳丘本体との接続部分にかけて近代以降に削られたと考えられ、本来の墳丘面が残存しないことがわかった。造出し斜面は、場所により様相が異なる。

発掘区北東部（造出し前面）では、表土下に埴輪片や転落石を多く含むオリーブ褐色土が堆積し、それを除去すると墳丘面となる。墳丘面に残存する葺石は部分的に


(西)
(東)
墓坑肩
108m
盗掘穴
化粧土
小礫敷
水平盛土
壇
土手状盛土
葺石
傾斜変換点
A 発掘区断面図（1/100）
97m
(北東)
95m
C 発掘区
D 発掘区
埴輪列
墳丘１段目端
墳丘２段目端
弥生時代の堆積層
(南西)
C・D 発掘区断面図（1/100）
97m
(北西)
95m
転落石
埴輪列
下段斜面
下段平坦面
上段斜面
上段平坦面
(南東)
0
5m
E 発掘区断面図（1/100）

しかなく、ほとんどが転落している。裾付近では人頭大の基底石を確認した。ただし、目地等は確認できず、いくらか崩れた状態であると考えられる。埴輪列は確認できなかった。

発掘区南東部（造出し南東側面）では、表土掘削後に拳大の敷石を検出した。ただし北西側面のように明確な平坦面や斜面への傾斜変換がみられない。このため、造出しは左右対称の形状にならない可能性が考えられる。

発掘区南西部は、墳丘の３段目斜面まで発掘区を伸ばして調査した。造出し平坦面で盛土の状況を確認するために墳丘の断割調査を行ったところ、地山直上面で１条の石列を検出した。この位置は１段目平坦面の円筒埴輪列復元ラインとほぼ一致する。

２段目平坦面は、墳丘が崩れており残存状態は悪いが、幅約 8.8 mの平坦面とその中央に円筒埴輪列を検出した。埴輪列は地山を布掘りして据えられており、この付近では地山を削り出して墳丘が構築されたことがわかる。埴輪列は約 20㎝間隔で立て並べられ、概ね直径 30㎝の個体を主とするが、直径約 35㎝とやや大きめの個体もみられる。なお、埴輪列よりやや北側では、その下層に弥生時代後期の土器を含む堆積層があり、この部分では地山をＬ字状に掘り込んで平坦面をつくりだしている。平坦面の端には地山を掘り込む溝 SD03 も確認できることから、弥生時代後期の竪穴建物が墳丘下に埋もれている可能性がある。後述するＤ発掘区でも弥生時代後期の堆積層を確認しており、弥生時代の遺跡が下層に重複する可能性が高い。

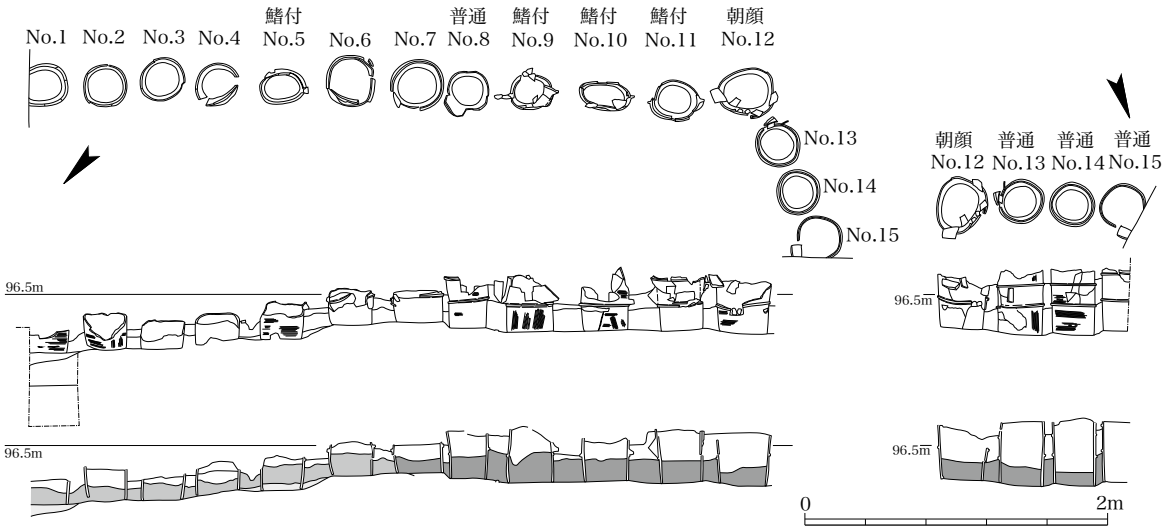
３段目斜面は、葺石がほとんど残存しないが、平坦面との接続部分付近にやや大きめの石が散在する。現位置ではないが、３段目斜面の根石としてやや大きめの基底石を用いていたことが想定できる。

Ｃ発掘区（２次）　墳丘裾の確認を目的に発掘区を設定した。表土下に転落石を含むオリーブ褐色土の流土が堆積し、その下にわずかに黄褐色粘質土の盛土が確認できる。盛土下は橙色砂礫土の地山が削り出されており、１段目斜面の傾斜が水平に屈曲する部分で盛土もみられなくなる。盛土直上面で葺石はほとんど残存しておらず、基底石も確認できなかったが、この傾斜変換点が墳丘裾である可能性が高い。裾から約 1.4 mの平坦面があり、その先は地形に沿って下降している。

Ｄ発掘区（２次）　１段目平坦面付近の墳丘構造を確認するために発掘区を設定した。表土掘削後、オリーブ褐色土、転落石を多く含む褐色土の流土があり、それを除去すると墳丘面となる。２段目平坦面と同様に幅約 7.2 mの平坦面ほぼ中央で円筒埴輪列を検出した。ただし、崩れており、埴輪の設置方法等は不明確である。平坦面には拳大の礫および２㎝前後の小礫が敷かれている。前後の斜面にもわずかに葺石が残存する。墳丘面を一部掘り下げたところ、弥生時代後期の遺物包含層があり、これを成形した後、黄褐色土の盛土で墳丘を整形している。

Ｅ発掘区（３次）　造出し北西側面に設定し、南西・南東方向へ幅約１m の拡張区を追加で設定した。

造出し北西側面は、斜面が２段に築成されており、平坦面には３㎝前後の小礫を敷き、斜面には拳大の葺石を施す。上段葺石では斜面下部に横目地となる石列を確認したが、その他の目地は崩れていて不明瞭である。明確な基底石はなく、横目地となる石列より下部は付け足し



造出し（E 発掘区）の埴輪列（1/50）

たような印象をもつ。

上段平坦面は墳丘本体側へ向かって高くなり、斜面との変換線は外側へハの字形に開く。これに従って上段斜面の高さも墳丘本体側が高く、造出し前面側が低くなるため、前面に向かって上段平坦面と上段斜面が収斂するような形状になると考えられる。造出し下段平坦面は幅約４ｍで、小礫敷は上段斜面の裾付近にのみ原位置をとどめていたが、その他は流出して埴輪片とともに散在していた。

円筒埴輪列は造出し下段平坦面のほぼ中央で検出した。発掘区内で 15 本確認し、円丘に沿って途中で屈曲する。埴輪の設置レベルが第２次調査で確認した墳丘１段目平坦面の埴輪列とほぼ同様であることから、これに接続するものと考えられる。埴輪列には掘方がなく、土層断面の観察から盛土で造出しを構築した後、埴輪を設置して１段目突帯付近まで埴輪の内外を埋め、敷石を施している。

造出し下段斜面をトレンチで確認し、墳丘裾と考えられる盛土と地山の接する傾斜変換を確認した。この標高は 94.2 ｍで、第２次調査で確認した造出し前面裾が 94.5 ｍであることから、概ね一致する。この墳丘裾以下には転落石が多く溜まっていた。部分的に確認しただけであるため、今後くびれ部を含めて墳丘裾を再確認する必要がある。

また、造出し下段平坦面のくびれ部付近で葺石とは異なる集石を確認した。葺石より大きめの石材が多く、石組のようにもみえる。重複関係から、下段平坦面の小礫敷を行なった後に配石されている。集石の南東側にあたる造出し上段斜面の葺石が崩れており、相互関係があるようにもみえる。性格等は不明であるが、墓道状遺構の一部である可能性もある。

南西方向に拡張したトレンチでは、２段目平坦面と前後の斜面を確認した。概ね第２次調査成果から復元した位置で傾斜変換点を確認した。また、円筒埴輪列が想定される部分には埴輪を確認できなかったが、布掘りの痕跡を確認した。南東側に拡張したトレンチでは、小礫敷が部分的に残存する部分を確認したが、ほとんど流出していた。

Ｆ発掘区（３次）　第２次調査で確認した掘り込み SX02 の範囲を確認するために設定した発掘区である。SX02 の輪郭は幅約３ｍ、長さ約９ｍの長方形となる。造出しおよび墳丘本体との関係は、まず地山を削り出して墳丘を成形した後､造出しを盛土で成形する。この際、主軸上の造出しと墳丘本体の接続部分に、造出し上段平坦面よりさらに１段高い高まりを設け、その平坦面に葺石と同様の石材で礫敷を行う。その後、この礫敷を埋めて再度盛土を行い、その上から SX02 を掘り込んだ後埋め戻して石を葺く。土層断面の観察では、SX02 を埋めた土は中心部分が陥没し、そこに葺石や埴輪片を含む流土が堆積している。これらの状態から、SX02 の内部には何らかの施設があり、それが腐朽し陥没したなかに、葺石が崩れて堆積した状況を想定できる。なお、遺構の性格を特定できるような遺物は出土していない。

Ⅳ．出土遺物

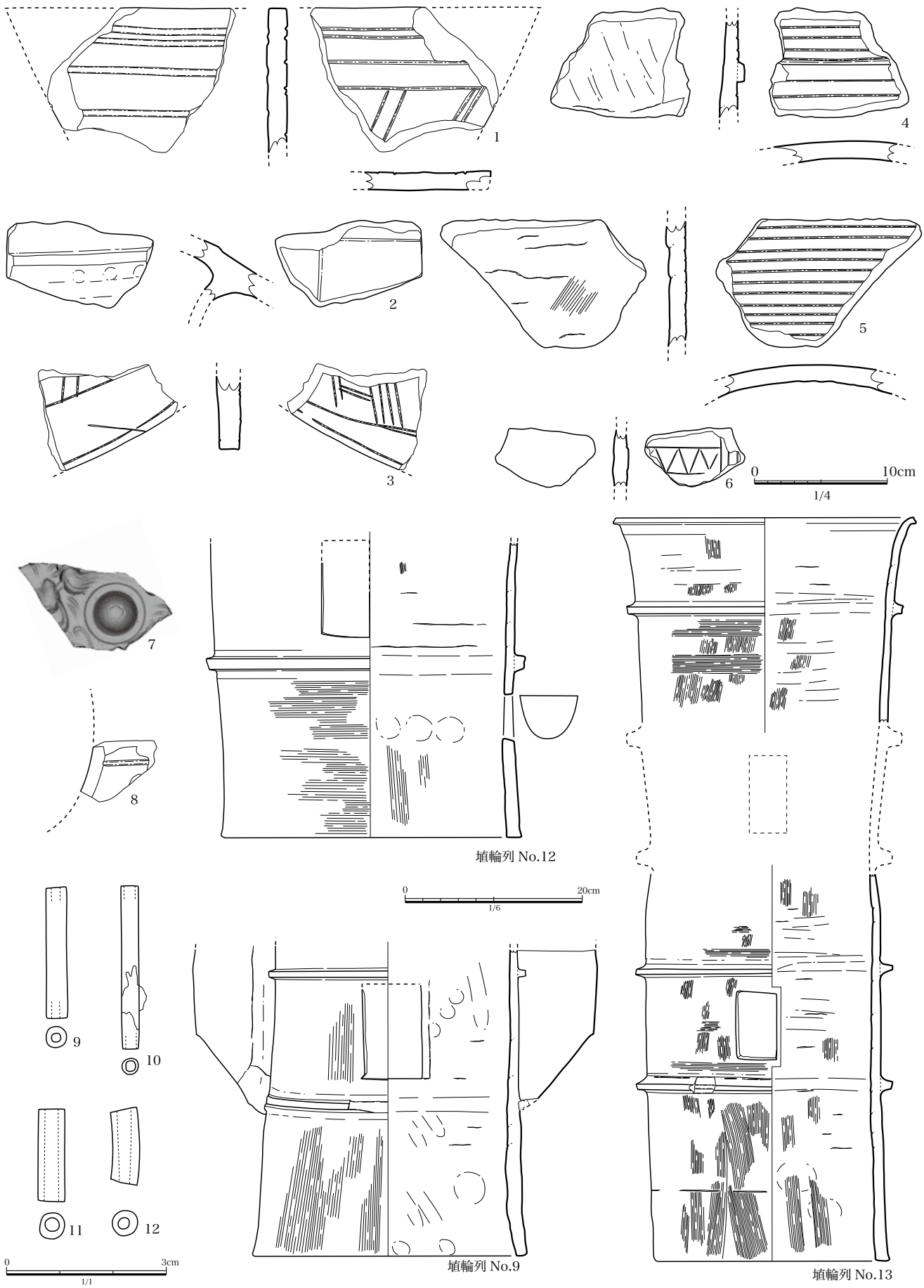
遺物整理箱 41 箱分がある。内訳は、弥生時代後期の弥生土器（甕・高杯）、４世紀中頃の円筒埴輪（普通・鰭付楕円）、形象埴輪（家・蓋・盾・草摺）、斜縁神獣鏡、鍬形石、管玉、銅鏃、鉄製品（刀・剣・刀子・鏃・籠手・鋤先・不明）、円板状土製品、６世紀前半の須恵器杯、近代の陶磁器、土製品、時期不明の鉄製品がある。整理中のため、以下では概要のみを記す。

弥生土器はＢ・Ｄ発掘区の墳丘下層から出土したもので、第Ｖ様式の甕と高杯がある。

円筒埴輪は、普通円筒埴輪のほかに鰭の幅が約 10㎝の鰭付楕円筒埴輪がある。Ｅ発掘区で検出した埴輪列では、底部径 34㎝、底部高 19㎝で底部に半円形透孔を有する朝顔形埴輪(No.12)､底部径 26.5㎝､底部高 19.5㎝、突帯間隔 13.5㎝、口縁部高 11㎝で方形透孔の配置から５条６段構成に復元できる普通円筒埴輪（No.13)、底部長径 31㎝･短径 19.5㎝の楕円を呈し、底部高 16.5㎝、突帯間隔 15㎝で方形透孔を伴う鰭付楕円筒埴輪（No.９）などがあり、他にも三角形透孔を伴うものや底部に円形透孔のあるものなどがある。

形象埴輪はＡ発掘区で盾・草摺形埴輪が出土した。草摺形埴輪（６）は小片であるが鋸歯文が線刻されたものである。Ｄ発掘区では蓋形埴輪が出土した。蓋形埴輪は笠部を立体表現するもの（２）である。立ち飾り部は用形文を線刻する先端の破片（１）が佐紀陵山古墳出土品に類似し、異なる部位の破片（３）もある。Ｅ発掘区では網代表現をもつ家形埴輪、Ｆ発掘区では盾面を突帯で区画し平行沈線を入れる盾形埴輪(４・５)が出土した。

斜縁神獣鏡１点、鍬形石１点、管玉４点、銅鏃１点、円板状土製品５点、鉄製品約 150 点はＡ発掘区で出土した。斜縁神獣鏡（７）は、内区を区画する乳と脇侍の一部が確認できる破片で、わずかに朱が付着する。鍬形石（８）は緑色凝灰岩製で内孔の一部と裏面に沈線が１条残る。この特徴をもとに京都国立博物館所蔵の鍬形石



TOM 第２・３次調査出土遺物（１～６：1/4、７～12：1/1、埴輪列 No.9・12・13：1/6）

と実物照合を行ったところ、環体を大きく欠損する鍬形石の一部である可能性が高いことが判明した。管玉は、緑色を呈し長さ約３㎝の細長いもの２点（９・10)、白色を呈し長さ約 1.5㎝のもの１点（11)、濃緑色を呈し長さ１㎝程度でやや屈曲し端部がハの字に加工された手玉の可能性があるもの１点（12）がある。円板状土製品は、手捏ねで作られたもので、土製模造品のひとつとして前期後半～中期前半の古墳から出土がみられるものである。鉄製品は県第１次調査で出土した種類と共通するもので、ほとんどが小片である。

６世紀前半の須恵器杯は造出し前面葺石の転落石除去中に出土した。このことから、墳丘各所でみられる転落石を多く含む流土は、６世紀前半を前後する時期に墳丘が大きく崩れて堆積したものである可能性がある。なお、環状の不明鉄製品が同地点の墳丘裾付近に堆積する流土上層から出土した。

近代の土製品は、火鉢類の破片と思われ、造出し中央の上段平坦面から前面斜面にかけて出土した。この時期に造出し上段中央付近が削られたと考えられる。

Ⅴ．調査所見

ⅰ）富雄丸山古墳の形状と構造

墳丘裾　Ｃ発掘区で確認した。これを墳丘裾とみて、測量図から復元できる墳頂部の中心から計算すると、直径 109m の円墳に復元できる。ただし、今回の調査地点は残りが悪く、今後複数箇所で墳丘裾を確認し形状を確認する必要がある。

墳丘１段目　斜面幅約 4.3m、平坦面幅約 7.2m である。D 発掘区では円筒埴輪列の残りが悪かったが、平坦面のほぼ中央にめぐることが確認できた。池跡断面で確認した円筒埴輪も平坦面の中央付近に位置し追認できる。ただし、この円筒埴輪列が造出しにどのように取りつくかは確認できておらず、今後の課題である。

墳丘２段目　斜面幅約 4.7m、平坦面幅約 8.8m である。B 発掘区部分は現地形をみても大きく崩れており、平坦面および斜面の葺石・敷石はほとんど残存していなかった。また、平坦面中央にめぐる円筒埴輪列は地山を布掘りして据えているが、E 発掘区の埴輪列に掘方がなかったように､埴輪の据え方に違いがある可能性がある。２段目平坦面の埴輪列は約 20㎝間隔であるため、出土した鰭の破片の多くは幅が約 10㎝なので、鰭が接するように据えられていた可能性が考えられる。

墳丘３段目　３段目斜面は、１・２段目との対比で１：１：２となり、最も高くなる。また、墳頂部平坦面の中心部にはさらに１段高い壇が存在した可能性が高い。墳頂部と埋葬施設との位置関係はこれまで不明確であったが、墓坑の輪郭からみて、概ね墳頂中心部に粘土槨があると推定できる。

造出し　造出し中心付近は近代以降に削られているが、北西側の上段平坦面の標高が 97.0m であり、中央付近で残存する最も標高の高い地点で 97.6m であることから、北西側の上段平坦面からみて中心側はさらに１段高まっていたと推定できる。

造出し南東側面は石敷のある緩い斜面が発掘区端まで続き北西側面とは様相が異なる。現況をみても、南東側へ張り出す地形を看守できる点も重要である。このことから、造出しは左右対称の形状ではない可能性がある。

ⅱ）F 発掘区で検出した遺構について

F 発掘区で検出した幅約３m、長さ約９m の長方形掘方をもつ SX02 は、先述の通り内部に何らかの施設を有している可能性がある。造出しに施設のある例は、兵庫県行者塚古墳や京都府久津川車塚古墳などで確認されているが、富雄丸山古墳はこれらより時期が遡る。SX02 の性格は今後の調査に委ねるが、少なくとも掘り込みを行う以前から周囲より１段高く盛土し、平坦面を設けていたことは確かである。造出しの出現およびその機能を解明する上で、重要な遺構であると考えられる。

ⅲ）古墳以前の遺跡

墳丘下で竪穴建物の可能性がある遺構や弥生土器を含む堆積層を確認した。この地点は概ね標高 100m 付近で、周辺には弥生時代後期の六条山遺跡などもあり、古墳築造以前に高地性集落として土地利用されていた可能性が高い。

（村瀬　陸）

註

1）奈良県教育委員会 1973『富雄丸山古墳発掘調査報告』
2）泉森皎 1986「富雄丸山古墳の墳形について」『青陵』59 奈良県立橿原考古学研究所

A 発掘区　東拡張部（東から）

B 発掘区　墳丘内列石（北東から）

B 発掘区　２段目平坦面の埴輪列（北から）

C・D 発掘区　全景（北東から）

D 発掘区　１段目平坦面の埴輪列（北東から）

E 発掘区　集石遺構（北から）

B 発掘区　造出し北東側　全景（北東から）

B 発掘区　造出し南東側　全景（南東から）

E 発掘区　埴輪列　コーナー付近（北から）

11. 平成 30 年度実施　遺跡有無確認踏査一覧

平成 30 年度の遺跡有無確認踏査は 4 件実施し、いずれも遺跡は確認できなかった。

	受理番号	踏査地	踏査日	事業面積（㎡）	事業者	事業内容	踏査所見
1	H30：4002	中山町西二丁目 946 番 3、他 21 筆	H30.7.25、27	20,589.43	個人	宅地造成	遺物、遺構とも確認できなかった。
2	H30：4003	小倉町 1180 番 9、他 13 筆	H30.7.25	37,854.38	京都グレインシステム（株）	倉庫新築	遺物、遺構とも確認できなかった。
3	H30：4005	中畑町 1132 番、他 52 筆	H30.12.11	92,234.87	（株）日本エコロジー	林地開発	遺物、遺構とも確認できなかった。
4	H30：4004	横井町 924-6 の一部、他 5 筆　白毫寺町 1195-3 の一部、他 4 筆	H31.3.27	52,587	奈良市長	火葬場及び市道の整備	遺物、遺構とも確認できなかった。

12. 平成 30 年度実施　工事立会一覧

平成 30 年度に土木工事等に関わってのべ 221 件の立会を実施した。

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
1	H29.3545	右京四条三坊十坪	平松一丁目 9 番 1、22 番 1 の各一部	新生土地（株）	擁壁の設置・スロープ造成	宅地	H30.4.2	盛土 1.3 m以上
2							H30.5.10	GL-1.7 m　盛土 1.5 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m以上
3	H29.3249	左京二条二坊五・十一坪	法華寺町地内	奈良市公共下水道管理者	下水道工事	道路	H30.4.3	GL-2.0～2.7 m　盛土 2.0 m黒灰色土(耕作土）0.2 m、灰色土 0.5 m
4	H29.3452	一条条間路	西大寺一丁目 2347-1・2341-1・2347-10 の各一部	近畿日本鉄道（株）	仮設駅舎新築	駅前広場	H30.4.4	GL-1.35 m　アスファルト 0.07 m、コンクリート及び砕石 0.43 m、盛土 0.6 m、黒灰色土（耕作土）0.15 m、灰色砂質土 0.1 m
5	H29.3536	北辺西一坊大路	山陵町 5-1	関西電力（株）	電柱新設	陵墓地	H30.4.4	GL-2.6 m　暗褐色土（表土）01 m、淡褐色土 1.4 m、以下地山の暗褐色粘土
6	H29.3365	護国神社前池中古墳	古市町 1848 番 1	ウエーブエネルギー（株）	太陽光発電所設置	宅地	H30.4.5	整地のみ、ほとんど掘削されず
7	H29.3538	右京三条二坊五坪	尼辻北町 320 番 4、320 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.5	GL-0.4 m　盛土 0.4 m以上
8	H29.3518	西大寺旧境内	西大寺野神町一丁目 627 番 1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.5	GL-1.3m　黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰色土 0.05 m、黄灰色土 0.05 m、灰褐色土 0.1 m、褐灰色土 0.2 m、以下地山の黄灰色粘土 0.3 m、暗灰色粘土 0.2 m、灰色粘土 0.2 m以上
9	H29.3472	右京四条三坊十五坪	平松一丁目 15 番 11	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.9	GL-0.3 m　盛土 0.3 m以上
10	H29.3002	五条大路　奈良町遺跡	京終地方東側町 21-5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.9	GL-0.3 m　盛土 0.3 m以上
11	H29.3585	秋篠寺旧境内 ドヨー塚	秋篠町 847-1、844-1	個人	共同住宅新築	宅地	H30.4.9	敷地西辺部：耕作土直下で黄白色粘土（地山）確認
12							H30.4.10	敷地北辺部 :GL-0.7～1.2 m　黒褐色土（表土）0.2 m、黒灰色土（旧耕作土）0.15 m、赤褐色土（床土）0.15 m、灰色土 0.2 m以上、敷地北東角から 1.8 mで、ドヨー塚西裾の黄白色粘土（地山）確認
13	H29.3521	右京二条四坊十六坪	若葉台三丁目 323 番 22、2656 番	個人	個人住宅新築	宅地	H30.4.10	GL-1.6 m　盛土 1.6 m以上
14	H29.3582	元興寺旧境内、奈良町遺跡	鶴福院町 15 番、16 番	個人	共同住宅新築	宅地	H30.4.11	GL-1.0 m　黒褐色土（表土）1.0 m以上
15	H29.3513	長谷遺跡	佐保台西町 56 番、57 番、59 番	（株）フクダ不動産	共同住宅新築	宅地	H30.4.12	GL-2.8 m　盛土（造成土）2.8 m以上
16	H29.3495	左京五条三坊三・四坪	五条二丁目 560 番、559 番の各一部	洋国開発（株）	宅地造成	道路	H30.4.16	GL-2.5 m　盛土 0.6 m、黒灰色土 0.6 m、暗灰色粘質土 0.5 m、褐灰色粘質土 0.3 m、黄灰色粘土（地山）0.5 m以上
17	H29.3549	左京五条六坊七坪 奈良町遺跡	西木辻町 353-2、353-1、351-1	関西電力（株）	電柱・支線新設	道路	H30.4.17	GL-0.5～0.6 m　盛土 0.2～0.3 m、黒褐色土 0.3～0.4 m以上

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
18	H29.3397	左京九条三坊三・五坪	西九条町四丁目２番地の２	大和ハウス工業（株）	汚染土壌の掘削除去、擁壁根入試掘調査	工場用地	H30.4.20	A区：GL-1.5m　上から0.8m除去、以下黒灰色土（耕作土）0.05m、灰色砂質土0.25m、黄灰色砂質土0.2m、以下灰褐色砂質土（遺構面）0.2m以上 B区：GL-2.6m　上から0.8m除去、灰色砂質土0.3m、灰褐色砂質土（遺構面）0.3m、淡褐色砂質土0.1m、黒褐色粘土0.2m、黒灰色粘質土0.25m、暗灰色砂0.15m、黒灰色粘土0.5m以上
19	H29.3465	ウワナベ古墳	法華寺町 1155 番３	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.4.20	GL-2.0 m　盛土 1.3 m、暗褐色砂質土 0.7 m以上
20	H29.3494	東市跡	東九条町・西九条町地内	奈良市長	下水道工事	道路	H30.4.23	GL-2.3 m　マサ土（盛土）1.2 m、暗灰色土（盛土）0.5 m、以下地山の黄灰色粘土 0.25 m、黒灰色粘土 0.3 m、黒灰色粘砂 0.05 m以上
21	H29.1065	史跡西大寺境内	西大寺南町	奈良市長	公園整備工事	駐車場	H30.4.23	GL-1.0 m　盛土 0.8 m、黒灰色土 0.2 m、以下灰色粘質土（地山）
22	H29.3467	奈良町遺跡	今在家町 12 番 1、13 番 1、13 番 3、雑司町 7 番 3、7 番 10、7 番 11	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H30.4.24	GL-1.0 m　盛土 0.2 m、黒褐色土（表土）0.8 m以上
23	H29.1179	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺町二丁目 1299 番 1、1320 番、1322 番 -1・2・3	（宗）大安寺	延石の撤去移設、植栽の撤去移設	宅地	H30.4.25	GL-0.4 m　黒褐色土（表土）0.4 m以上
24	H29.3578	東六坊四条大路	南魚屋町 18-9、18-10	個人	個人住宅新築	駐車場	H30.4.27	GL-2.0 m　盛土 0.2 m以上
25	H29.3029	右京三条三坊十六坪	菅原町 432 番 5、432 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.5.8	GL-1.9 m　盛土 1.9 m以上
26	H30.3003	左京二条七坊北郊	西包永町 9 番 1、9 番 2、9 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.5.9	GL-0.6 ～ 0.65 m　黒褐色土（表土）0.5 ～ 0.55 m、黄褐色土（地山）0.1 m以上
27	H29.3332	左京五条二坊三坪	大安寺町 518-1	（株）ヤナセ	車庫新築	青空駐車場	H30.5.14	GL-1.5 m　盛土 1.5m、以下黒灰色土（耕作土）
28	H29.3525	左京三条六坊九坪奈良町遺跡	中筋町 5 番 4 の一部	天美学園ナーサリー（株）	保育所新築	宅地	H30.5.16	GL-2.5 m　黒褐色土（表土）0.25 m 以下黄灰色砂質土（地山）
29	H29.3544	右京五条三坊十五坪	平松二丁目 281 番 76	アイディホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.5.14	GL-0.3 m　盛土 0.3 m　以下黄灰色砂質土（地山）
30	H29.3561	右京二条三坊十四坪、二条条間路	青野町一丁目 57-3、青野町 56-3	関西電力（株）	電柱建替・新築	道路	H30.5.21	GL-1.0 ～ 1.1 m　盛土 1.0 m以上
31	H29.3577	左京四条六坊六坪奈良町遺跡	南魚屋町 39	関西電力（株）	電柱建替・支線新築	道路	H30.5.28	GL-0.65 m　黒褐色土（表土）0.3 m、赤灰色粘土（地山）0.6 m
32	H30.3100	左京五条六坊九坪奈良町遺跡	南袋町 26 番２	個人	個人住宅新築	宅地	H30.5.28	GL-0.3 m　盛土 0.2 m、黒褐色土（表土）0.1 m以上
33	H29.3490	左京九条三坊二坪	西九条町二丁目 7-1、7-2	個人	共同住宅新築	宅地	H30.5.28	GL-0.8 m　盛土 0.2m、黒褐色土 0.6 m以上
34	H29.3503	右京三条二坊十二坪、三条大路	尼辻北町 230-2 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H30.5.29	GL-1.7 m　盛土 1.1m、赤灰色粘土（地山）0.6 m
35	H30.3079	古市遺跡	古市町 1518 番１（1 号棟）	（株）アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.5.29	GL-0.6 m　盛土 0.4 m、赤褐色砂質土（地山）0.2 m以上
36	H30.1030	史跡大安寺旧境内	大安寺町二丁目 1229-1	（宗）大安寺	電線の地下埋設工事	寺院境内	H30.5.29	GL-0.2 m　盛土 0.2 m以上
37	H29.3424	左京九条四坊七坪	東九条町 293 番	平井建設（株）	資材倉庫新築	工場用地	H30.5.30	GL-1.0 m　盛土 0.7m、黒灰色土（耕作土）0.3 m以上
38	H30.3105	古市城跡	古市町 1841 番６	個人	個人住宅新築	宅地	H30.5.31	GL-0.3 m　褐色土（表土）0.3 m以上
39	H29.3094	東一坊坊間東小路	四条大路二丁目 858-1	（株）ひまわりの会	擁壁工事	青空駐車場	H30.6.4	GL-0.7 m　砕石 0.5 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、以下淡黄灰色砂質土（包含層）
40	H30.3045	左京五条二坊四坪	大安寺町 498-1、498-2	奈良日産（株）	店舗新築	宅地	H30.6.4	GL-0.8 ～ 2.0 m　盛土 1.4 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰色砂質土 0.2 m、灰色粘砂（河川堆積土）0.2 m以上
41	H30.3089	左京四条一坊十六坪	四条大路二丁目 826-1	（株）ひまわりの会	青空駐車場	水田	H30.6.5	GL-0.4 m　黒灰色土（耕作土）0.4 m、以下淡黄灰色砂質土
42	H29.3423	元興寺旧境内、奈良町遺跡	今御門町 24 番地、26-2 番地	（株）ホウユウ	店舗新築	宅地	H30.6.7	GL-1.1 m　盛土 0.2 m、黒褐色土 0.9 m以上
43	H29.3038	西四坊大路	平松五丁目 632-6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.6.7	GL-0.3 m　砕石 0.1 m、黄灰色粘土（地山）0.2 m以上

工事立会

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
44	H29.3524	右京六条四坊七・八坪	六条二丁目 1017 番及び 1019 番 1	個人	共同住宅新築	水田	H30.6.8	GL–0.6 m　黒灰色土（耕作土）0.1 m、淡灰色土 0.2 m、以下明黄褐色粘土 0.3 m以上
45	H30.3074	左京四条三坊五坪	三条桧町 636 番 3 の一部	個人	車庫新築	宅地	H30.6.8	GL–0.3 m　砕石 0.1 m、盛土 0.2 m以上
46	H30.3462	左京五条五坊四坪	大安寺町 801 番 6	クレイジーモーターワークスムカイ（有）	店舗新築	宅地	H30.6.11	GL–1.3 m　盛土 1.3 m以上
47	H30.3505	左京二条三坊十坪	法華寺町 27 番 1、27 番 2	（株）八洲エイジェント	宅地造成	水田	H30.6.11	GL–1.3 m　盛土 1.3 m以上
48	H30.3023	左京四条三坊五坪	三条桧町 30–29･31–4 他	関西電力（株）	電柱・付属物の新設・撤去	道路	H30.6.11	GL–1.3 m　盛土 1.3 m以上
49	H30.3027	左京八条四坊三坪	東九条町 577–1	関西電力（株）	電柱新設	宅地	H30.6.11	GL–2.7 ～ 3 m　黒灰色土（耕作土）0.25 m、灰色土 0.25 m、黒色土 0.2 m以上
50	H29.3521	右京二条四坊十六坪	若葉台三丁目 323 番 22、2656	個人	個人住宅新築	宅地	H30.6.12	GL–0.2 m　黒褐色土（表土）0.1 m、以下黄灰色粘質土（地山）0.1 m以上
51	H30.3591	左京一条四坊十四坪	法蓮町 652–3 地内･652–5･686 地先	関西電力（株）	本柱・支線の新設撤去、接地棒新設	宅地	H30.6.12	GL–0.7 m　盛土 0.3 m、黒灰色土（耕作土）0.3 m、暗黄褐色砂質土（地山）0.1 m以上
52	H30.3076	佐伯院跡、奈良町遺跡	北京終町 31 番 1、32 番 1	個人	医院併用住宅新築	宅地	H30.6.15	GL–0.25 ～ 0.65 m　黒褐色土（表土）0.25 ～ 0.65 m以上
53	H30.3089	西大寺旧境内	西大寺新田町 541 番 1	個人	個人住宅新築	山林	H30.6.18	GL–1.5 m　盛土 1.5m､以下黒灰色土（耕作土）0.2 m、以下黄灰色砂質土（地山）1.3 m以上
54	H30.3033	右京五条四坊八坪	平松四丁目 449–4	個人	個人住宅新築	宅地	H30.6.18	GL–0.2 ～ 0.3 m　盛土 0.3 m以上
55	H30.3022	右京四条一坊八坪	四条大路四丁目 48 番 1、50 番	個人	スイミングスクール用地造成	畑地	H30.6.19	GL–0.55 ～ 1.1 m　黒灰色土（耕作土）0.25 m、灰白色砂質土 0.3 m、灰褐色土 0.2 m、黄灰色粘質土（地山）0.4 m以上
56	H30.3473	新薬師寺旧境内、奈良町遺跡	高畑町 672 番 1、672 番 2、675 番 1、675 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.6.21	GL–0.4 m　黒褐色土（表土）0.4 m以上
57	H29.3565	正暦寺	菩提山町 77 番	KDDI（株）	携帯電話基地局設置	駐車場	H30.6.25	GL–3.1 m　砕石 0.15 m､暗褐色土(表土) 0.45 m、淡褐色土砂質土 0.4 m以上
58	H29.3088	右京北辺三坊一坪	秋篠早月町 231–1 番地～西大寺新町一丁目 4–9	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	H30.6.27	GL–1.4 m　アスファルト 0.05 m、砕石 0.15 m、暗灰色土 0.4 m　灰色砂 0.2 m 黄灰色粘土（地山）0.5 m以上
59	H29.3060	左京五条四坊十三坪	大安寺六丁目 824 番 1 の一部	（株）クレアデルネ	共同住宅新築	駐車場	H30.6.29	GL–0.65 m　盛土 0.35 m、黒灰色土（耕作土）0.25 m、黄灰色粘質土（地山）0.05 m以上
60	H30.3081	右京五条四坊二坪	平松町 360 番 17、19（2 号棟）	（株）アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.6.30	GL–1.73 m　灰黄褐色砂質土 0.1 m、黒褐色砂質土（耕作土）0.38 m、灰褐色砂質土 0.7 m、黄褐色砂質土（地山）0.55 m以上
61	H30.3080	右京五条四坊二坪	平松町 360 番 2、18（1 号棟）	（株）アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.6.30	GL–1.7 m　砕石 0.05 m、黒褐色砂質土（耕作土）0.3 m、灰褐色砂質土 0.35 m、黄褐色砂質土（地山）1.0 m以上
62	H30.3147	古市遺跡	古市町 1669 番 5（1 号棟）	（株）アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H30.6.30	GL–0.3 m　砕石 0.13 m、茶褐色砂質土 0.17 m以上
63	H30.3026	右京三条一坊十三坪	三条大路四丁目 512–1	（株）あきんどスシロー	店舗新築	宅地	H30.7.2	GL–0.4 m　盛土 0.4 m以上
64	H29.3528	二条条間路	川久保町 23 番 1、23 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.3	GL–0.26 m　砕石 0.06 m、黒灰色土（表土）0.2 m以上
65	H30.3040	右京五条三坊一坪	五条一丁目 451 － 3、79 － 3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.9	基礎掘削なし、GL ＋ 0.14 mの砕石敷く
66	H30.3011	西大寺旧境内	西大寺芝町二丁目 2552–2 番地 地先	関西電力（株）	本柱・支線の建替	道路	H30.7.10	GL–0.9 m　コンリート 0.3 m、盛土 0.3 m、黄灰色砂質土（地山）0.3 m以上
67	H30.3044	古市城跡	鹿野園町 19 番 1	KDDI（株）	既設携帯電話基地局設備増設	宅地	H30.7.11	GL–0.4 m　盛土 0.25 m、黒褐色土（耕作土）0.15 m以上
68	H29.3579	左京九条四坊十坪	東九条町 260 － 1、260 － 3	トヨタ部品奈良共版（株）	事務所新築	宅地	H30.7.17	GL–0.95 m　盛土 0.95 m以上
69	H30.3107	二条大路	菅原町 637–1 ～菅原町	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	H30.7.17	GL–0.9 m　アスファルト・クラッシャー 0.2 m、盛土 0.5 m、茶褐色土（表土）0.2 m
70	H29.3519	右京三条四坊二坪	菅原町 663–8、666、667–1 の各一部	リアルアセット（株）	宅地造成	道路	H30.7.17	GL–0.9 m　アスファルト・クラッシャー 0.2 m、盛土 0.5 m、茶褐色土（表土）0.2 m

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
71	H30.3052	右京七条三坊五坪	七条一丁目 405 番 12	一建設（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.7.18	GL-0.4 m　盛土 0.4 m以上
72	H30.3591	左京二条七坊十二坪	南半田中町 21-13 番地	関西電力（株）	電柱新設	道路	H30.7.19	GL-0.6 m　黒褐色土（表土）0.6 m以上
73	H30.3099	右京四条三坊九・十坪	宝来二丁目 3 番、126 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.23	GL-0.4 m　盛土 0.2 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m以上
74	H30.3073	左京一条四坊十坪	法蓮町 1962 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.23	GL-1.8 m　盛土 0.8 m、以下地山の赤褐色砂質土 0.3 m、黄灰色砂質土 0.7 m以上
75	H29.3551	六条大路	六条三丁目 1174 番 16（2 号地）	アイディホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.7.23	GL-0.2 ～ 0.6 m　盛土 0.3 m、黄灰色砂質土（地山）0.3 m以上
76	H29.3550	六条大路	六条三丁目 1174 番 16（1 号地）	アイディホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.7.23	GL-0.4 m　盛土 0.3 m、黄灰色砂質土（地山）0.1 m以上
77	H29.3508	左京四条四坊七坪	三条添川町 229 番 1	個人	事務所新築	宅地	H30.7.24	GL-1.0 m　盛土 1.0 m、以下灰色砂
78	H29.3533	松林苑隣接地	佐紀町地内	奈良市公営企業管理者	下水道工事	道路	H30.7.25	GL-2.55 m　アスファルト 0.05 m、暗灰色土（表土）0.2 m、黄褐色土 0.4 m、以下地山の赤褐色土 0.4 m、黄白色砂礫 1.5 m以上
79							H30.7.30	GL-3 m 暗灰色土（表土）0.25m、黄褐色土 0.4 m、以下地山の赤褐色土 0.4 m、黄白色砂礫 1.95 m以上
80	H30.3151	左京五条六坊四坪	西木辻町 139 番、139 番 31 の各一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.7.31	GL-0.2 ～ 0.25 m　黒褐色土（表土）0.2 m以上
81	H30.3184	新薬師寺旧境内、奈良町遺跡	高畑町 468 番	鏡神社	炊事場新築	宅地	H30.8.3	GL-0.4 ～ 0.9 m　盛土 0.4 m、黄褐色砂礫（地山）0.5 m以上
82	H30.3115	左京三条五坊一・二坪	芝辻町一丁目 110 番 1 の一部	個人	共同住宅新築	宅地	H30.8.6	GL-0.2 m　盛土 0.2 m以上
83	H30.3233	左京二条四坊十六坪	法蓮町 323 － 2、330-1 他	（株）吉川商事	宅地造成	宅地	H30.8.17	GL-1.2 m　黒褐色土（表土）0.3 m、暗黄褐色土 0.2 m、暗黄褐色土 0.2 m、淡黄褐色土 0.4 m、褐灰色土 0.1 m以上
84	H30.3200	西大寺旧境内	西大寺小坊町 293-1	（株）小林商店	店舗新築	宅地	H30.8.17	GL-0.3 mまで掘削　盛土 0.3m 以上
85	H30.3145	四条大路	平松一丁目 94 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.8.20	GL-0.3 m　盛土 0.3m 以上
86	H30.3178	左京二条五坊二坪	法蓮町 326 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.8.20	GL-0.3 m　盛土 0.3m 以上
87	H30.3172	右京三条一坊十一坪	三条大路五丁目 496 番地	（株）インパクト	宅地造成	宅地	H30.8.20	GL-0.45 m　黒褐色土（表土）0.2m、暗黄灰色土 0.25 m以上
88	H30.3121	右京四条一坊八坪	四条大路四丁目 48-1、50	光亜興産（株）	スイミングスクール新築	畑地	H30.8.27	GL-0.7 m　盛土 0.7 m以上
89	H30.1056	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目 1314-1・2、1303-17・19、1309-4	奈良市長 仲川元庸	ブロック塀の撤去・新設	学校用地	H30.8.28	GL-0.2 ～ 0.4 m　盛土 0.2 ～ 0.4 m以上
90	H30.3122	奈良町遺跡	高畑町 824 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H30.8.30	GL-1.38 m　盛土 0.38m、黒色土（解体時埋土）1.0 m以上
91	H30.3131	左京四条五坊十二坪	大森町 301-15・301-17	関西電力（株）	電柱新設	道路	H30.9.3	GL-1.3 m　盛土 0.9 ～ 1.1 m、黒褐色土 0.2 ～ 0.4 m以上
92	H30.3196	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目 801-6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.6	GL-0.15 m　盛土 0.15 m以上
93	H30.3255	左京一条三坊十二坪	法華寺町 1359 番 1	（株）吉川商事	宅地造成	畑地	H30.9.11	GL-1.7 m　砕石 0.3 m、暗褐色土 0.2 m、黄灰色粘砂（地山）1.2 m以上
94	H30.3206	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目 134 番 5、135 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.14	GL-0.2 m　盛土 0.2 m以上
95	H30.3065	奈良町遺跡	肘塚町 15-1（2 号棟）	一建設（株）	個人住宅新築	宅地	H30.9.18	GL-0.15 m　盛土 0.15 m以上
96	H30.3123	左京五条六坊十坪	西木辻町 298 番 10	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.18	GL-0.45 m　黒褐色土（表土）0.3 m、黄灰色粘土（地山）0.15 m以上
97	H30.3226	五条大路、奈良町遺跡	中辻町 59 番地 4・5・12	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.20	GL-0.3 m　盛土 0.15 m、黒褐色土（表土）0.15 m以上
98	H30.3229	左京二条六坊北郊	法蓮町 958 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.21	GL-0.29 m　盛土 0.29 m以上
99	H30.3127	南紀寺遺跡	南紀寺町二丁目 341 番 4	（株）未来	宅地造成	青空駐車場	H30.9.25	工事掘形：敷地南側・西側：GL-1.8 m、北側：GL － 0.7 m、東側：GL-0.9 m 土層は南側・西側：盛土 0.8 m、耕作土 0.1m、淡灰色砂質土 0.5 m、暗褐色砂質土（土師器包含）0.3 m、淡黄褐色砂質土 0.2 m、茶褐色砂礫（地山）0.4 m以上、北側：盛土 0.8 m、耕作土 0.3 m以上

工事立会

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
100	H30.3250	右京二条二坊十四坪	西大寺国見町二丁目296番63	個人	個人住宅新築	宅地	H30.9.26	GL–0.3～0.6 m　盛土0.3～0.6 m以上
101	H30.3164	東五坊坊間西小路	大宮町一丁目43–3先	関西電力（株）	電柱建替・支線新設	道路	H30.10.1	GL–1.0 m　アスファルト0.1 m、盛土0.9 m以上
102	H30.3268	古墳（05A–0034）	西大寺赤田町一丁目989番19の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.2	GL–0.2～0.3 m　黒褐色土（表土）0.2～0.3 m、以下黄灰色粘質土（地山）
103	H30.3258	右京北辺四坊六坪	西大寺宝ヶ丘747番2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.4	GL–0.3～0.4 mまで掘削　黄灰色粘質土（地山）0.3～0.4 m以上
104	H30.3179	八条大路	東九条町282–4	関西電力（株）	本柱新設・建替	道路	H30.10.5	GL–0.7～0.8 m　アスファルト0.05 m、盛土0.65～0.75 m以上
105	H29.3523	左京三条四坊六坪	大宮町三丁目163番3	（合）ＲＡビルリース	共同住宅新築	宅地	H30.10.9	GL–3.7 mまで掘削　盛土0.4 m、黒灰色シルト0.15 m、灰色粘砂、黄灰色砂質土0.8 m、黒褐色粘砂0.3 m、以下淡黄褐色粘砂（地山）
106	H29.3552	右京七条四坊八坪	六条三丁目1182番4（1号地）	アイディホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.10.9	GL–0.6 mまで掘削　盛土0.6 m以上
107	H29.3553	左京七条四坊八坪	六条三丁目1182番4（2号地）	アイディホーム（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.10.9	GL–0.3 mまで掘削　盛土0.3 m以上
108	H30.3239	一条北辺京極路	秋篠早月町239–1・239–7	関西電力（株）	電柱・支線新築	宅地	H30.10.10	GL–2.4 mまで掘削　盛土0.2 m、黒褐色土（表土）0.1m、暗黄褐色粘質土0.6 m、以下黄褐色粘土（地山）
109	H30.3243	古市遺跡	古市町1233–1	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.11	GL–0.45 mまで掘削　盛土0.45 m以上
110	H30.3267	一条条間南小路	法華寺町1363番9	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.11	GL–0.3 mまで掘削　盛土0.3 m以上
111	H30.3062	新薬師寺旧境内	高畑町	奈良教育大学	教育資料館の耐震補強工事	学校用地	H30.10.11	GL–0.5～0.8 mまで掘削　黒褐色土0.5～0.8 m以上
112							H30.10.29	
113							H30.10.31	
114	H30.3256	南紀寺遺跡	白毫寺町	奈良教育大学	防災教育のための穴の掘削	畑地	H30.10.13	GL–0.6 m　黒褐色土0.1～0.15 m、暗灰色土0.45～0.5 m以上
115	H30.1110	史跡大安寺旧境内	東九条町1867番地ほか	奈良市長	フェンス・盛土の除去	公有地	H30.10.20	GL–0.3 m　盛土0.3 m以上
116	H30.3230	西大寺旧境内	西大寺竜王町一丁目1607番8	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.22	GL–0.4 m掘削　黒灰色土（表土）0.1 m、黄灰色砂質土0.3 m以上
117	H30.3232	左京六条三坊十六坪	大安寺三丁目114–4の一部	（株）オージェイ	共同住宅新築	宅地	H30.10.23	GL–0.5 m　盛土0.5 m以上
118	H30.3125	元興寺旧境内、奈良町遺跡	鶴福院町5番1、6番1	個人	個人住宅新築	宅地	H30.10.30	GL–0.5 m　黒褐色土（表土）0.5 m以上
119	H30.3270	左京一条四坊六坪	法連町541番1、541番2、543番2、543番1の一部	（有）シャトレー井田	賃貸住宅新築	宅地	H30.11.1	GL–0.3～0.7 m　盛土0.3～0.7 m以上
120	H30.3135	左京四条五坊十六坪	三条町553、554–3、469–4	個人	集会所新築	宅地	H30.11.6	GL–0.3～0.5 m　黒褐色土（表土）0.3～0.5 m以上
121	H30.3209	左京九条四坊十四坪	東九条町163–1・163–4	関西電力（株）	電柱新設	道路	H30.11.8	№1：GL–1.2 m　盛土0.5 m、黒灰色土（耕作土）0.3m、灰色砂質土0.4 m以上 №2：盛土1.2 m以上、
122	H30.3204	左京四条四坊十五坪	三条本町1098の一部	ケイエル・リース＆エステート（株）	ホテル新築	宅地	H30.11.13	GL–2.1 m　暗灰色土（表土）0.25 m、コークス0.25 m、盛土1.3 m、黒灰色土（耕作土）0.15 m、黄灰色土（床土）0.15 m、灰色粗砂（地山）1.55 m以上
123	H30.3203	成務陵陪塚い号・ろ号隣接地	山陵町407～309	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	H30.11.15	GL–0.65 m　アスファルト0.05 m、砕石0.15 m、淡褐色土0.3～0.45 m以上
124	H30.3297	東二坊大路	西九条町四丁目4–4、2–11	関西電力（株）	電柱新設	宅地	H30.11.16	GL–1.45 m　黒褐色土（表土）0.05 m、盛土1.2 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m
125	H30.3330	左京五条六坊十坪	西木辻町283番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.11.19	GL–0.7～0.9 m、黒褐色土（表土）0.7～0.9 m
126	H30.3306	右京一条二坊三坪	二条町二丁目3–29～2–16	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	H30.11.20	GL–0.75～1.2 m　アスファルト0.05 m、盛土0.6 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰色土0.35 m
127	H30.3329	右京三条三坊十三坪	宝来二丁目18–5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.11.22	GL–0.1 m　盛土0.1 m以上
128	H30.3334	東四坊大路	大安寺町五丁目941番5	個人	個人住宅新築	宅地	H30.11.21	GL–0.45 m　黒褐色土（表土）0.45 m以上
129	H30.3262	左京四条六坊十六坪、奈良町遺跡	橋本町23番地1、24番地3	個人	店舗新築	宅地	H30.11.26	GL–0.4 m　黒褐色土（表土）0.4 m以上

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
130	H30.3211	左京二条三坊八坪	法華寺町 351–10	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	H30.11.26	GL–0.87 m　アスファルト 0.07 m、盛土 0.7 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m以上
131	H30.3083	左京五条四坊八坪	大森町（仮番号 5–3）	関西電力（株）	電柱新設	宅地	H30.11.28	GL–1.0 m　盛土 1.0 m以上
132	H30.3333	左京二条三坊八坪	西木辻町 139–10 ～ 139–17	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	H30.11.29	GL–0.95 m　盛土 0.25 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、褐灰色土 0.3 m、灰褐色土 0.2 m以上
133	H30.3114	左京一条四坊三坪	法蓮町 475–3、474–2	奈良市長	道路改良工事	道路	H30.11.29	GL–1.8 m　アスファルト 0.05m、暗灰色土 0.3 m、黄褐色土 0.9 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m、灰白色粗砂（地山）0.45 m
134	H30.3201	平城京南方遺跡	北之庄町 370–1、368–2	個人	個人住宅新築	宅地	H30.11.30	GL–0.2 m　黒褐色土（表土）0.2 m以上
135	H30.3349	左京六条三坊十坪	大安寺三丁目 80 番 1	個人、（株）ローソン	店舗新築	宅地	H30.12.3	GL–0.4 ～ 0.6 m　盛土 0.1 ～ 0.6 m以上
136	H30.3345	六条条間路	大安寺三丁目 80 番 1	（株）ローソン	サインポールの設置	宅地	H30.12.3	GL–1.2 m　盛土 0.9 m、黒灰色土（耕作土）0.3 m以上
137	H30.3282	右京二条二坊十四坪	西大寺国見町二丁目 296 番 55	個人	賃貸住宅新築	宅地	H30.12.3	GL–0.9 m　盛土 0.5 m、暗褐色土（表土）0.15 m、灰色土 0.1 m、灰褐色土 0.15 m以上
138	H30.3340	西隆寺跡	西大寺本町 221–3 の一部	（株）興商	事務所新築	宅地	H30.12.5	GL–0.4 ～ 0.8 m　盛土 0.5 m、黒灰色土（耕作土）0.3 m以上
139	H30.3319	六条大路	六条三丁目 1078 番	個人	個人住宅新築	宅地	H30.12.6	GL–0.2 ～ 0.3 m　盛土 0.2 ～ 0.3 m以上
140	H30.3358	左京九条二坊十坪	西九条町 2–1、3–1	ソフトバンク（株）	携帯電話基地局設置	駐車場	H30.12.6	GL–0.85 m　盛土 0.85 m以上
141	H30.3247	右京四条二坊七坪	尼辻中町 372 番地 10	個人	個人住宅新築	宅地	H30.12.12	GL–1.8 m　盛土 0.85 m以上、黒灰色土（耕作土）0.3 m、灰色土 0.3 m以上
142	H30.3387	左京二条四坊十四坪	疋田町一丁目 339–2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H30.12.14	GL–0.2 m　黒褐色土（表土）0.2 m、以下明黄灰色粘質土（地山）
143	H30.3227	左京二条四坊四・五坪	菅原町 367 番地	奈良市長	（仮称）伏見こども園園舎増築及び外工事	幼稚園敷地	H30.12.14	GL–0.6 ～ 0.9 m　盛土 0.6 ～ 0.9 m、以下明黄灰色粘質土（地山）
144	H30.3350	左京三条五坊四坪	大宮町一丁目 52 番 15 他 7 筆	南海電気鉄道（株）	店舗新築	宅地	H30.12.14	GL–1.3 m　盛土 1.3 m以上
145	H30.3283	南紀寺遺跡	南紀寺町 3–288–5（1 号棟）	一建設（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.12.17	GL–0.4 m　盛土 0.4 m以上
146	H30.3284	南紀寺遺跡	南紀寺町 3–288–5（2 号棟）	一建設（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.12.17	GL–0.3 m　盛土 0.3 m以上
147	H30.3254	遺物散布地	北永井町 91・北永井町 131	関西電力（株）	電柱新設	宅地・水田	H30.12.18	GL–2.6 ～ 2.7 m　№.1 黒灰色土（耕作土）0.3 m、淡褐色土 0.7 m以上 №.2 淡褐色土 1.0 m以上
148	H30.3290	菅原寺跡	菅原町 494–1・494–1 地先	関西電力（株）	本柱建替・支線撤去	宅地	H30.12.18	GL–1.0 m　盛土 0.4 m、黒灰色土（耕作土）0.3 m、灰色粘砂 0.3 m以上
149	H30.3335	南紀寺遺跡	白毫寺町 748 番 1	個人	個人住宅	宅地	H30.12.19	GL–0.1 ～ 0.25 m　盛土 0.1 ～ 0.25 m以上
150	H30.3303	東五坊大路	北市町 36 番 1（1 号地）	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.12.25	GL–0.2 ～ 0.3 m　黒褐色土（表土）0.2 ～ 0.25 m以上
151	H30.3304	東五坊大路	北市町 36 番 18（2 号地）	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.12.25	GL–0.2 ～ 0.3 m　黒褐色土（表土）0.2 ～ 0.25 m以上
152	H30.3305	東五坊大路	北市町 36 番 1（3 号地）	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	H30.12.25	GL–0.2 ～ 0.3 m　黒褐色土（表土）0.2 ～ 0.25 m以上
153	H30.3214	多聞城跡	法連町 1514 番 59	（株）住活	分譲住宅新築	宅地	H30.12.27	GL–0.3 ～ 0.4 m　盛土）0.3 ～ 0.4 m以上
154	H30.3248	左京二条五坊三坪	芝辻町三丁目 77 番 7、87 番 9	大都美装興業（株）	事務所新築	宅地	H31.1.8	GL–1.4 m　盛土 0.4 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、暗灰色砂質土 0.6 m、暗灰色砂（河川堆積層）0.2 m以上
155	H30.3225	東二坊大路	西九条町四丁目 2–1	大和ハウス工業（株）	道路拡幅	道路	H31.1.11	A 区 :GL–0.8 m　b アスファルト 0.2 m、砕石 0.4 m、盛土 0.2 m以上
156							H31.2.8	B 区 :GL–1.1 m　アスファルト 0.2 m、砕石 0.3 m、盛土 0.2 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰色土 0.2 m以上
157							H31.2.21	C 区 GL–1.25 m　盛土 1.05 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m以上
158	H30.3441	右京三条四坊九坪	菅原町 610 番 17	秋田工務店（株）	分譲住宅新築	宅地	H31.1.16	GL–0.2 m　黒灰色土（表土）0.2 m以上

工事立会

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
159	H30.1145	右京三条二坊十五坪	横領町 65–11 － 1	奈良市長	看板設置	公園	H31.1.17	GL–0.4 ～ 0.5 m　暗褐色土（盛土）0.4 ～ 0.5 m、以下淡褐色砂質土（埴輪砕片包含）
160	H30.3182	左京二条六坊十三坪	宿院町 9–1・10–2 番地、北魚屋西町 29–1 番地	関西電力（株）	電柱・支線建替	宅地	H31.1.17	GL–0.8 m　アスファルト 0.05 m、盛土 0.15m、暗褐色土 0.6 m以上
161	H30.3457	平城宮北方遺跡、松林苑跡	歌姫町・佐紀町地内	公営企業管理者	水道既設管の入替工事	道路	H31.1.18	№1：GL–1.6 m　アスファルト 0.1 m、盛土 0.4 m、黄褐色砂質土（地山）1.1 m以上
162							H31.1.22	№2：GL － 1.45 m　アスファルト 0.15 m、盛土 1.3 m以上　黄褐色砂質土（地山）1.1 m以上
163							H31.1.24	№3：GL–1.3 m　アスファルト 0.1 m、盛土 0.5 m以上　黄褐色粘質土（地山）0.7 m以上
164							H31.1.28	№4：GL–1.0 m　アスファルト 0.1 m、盛土 0.6 m 黄褐色砂質土（地山）0.3 m以上
165	H30.3312	左京二条三坊八坪	法華寺町 351–10	関西電力（株）	電柱・支線新設	宅地	H31.1.21	GL–0.9 m　盛土 0.8 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m以上
166	H30.3193	右京三条四坊十三・十四坪	宝来四丁目 684–1 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H31.1.21	GL–0.35 m　暗褐色土（表土）0.2 m、淡灰色砂質土 0.15 m以上
167	H30.3372	右京五条四坊一坪	平松三丁目 3–5	（株）飯田産業	分譲住宅新築	宅地	H31.1.22	GL–1.3 m　黒褐色土(表土)0.2 ～ 0.4 m、以下黄灰色粘土（地山）
168	H29.3486	左京九条三坊三・四・五・六坪	西九条町四丁目 1 番地の 11 他 1 筆	大和ハウス工業（株）	工場新築	工場用地	H31.1.23	№1：GL–3.3 m　盛土 1.25 m、黒灰色土（耕作土）0.4 m、灰色砂 0.6 m、暗灰色粘土 1.05 m以上
169							H31.1.30	№2：GL–2.79 m　盛土 0.85 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰褐色土 0.63 m、暗灰褐色土 0.3 m、暗灰色粘土 0.8 m以上
170							H31.2.5	№3：GL–0.36 m　盛土 1.5 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰色土 0.3 m、灰色砂 0.3 m、暗灰色粘土 1.3 m以上
171	H30.3252	遺物散布地	古市町 384–1 番地・961 番地	関西電力（株）	電柱新設	宅地	H31.1.24	GL–0.8 m　盛土 0.45 m、褐灰色土 0.1 m、灰色粗砂 0.25 m
172	H30.3354	左京一条四坊八坪	法連町 589 番 19	（株）ビルド	分譲住宅新築	宅地	H31.1.30	GL–0.4 m　黒灰色土（耕作土）0.2 m、黄灰色砂質土（地山）0.2 m以上
173	H30.3347	左京四条三坊十坪	三条栄町 187 番 1、189 番 1	個人	駐車場造成	水田	H31.1.30	GL–1.2 m　黒灰色土（耕作土）0.7 m、黄灰色粘土（地山）0.5 m以上
174	H30.3417	左京三条六坊九坪	内侍原町 8–1	三井生命保険（株）	事務所新築	宅地	H31.2.1	GL–2.0 m　盛土 1.8 m、黄褐色砂礫（地山）0.2 m以上
175	H30.3384	右京二条二坊十二坪	西大寺国見町二丁目 296 番 35	個人	個人住宅新築	宅地	H31.2.1	GL–0.9 m　盛土 0.9 m以上
176	H30.3309	右京六条四坊五坪	六条三丁目 1170 番 62	個人	個人住宅新築	宅地	H31.2.4	GL–0.4 m　盛土 0.4 m以上
177	H30.3246	新薬師寺旧境内	高畑町 181–4 番地	大阪ガス（株）	ガス管埋設	宅地	H31.2.5	GL–0.8 m　黒褐色土 0.8 m以上
178	H30.3308	古市遺跡	古市町 1512 番の一部（1 号地）	（株）アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H31.2.7	GL–0.3 ～ 0.4 m　黒褐色土（表土）0.3 ～ 0.4 m以上
179	H30.3409	古市遺跡	古市町 1512 番の一部（2 号地）	（株）アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H31.2.8	GL–0.3 ～ 0.4 m　黒褐色土（表土）0.3 ～ 0.4 m以上
180	H30.3410	古市遺跡	古市町 1512 番の一部（3 号地）	（株）アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	H31.2.8	GL–0.3 ～ 0.4 m　黒褐色土（表土）0.3 ～ 0.4 m以上
181	H30.3273	左京九条四坊十坪	東九条町 262 番 1	（株）興和不動産住宅	青空資材置場造成	宅地	H31.2.8	GL–0.5 m　黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰色土 0.1 m、淡黄灰色土 0.1 m、灰褐色土 0.1 m以上
182	H30.3378	奈良町遺跡	紀寺町 841–63、841–55 番地	関西電力（株）	電柱新設	宅地	H31.2.15	GL–0.7 m、盛土 0.7 m以上
183	H30.3308	西大寺旧境内	西大寺南町 2354 番 1–1	（同）玉造企画	店舗付共同住宅新築	宅地	H31.2.15	GL–2.3 m　盛土 2 m、茶褐色土 0.3 m以上
184	H30.3414	左京二条七坊二・七坪	西笹鉾町 42–3	（国）奈良教育大学	コンクリートブロック塀基礎撤去、フェンス新設	宅地	H31.2.18	GL–0.85 m　黒褐色土 0.85 m以上
185	H30.3492	西三坊坊間西小路	菅原町 248–3	個人	共同住宅新築	宅地	H31.2.18	GL–0.95 m　盛土 0.35 m、黒褐色土 0.25 m、灰色土 0.15 m、黄灰色粘土（地山）0.2 m以上

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
186	H30.3353	二条大路	鍋谷町 34–2、35、36、37–1	個人、(株) シュガーアソシエイツ	旅館新築	宅地	H31.2.19	GL–0.38 m　黒褐色土 0.38 m以上
187	H30.3407	右京六条三坊十五坪	六条町一丁目 880 番 14	個人	個人住宅新築	宅地	H31.2.21	GL–0.4 ～ 0.5 m　盛土 0.4 ～ 0.5 m以上
188	H30.3225	東二坊大路	西九条町四丁目 2–1	大和ハウス（株）	道路拡幅	道路	H31.2.21	GL–0.8 ～ 1.25 m　A 区：アスファルト 0.2 m、砕石 :0.4 m、盛土 0.2 m以上 B 区：アスファルト 0.2 m、砕石 0.3 m、盛土 0.2 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰色土 0.2 m以上 C 区：盛土 1.05 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m以上
189	H30.3119	奈良町遺跡	高畑町 181–4	関西電力（株）	電柱新設	宅地	H31.2.22	A 地点・B 地点：盛土 0.7 ～ 0.8 m以上
190	H30.3279	右京四条三坊十六坪	宝来二丁目 21–37	大阪ガス（株）	ガス管埋設	宅地	H31.2.25	GL–0.95 m　アスファルト 0.1 m、砕石 0.8 m、黄灰色粘土（地山）0.05 m以上
191	H30.3357	右京四条二坊七坪	尼辻中町 401 番 1 の一部、401 番 2	個人	共同住宅新築	宅地	H31.2.25	現況地盤直上で地山確認
192	H30.3423	菅原寺跡	菅原町 500 番 1、501 番 1	(株) セブンーイレブン・ジャパン	店舗新築	宅地	H31.2.26	GL–0.5 m　黒灰色土（耕作土）0.4 m、青灰色粘砂 0.1 m
193	H30.3416	二条条間路	北魚屋町 11	奈良教育大学	コンクリートブロック塀基礎撤去、フェンス新設	宅地	H31.2.26	GL–0.85　黒褐色土 0.85 m以上
194	H30.3480	右京七条三坊五坪	七条一丁目 467 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H31.2.27	GL–0.2 m　盛土 0.2 m以上
195	H30.3360	左京八条一坊七坪	法連町 382 番 1 の一部、383 番の一部	関西電力（株）	本柱・支線新設、小柱撤去	宅地	H31.2.27	GL–1.3 m　盛土 1.3 m以上
196	H30.3467	左京五条六坊二坪	西木辻町 5–2　済美小学校	奈良市長	キュービクル	学校用地	H31.3.1	GL–0.5 m　盛土 0.5 m以上
197		左京六条三坊十四坪	大安寺二丁目 15–1 大安寺小学校				H31.3.7	GL–0.6 m　盛土 0.6 m以上
198		古市城跡	古市町 268　東市小学校				H31.3.18	GL–0.4 ～ 0.6 m　盛土 0.4 m、黄褐色粘土（地山）0.2 m以上
199		多聞城跡	法連町 1416–1　若草中学校		ハンドホール		H31.3.19	GL–1.2 m　黒褐色土（表土）0.4 m、黄灰色砂質土（地山）0.8 m以上
200		左京五条一坊八坪	柏木町 13　都跡中学校				H31.3.23	GL–1.2 m　盛土 0.8 m、暗灰色土（耕作土）0.3 m、灰色土 0.1 m以上
201	H30.3396	右京五条二坊十三坪	五条町 541–1	関西電力（株）	本柱・支線新設	宅地	H31.3.5	GL–1.2 m　黒灰色土（耕作土）0.2 m、明黄灰色砂 1.0 m以上
202	H30.3429	左京二条四坊二坪	法連町 382 番 1 の一部、383 番の一部、484 番 1	(有) ウエムラ	事務所新築	宅地	H31.3.6	GL–1.1 m　盛土 1.0 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m以上
203	H30.3453	右京七条四坊十一坪	七条西町一丁目 627 番 32	(株) 飯田産業	分譲住宅新築	宅地	H31.3.6	GL–0.55 m　盛土 0.15 m、黒褐色土 0.3 m、黄灰色粘土（地山）0.1 m以上
204	H30.3412	奈良町遺跡	高畑町 1252–1 番地、高畑町 1252–3	奈良教育大学	コンクリートブロック塀撤去、フェンス新設	寄宿舎	H31.3.8	GL–1.8 m　黒灰色土（耕作土）0.2 m、明青灰色砂 1.0 m以上
205	H30.3455	右京四条二坊十坪	尼辻中町 409–3–1	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.8	GL–0.5 m　盛土 0.25 m、黒褐色土 0.15 m、黄灰色砂質土（地山）0.1 m以上
206	H30.3415	一条北大路	法連町 2058–2	奈良教育大学	コンクリートブロック塀撤去、フェンス新設	学校用地	H31.3.13	GL–0.4 ～ 0.5 m　淡褐色土（盛土）0.4 ～ 0.5 m以上
207	H30.3506	左京六条四坊一坪	大安寺四丁目 1036–2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.14	GL–0.6 m　黒褐色土（表土）0.35 m、淡褐色土 0.1 m、暗灰色土 0.15 m以上
208	H30.1157	史跡東大寺旧境内、名勝奈良公園	雑司町 406 番地 1、登大路町他	奈良市長	観光案内板の撤去と新設、観光名所解説板の新設	公園	H31.3.14	空海寺：GL–0.4 m、盛土 0.4 m
209							H31.3.14	みとい池：掘削 GL–0.4 m、暗灰褐色土（丸平瓦砕片包含）0.4 m
210							H31.3.20	戒壇院：掘削 GL–0.5 m、黒褐色土（表土）0.15 m、淡黄褐色土 0.3 m、淡黄褐色砂礫（地山）0.05 m以上
211							H31.3.20	知足院：未掘削の為土層未確認
212							H31.3.22	転害門：GL–0.5 ～ 0.6 m　黒褐色土 0.5 ～ 0.6 m
213	H30.1197	史跡東大寺旧境内	雑司町	奈良市長	空調設備の設置（キュービクル・フェンス・引込柱等の設置	学校用地	H31.3.19	GL–0.3 ～ 0.6 m　黒褐色土（表土）0.3 ～ 0.6 m以上

工事立会

	受理番号	遺跡名	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	立会調査	
							日付	結果
214	H30.3536	左京二条五坊十三坪	芝辻町 878–2、879–2	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.20	GL–0.5 m　黒褐色土（表土）0.5 m以上
215	H30.3413	新薬師寺旧境内	高畑町	奈良教育大学	コンクリートブロック塀撤去、フェンス新設	学校用地	H31.3.22	GL–0.5 ～ 0.7 m　黒褐色土 0.5 ～ 0.7 m以上
216	H30.3443	右京四条三坊十三坪	平松町一丁目 101 番 1	個人	共同住宅新築	水田	H31.3.25	GL–1.0 m　盛土 0.35 m、黒灰色土（耕作土）0.25 m、灰色土 0.25 m、灰色砂（河川堆積土）0.15 m
217	H30.3496	左京三条六坊四坪	今辻子町 4 番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.25	GL–0.4 ～ 0.5 m　黒褐色土 0.4 ～ 0.5 m
218	H30.3472	右京四条四坊十一坪	平松五丁目 683 番 9、684 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.25	GL–0.15 m　盛土 0.15 m
219	H30.3517	左京二条七坊三・四坪	芝辻町 24 番 1	奈良市長	観光名所解説看板設置	道路	H31.3.25	GL–0.2 m　コンクリート 0.12 m、盛土 0.08 m
220		左京二条七坊三・四坪	半田横町 30 番、北魚屋西町地内				H31.3.26	GL–0.5 m　アスファルト 0.1 m、盛土 0.4 m以上
221	H30.3437	右京五条三坊十坪	平松二丁目 7–23	個人	個人住宅新築	宅地	H31.3.27	GL–0.45 m　表土 0.2 m、黄白色粘土 0.25 m

なお、表中、遺跡名のうち、平城京跡については名称を省略し、○京○条○坊○坪等で示した。

第２章　　平成30（2018年）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進

平成 30（2018）年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

1．展　示

A　常設展示

対　　象：一般

会　　期：平成 30 年 4 月 2 日（月）～ 7 月 20 日（金）
平成 30 年 10 月 4 日（木）～ 12 月 28 日（月）
平成 31 年 1 月 4 日（金）～ 3 月 29 日（金）
（194 日間）

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣　　旨：埋蔵文化財の展示を通じて奈良市の歴史を紹介する。

内　　容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。

B　夏季特別展「奈良市の埴輪－土師氏の故郷でのハニワ生産－」の開催

対　　象：一般

会　　期：平成 30 月 8 月 1 日（水）～ 9 月 28 日（金）
（42 日間）

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室・同室前ロビー

趣　　旨：埴輪の作り方とその変化に着目した埴輪生産をテーマに、奈良市内で出土した埴輪を紹介する。

観覧者数：1005 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」8 月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用のチラシの作成・配布。
・展示パンフレットの作成。
・事前に報道機関向けに資料を配布し、内覧会を実施。

夏季特別展　「奈良市の埴輪」

C　巡回ミニ展示「奈良を掘る」の開催

対　　象：一般

趣　　旨：奈良新聞に平成 26 年 7 月から平成 28 年 1 月に連載した「奈良を掘る」の記事のひとつを取り上げ、出土遺物を加えて、夏季と冬季の 2 回に分けて、3 施設で巡回展示する。

①　夏季展示「第 5 回　陶棺に納められた副葬品」

会期・場所：平成 30 年 6 月 1 日（金）～ 6 月 29 日（金）（21 日間）・埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー
平成 30 年 7 月 4 日（水）～ 7 月 31 日（火）（23 日間）・奈良大学博物館
平成 30 年 8 月 3 日（金）～ 8 月 31 日（金）（21 日間）・奈良市役所ロビー展示ケース

内　　容：「奈良を掘る」第 2 話「横穴墓と陶棺」を取り上げ、赤田横穴墓群・赤田 1 号墳の陶棺から出土した副葬品を展示し、土師氏の墓制と葬送儀礼の関係について紹介。
・案内を「しみんだより」 6 月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

②　冬季展示「第 6 回　播磨の国から来た瓦」

会期・場所：平成 31 年 1 月 8 日（火）～ 2 月 8 日（金）（23 日間）・埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー
平成 31 年 2 月 14 日（木）～ 2 月 28 日（木）

巡回ミニ展示　奈良を掘る（第 6 回）

表 1　月別観覧者数

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
209	184	270	303	636	369	144	404	104	232	173	241

（11 日間）・奈良市役所ロビー展示ケース
平成 31 年 3 月 5 日（火）～ 4 月 25 日（木）
（44 日間）・奈良大学博物館

内　　容：「奈良を掘る」第 8 話「播磨国の調邸」を取り上げ、平城京左京五条四坊八・九坪で出土した播磨産の瓦類を展示し、瓦が出土したその背景として、この地に播磨国調邸が存在した可能性を遺物・パネルで展示・紹介。

そ の 他：・案内を「しみんだより」1 月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

D　春季発掘調査速報展「平城京跡（左京六条三坊十二坪・東堀河）、史跡大安寺旧境内（塔院・六条大路）、平城京跡（左京三条六坊十坪）・奈良町遺跡

会　　期：平成 31 年 3 月 1 日（水）～ 3 月 30 日（金）
（22 日間）

場　　所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

趣　　旨：発掘調査等の最新成果について、展示・紹介する。

内　　容：平成 30 年度に大安寺二丁目で実施した平城京跡と東堀河、平成 28 ～ 30 年度に東九条町で発掘体験と調査を実施した六条大路と大安寺塔院北門、平成 30 年度に西御門町で実施した平城京跡と奈良町遺跡の成果を遺物・パネルで展示・紹介。

観覧者数：241 名

そ の 他：・案内を「しみんだより」2 月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

E　年間観覧者数
3269 名（236 日間）。月平均 272 名。

2．施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

（1）対　　象：
河合町観光ボランティアガイドの会　65 名

期　　日：平成 30 年 11 月 11 日（日）

3．講演会・教室の開催

A　埋蔵文化財講演会

対　　象：一般

期　　日：平成 30 年 8 月 25 日（土）13:30 ～ 16:25

内　　容：夏季特別展の理解をより一層深めるため、特別展開催中に市民から聴講者を募集し、専門的な講演会を外部から講師を招いて開催した。

参加者数：80 名

会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室
・廣瀬 覚（奈良文化財研究所）
「土師氏の故郷での埴輪生産」
・村瀬 陸（埋蔵文化財調査センター）
「奈良市の埴輪」

対　　象：一般

そ の 他：・募集案内を「しみんだより」8 月号と奈良市役所のホームページに掲載。
・夏季特別展チラシに掲載。
・報道機関に募集要項をお知らせ。

埋蔵文化財講演会

B　埋蔵文化財発掘調査報告会

対　　象：一般

期　　日：平成 31 年 3 月 10 日（日）13:30 ～ 16:30

内　　容：春季速報展の理解をより一層深める為、速報展開催中に市民から聴講者を募集し、速報展展示遺跡の調査成果報告を調査担当職員がパワーポイントや資料を使用し報告。

・「平城京跡(左京六条三坊十二坪・東堀河)」

・「史跡大安寺旧境内（塔院・六条大路)」

・「平城京跡（左京三条六坊十坪）・奈良町遺跡」

会　　場：埋蔵文化財調査センター講座室

参加者数：44 名

そ の 他：募集案内を「しみんだより」2 月号と奈良市役所のホームページに掲載

・春季速報展チラシに掲載。

・報道機関に募集要項をお知らせ。

C　夏休み親子考古学体験

対　　象：小学 4 年生以上の児童とその保護者

期　　日：平成 30 年 8 月 4 日（土）

内　　容：夏休みを利用して児童とその保護者を対象に夏季特別展と関連させ、「ハニワをつくろう！」と題し、埴輪の製作法を学んだ後、粘土からミニサイズの円筒埴輪を製作した。

会　　場：埋蔵文化財調査センター洗浄室

参加者数：36 名

そ の 他：募集案内を「しみんだより」8 月号と市役所ホームページに掲載。案内チラシの配布・掲示

埋蔵文化財発掘調査報告会

夏休み親子考古学体験

4．市民考古学講座

対　　象：一般

期　　日：平成 30 年 7 月 4 日（水）～平成 31 年 3 月 6 日（水）
毎月 1 ～ 2 回、全 13 回（表 2）

内　　容：埋蔵文化財調査センター職員、市民考古学サポーターが講師を勤める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。

受講者数：25 名

そ の 他：案内を「しみんだより」6 月号と奈良市役所のホームページに掲載。

表 2

	日　時	講　座　名
第 1 回	7 月 4 日	開講式・オリエンテーション 考古学って何？・旧石器・縄文時代の基礎知識
第 2 回	7 月 18 日	弥生時代の基礎知識
第 3 回	8 月 8 日	古墳時代の基礎知識
第 4 回	9 月 5 日	発掘調査の流れ
第 5 回	9 月 19 日	発掘調査体験（実習）
第 6 回	10 月 3 日	奈良の都　平城京
第 7 回	10 月 24 日	平城宮跡をみる（実習）
第 8 回	11 月 7 日	古代の土器
第 9 回	11 月 28 日	古代の瓦
第 10 回	12 月 5 日	舞台裏（内業作業）をみる（実習）
第 11 回	1 月 9 日	拓本のとり方（実習）
第 12 回	2 月 13 日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第 13 回	3 月 6 日	土器類の分類整理（実習）・閉講式

5．市民考古サポーターの活動支援

A　市民考古サポーター事業

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対　　象：平成 29 年度の受講修了者

登録人員：16 名（登録総人数 106 名）

活動開始：平成 30 年 7 月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参画。

月平均活動のべ人数：182 名

6．体験学習・実習の受け入れ

A　市立一条高校体験学習

対　　象：一条高校人文科学科 1 年生　40 名

期　　日：平成 30 年 11 月 13 日（火）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

B　中学校職場体験学習

対　　象：登美ヶ丘中学校 2 年生　男子 1 名

期　　日：平成 30 年 11 月 14 日（水）～ 16 日（金）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：遺物洗浄・注記・拓本

C　中学校校外研修

対　　象：開成中学校 2 年生　44 名

期　　日：平成 30 年 6 月 7 日（木）

場　　所：埋蔵文化財調査センター

内　　容：展示解説及び出土遺物を用いた体験実習

D　体験学習事業

①　発掘調査体験学習（史跡大安寺旧境内）

対　　象：一般

期　　日：平成 30 年 9 月 13（木）～ 15 日（土）・18 日（火）・20（木）～ 22 日（土）・25（火）～ 29 日（土）・10 月 1 日（月）～ 12 日（金）の 24 日間

事前説明会実施日：平成 30 年 8 月 28 日（火）・29 日（水）

場　　所：史跡大安寺旧境内発掘調査現場

内　　容：事前説明会にて発掘調査方法や安全の為の講習を受講後に、体験を実施。調査を始める前には必ず検出遺構の説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・検出遺構の説明を行った。また、体験期間中は調査現場を常時公開し、見学者に調査についての説明を行った。

そ の 他：・募集案内を「しみんだより」8 月号と奈良市役所のホームページに掲載

・宣伝用チラシに掲載。

・報道機関に募集要項をお知らせ

参加者数：のべ 363 名

②　発掘調査体験学習（富雄丸山古墳）

対　　象：一般

期　　日：平成 30 年 12 月 16(木)～ 18 日(火)・20（木）～ 24 日（木）、平成 31 年 1 月 7 日（月）・8 日（火）・10（木）～ 15 日（火）の 16 日間

事前説明会実施日：平成 30 年 11 月 22 日(木)・26 日(月)

場　　所：富雄丸山古墳発掘調査現場

内　　容：事前説明会にて発掘調査方法や安全の為の講習を

中学校職場体験学習

発掘調査体験学習（史跡大安寺旧境内）

受講後に、体験を実施。調査を始める前には必ず現況説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・遺構の説明を行った。

そ の 他：・募集案内を「しみんだより」11 月号と奈良市役所のホームページに掲載
・宣伝用チラシに掲載。
・報道機関に募集要項をお知らせ

参加者数：のべ 315 名

③　大安寺遺跡探訪ツアー

対　　象：一般

期　　日：平成 30 年 9 月 13（水）･14（木）･18（月）･20（木）･21（金）･25（月）～ 28 日（金）、11 月 1（月）～ 4 日（金）の 13 日間

内　　容：発掘現場と整備された大安寺の遺構、大安寺古墳群の見学コースを設定し、大安寺とその周辺遺跡を案内。

コ ー ス：史跡大安寺旧境内塔院―大安寺発掘現場―南大門―経楼―僧房―杉山古墳－墓山古墳－野神古墳

そ の 他：・募集案内を「しみんだより」9 月号と奈良市役所のホームページに掲載
・宣伝用チラシに掲載。
・報道機関に募集要項をお知らせ。

参加者数：のべ 105 名

7．文化財学習キットの貸出し

市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦等の実物資料の貸し出しキットで解説書付き。小・中学校の社会科学習・郷土学習の補助教材に利用でき、埋蔵文化財調査センターを見学する小・中学生にも「触れることのできる文化財」としても使用する。

対　　象：奈良市内の小・中学校

内　　容：①～⑥の 6 キット
①縄文土器と弥生土器
②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁
③古墳時代の埴輪と須恵器
④奈良時代の土器（A・B 2 セットあり）
⑤奈良時代の瓦－軒丸瓦・軒平瓦
⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

貸出・利用

（1）興東小学校社会科の歴史学習
期日等：平成 30 年 4 月 16 日～ 23 日
キット：①・②・⑥

（2）西大寺北小学校卒業制作における資料
期日等：平成 30 年 7 月 6 日～ 13 日
キット：①・⑤

（3）春日中学校社会科の歴史学習
期日等：平成 30 年 7 月 6 日～ 13 日
キット：①・②

8．職員の派遣（講師など）

A　田原本町教育委員会「歴史文化教室」講義

期　　日：平成 30 年 6 月 8 日（金）

場　　所：田原本町青垣生涯学習センター視聴覚室

派遣人数：1 名

内　　容：南アジアの巨石文化について

B　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主催「大和を掘る」土曜講座

期　　日：平成 30 年 7 月 21 日（土）･9 月 1 日（土）

場　　所：奈良県立橿原考古学研究所　講堂

派遣人数：2 名

内　　容：東九条町の弥生時代遺跡と銅箸
平城京左京二条四坊十坪の調査

C　市立一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期　　日：平成 30 年 11 月 13 日（火）・16 日（金）

場　　所：一条高校

派遣人数：1 名

内　　容：遺物の整理・発掘調査

D　橿原市教育委員会「橿原市まほろば大学クラブ」講義

期　　日：平成 30 年 12 月 20 日（木）

場　　所：橿原市まほろば大学校

派遣人数：1 名

内　　容：奈良を掘る

9．出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している金属製遺物の化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を行った。

（保存処理資料）平城京跡出土鉄斧 7 点・絞具 1 点・鉄鏃 1 点・不明鉄製品 2 点、奈良町遺跡出土目貫 5 点

10. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A　遺物などの貸出　9件（表３）
B　写真などの貸出・提供・掲載許可　30 件（表４）
C　学術研究等に関わる資料閲覧　８件（表５）

表３

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 30.4.1 ～ H 31.3.31	平城京跡出土木簡（模造品）10 点（礫進上木簡１点、月借銭進上木簡１点、豹皮分銭付札１点、渋皮御田侍奴画指木簡１点、北宮封緘木簡１点、衛府進塩付札１点、禄布付札１点、槐花進上木簡１点、造酒司符１点、瓦進上木簡１点）、分銅（模造品）１点（平城京跡第 167 次調査出土）
2	国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所	平城宮跡展示館（仮称）に展示	H 30.4.1 ～ H 31.3.31	元興寺旧境内第７次調査出土軒丸瓦１点、軒平瓦１点
3	大阪府立近つ飛鳥博物館	夏季企画展に展示	H 30.6.26 ～ H 30.9.21	南紀寺遺跡第２次調査出土土師器３点・須恵器１点・筒状土製品２点、南紀寺遺跡第４次調査出土土師器７点・筒状土製品６点
4	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	速報展『大和を掘る 36』で展示	H 30.6.26 ～ H 30.9.14	平城京跡第 709 次調査出土弥生土器 14 点・磨製石斧１点・石包丁２点・銅箸１点、平城京跡第 713 次調査出土円筒埴輪４点、平城京跡第 708 次調査出土奈良三彩小壺１点・帯金具２点・銭３点・海老錠１点・鳥形硯１点・墨書土器２点・須恵器４点・土師器 14 点
5	古代オリエント博物館および岡山市立オリエント美術館	特別展『シルクロード新世紀―ヒトが動き、モノが動く―』に展示	H 30.7.2 ～ H 30.12.28	西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器１点、平城京跡第 484 次調査（左京八条二坊五坪）出土ココヤシの実１点
6	橿原市教育委員会	歴史に憩う橿原市博物館の平成 30 年度夏季企画展『シアワセのカタチ from Asuka・fujiwara・Heijo』に展示	H 30.7.3 ～ H 29.9.26	平城京跡出土賽子１点・唐三彩三足炉１点・唐三彩輪花杯１点・唐三彩杯２点・胞衣壺蓋１点・胞衣壺身１点・人形封入壺１点・人形（人形封入壺内）１点・人形（人形封入壺内、釘あり）１点・須恵器壺１点・二彩小型火舎１点・唐白磁円面硯１点、平城京東市跡推定地出土須恵器　墨書土器「鯛」１点・墨書土器「鯛」１点・奈良三彩枕１点、史跡大安寺旧境内出土独楽１点・唐三彩枕４点、西大寺旧境内出土籤引き木簡４点
7	公益財団法人元興寺文化財研究所	平成 30 年度秋季特別展『大元興寺展』に展示	H 30.8.1 ～ H 30.11.30	元興寺旧境内第７次調査出土飛鳥寺Ｉ型式軒丸瓦１点・軒丸瓦 6201 Ａａ１点・軒丸瓦 6201 Ａｂ１点・軒平瓦 6661 Ｄ２点・平安以降軒平瓦２点、、元興寺旧境内第 38 次調査出土製墨土器１点・和泉型瓦器椀３点、元興寺旧境内第 48 次調査出土蛭藻金１点、、元興寺旧境内第 62 次調査出土ゴンパイ８点
8	葛城市歴史博物館	第 19 回特別展『古代葛城の武人―葛城市兵家古墳群と大和の甲冑―』に展示	H 30.9.7 ～ H 30.12.7	市指定文化財ベンショ塚古墳出土三角板革綴短甲（展示台付）１点・小札鋲留眉庇付冑１点・馬具鞍金具前輪（展示台付）１点・槍先１点・柳葉式鉄鏃４点・長頸鏃４点・鑿２点・鉄斧１点・ミニチュア鉄鎌１点・砥石１点・石製勾玉７点・有孔円盤４点・石製小玉 20 点・ガラス小玉 20 点・管玉３点
9	山梨県立博物館	平成 30 年度秋季企画展『文字が語る古代甲斐国』に展示	H 30.9.25 ～ H 30.12.25	西大寺旧境内第 25 次調査出土 042 号木簡１点、平城京左京二条四坊十一坪出土甲斐型杯５点

表 4

	申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
1	H 30.4.10	関西大学職員	漢城百済博物館編『百済王城　風納土城の現在と未来』に掲載	奈良市内出土石製品写真 1 枚	貸出・掲載許可
2	H 30.4.25	奈良教育大学職員	入学希望者を対象とした入試過去問題に掲載	平城京跡第 622- D次調査出土奈良三彩小壺写真 1 枚	貸出・掲載許可
3	H 30.4.27	フリーライター	東京新聞及び中日新聞水曜日夕刊コラム『かわいい古代』に掲載	赤田 9 号墓出土陶棺・円筒棺写真 1 枚	貸出・掲載許可
4	H 30.5.11	橿原市教育委員会	歴史に憩う橿原市博物館の平成 30 年度夏季企画展『シアワセのカタチ from　Asuka・Fujiwara・Heijo』における展示及びポスター・チラシ・パンフレットに掲載	「平城京各地出土唐三彩」写真 1 枚、「平城京各地出土独楽・賽子・碁石」写真 1 枚、「左京五条四坊十坪出土地鎮遺構」写真 1 枚、「右京二条三坊出土人形とその封入壺」写真 1 枚、「平城京東市跡推定地出土墨書土器「鯛」」写真 1 枚、「史跡大安寺旧境内出土唐三彩陶枕」写真 1 枚	貸出・掲載許可
5	H 30.6.1	大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館平成 30 年度夏季企画展の図録・展示パネル、ならびにポスター・チラシ・ホームページ等の広報資料に掲載	「南紀寺遺跡第 4 次調査井泉 SX01」写真 1 枚、「南紀寺遺跡第 4 次調査　所濠 SD07・SD06」写真 1 枚	貸出・掲載許可
6	H 30.6.7	古代オリエント博物館・岡山市立オリエント美術館	特別展『シルクロード新世紀―ヒトが動き、モノが動く―』でパネル展示ならびに展示図録、広報物に掲載	「西大寺旧境内第 25 次調査出土イスラム陶器」写真 1 枚、「平城京跡第 484 次調査（左京八条二坊五坪）出土　ココヤシの実」写真 1 枚	貸出・掲載許可
7	H 30.6.22	（公財）古都飛鳥保存財団高松塚壁画館	平成 30 年度秋季企画展『古代寺院出土の壁画』展でパネル展示	「史跡大安寺旧境内第 133 次調査出土壁画片」写真 7 枚	貸出・掲載許可
8	H 30.7.5	山梨県立博物館	平成 30 年度秋期企画展『文字が語る　古代甲斐国』の展示図録、展示会ホームページ、展示解説パネル、ワークシートに掲載	「西大寺旧境内第 25 次調査出土　042 号木簡」写真 5 枚、「平城京左京二条四坊十一坪出土　甲斐型杯」写真 1 枚	貸出・掲載許可
9	H 30.7.10	公益財団法人元興寺文化財研究所	平成 30 年度秋季特別展『大元興寺展』でパネル展示、図録・パンフレット等に掲載	「元興寺旧境内第 48 次調査埋甕遺構」写真 1 枚、「元興寺旧境内第 51 次古墳～奈良時代の遺構」写真 1 枚、「元興寺旧境内第 48 次出土蛭藻金」写真 1 枚	貸出・掲載許可
10	H 30.8.2	公益財団法人元興寺文化財研究所	平成 30 年度秋季特別展『大元興寺展』図録に掲載	元興寺旧境内第 7 次調査出土軒丸瓦 3 点・軒平瓦 4 点写真、元興寺旧境内第 48 次調査出土蛭藻金 1 点写真、元興寺旧境内第 38 次調査出土製墨土器 1 点・和泉型瓦器 3 点椀写真、元興寺旧境内第 62 次調査出土ゴンパイ 8 点写真	掲載許可
11	H 30.8.7	葛城市歴史博物館	第 19 回特別展『古代葛城の武人』でパネル展示、図録・ポスター・チラシ・ホームページに掲載	市指定文化財ベンショ塚古墳出土三角板革綴短甲と小札鋲留眉庇付冑写真 1 枚・小札鋲留眉庇付冑写真 1 枚・馬具鞍金具前輪写真 1 枚・馬具鞍金具後輪写真 1 枚	貸出・掲載許可
12	H 30.8.9	株式会社世界思想社教学社	教学社編 2019 年版～ 2020 年版『大学入試シリーズ　奈良教育大学』に掲載	平城京跡第 622- D次調査出土奈良三彩小壺写真 1 枚	掲載許可

	申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
13	H 30.8.31	朝日新聞出版書籍編集部	今尾文昭『天皇陵を歩く』に掲載	「念仏寺山古墳航空写真」写真１枚	貸出・掲載許可
14	H 30.9.7	（株）ロングテイル	テレビ番組で画像を放映	「大安寺西塔出土風鐸」写真１枚	貸出・掲載許可
15	H 30.9.7	個人	大安寺の遺跡紹介パネルを作成し、参拝者に大安寺の遺跡・歴史を紹介	「大安寺西塔基壇全景」、「大安寺西塔出土鬼瓦」、「大安寺杉山古墳出土家形埴輪」、「大安寺西塔出土風鐸」、「大安寺東塔基壇」、「大安寺僧房」、「大安寺杉山古墳と瓦窯」、「整備後の杉山古墳」、「南大門北階段」、「平城京・大安寺出土奈良三彩陶器」写真、「大安寺第 110 次西塔遺構平面図」図各１枚	貸出・掲載許可
16	H 30.10.24	個人	『工楽善通先生傘寿記念論文集』に掲載	「西大寺旧境内第 25 次調査出土　「東□〔朝カ〕／皇浦」銘墨書土器」写真１枚	貸出・掲載許可
17	H 30.10.26	出雲市長	出雲弥生の森博物館 2018 ギャラリー展Ⅳでパネル展示およびパンフレット等に掲載	「平城京跡出土壺形分銅」、「平城京跡出土笠形分銅」、「平城京跡出土釣鐘形分銅」、「「分銅形」土製品」の写真各１枚	貸出・掲載許可
18	H 30.10.31	国立歴史民俗資料館	雑誌『延喜式研究』終刊に伴うネット公開	「平城京跡出土土師器「杯」」銘墨書土器」、「平城京跡出土須恵器椀「三合一夕」」銘墨書土器」の図	貸出・掲載許可
19	H 30.11.15	戎光祥出版（株）	金松誠『筒井順慶』に掲載	「多聞城跡出土軒丸瓦・軒平瓦」写真	貸出・掲載許可
20	H 30.11.29	（株）雄山閣	（株）雄山閣発行『奈良のミュージアム（仮題）』に掲載	「奈良市埋蔵文化財調査センターの外観」、「展示室」、「錘とものさし」、「赤田横穴墓陶棺（７号墓）」の写真	貸出・掲載許可
21	H 30.12.11	特定非営利活動法人奈良 21 世紀フォーラム	冊子『奈良の風土産業の継承－企業人列伝』に掲載	「奈良町遺跡出土製墨土器」写真	掲載許可
22	H 31.1.22	（株）奈良新聞社	奈良新聞「歴史万華鏡」面に掲載	「播磨産軒瓦の組み合わせ」、「播磨産鬼瓦」、「平城京左京五条四坊八・九坪出土瓦類」、「播磨産とみられる丸瓦･平瓦･熨斗瓦」写真各１枚	貸出・掲載許可
23	H 31.1.30	地域情報ネットワーク株式会社	『月刊大和路ならら３月号』に掲載	「富雄丸山古墳墳頂部で出土した遺物」、「富雄丸山古墳造り出し斜面と円筒埴輪」、「富雄丸山古墳墳丘裾」写真各１枚	貸出・掲載許可
24	H 31.1.30	地域情報ネットワーク株式会社	『月刊大和路ならら３月号』に掲載	「播磨産軒瓦の組み合わせ」、「播磨産鬼瓦」写真各１枚	貸出・掲載許可
25	H 31.2.4	個人	『月刊考古学ジャーナル』2019 年６月号に掲載	『多聞廃城発掘調査概要報告』17 頁図９の「懸瓦組み合わせ模式図」１枚	掲載許可
26	H 31.2.27	多聞城ファン倶楽部	案内冊子『幻の城　多聞城』に掲載	「多聞城跡出土軒瓦の組み合わせ」写真１枚	掲載許可
27	H 31.3.1	関西大学文学部考古学研究室	『天皇の寺　大官大寺』副読本に掲載	「大安寺創建軒瓦の組み合わせ」、「大安寺西塔出土大型風鐸」写真各１枚	貸出・掲載許可
28	H 31.3.5	公益財団法人元興寺文化財研究所	『研究報告』（公益財団法人元興寺文化財研究所発行）に掲載	「元興寺旧境内第７次調査出土軒瓦」写真　１点	掲載許可
29	H 31.3.6	奈良県立橿原考古学研究所	『シルクロード東西文化交流研究事業報告書』に掲載	「西大寺旧境内第 25 次調査出土墨書土器「皇甫東朝」」写真１枚	掲載許可
30	H 31.3.12	（株）奈良新聞社	奈良新聞に掲載	「平城京跡第 723 次調査　東堀河と SX 01」写真１枚	貸出・掲載許可

表 5

	申請日	申請者	目的	内容	その他
1	H 30.4.24	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	長谷遺跡出土土器一式、菅原東遺跡出土土器 1 点、古市桜谷遺跡出土土器 1 点の観察・写真撮影	貸出・掲載許可
2	H 30.5.18	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	長谷遺跡出土土器一式の観察・実測・写真撮影	貸出・掲載許可
3	H 30.6.25	元高崎市教育委員会職員	個人研究	水間遺跡 1 号墳出土小鉄刀 1 点、水間遺跡 2 号墳出土鉄斧・鉄鑿・鉄錐・鉄鉋・鉄刀子・不明鉄器各 1 点・鉄鏃 4 点、水間遺跡第 39 発掘区流路内出土滑石製品・骨製品一式の観察・実測・写真撮影	貸出・掲載許可
4	H 30.10.3・5	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	東市跡推定地第 4 次調査東堀河下層出土須恵器甕破片 3 箱分、同中・上層出土須恵器甕破片 1 箱分、同層位不明須恵器大甕、平城京跡第 134 次調査東堀河出土須恵器甕破片 2 箱分の観察・実測・拓本・写真撮影	貸出・掲載許可
5	H 30.10.24・29・31	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	東市跡推定地第 4 次調査東堀河下層出土須恵器甕破片 3 箱分、同中・上層出土須恵器甕破片 1 箱分、同層位不明須恵器大甕、平城京跡第 134 次調査東堀河出土須恵器甕破片 2 箱分の観察・実測・拓本・写真撮影、東市跡推定地第 12 次調査出土甑の観察・実測・写真撮影	貸出・掲載許可
6	H 30.1.21	香芝市教育委員会職員	個人研究	平城京跡第 274 次調査出土軒平瓦 6717 B の観察・写真撮影	貸出・掲載許可
7	H 30.2.6	奈良県立橿原考古学研究所員	個人研究	長谷遺跡出土土器一式の観察・実測・写真撮影	貸出・掲載許可
8	H 30.2.8	上牧町教育委員会職員	個人研究	石ガマチ 2 号墳出土埴輪の観察・実測	貸出・掲載許可

第３章　　資　料　報　告

１．平城京出土の刺突痕がある土製品／原田憲二郎

２．菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器／村瀬　陸

平城京出土の刺突痕がある土製品

原田憲二郎

Ⅰ．はじめに

本稿で主題として取り上げる土製品は、全体形がわかるものは出土していないが、端面があることから、瓦のような形状とみられ、その凸面に特徴的な刺突痕を残す平城京出土の用途不明品である。

これまで用途不明土製品等として、奈良文化財研究所により、10点あまりの報告例がある[1]が、今回の資料調査により、奈良市教育委員会保管品にも同様の資料が21点あることを確認した[2]。

そこで本稿では大半が未報告であった、これら奈良市教育委員会保管の土製品を紹介し、刺突痕から分類を行い、その用途について考えてみたい。

Ⅱ．平城京出土の刺突痕がある土製品の分類

奈良市教育委員会保管品21点は図１・２に図示し、このうち、主なものは写真１に掲げた。

ここではこれら21点の紹介をかねて分類を示す。

まず、形状から以下の２つに分類することができる。

丸：粘土円筒を半截して製作した丸瓦状のもの。

平：凸面が平坦な平瓦状のもの。

ただし、平瓦状のもの１点（21）を除く他20点は全て丸瓦状のものとみられる。また厚さは0.8㎝程度のもの（３）から約４㎝のもの（17）と差がある。

凹面に残る成形痕等、製作技法の特徴からは、以下の２つに分類できる。

Ⅰ：凹面はヨコナデ調整するが、粘土紐を積み上げ成形した際その接合線を消すためであろう、その箇所には強めのナデを加える。このため素材は粘土紐と判断できる。灰色を呈し、胎土が精良な須恵質。

Ⅱ：凹面に布目痕が残る。Ⅰ類にみられる粘土紐積み上げ成形技法と判断できる痕跡はなく、明瞭な糸切痕は確認できないが、素材は粘土板とみられる。表面黒色、内部淡褐色を呈し、胎土が粗い瓦質。

内訳はⅠ類が14点（１～14）、Ⅱ類は７点（15～21）である。

凸面の刺突痕は、大きく以下の２つに大別できる。

Ａ：刺突具を斜め方向から突き刺した後、上に持ち上げ、あるいは左右に広げて、ひだを付けるもの。

Ｂ：刺突具を垂直方向に突き刺したもの。ひだは付かない。

内訳はＡ類が19点（１～13・15～19・21）、Ｂ類が２点（14・20）である。

大半が単純な刺突法といえるＢ類ではなく、一手間かけたＡ類であることがわかり、ひだがこの土製品の用途を解明する手掛かりの可能性が考えられる。

さらに、刺突痕から想定される刺突具の形状から、刺突痕は以下の６種類に分類できる

ａ：断面形円形の丸箸のような、先端が平坦な円棒状工具による刺突痕（写真２）。

ｂ：ａで示した刺突具の先端を縦割りし、先端が半円形を呈する工具による刺突痕。先端の半円形側を下向きに刺突したｂ１類（写真３）と、上向きに刺突したｂ２類（写真４）に細分できる。

ｃ：内部が空洞の竹管状のものを縦割りした工具を用い、半円形側を下向きに刺突した刺突痕（写真５）。この刺突痕には、半円形の内側に小さな突起が確認でき、ｂと区別することができる。

ｄ：彫刻刀で「切り出し刀」または「印刀」と呼称される、刃先が斜めになった工具による刺突痕（写真６）。

ｅ：彫刻刀では「角ニードル」と呼称される、断面方形で、先端が尖った工具による刺突痕（写真７）。

ｆ：彫刻刀では「平刀」と呼称される、柄と直角の形に刃がついた工具による刺突痕（写真９）。

なお、これらで用いられた刺突具は、ひだの状況などから、彫刻刀のような鋭い刃先の金属製ではなく、木もしくは竹製の鈍い刃先であったと判断できる。すなわち彫刻刀のような専門工具を使い得る彫刻師による施紋ではないと考えてよい[3]。

以上の特徴からみた分類は全ての組合せが存在するのではなく、丸ⅠＡａ類（１）、丸ⅠＡｂ１類（２～７）、丸ⅠＡｂ２類（８・９）、丸ⅠＡｃ類（11・12）、丸ⅠＡｄ類（13）、丸ⅠＢｂ類（14）、丸ⅡＡｂ１類（15・16）、丸ⅡＡｃ類（17）、丸ⅡＡｄ類（18）、丸ⅡＡｅ類（19）、丸ⅡＢｆ類（20）、平ⅡＡｂ１（21）の12種類にまとめることができる。

Ⅲ．平城京出土の刺突痕がある土製品の用途

ここでは、土製品の用途について示してみたいが、まず手掛りになる出土遺構について紹介する。

奈良市保管品については表１のとおりである。21例の

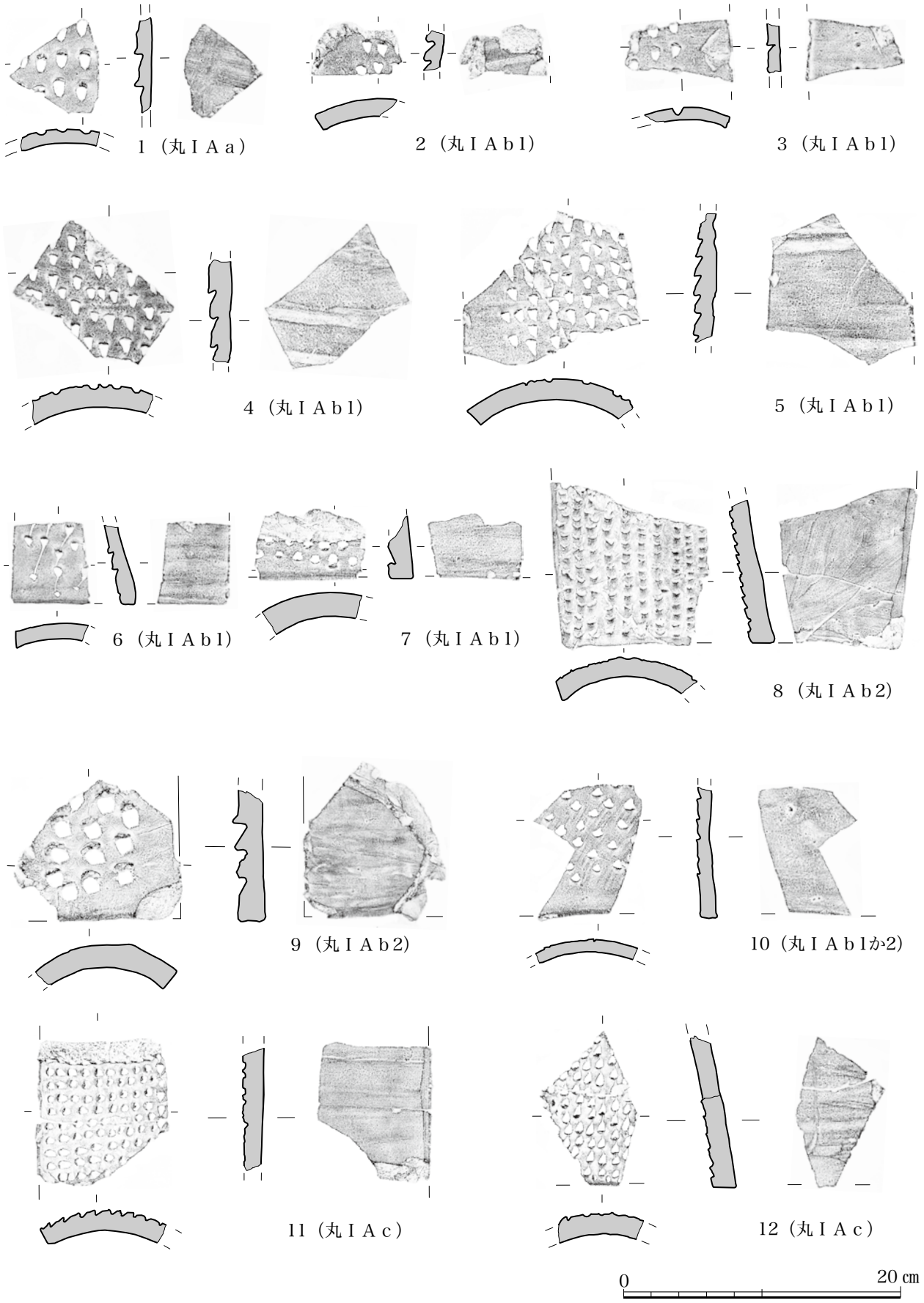


図１　刺突痕がある土製品１（1/4）

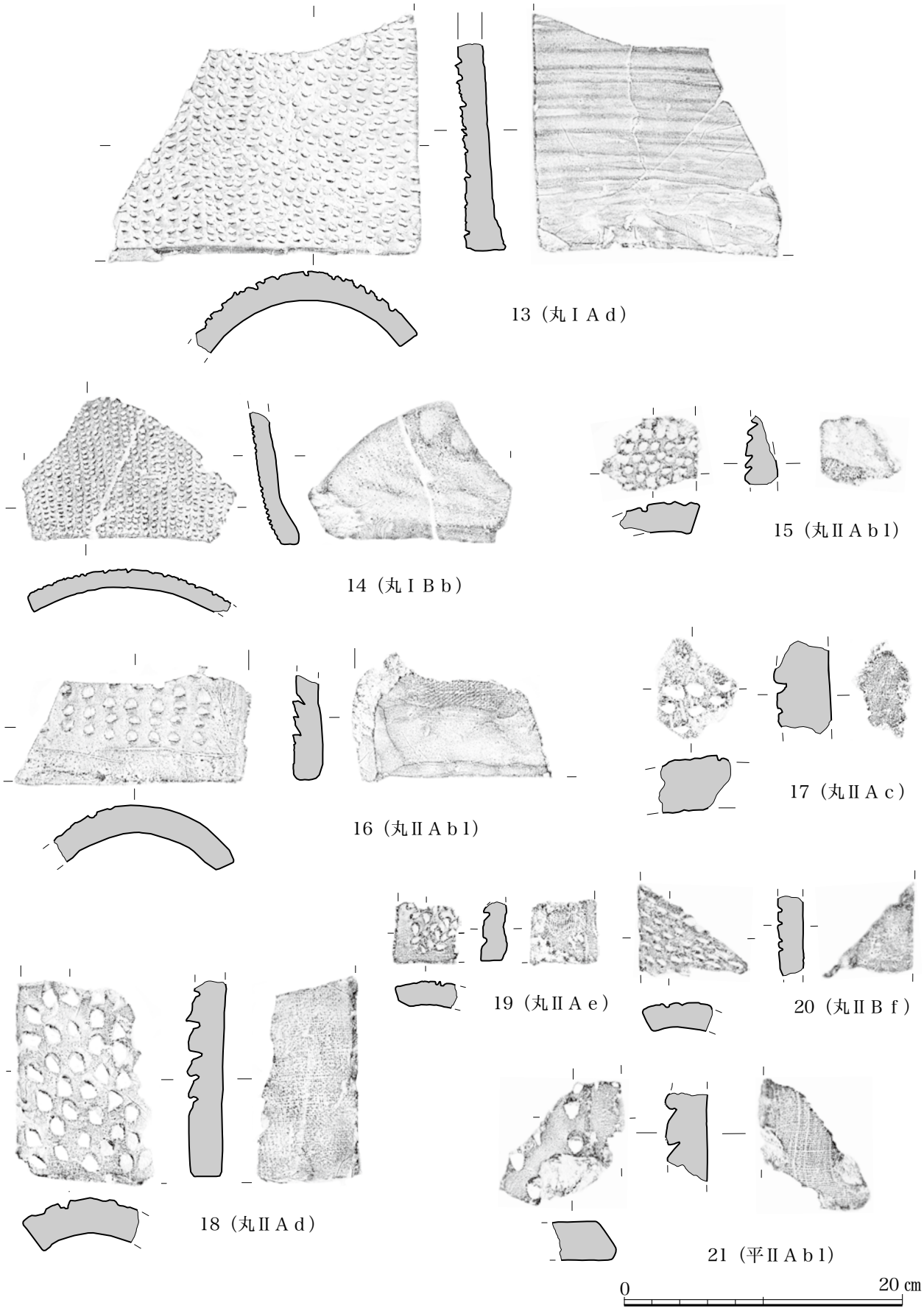


図２　刺突痕がある土製品２（1/4）

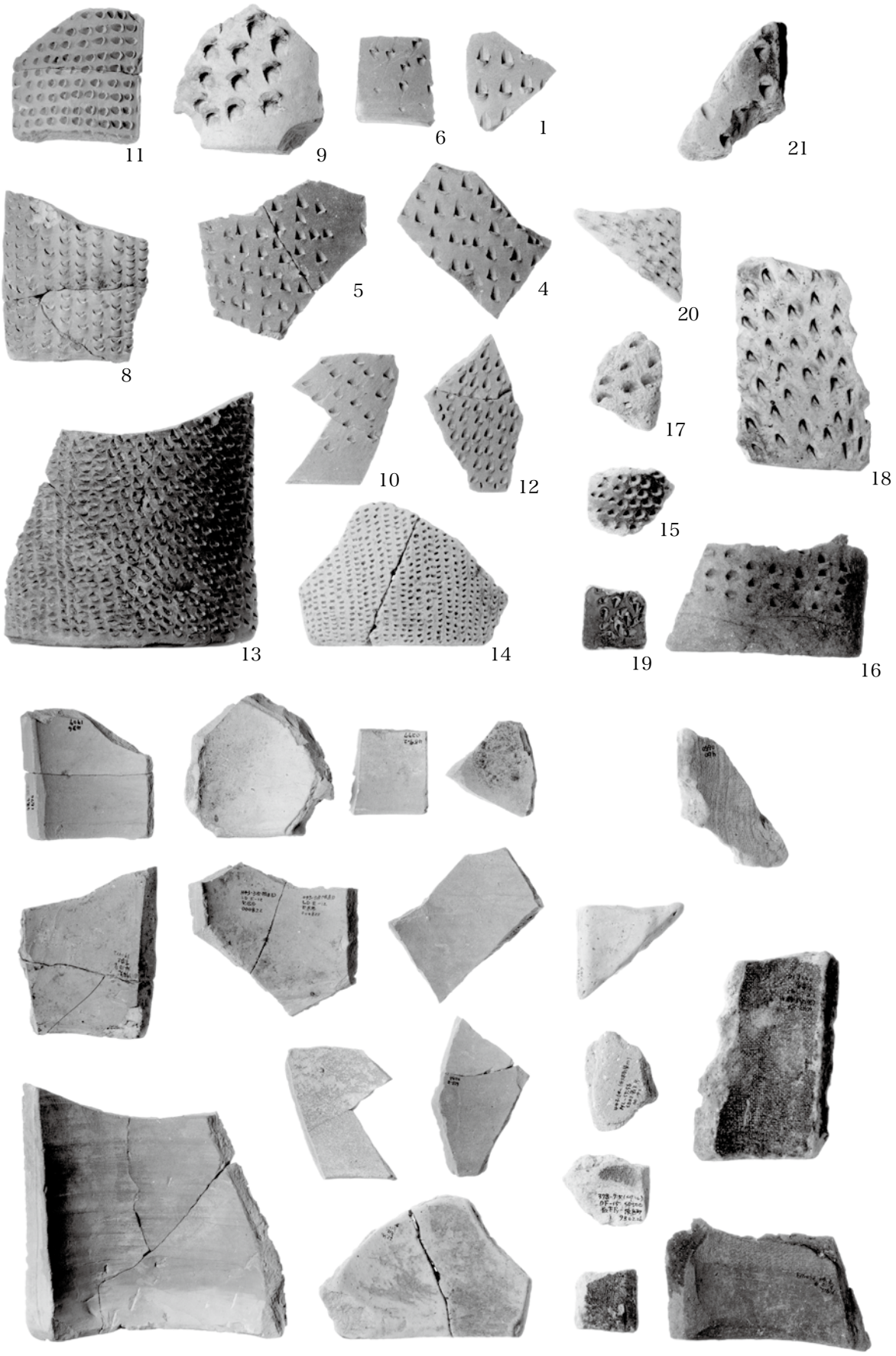


写真１　刺突痕がある土製品（上：外面、下：内面、番号は図１・２に対応）

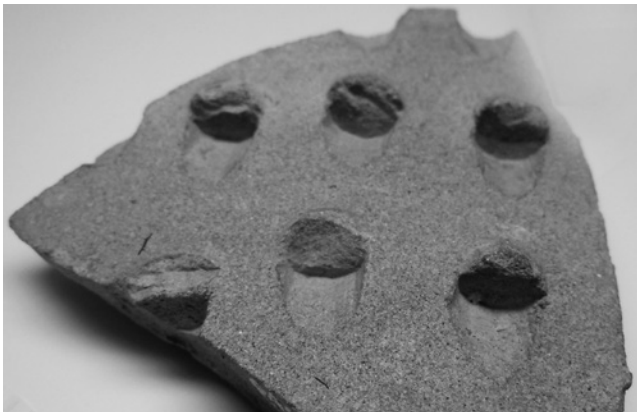


写真２　刺突痕 Aa

写真３　刺突痕 Ab1

写真４　刺突痕 Ab2

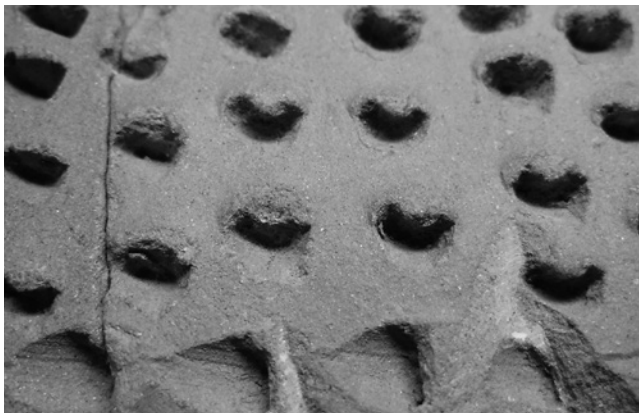


写真５　刺突痕 Ac

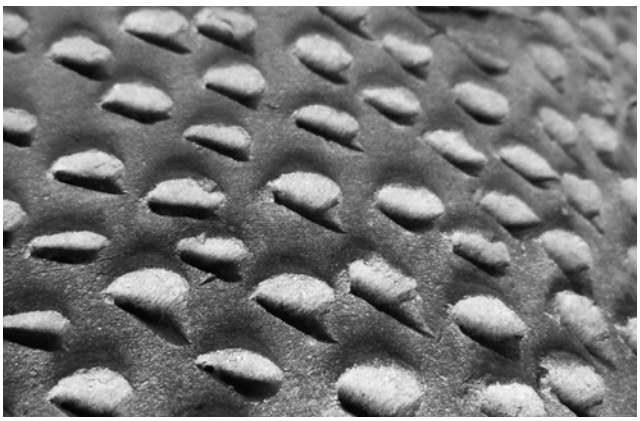


写真６　刺突痕 Ad

写真７　刺突痕 Ae

写真８　刺突痕 Bb

写真９　刺突痕 Bf

出土遺構をみると、宅地内が12例、条坊遺構が9例と大きく2つに大別できる。しかし宅地内出土の12例の内、8は二条条間北小路南側溝、11は東四坊大路西側溝、21は西二坊大路東側溝にそれぞれ3m程度と、条坊遺構に近接する位置で出土していることは注意を要する。

さらには、5・6・12は条坊遺構からの出土であるが、それぞれ、南に条間南小路、西に四坊坊間路、東に東四坊大路が近接した地点、すなわち条坊道路交差点に近い位置での出土であることがわかる。

以下、用途についての可能性を挙げ、その是非を検討する。

①調理具である「おろし金」とする見方

「おろしがねのようなもの？」と書かれたキャプションで展示されている事例がある[4)]。確かに、ひだの部分が尖るA類ならば、固い大根は無理でも、比較的軟らかい山芋程度であればおろせそうではある。

しかしながら、「おろし金」とすると、丸瓦に似た形状を呈する理由がわからない。また、側縁付近にまで刺突痕を施すA類（8・11・13・15・18）があるが、この部位でおろすことが難しいのは明らかである。さらには、ひだをもつA類でも刺突痕が大きく、その間隔が広いもの（9・18・21）があることも疑問である。

決定的なことは、ひだの無い刺突痕であるB類（14・20）ではおろすことはできないことである。

以上のことから、おろし金としての用途ではないと考える。

②土管とする見方

丸瓦状の形状に復元できるものが多いので、これを2つ用い、側面を合わせ、土管として使ったと考えることも可能である。この場合、凸面の刺突痕のひだは、滑り止めとしての機能をもち、急勾配の掘方に据える際に有効であったとも考えられる。

しかしながら、急勾配用の土管であれば、縦に分割しない円筒の形状の方が、都合が良かったであろう。また、ひだの無い刺突痕であるB類（14・20）や、平瓦状に復

表1　刺突痕がある土製品の出土地

番号	分類	出　土　地	調査次数
1	丸Ⅰ Aa	左京五条二坊十四坪	市HJ第1次
2	丸Ⅰ Ab1	右京二条三坊六坪	市HJ第292次
3	丸Ⅰ Ab1	左京四条四坊十六坪	市HJ第377-2次
4	丸Ⅰ Ab1	左京四条四坊十四坪	市HJ第353-1次
5	丸Ⅰ Ab1	右京二条三坊坊間路（六・十一坪間、南に条間南小路が近接）	市HJ第443-3次
6	丸Ⅰ Ab1	左京五条四坊条間北小路（九・十坪間、西に四坊坊間路が近接）	市HJ第459-2次
7	丸Ⅰ Ab1	右京七条西一坊大路（一坊十四坪・二坊三坪間）	市HJ第491次
8	丸Ⅰ Ab2	左京二条四坊七坪（二条条間北小路南側溝が近接）	市HJ第174次
9	丸Ⅰ Ab2	右京七条一坊十四坪	市HJ第491次
10	丸Ⅰ Ab1か2	右京二条三坊六坪	市HJ第286-2次
11	丸Ⅰ Ac	左京五条四坊十六坪（東四坊大路西側溝が近接）	市HJ第486次
12	丸Ⅰ Ac	左京五条四坊条間北小路（十五・十六坪間）北側溝（東に東四坊大路が近接）	市HJ第506・623-B次
13	丸Ⅰ Ad	左京七条西一坊大路（一坊十五坪と二坊二坪間）東側溝	市HJ第97次
14	丸Ⅰ Bb	左京六条二坊条間北小路（九・十坪間）北側溝	市HJ第45次
15	丸Ⅱ Ab1	右京二条西二坊大路（二坊十四坪・三坊三坪間）西側溝	市HJ第378-7次
16	丸Ⅱ Ab1	左京二条四坊七坪	市HJ第174次
17	丸Ⅱ Ac	右京二条三坊坊間西小路（十一・十四坪間）東側溝	市HJ第443-1次
18	丸Ⅱ Ad	右京二条三坊十一坪	市HJ第443-2次
19	丸Ⅱ Ae	右京二条西二坊大路（二坊十四坪・三坊三坪間）西側溝	市HJ第378-7次
20	丸Ⅱ Bf	左京五条四坊二坪	市HJ第735次
21	平Ⅱ Ab1	右京二条二坊十五坪（西二坊大路東側溝が近接）	市HJ第460次

（凡例）1.「番号」は図1・2に対応する。
2.　網掛けは条坊遺構出土例。

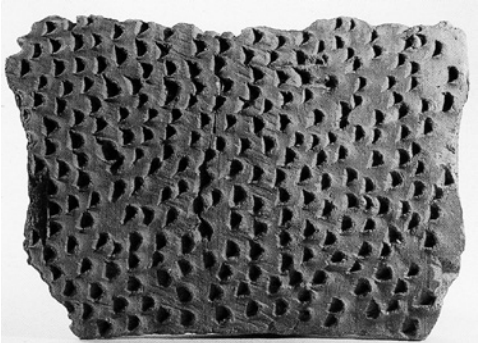


写真 10　芬皇寺出土品

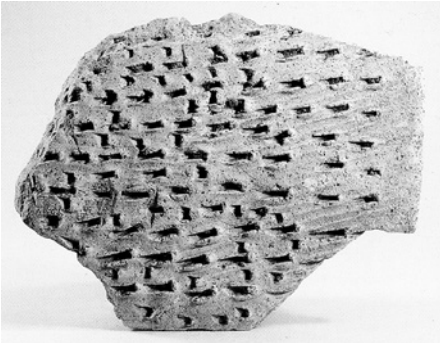


写真 11　金丈里瓦窯跡出土品

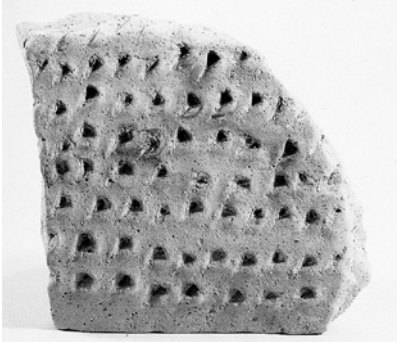


写真 12　金丈里瓦窯跡出土品

元できるもの（21）が存在する理由がわからない。
このようなことから、土管でもないと考える。

③屋根の谷の部分に使う瓦とする見方

二つの勾配屋根の下部の先端が出会う所にできる溝の部分を谷と呼び、その谷筋に使う専用の瓦は「谷平瓦」と呼ばれる[5]。急勾配の谷筋であれば、凸面の刺突痕のひだは滑り止めとしての機能が考えられる。

しかしながら、「谷平瓦」と呼ばれるように、平瓦状のものが使用されたことは知られるが、丸瓦状のものが使用された例は聞かない。

また、谷筋の長さにも因るところであろうが、ある程度の数の使用が想定されることに対し、主題とした土製品が一か所に集中して多数出土した事例も無い。

さらに、出土地点の問題もある。本章の冒頭に出土地点を紹介したが、このうち条坊遺構とその周辺での出土例が半数近くと、目立つことを示した。この出土場所の検討から、築地塀に葺かれた瓦の可能性が考えられる。しかしながら、築地塀に屋根の谷部分が生じるケースは考え難い。

また、おろし金説、土管説と同様に、ひだの無い刺突痕であるＢ類（14・20）が存在する理由も説明できず、屋根の谷の部分に使用する瓦ではないと考える。

④「飾り瓦[6]」とする見方

尖ったひだの部分に滑り止め等の機能は無く、刺突痕は単なる紋様とみた場合は、屋根の一部を飾った「飾り瓦」とみることもできよう。

出土地点から築地塀に葺かれた可能性が高いことは上で述べた。一方出土点数が少ないことから、その使用場所は限定されるとみられ、築地塀の大棟の端や、その付近から斜め方向に軒先に向かって降る降棟、あるいは屋根の隅で斜め方向に降る隅棟の棟端を塞ぐ鬼瓦に近接して用いられたと考えられる。なお、条坊遺構出土品のうち３点（５・６・12）は条坊道路交差点付近での出土であり、鬼瓦の使用が想像しやすい場所である。

平瓦状のものは鬼瓦の頂面に伏せた「棟平瓦[7]」で、丸瓦状のものは「棟平瓦」の上に被さる軒丸瓦（「鳥伏間」）に接続する「棟丸瓦」（「伏間瓦」）の可能性が考えられる。この場合、刺突痕は顔面のみ表現した鬼瓦の獣の背の表現となろう。また丸瓦状のものは、隅棟の鬼瓦直下の「棟丸瓦」とみれば、前肢を表現したものかもしれない。

組み合う鬼瓦については、刺突痕がある土製品が、今のところ京内寺院からの出土を聞かないため、平城宮式鬼瓦[8]の可能性が高い。ただし平城宮式鬼瓦のうちＩ式は、顔面だけでなく全身像を表すため、組み合う可能性はないだろう。

以上、「飾り瓦」としての可能性を述べた。しかしながら、鬼瓦の周辺に刺突痕がある土製品を飾ったようなことを示す絵画や彫刻等の意匠をみつけているわけではない。

また、平城宮式鬼瓦等、古代の鬼瓦の意匠については、特徴的な外縁に沿う大柄の巻毛の意匠等から、獅子あるいは獣神ともいうべきものにあてる考えがある[9]。これに従うならば、刺突紋は獣毛を表現したものと理解されるが、刺突紋は獣毛というより、魚鱗に見え[10]、飾り瓦とした場合でも、何をモチーフとしたものか、今後さらなる検討が必要と考える。

Ⅳ．おわりに

以上、本稿で取り上げた刺突紋がある土製品を紹介し、用途について考えてみた。用途については今後の平城京の発掘調査での出土に期待するところが大きい。

最後に同様の土製品は韓国でもみられることを紹介しておく。(写真 10 ～ 12)。

写真 10 は芬皇寺の平瓦として紹介されるもの[11]で、本稿の分類の平Ａｂ２類とみられる。

写真 11・12 は慶尚北道慶州市見谷面金丈里の統一新羅時代の金丈里瓦窯跡の平瓦として紹介されるもの[12]。わずかながら、ひだが確認でき、刺突の角度は異なるが双方とも平Ａｅ類とみられる。

本稿で取り上げた土製品が、朝鮮半島から運ばれたも

のとは考え難いが、その用途を考えるうえでは、今後、国外の同様の出土品にも注意する必要がある[13)]。

謝辞

本稿で扱った土製品の所在確認については、三好美穂氏と永野智子氏のお手を煩わせた。また類例については中島正氏、岩戸晶子氏、重見泰氏からご教示を得た。
文末ではありますが、記して感謝致します。

参考・引用文献（刊行順）

小杉一雄 1938「鬼瓦考」東京考古学会『夢殿第 18 冊　総合古瓦研究』

奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告Ⅵ－平城京左京一条三坊の調査』

坪井利弘 1976『日本の瓦屋根』理工学社

東夷文化研究院・東山文化社編 1976『韓國建築史大系Ⅴ　建築과文様（上）新羅의기와』

山本忠尚 1979「舌出し獣面考」奈良国立文化財研究所『研究論集Ⅴ』

毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦－ 8 世紀を中心として－」奈良国立文化財研究所『研究論集Ⅵ』

奈良国立文化財研究所 1984『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』

奈良市教育委員会 1984「平城京左京六条二坊九･十坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和 58 年度』

奈良国立文化財研究所 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』

國立慶州博物館 2000『新羅瓦塼』図録

岩戸晶子 2001「奈良時代の鬼面文鬼瓦－瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷－」史学研究会『史林』84 巻 3 号

井内潔 2015「播磨新出の蓮華紋棟端飾瓦」帝塚山大学考古学研究所『帝塚山大学考古学研究所研究報告』ⅩⅦ

註

1）奈良国立文化財研究所 1975 の 36 頁、同 1984 の 29 頁、同 1995 の 289 頁で紹介される。また奈良国立文化財研究所 1975 と 1995 では、凸面に刺突痕では無く、格子風にヘラ描き線を施すものも紹介されている。本稿で紹介した奈良市保管品は刺突痕のものばかりであるが、同様の性格を持つものであろう。また奈良国立文化財研究所 1975 では、筆者の見方と同じく「特異な瓦」として報告される。

2）平城京以外でも、大阪府富田林市の新堂廃寺では、同様の土製品が出土しているが未報告という（岩戸晶子氏のご教示による）。また、京都府木津川市の高麗寺でも同様の土製品が出土しているという（中島正氏のご教示による）。

3）なお､｢丸刀｣と呼称される彫刻刀を用いて刺突実験してみたが、刺突痕ｂのような半円形には表現できす､ひだもできなかった。

4）平城宮跡資料館の展示品。出土場所の表示は無い。

5）「谷平瓦」や以下文中「鳥伏間」､「伏間瓦」の用語は坪井 1976 に拠る。

6）「飾り瓦」の用語について坪井 1976 では、主に棟に飾りとして取り付けられる鍾馗や鳩等の瓦製品と限定的に示されている。本稿では今少し広義の瓦製の装飾の意味で使用した。

7）「棟平瓦」･「棟丸瓦」の用語は井内 2015 に拠った。

8）平城宮式鬼瓦の名称・分類等は毛利光 1980 および岩戸 2001。

9）獅子起源説は山本 1979、獣神起源説は小杉 1938・毛利光 1980。

10）魚鱗を飾る造形には、龍が思い浮かぶが、我が国で屋根に龍の造形を載せたのは中世以降のようである。他にも魚鱗を飾る造形には、中国にマカラがある。この点については、今後さらに資料を集め、稿を改めて論じてみたい。

11）國立慶州博物館 2000 の 85 頁写真 274。なお､東夷文化研究院･東山文化社編 1976 の 342 頁 1500 の瓦も同じものとみられる。

12）國立慶州博物館 2000 の 215 頁写真 730・731。

13）この他にも、同様のものが慶州市内南面の花谷里遺跡から出土しているという（重見泰氏のご教示による）。

図版出典

写真 10 ～ 12 は國立慶州博物館 2000 より､一部修正を加え転載。その他は著者作成。

菅原東遺跡の竪穴建物・土坑群出土土器

–古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究Ⅲ–

村瀬　陸

Ⅰ．はじめに

本稿では、奈良市教育委員会が発掘調査した菅原東遺跡のうち、竪穴建物・土坑群を検出したHJ第169・173・182・184次調査出土土器について報告する。

HJ第169・173・182・184次調査は、近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に伴う発掘調査で、近接する４次調査が一括して概要報告された（奈良市教育委員会1990）。平城京の条坊復元では右京三条三坊一坪にあたり、一連の調査により菅原東遺跡の存在が認識された。

菅原東遺跡には、主に古墳時代前～中期初頭と後期の遺構があり、中期初頭～後期の間は一度断絶するようである。古墳時代前～中期初頭では、HJ第169・173・182・184次調査で検出された竪穴建物群とその周辺に広がる土坑群、HJ第257-3次調査等で検出された首長居館と目される方形区画溝と井戸群（奈良市教育委員会1994、村瀬2016）が中心部として機能し、周辺では基幹水路に想定される斜行溝などが確認されている（奈良県立橿原考古学研究所2011）。また、これらの東側にあたるHJ第229・443-7次調査では、谷状の落ち込みから埴輪編年Ⅱ期の円筒・形象埴輪が一定数出土しており（村瀬2018）、約500m南に位置する宝来山古墳との関係を想定できる。後期には、HJ第200次調査で埴輪窯６基を検出しており（奈良市教育委員会1992）、周辺調査でも包含層等から多くのⅤ群埴輪が出土していることから、拠点的埴輪生産地として機能したといえる。

このように、古墳造営や埴輪生産の実態に関わる重要遺跡であることはもちろん、『日本書紀』に登場する埴輪誕生説話や『続日本紀』にみる菅原土師氏との関連を検討することができる点においても、希少性の高い遺跡であると評価できる。

一方で、奈良市教育委員会が実施してきた調査成果は、重複する平城京跡に重点が置かれてきたこともあり、菅原東遺跡については一部の遺物報告を除いて遺構配置の提示等に留まらざるを得ない状況であった。そのため、遺構から出土する遺物の詳細が不明であり、より詳細な検討を進めることが困難であった。

そこで筆者は、菅原東遺跡の再評価を目的として、出土遺物の整理作業・調査を継続的に実施している（村瀬2016･2018･2019）。ここで報告する土器類についても、この一環の整理に基づくものである。

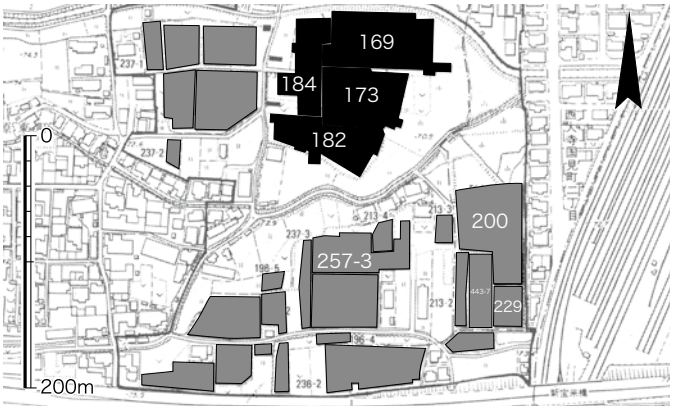


図１　HJ第169・173・182・184次位置図（1/6,000）

Ⅱ．HJ第169・173・182・184次調査の概要

ここでは４次にわたる調査によって検出された古墳時代以前の遺構について概要を記す。遺構番号は概要報告書（奈良市教育委員会1990）に従う。

弥生時代の遺構には、方形周溝墓５基（SX01～05）がある。いずれも周溝を検出し、概ね大和第Ⅲ様式の弥生土器が少量出土している。

概報で示された古墳時代前期の遺構は、土坑44基（SK01～44）、井戸５基（SE01～05）、土器埋納遺構９基（SX06～14）、竪穴建物10棟（SB01～10）、溝４条(SD01～04)であり、後期の遺構は、溝１条(SD05)、掘立柱建物１棟（SB14）、土坑３基（SK45～47）である。ただし、溝や土坑の出土遺物は少量である場合が多く、後期の遺構に前期の遺物が混ざる場合が往々にしてあることから、一定数出土遺物のある遺構を中心に検討を進める必要がある。本稿では、時期判断の可能な遺構について、出土土器の報告を行う。

Ⅲ．出土遺構・土器の報告

ここでは、HJ第169・173・182・184次調査のなかでも一定数の土器が出土した以下７つの遺構と出土土器について報告する。土器の詳細は観察表にまとめ、ここでは特徴を中心に記述する。

SB03（HJ173-SB03）　北で西に振れる竪穴建物で3.6×4.2mの方形を呈する。周囲には幅約0.2mの周壁溝がめぐる。小型丸底壺（１～７）、小型丸底鉢（８）、有段口縁鉢（９）、小型器台（10）、器台（11･12）、高杯（13～17）、壺（18）、甕（19～22）が出土した。

小型丸底壺は、いずれも比較的球形の体部に短めの口

図２　HJ 第 169・173・182・184 次　古墳時代以前の遺構配置図（1/200）

縁部が伴うものである。調整から大きく３区分でき、①外面ハケ調整のもの（１・２）、②外面ナデ調整、内面ケズリ調整のもの（３～５）、③内外面ナデ調整のもの（６・７）である。外面ナデ調整のものが目立ち、口縁部の接合後のナデ調整が粗いものが含まれる。

小型丸底鉢（８）は、ミガキ調整の精製品であるが、口縁部は縦方向のミガキであり、やや粗雑な印象をうけるものである。なお、９・10 も精製品であり、小型丸底壺が粗製品であるのに対して鉢・小型器台（８～10）はやや古相の傾向を示すものである。

器台（11・12）は、小型器台とは異なるもので、胎土も粗くナデ調整の粗製品である。11 は端部に炭化した部分がみられ、灯明用に使用された可能性がある。

高杯は、口径に対して杯部が浅く、口縁端部はやや外反する。ナデ調整であり胎土も粗く、粗製品である。脚部はケズリ主体のもの（16）とナデ主体のもの（17）があるが、脚高や形状は類似しており、系統差として認識できる。

壺（18）は、大型の複合口縁部であり搬入品の可能性がある。

甕は、布留甕で肩部にヨコハケが残るもの（19）、口縁部の形状がやや独特なもの（20）などがある。また、

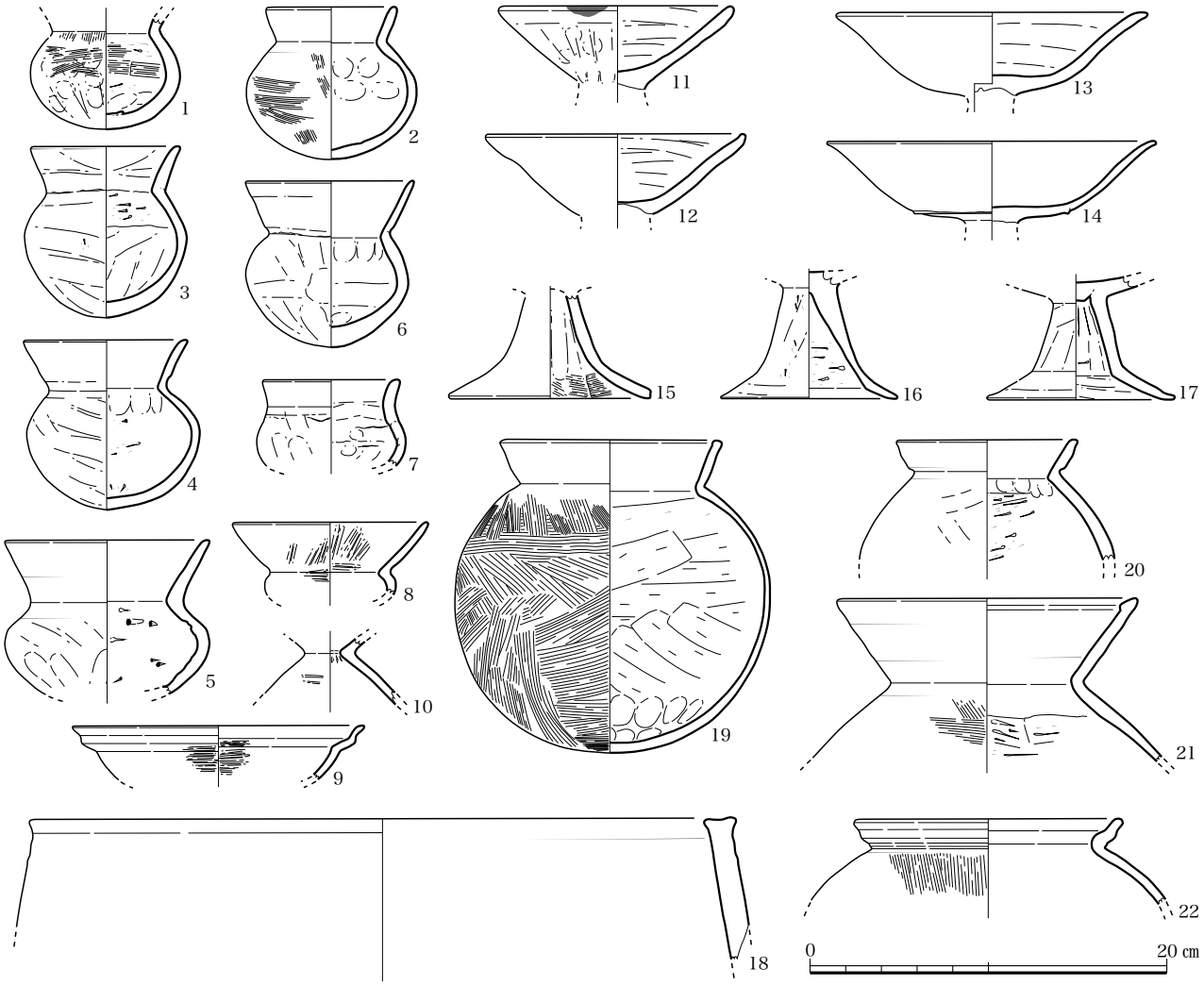


図３　SB03 出土土器（1/4）

S 字甕（22）は比較的器壁が厚いものである。

以上の特徴のなかでも、小型丸底壺や高杯等でナデ調整主体の粗製品が目立つこと、布留式前半段階には認められない器台（11・12）があることなどは注目できる。

SX06（HJ173-SK71）　SB01 内にある小穴で直径約 0.5m、深さ約 0.2m である。

出土土器は X 字状の小型器台（１）のみである。器壁は非常に薄いものの、内外面ともにハケ調整でミガキ調整はみられない。胎土はさほど粗くないが、ミガキ調整のものより粗雑化したものとみられる。

SB04（HJ173-SK25）　北で西に振れる竪穴建物で、約２m 四方であり、周壁溝はないが内部が約 0.1m 落ち込む。当初は土坑として調査されたが、SB03 等と方位を揃えることなどから竪穴建物として報告された。小型丸底鉢（１～４）、有段口縁鉢（５～８）、小型器台（９～ 12）、高杯（13・14）、壺（15 ～ 24）、甕（25 ～ 29）が出土した。

小型丸底鉢は、口縁部と体部の比率が同等のもの（１）と、口縁部が発達するもの（２～４）がある。いずれも調整が残るものはヨコミガキを密に施しているが、３の口縁部内面には、ヨコミガキ後に放射状暗文を施す。また、外面は底部をケズリ、体部もヨコミガキ下にケズリの痕跡が観察できる。

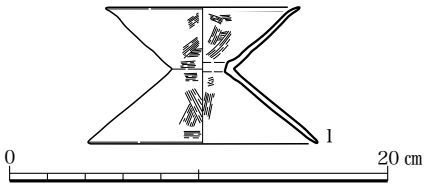


図４　SX06 出土土器（1/4）

有段口縁鉢の法量は様々であるが、５・８はヨコミガキを施す精製品である一方、７は胎土が粗く粗製品と考えられる。

小型器台は、脚部の透孔が２・３方向のものがあるが、いずれもヨコミガキを密に施す精製品である。11・12 は X 字状の小型器台であり、外面はいずれもヨコミガキであるが、内面は 11 がハケ、12 がミガキと異なる。

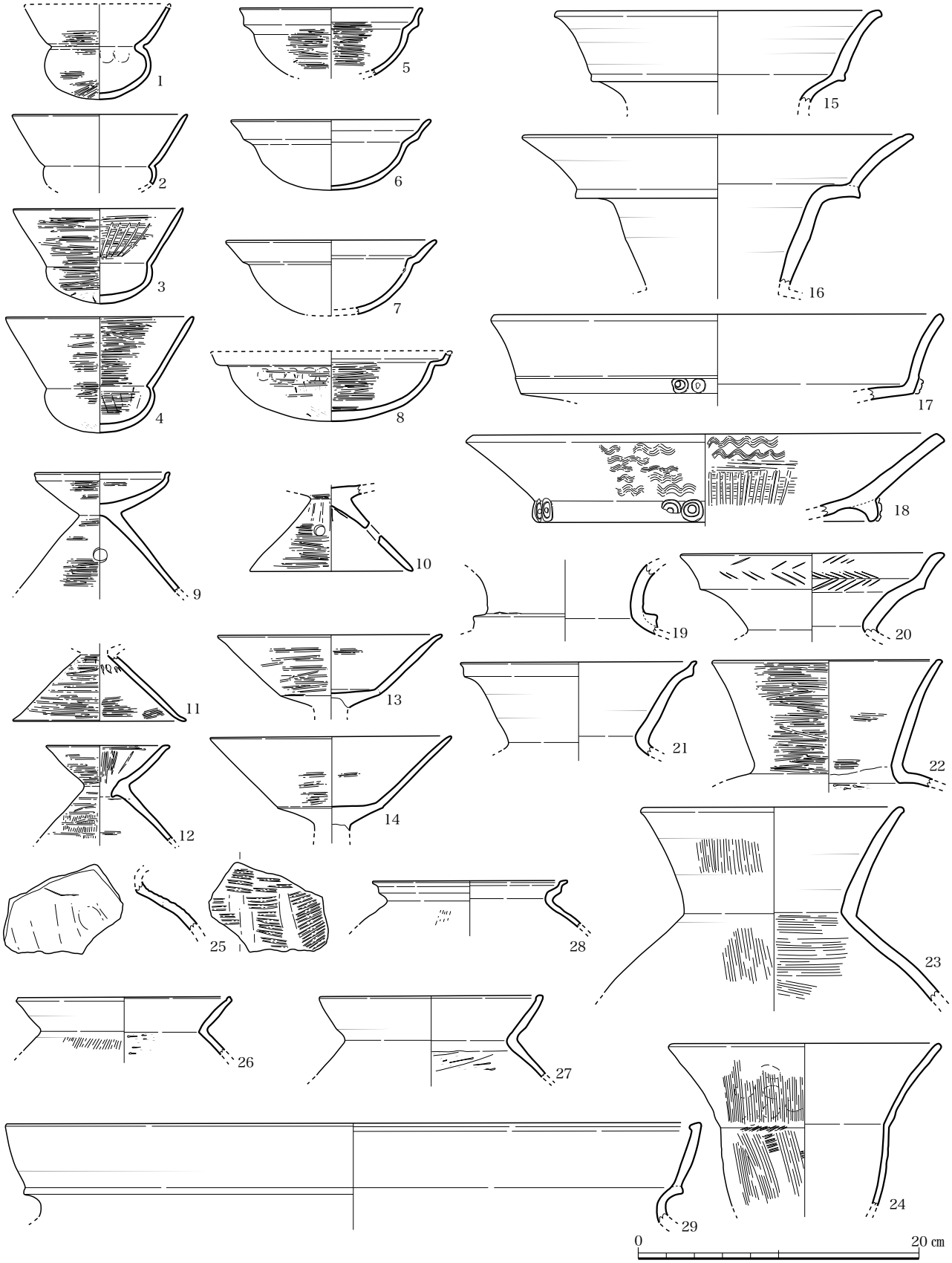


図 5　SB04 出土土器（1/4）

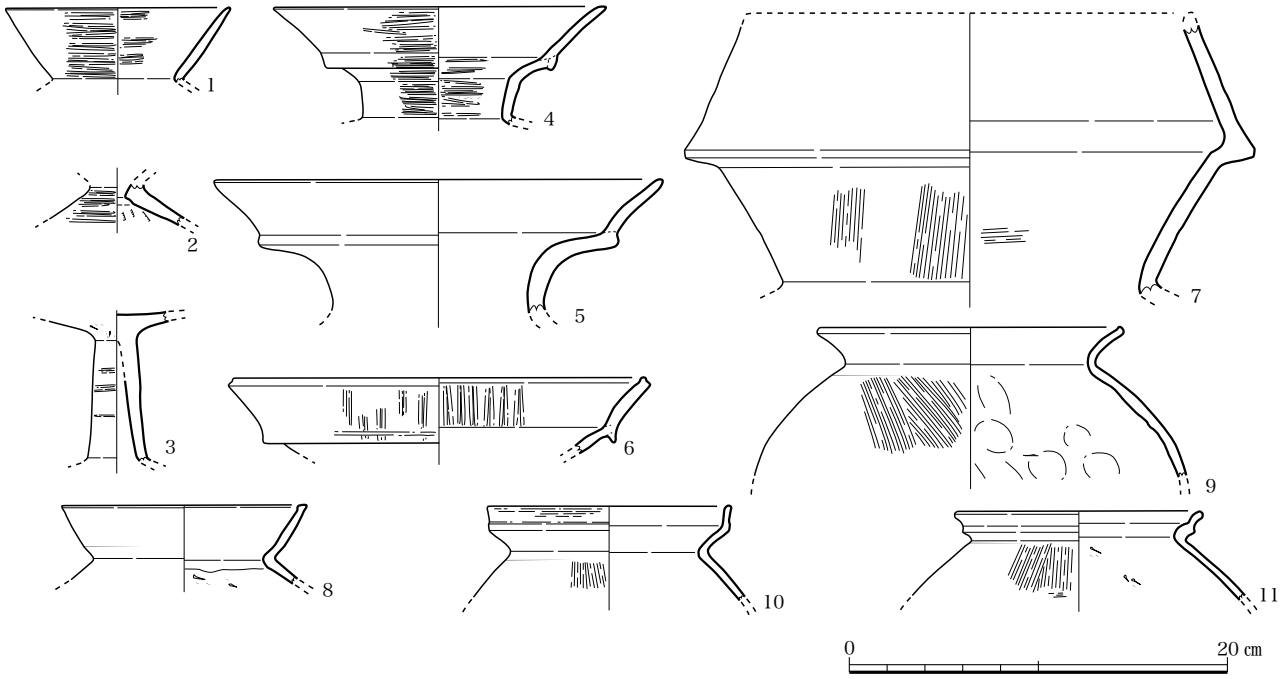


図６　SB07 出土土器（1/4）

高杯は、杯部が深く受部との稜線が明瞭である。いずれも内外面ともにヨコミガキを施す。

二重口縁壺（15・16）は、いずれも二次口縁部の傾きは異なるが同等の高さであり、16 はやや頸部が長く外側へひらく形状を呈する。加飾壺（17 ～ 19）はいずれも貼付竹管文を施すものであるが、17 は屈曲部に段差を削り出して貼り付けているのに対して、18 は口縁部を垂下させた部分に貼り付けている。18 は内外面に波状文を施す。また、内面にはヨコミガキ後、放射状暗文を施す。19 は頸部に突帯を施すことから加飾壺と考えられる。20 は柳ヶ坪型壺で、線刻は摩滅するが綾杉文が観察できる。21 は口縁部をやや立ち上げるもので、22 は口縁部の内外面にヨコミガキを密に施す。24 は特異な形状を呈し、外面もタタキ後ハケ調整である。

甕は、伝統的Ｖ様式系のもの（25）、26 も口縁部が直線的にのび、端部がわずかに肥厚する庄内系の系譜上にある特徴をもつ。27 は典型的な布留甕である。28 はＳ字甕、29 は山陰系の甕でいずれも外来系の特徴をもつ形態であるが、胎土は他の個体と大きく変わらない。

以上の特徴のなかでも、小型丸底鉢が口縁部の発達するものが主体であり、その製作技法が緻密であること、小型器台はＸ字状のものを含むが、ヨコミガキを比較的密に施すものであること、高杯は杯部と受部の稜が明瞭でヨコミガキを施すこと、加飾壺や精製の直口壺、タタキ甕を含むことなどは注目できる。

SB07（HJ182-SB03）　周壁溝はないが 3.7×3.0m の方形を呈する竪穴建物で北で西に振れる。小型丸底鉢（１）、小型器台（２）、高杯（３）、壺（４～７）、甕（８～ 11）が出土した。

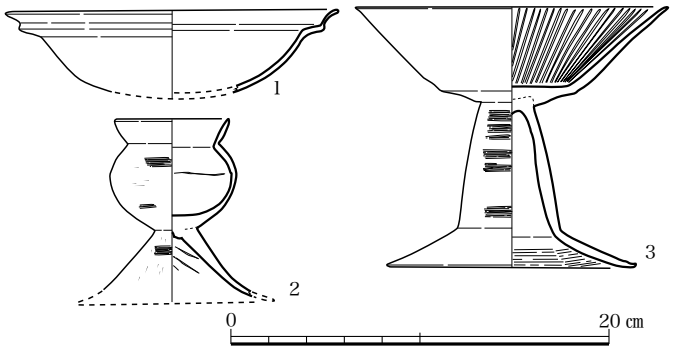


図７　SX09 出土土器（1/4）

１～４はヨコミガキ調整を施す精製品であり、３の高杯は脚柱部が細身である。４は頸部がやや細く短い精製二重口縁壺である。６も二重口縁壺と考えられるが、口縁部内外面ともに縦方向のミガキを施し、外面は一部ヨコミガキを施す。７は大型の複合口縁壺で、ハケ調整を基調とする外来系土器である。

甕は口縁部が短く端部が肥厚し、体部が球形に発達するもの（９）や布留甕（８）を含み、吉備系（10）やＳ字甕（11）といった外来系土器を含む。

以上の特徴のなかでも、Ｘ字状小型器台を含みつつ、精製品が各器種に含まれること、外来系土器が甕・壺にみられることが注目できる。

SX09（HJ182-SK44）　SB08 内に位置する小穴で、

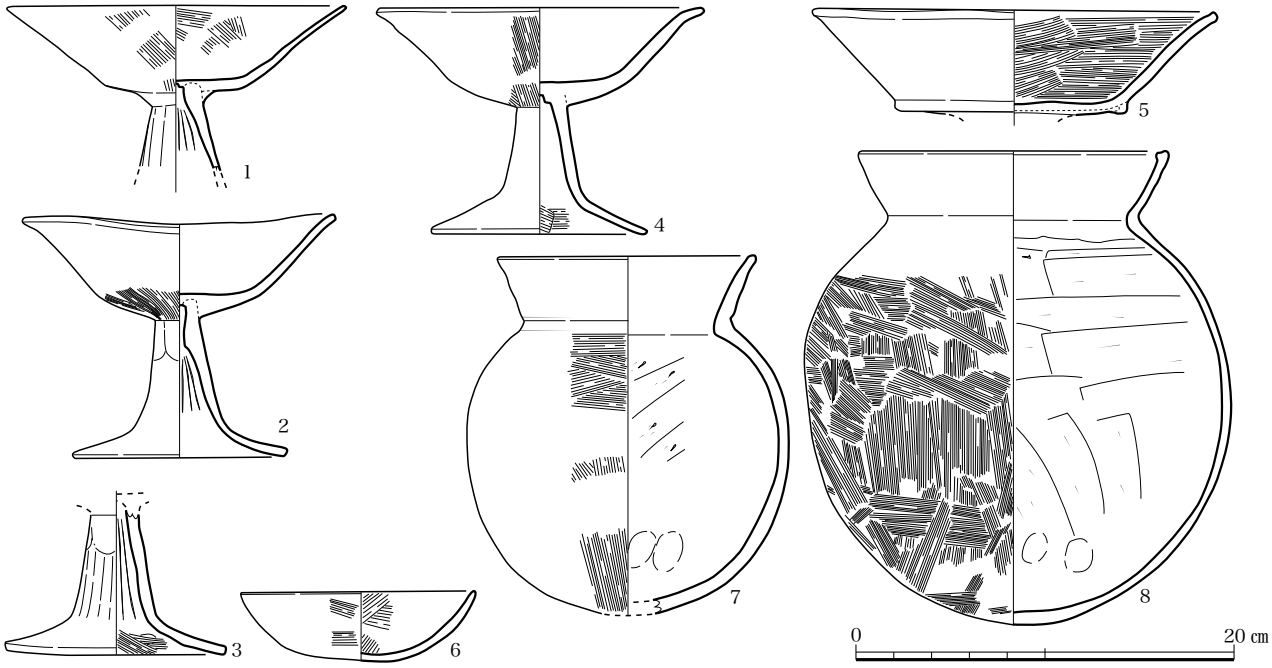


図７　SE05 出土土器（1/4）

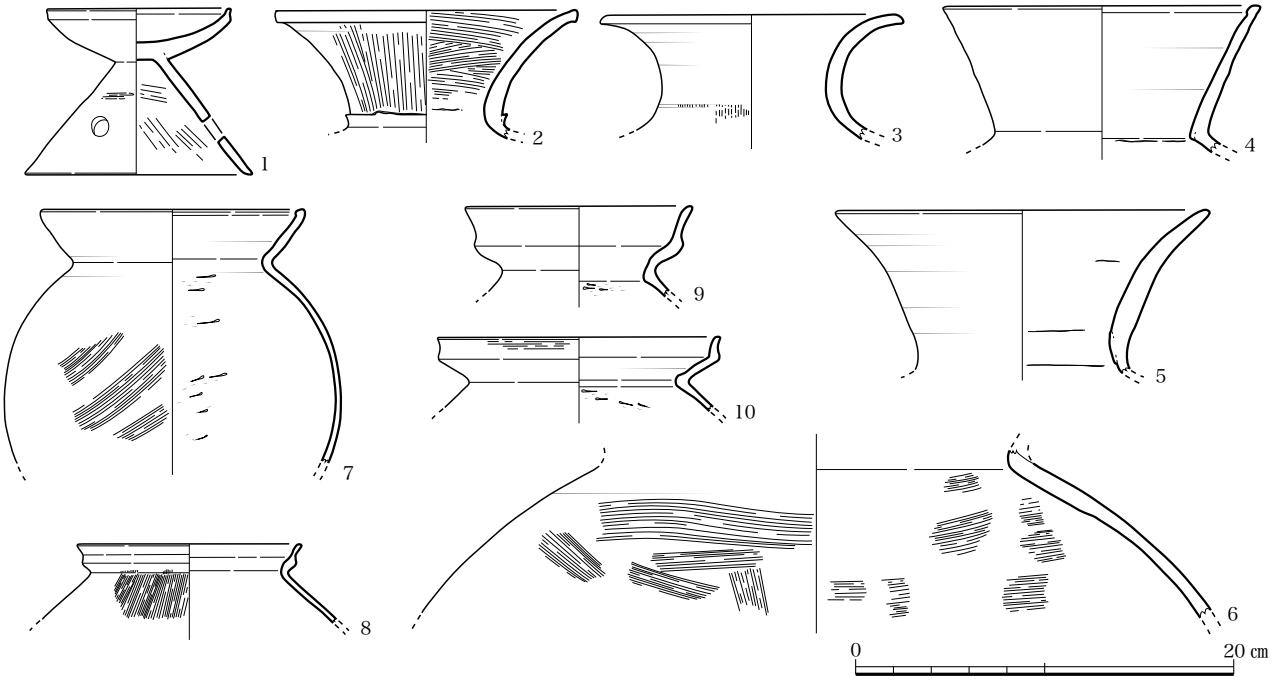


図８　SK23 出土土器（1/4）

直径約 0.6m、深さ約 0.6m である。有段口縁鉢（１）、台付小型丸底壺（２）、高杯（３）が出土した。

１は摩滅するが、いずれも精製品であると考えられ、２は台付であるが、口縁部が短めの小型丸底壺の形態を保つものである。高杯（３）は、脚部をヨコミガキするほか、杯部内面に放射状暗文を施す点が特徴である。杯部と受部、脚部の稜は明瞭であり、脚裾部に透孔はない。

SE05（HJ173-SK54）　直径約 1.1m の不整円形を呈し、深さ約 0.2m である。土器類とともに板・棒状の木材が出土していることから井戸として報告されている。高杯（１～５）、鉢（６）、甕（７・８）が出土した。

高杯は、いずれもハケ調整を基調とし、杯部が直線的にのびるもの（１）、端部が外反するもの（２・４）、杯部と受部に段をつける大型高杯（５）がある。５を除きいずれも杯部と受部や脚部の稜は不明瞭である。

鉢は、杯状の形態であり、内外面ともにハケ調整で、

表１　HJ173・182 次調査出土土器観察表

調査次数	報告遺構番号	番号	器種	計測値		色調（外面）	胎土・材質 焼成	説明	調査時遺構番号
HJ173	SB03	1	古式土師器 小型丸底壺	残高	6.2cm	暗褐色	やや密、1mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部が欠損する。外面は、頸部付近が縦方向のハケ、体部中位が横方向のハケ、下部がナデ調整で、成形時の指オサエにより表面がボコボコする。内面はケズリ後ハケ調整で、底部付近は指頭圧痕がある。器壁は比較的厚い。頸部で 3/4 遺存。	SB03
HJ173	SB03	2	古式土師器 小型丸底壺	復元口径 器高	7.3cm 8.5cm	淡橙色	粗、3mm 以下の砂粒多く含む。焼成良好。	比較的球形の体部と短めの口縁部からなる。外面は頸部付近をヨコナデ、体部はハケ調整。内面は指オサエを観察できるが摩滅し調整不明瞭。胎土も粗く、頸部の屈曲等もゆるやかである粗製品。全体で 1/2 遺存。	SB03
HJ173	SB03	3	古式土師器 小型丸底壺	口径 器高	8.4cm 9.6cm	淡褐色（黒斑が主）	やや粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	比較的球形の体部と短めの口縁部からなる。外面は口縁部をヨコナデ、体部はナデ調整だが、部分的に１次調整のケズリが下に観察できる。内面は口縁部をヨコナデ、体部上半はケズリ、下半はナデ調整。口縁部の接合はやや粗く、表面に接合痕が観察できる。完存。	SB03
HJ173	SB03	4	古式土師器 小型丸底壺	口径 器高	9.2cm 9.5cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	比較的球形の体部と短めの口縁部からなる。口縁部は器壁がやや薄い。外面は頸部付近までをヨコナデするが、頸部はやや強めで窪む。体部は全体がナデ調整。内面は口縁部をヨコナデ、体部はケズリ調整。完存。	SB03
HJ173	SB03	5	古式土師器 小型丸底壺	復元口径 残高	11.9cm 8.6cm	褐色	粗、5mm 以下の砂粒多く含む。焼成良好。	底部が欠損するが、体部中位がやや張り、口縁部はやや長い。外面は口縁～頸部までヨコナデ､体部はナデ調整により胎土は粗いが器面は比較的整う。内面は口縁部は摩滅、体部はケズリ調整であるが、器面は粗い。全体で 1/2 遺存。	SB03
HJ173	SB03	6	古式土師器 小型丸底壺	口径 器高	9.4cm 9.3cm	淡赤褐色	やや粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	比較的球形の体部とやや短い口縁部からなり、器壁は厚く底部はとくに厚い。口縁部の貼り付けが甘く、接合痕が明瞭に観察できる。外面は口縁部をヨコナデ、体部をナデ調整するが、体部は調整時のアタリで面を持つ部分が複数ある。内面はナデ調整。完存。	SB03
HJ173	SB03	7	古式土師器 小型丸底壺	復元口径 残高	7.7cm 4.8cm	褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	通有の小型丸底壺とは異なり、口縁～体部の屈曲は緩やかで手捏ねに近い形状を呈する。内外面ともにナデ調整であるが甘く、接合痕が明瞭に観察できる。口縁部で 1/4 遺存。	SB03
HJ173	SB03	8	古式土師器 小型丸底鉢	復元口径 残高	11.0cm 4.1cm	褐色	やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	口縁部がやや発達し、体部高が比較的低い。口縁部内外面をやや斜め方向のミガキ、体部外面はヨコミガキ、内面は不明瞭。器壁はやや厚めであり、頸部の屈曲もやや鈍い。厚さやミガキ調整が典型的な口縁部の発達する小型丸底鉢とはやや異なり、いずれも粗雑になった印象をもつ。頸部で 1/8 遺存。	SB03
HJ173	SB03	9	古式土師器 有段口縁鉢	復元口径 残高	16.3cm 3.0cm	褐色	やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	１次口縁～体部にかけてヨコミガキ、２次口縁部はヨコナデ。各屈曲部は比較的鋭く、器壁も薄手である。頸部で 1/10 遺存。	SB03
HJ173	SB03	10	古式土師器 小型器台	残高	3.7cm	橙色	やや密、ほとんど砂粒なし。焼成良好。	X 字状の小型器台。外面にはわずかにヨコミガキの痕跡が観察でき、内面は摩滅するが脚上部に絞り目がある。屈曲部内面にはわずかに面をもつ。頸部で 1/2 遺存。	SB03
HJ173	SB03	11	古式土師器 器台	口径 残高	13.2cm 4.7cm	淡褐色	粗、5mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	器壁が厚く、ラッパ状にひらく杯部をもつ。内外面ともにナデ調整で、口縁端部外面はヨコナデし、１ヶ所に灯明皿のように炭化し黒い部分がある。杯部完存。	SB03
HJ173	SB03	12	古式土師器 器台	口径 残高	14.6cm 4.6cm	淡褐色	粗、5mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	器壁が厚く、ラッパ状にひらく杯部をもつ。外面は摩滅、内面はナデ調整。内面の口縁端部はナデによりやや窪む。杯部完存。	SB03
HJ173	SB03	13	古式土師器 高杯	口径 残高	17.5cm 4.7cm	淡橙色	粗、5mm 以下の砂粒多く含む。焼成良好。	杯部は端部に向かって緩やかに外反し、杯部と受部の屈曲は不明瞭で稜はなく、比較的杯部は浅い。外面は摩滅し､内面はナデ調整。脚部との接合部分に棒状刺突痕がある。口縁部で 1/2 遺存。	SB03
HJ173	SB03	14	古式土師器 高杯	復元口径 残高	18.4cm 4.6cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	杯部は端部に向かって緩やかに外反する。受部から杯部への接続部分はやや段をもつ。内外面ともに摩滅するが、わずかに摩滅していない部分でもハケ調整の痕跡はなく、ナデ調整の可能性がある。受部で 1/2 遺存。	SB03
HJ173	SB03	15	古式土師器 高杯	底径 残高	11.3cm 5.8cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	脚部は稜をもたずラッパ状にひらき、端部には面をもつ。高杯としたが器台の可能性もある。外面は摩滅、内面は脚柱部をナデ、裾部にハケ調整を施す。脚部完存。	SB03
HJ173	SB03	16	古式土師器 高杯	底径 残高	9.9cm 7.1cm	褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	脚部は外面には稜をもたないが、内面は明瞭な稜をもつ。外面はケズリ後ナデ調整、内面は横方向のケズリ調整。脚端部完存。	SB03
HJ173	SB03	17	古式土師器 高杯	底径 残高	10.5cm 6.9cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	脚柱部はやや膨らみをもち、内外面とも明瞭な屈曲をもつ。内外面ともにナデ調整であるが、内面の脚柱部は１次調整にケズリを施す。杯部との接合は、脚部を絞りながら積み上げたのち、粘土を充填してから受部の成形を行う。脚端部で 1/2 遺存。	SB03
HJ173	SB03	18	古式土師器 複合口縁壺	復元口径 残高	39.6cm 8.0cm	暗褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部は内傾し、端部は内外面ともに外側へひらいて、端面は窪みをもつ。内外面ともにヨコナデ。形状や胎土が在地のものと異なることから、搬入品と考えられる。	SB03
HJ173	SB03	19	古式土師器 甕	口径 器高	11.8cm 17.6cm	淡橙色	粗、2mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	典型的な布留甕であり、口縁端部は肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ調整。体部外面はハケ調整で肩部にヨコハケを施す。内面はケズリ調整で、底部には指頭圧痕が観察できる。ほぼ完存。	SB03
HJ173	SB03	20	古式土師器 甕	復元口径 残高	10.1cm 6.8cm	褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はやや短めで厚く、頸部に強めのヨコナデを施すことでやや異質な形状を呈する。外面はナデ、内面は頸部直下は指オサエで、以下ケズリを施すが器壁は比較的厚い。口縁部で 1/4 遺存。	SB03
HJ173	SB03	21	古式土師器 甕	復元口径 残高	16.9cm 9.2cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部は比較的長くまっすぐのび、端部は肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、内面はケズリ調整であるが頸部付近には及ばない。口縁部で 1/6 遺存。	SB03
HJ173	SB03	22	古式土師器 S 字甕	復元口径 残高	14.8cm 4.8cm	暗褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	器壁は全体的に厚く、口縁部の各屈曲は緩いが、頸部はそれに比べてやや鋭い。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部外面はハケ、内面は摩滅。胎土はほかの在地のものと異なることから、搬入品と考えられる。口縁部で 1/6 遺存。	SB03
HJ173	SX06	1	古式土師器 小型器台	口径 器高	10.2cm 7.2cm	橙色	やや密、ほとんど砂粒なし。焼成やや良好。	X 字状の小型器台。口縁端部はやや外反する。屈曲部は外面は鋭く、内面は面をもつ。比較的薄手で、内外面ともにハケ調整。全体で 1/3 遺存。	SK71
HJ173	SB04	1	古式土師器 小型丸底鉢	残高	6.5cm	橙色	やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	口縁部がやや発達するもので、体部との比率はほぼ同率である。頸部は外面のヨコナデに起因して入り込むように窪む。外面はヨコミガキで、底部付近は一定方向に施す。内面は摩滅。頸部完存。	SK25
HJ173	SB04	2	古式土師器 小型丸底鉢	復元口径 残高	12.5cm 5.0cm	淡橙色	やや密、ほとんど砂粒を含まない。焼成やや不良。	口縁部が発達し、体部の比率は口縁部より短い。口縁部は直線的にのび、頸部の屈曲は鋭い。内外面ともに摩滅。頸部で 1/8 遺存。	SK25
HJ173	SB04	3	古式土師器 小型丸底鉢	復元口径 器高	12.1cm 5.8cm	橙色	やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	口縁部が発達し、体部の比率は口縁部より短い。口縁部は直線的にのび、頸部はやや鋭く屈曲するが、内面はあまりえぐりこまない。外面はヨコミガキで、体部には１次ケズリ調整がわずかに観察できる。外面下半はケズリ調整。内面は、口縁部でヨコミガキ後、放射状のミガキを施す。体部は摩滅し不明瞭。ほぼ完存。	SK25
HJ173	SB04	4	古式土師器 小型丸底鉢	復元口径 器高	13.4cm 8.2cm	橙色	やや密、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部が発達し、体部の比率は口縁部より短い。口縁部は直線的にのび、頸部はやや鋭く屈曲し内面もえぐりこんで稜が明瞭である。内外面ともにヨコミガキで、外面下半はケズリ、体部内面はケズリ後、蜘蛛の巣状ハケを施してからヨコミガキを施す。頸部で 1/2 遺存。	SK25

HJ173	SB04	5	古式土師器 有段口縁鉢	復元口径 残高	13.0cm 4.8cm	淡褐色	やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	復元口径がやや短く、口径に対して深みのある形状を呈する。２次口縁部はヨコナデ、それ以外は内外面ともにヨコミガキで、体部外面には１次ケズリ調整がわずかに観察できる。各部の屈曲は鋭く、薄手の精製品である。口縁部で 1/8 遺存。	SK25
HJ173	SB04	6	古式土師器 有段口縁鉢	復元口径 器高	14.1cm 5.0cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	比較的薄手であるが、各部の屈曲はやや鈍い。内外面ともに摩滅。胎土や焼成もやや不良であり、精製品であるかは不明。口縁部で 1/8 遺存。	SK25
HJ173	SB04	7	古式土師器 有段口縁鉢	復元口径 残高	15.0cm 5.3cm	橙色	非常に粗、3mm 以下の砂粒多く含む。焼成やや不良。	各部の稜は比較的明瞭であるが、頸部の屈曲はやや緩い。内外面ともに摩滅。胎土が非常に粗く、粗製品と考えられる。口縁部で 1/8 遺存。	SK25
HJ173	SB04	8	古式土師器 有段口縁鉢	残高	4.8cm	赤褐色	やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	口径に対してやや浅い形状を呈する。口縁部は内外面ともにヨコナデ。体部は外面でケズリ後やや粗いヨコミガキ。内面は密なヨコミガキで底部はハケ調整。頸部で 1/6 遺存。	SK25
HJ173	SB04	9	古式土師器 小型器台	復元口径 残高	9.6cm 8.6cm	淡橙色	やや粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	通有の小型器台の精製品。口縁端部はやや立ち上がり、ヨコナデによりやや外反する。内外面ともに比較的密なヨコミガキを施すが摩滅し一部不明瞭。脚部に２方向の透孔あり。脚裾部完存。	SK25
HJ173	SB04	10	古式土師器 小型器台	復元底径 残高	11.6cm 6.1cm	赤褐色	やや密、2mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	外面は杯部と脚部の透孔付近より下部をヨコミガキし、透孔より上部は縦方向のナデ調整でミガキは観察できない。内面は摩滅するが、絞り目が確認できる。透孔は３方向に穿孔される。脚上部完存。	SK25
HJ173	SB04	11	古式土師器 小型器台	底径 残高	12.3cm 4.7cm	橙色	やや密、2mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	X 字状の小型器台。外面は縦方向のケズリ後、密なヨコミガキ。内面は脚裾部をハケ調整し、上部は絞り目が観察できる。脚部は直線的にのびるが、端部はやや反る。脚部完存。	SK25
HJ173	SB04	12	古式土師器 小型器台	復元口径 残高	8.8cm 6.8cm	淡橙色	やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	X 字状の小型器台。杯部はやや膨らみをもち、端部はわずがに外反する。外面は杯部をヨコミガキ、脚部は縦方向のハケ後やや粗いヨコミガキ。内面は口縁端部をヨコミガキし、杯部は縦方向のミガキ、脚部はわずかにヨコミガキが観察できる。脚部で 1/2 遺存。	SK25
HJ173	SB04	13	古式土師器 高杯	復元口径 残高	16.0cm 5.2cm	橙色	やや粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	杯部が比較的深く、受部との稜線もやや緩くなるが観察できる。杯部は直線的にのび端部がわずかに外反する。内外面ともにヨコミガキであるが摩滅し不明瞭。口縁部で 1/2 遺存。	SK25
HJ173	SB04	14	古式土師器 高杯	口径 残高	17.2cm 6.7cm	橙色	やや密、1mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	杯部が比較的深く、受部との間にわずかな段をもつ。杯部は直線的にのびる。内外面ともにヨコミガキであるが摩滅し不明瞭。杯部完存。	SK25
HJ173	SB04	15	古式土師器 二重口縁壺	復元口径 残高	23.0cm 6.5cm	淡黄褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	１次口縁部はやや斜め方向に立ち上がり、そこから２次口縁を貼り付ける。２次口縁はやや外反し、端部でやや強く反る。内外面ともにヨコナデ。１次口縁部付近で 1/8 遺存。	SK25
HJ173	SB04	16	古式土師器 二重口縁壺	復元口径 残高	27.7cm 10.7cm	暗褐色	粗、7mm 以下の砂粒・角閃石含む。焼成良好。	頸部から上方へはややひらいてのび、１次口縁部はほぼ水平に外側へ屈曲する。そこから２次口縁をややひらき気味で貼り付ける。内外面ともにヨコナデ。胎土からみて生駒西麓産か。口縁部で 1/4 遺存。	SK25
HJ173	SB04	17	古式土師器 加飾壺	復元口径 残高	31.8cm 6.8cm	暗褐色	粗、3mm 以下の砂粒・角閃石含む。焼成やや不良。	口縁部は緩やかに外反し、屈曲部は削り出しで段を設け、２個１組の貼り付け竹管文を施す。残存片で１ヶ所しかみられず間隔は不明。胎土からみて生駒西麓産か。口縁部で 1/8 遺存。	SK25
HJ173	SB04	18	古式土師器 加飾壺	復元口径 残高	33.1cm 6.2cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	口縁部はややひらき気味で、粘土を貼り付けて垂下口縁となる。この部分に２個１組の貼り付け竹管文を施し、間隔は広めである。外面は４条１組の櫛描波状文を５段施す。内面には口縁端部に４条１組の櫛描波状文を２段施し、以下はヨコミガキのち放射状にミガキを施す。櫛描波状文下にはミガキは及ばない。口縁部で 1/4 遺存。	SK25
HJ173	SB04	19	古式土師器 壺	残高	5.0cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	頸部に突帯を貼り付けることから加飾壺の可能性がある。内外面ともに摩滅。頸部で 1/4 遺存。	SK25
HJ173	SB04	20	古式土師器 柳ヶ坪型壺	復元口径 残高	18.8cm 5.7cm	淡橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成不良。	焼成不良で摩滅が激しいが、柳ヶ坪型壺特有の綾杉文が口縁部の内外面に施される。器壁はやや厚め。口縁部で 1/4 遺存。	SK25
HJ173	SB04	21	古式土師器 壺	復元口径 残高	16.8cm 6.7cm	暗褐色	粗、5mm 以下の砂粒・角閃石含む。焼成良好。	口縁端部はやや強めのヨコナデにより窪み、斜め方向に立ち上がる形状を呈する。内外面ともにヨコナデ。胎土から生駒西麓産か。口縁部で 1/3 遺存。	SK25
HJ173	SB04	22	古式土師器 壺	復元口径 残高	16.4cm 9.0cm	橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部がハの字にひらく直口壺で、内外面ともに密なヨコミガキを施す精製品。頸部直下から横方向のケズリ調整。頸部で 1/2 遺存。	SK25
HJ173	SB04	23	古式土師器 壺	復元口径 残高	18.2cm 13.9cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや良好。	頸部の屈曲は比較的鋭く、口縁部は緩やかに外反する。外面は全体をタテハケし、口縁端部と頸部付近にはヨコナデを施す。内面は口縁部がヨコナデ、体部が横方向のハケ調整。頸部完存。	SK25
HJ173	SB04	24	古式土師器 壺	復元口径 残高	19.5cm 11.6cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	ハの字にひらく口縁部とそこから肩がはらず窄まる体部をもつ。外面は口縁部をハケ調整、体部はやや右上がりのタタキのちタテハケ調整。口縁部は指オサエによりボコボコしている。内面は摩滅。頸部で 1/6 遺存。	SK25
HJ173	SB04	25	古式土師器 甕	高さ 幅	6.4cm 8.5cm	橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	伝統的Ｖ様式系甕の肩部付近の破片。外面はタタキのち部分的にナデ。内面ナデ。	SK25
HJ173	SB04	26	古式土師器 甕	復元口径 残高	15.1cm 4.2cm	淡褐色	粗、2mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	頸部の屈曲は比較的鋭く、口縁部は直線的にのび、頸部・端部付近をヨコナデすることで中位の器壁はやや厚い。端部は小さく肥厚し、端面はヨコナデにより窪む。外面は肩部タテハケ、内面は頸部直下からケズリ調整。口縁部で 1/6 遺存。	SK25
HJ173	SB04	27	古式土師器 甕	復元口径 残高	16.0cm 5.9cm	淡橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はわずかに内湾し端部は肥厚する。頸部はやや強めのヨコナデにより窪む。外面は摩滅するが、内面は頸部直下にヨコナデを施し、その下方からケズリ調整。口縁部で 1/5 遺存。	SK25
HJ173	SB04	28	古式土師器 S 字甕	復元口径 残高	13.9cm 3.3cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	S 字甕で口縁部の屈曲は比較的鋭く、頸部は緩やかに屈曲する。外面肩部にはわずかに斜め方向のハケ調整が残る。口縁部で 1/6 遺存。	SK25
HJ173	SB04	29	古式土師器 甕	復元口径 残高	49.6cm 7.1cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	短めの複合口縁部をもち、端部は肥厚し端面には面をもつ。頸部は緩やかに屈曲する。形状から山陰系であるが、胎土はいずれであるか判断がつかない。口縁部で 1/12 遺存。	SK25
HJ182	SB07	1	古式土師器 小型丸底鉢	復元口径 残高	11.9cm 3.9cm	橙色	やや密、2mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	体部が欠損するが、小型丸底鉢と考えられる。口縁部は比較的発達し、内外面ともに密なヨコミガキを施す。口縁部で 1/8 遺存。	SB03
HJ182	SB07	2	古式土師器 小型器台	残高	2.1cm	橙色	やや密、1mm 以下の砂粒わずかに含む。焼成良好。	X 字状の小型器台。外面は密なヨコミガキ、内面はハケの痕跡がわずかに残り、脚上部には絞り目が観察できる。脚上部完存。	SB03
HJ182	SB07	3	古式土師器 高杯	残高	7.9cm	橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	比較的脚柱部が細長く、脚裾部の屈曲も鋭く稜線が明瞭である。受部外面は本来ミガキまたはナデであるが１次調整のケズリが観察できる。脚部は摩滅するがヨコミガキ、内面は不明瞭である。脚柱部完存。	SB03

HJ182	SB07	4	古式土師器 二重口縁壺	復元口径 残高	17.6cm 6.2cm	橙色	やや密、5mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	やや外傾する頸部をもち、２次口縁は比較的ひらく形状を呈する。内外面ともにヨコミガキを施す精製品で、内面は外面に比べやや粗雑なミガキである。頸部完存。	SB03
HJ182	SB07	5	古式土師器 二重口縁壺	復元口径 残高	23.7cm 7.1cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	頸部は強く屈曲し、１次口縁部は比較的水平となり２次口縁を貼り付ける。内外面ともに摩滅するが、頸部外面には光沢があり、本来はミガキを施したものと考えられる。１次口縁部で 1/6 遺存。	SB03
HJ182	SB07	6	古式土師器 二重口縁壺	復元口径 残高	21.6cm 4.0cm	橙色	やや粗、2mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	斜め方向に１次口縁がのび、垂下口縁を作り出す。２次口縁端部は端部内面と端面をヨコナデすることで、ややつまみ上げたような形状を呈する。２次口縁部は内外面ともに縦方向のミガキで、外面はわずかに２次ヨコミガキを観察できる。口縁部で 1/8 遺存。	SB03
HJ182	SB07	7	古式土師器 複合口縁壺	残高	13.9cm	橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	くの字に屈曲する複合口縁壺で、頸部外面タテハケ、内面にはわずかにヨコハケが観察できる。口縁屈曲部で 1/4 遺存。	SB03
HJ182	SB07	8	古式土師器 甕	復元口径 残高	12.9cm 4.2cm	褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	やや内湾する口縁部で端部は肥厚する。外面は摩滅するが､内面は頸部直下をヨコナデ、その下方からケズリ調整。口縁部で 1/4 遺存。	SB03
HJ182	SB07	9	古式土師器 甕	復元口径 残高	16.0cm 8.0cm	橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	体部が張り、短めの口縁部をもつ。頸部の屈曲は緩やかで、口縁端部はわずかに立ち上がる。体部外面はハケ調整、内面はナデ。頸部で 1/8 遺存。	SB03
HJ182	SB07	10	古式土師器 甕	復元口径 残高	12.9cm 5.0cm	褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	短めの複合口縁部をもち、外面には櫛描文を施す。肩部にはタテハケ、内面は摩滅。口縁部からみて吉備系と考えられるが、胎土は在地のものと同様である。口縁部で 1/8 遺存。	SB03
HJ182	SB07	11	古式土師器 S 字甕	復元口径 残高	13.0cm 4.7cm	暗赤褐色	やや粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	S 字甕で、屈曲は比較的鋭い。肩部外面はタテハケで、残存する最下部に２次ヨコハケが観察できる。内面には部分的にケズリ調整が認められる。口縁部で 1/4 遺存。	SB03
HJ182	SX09	1	古式土師器 有段口縁鉢	口径 残高	17.4cm 4.6cm	橙色	やや密、1mm 以下の砂粒含む。焼成不良。	焼成不良により表面は激しく摩滅し、器壁が薄くなっている。調整は内外面ともに不明瞭。口縁部完存。	SK44
HJ182	SX09	2	古式土師器 台付小型丸底壺	口径 残高	6.0cm 9.8cm	橙色	やや密、1mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	口縁部が短めの小型丸底壺にハの字にひらく脚部が取り付く。表面は摩滅するが、丸底壺部分で横方向のケズリのちヨコミガキ、脚部で縦方向のケズリのちヨコミガキが観察できる。脚部内面には斜め方向に絞り目がある。口縁部で完存。	SK44
HJ182	SX09	3	古式土師器 高杯	口径 器高	16.5cm 13.7cm	赤褐色	やや密、ほとんど砂粒なし。焼成良好。	深めの杯部をもち、受部との稜線や脚部の稜線も比較的明瞭。杯部外面は摩滅するが、内面には放射状のミガキが観察できる。脚部外面はヨコミガキ、内面は不明瞭であるが裾部にハケ調整がみられる。ほぼ完存。	SK44
HJ173	SE05	1	古式土師器 高杯	口径 残高	17.9cm 8.5cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	比較的ひらく杯部をもち、杯部と受部の稜線は緩やかであるが確認できる。杯部は内外面ともにハケ、脚部は外面ナデ、内面は不明瞭であるが絞り目が観察できる。杯部完存。	SK54
HJ173	SE05	2	古式土師器 高杯	口径 器高	17.3cm 12.8cm	淡黄褐色	粗、5mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	杯部と受部の稜線は緩やかで不明瞭。内外面ともに摩滅するが受部外面はハケ調整。脚部内面には絞り目が観察できる。この絞り目より上部は細長く筒状となる。脚裾部も緩やかに屈曲する。ほぼ完存。	SK54
HJ173	SE05	3	古式土師器 高杯	底径 残高	11.4cm 7.6cm	淡褐色	やや粗、1mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	脚裾部にかけての屈曲は比較的緩やかで稜線は不明瞭。外面はナデ、内面は脚裾部でハケ調整、脚柱部に絞り目が観察できる。脚部完存。	SK54
HJ173	SE05	4	古式土師器 高杯	口径 器高	17.0cm 12.0cm	褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	杯部と受部の稜線は不明瞭で、口縁端部が外反する。脚部も屈曲は緩やか。杯部外面は縦方向のハケ調整、脚裾部内面はハケ調整。ほぼ完存。	SK54
HJ173	SE05	5	古式土師器 高杯	口径 残高	21.2cm 5.5cm	淡褐色	やや粗、2mm 以下の砂粒少量含む。焼成やや不良。	受部成形後、杯部を貼り付け、接合部に粘土を貼り足して稜をつける大型高杯。外面は摩滅、内面は横方向のハケ調整。杯部完存。	SK54
HJ173	SE05	6	古式土師器 杯	口径 器高	12.3cm 3.7cm	淡褐色	粗、2mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	内外面ともにハケ調整で胎土は比較的もろい。完存。	SK54
HJ173	SE05	7	古式土師器 甕	口径 器高	13.5cm 19.0cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はあまりひらかず、端部も肥厚しない。外面は体部上半は横方向のハケ、下半は縦方向のハケ。内面はケズリ調整。外面全体に２次焼成のススが付着する。全体で 1/4 遺存。	SK54
HJ173	SE05	8	古式土師器 甕	口径 器高	15.8cm 25.0cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はやや内湾し、端部は肥厚する。全体的に薄手であり、体部外面はハケ調整、内面は頸部直下はヨコナデ、以下ケズリ調整。ほぼ完存。	SK54
HJ173	SK23	1	古式土師器 小型器台	口径 器高	9.7cm 8.8cm	淡褐色	やや密、ほとんど砂粒なし。焼成やや不良。	通有の小型器台で口縁端部はわずかに立ち上がる。杯部内外面は摩滅。脚部外面は摩滅するがヨコミガキ、内面はやや粗いハケ調整。３方向の透孔あり。ほぼ完存。	SK36
HJ173	SK23	2	古式土師器 壺	復元口径 残高	16.0cm 5.8cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部はゆるやかに外反し、頸部には低く突帯を貼り付ける。内外面ともにハケ調整。口縁部で 1/8 遺存。	SK36
HJ173	SK23	3	古式土師器 壺	復元口径 残高	15.4cm 6.6cm	褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	強く外反し、口縁部と体部の境目は不明瞭である。外面はヨコナデであるが、頸部付近以下では１次ハケ調整を施す。内面は摩滅。口縁部で 1/3 遺存。	SK36
HJ173	SK23	4	古式土師器 壺	復元口径 残高	16.2cm 7.8cm	淡黄褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成やや不良。	口縁部は直線的にひらき、端部は肥厚する。外面は摩滅し、内面は口縁部をヨコナデ。頸部の屈曲は比較的鋭く、頸部直下に接合痕が観察できる。口縁部で 1/3 遺存。	SK36
HJ173	SK23	5	古式土師器 壺	復元口径 残高	19.6cm 8.6cm	橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにヨコナデ。内面の頸部付近には粘土を横方向に貼り足している。口縁部で 1/5 遺存。	SK36
HJ173	SK23	6	古式土師器 壺	残高	8.9cm	橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	比較的大型の壺肩部片で口縁部の剥離痕が一部で残る。外面は頸部付近をヨコナデ、その直下に横方向にやや波打つヨコハケを施し、以下不定方向のハケ調整。内面は横方向を中心とするハケ調整。頸部で 1/6 遺存。	SK36
HJ173	SK23	7	古式土師器 甕	復元口径 残高	14.0cm 13.4cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	わずかに内湾気味の口縁部で端部は肥厚する。口縁部は内外面ともにヨコナデ。体部外面はハケ、内面は頸部直下はヨコナデし、以下ケズリ調整。口縁部で 1/2 遺存。	SK36
HJ173	SK23	8	古式土師器 S 字甕	復元口径 残高	11.8cm 4.2cm	淡褐色	やや粗、2mm 以下の砂粒少量含む。焼成やや不良。	S 字甕で、口縁端部は非常に薄い。肩部外面は斜め方向のハケ調整、内面は摩滅。口縁部で 1/4 遺存。	SK36
HJ173	SK23	9	古式土師器 甕	復元口径 残高	12.0cm 4.8cm	橙色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	複合口縁をもち、２次口縁部はやや長めに斜め方向へ立ち上がる。１次口縁部の稜線はやや緩やか。摩滅し調整は不明瞭であるが、肩部内面は横方向のケズリ調整。口縁部で 1/4 遺存。	SK36
HJ173	SK23	10	古式土師器 甕	復元口径 残高	15.0cm 3.9cm	淡褐色	粗、3mm 以下の砂粒含む。焼成良好。	複合口縁をもち、２次口縁部は短く立ち上がる。２次口縁部の外面には櫛描文に起因するとみられる条線がわずかに残る。頸部内面にはやや面をもち、肩部内面はケズリ調整。形態から吉備系とみられるが、胎土は在地のものと考えられる。口縁部で 1/2 遺存。	SK36

胎土も粗く粗製品である。

甕は８が布留甕であるが､肩部ヨコハケはみられない。７は口縁部が肥厚せず、典型的な布留甕の形態を逸脱しつつあるものである。

以上の特徴のなかでも、高杯がハケ調整を基調とし大型高杯を含むこと、杯状の鉢を含むこと、布留甕の肩部ヨコハケが消失していることが注目できる。

SK23（HJ173-SK36）　直径約 2.4m の不整円形を呈し、深さ約 0.4m である。小型器台（１)、壺（２～６)、甕（７～ 10）が出土した。

１は、外面にわずかにヨコミガキが残るが、内面はハケ調整のものである。

壺は、いずれもハケ調整を主とし、様々な口縁部形状のものがある。

甕は典型的な布留甕（７）のほか、S 字甕（８）や吉備系（10）のものを含む。

ここでは、壺や甕が主体であり、精製の小型器台１点を含むものの、その他精製器種や高杯を含まないことが特徴である。

Ⅳ．菅原東遺跡出土土器の編年

菅原東遺跡では、重複する遺構が少なく層位による土器年代の前後関係を追うことが困難である。したがって、編年を行う場合は一括資料に基づいて型式学的検討を行う必要がある。

菅原東遺跡出土土器については、本稿以前に概要報告されたものに筆者が加筆修正を加えたもの（村瀬 2016）と、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）の調査出土土器（橿考研 2011）がある。ほかに、奈良市教育委員会が調査した方形区画溝 SX22 周辺の溝資料があるが、これについては橿考研調査溝と繋がると思われるため、本稿をもって、概ね菅原東遺跡の主要遺構についての土器様相は報告されたといえる。以下では、各遺構出土土器をもとに、器種ごとに型式分類を行い、その様相を総合的に検討することで編年を行う。

ⅰ）各種土器の分類

小型丸底土器　特徴をもとに分類すると、①高さの比率が口縁部＜体部でヨコミガキを施すもの、②口縁部＝体部でヨコミガキを施すもの、③口縁部＞体部でヨコミガキを施すもの、④口縁部≧体部で一部縦方向のミガキを施すもの、⑤口縁部＜体部で外面ハケ調整のもの、⑥口縁部＜体部で外面ナデ調整のもの、に分けられる。

小型器台　分類すると、①中実で外面ヨコミガキを施すもの、②Ｘ字状を呈し外面ヨコミガキを施すもの、③Ｘ字状を呈し、外面ハケ調整のもの、④中実で器壁が厚くナデ調整の粗製品であるもの、に分けられる。

有段口縁鉢　分類すると、①内外面ともにヨコミガキを施すもの、②ミガキを施さない粗製品であるもの、に分けられる。

高杯　分類すると、①杯部と受部の稜が明瞭で外面にヨコミガキを施し、杯部内面に放射状暗文を施すもの、②杯部と受部の稜が明瞭で杯部内外面ヨコミガキであるもの、③杯部と受部の稜が明瞭で杯部内外面ハケ調整であるもの、④杯部と受部の稜が不明瞭で杯部内外面ハケ調整のもの、⑤杯部と受部の接合部に段差をつけ杯部内外面ハケ調整のもの、に分けられる。

杯　分類すると、①外面にケズリ調整を施すもの、②内外面ハケ調整であるもの、に分けられる。

二重口縁壺　分類すると、①口縁部にミガキ後波状文を施し、垂下口縁部に竹管文を加飾するもの、②口縁部外面に竹管文を加飾するもの、③加飾はなく、内外面にヨコミガキを施すもの、③ミガキ調整がなく頸部が屈曲するもの､④ミガキ調整がなく頸部が直線的にのびるもの、に分けられる。

直口壺　分類すると、①ヨコミガキ調整を施すもの、②ハケ・ナデ調整を施すもの、に分けられる。

甕（外来系を除く）　分類すると、①外面タタキであるもの､②口縁部が直線的にのびて端部がわずかに肥厚し、外面ハケ・内面ケズリ調整のもの、③口縁部が内湾気味にのびて端部が肥厚し、外面ハケ（肩部ヨコハケあり)・内面ケズリ調整のもの、④口縁部が内湾気味にのびて端部が肥厚し、外面ハケ（肩部ヨコハケなし）・内面ケズリ調整のもの、⑤口縁部が肥厚せず、外面ハケ・内面ケズリ調整のもの、に分けられる。

ⅱ）菅原東遺跡の土器様相

様相１　SX09 が該当する。小型丸底土器は脚付のものであるが、口縁部が短くヨコミガキを施すものである。有段口縁鉢は調整不明瞭であるがそれを含む。高杯は杯部内面に放射状暗文を施すのが特徴であり、庄内系高杯の系譜にあるものである。

大和地域における有段口縁鉢の出現は、寺澤編年布留１式以降であるが、放射状暗文を施す高杯は布留１式後半以降減少傾向となる。出土量が少ないため、厳密な位置づけは困難であるが、布留１式後半以前に相当する。

様相２　SB07・SB04・SK23 が該当する。小型丸底鉢は口縁部が発達するものが主体であるが、製作技法はケズリのちヨコミガキを密に施す丁寧なものである。有段口縁鉢は、SB04 で粗製品を含むが精製品が主体である。

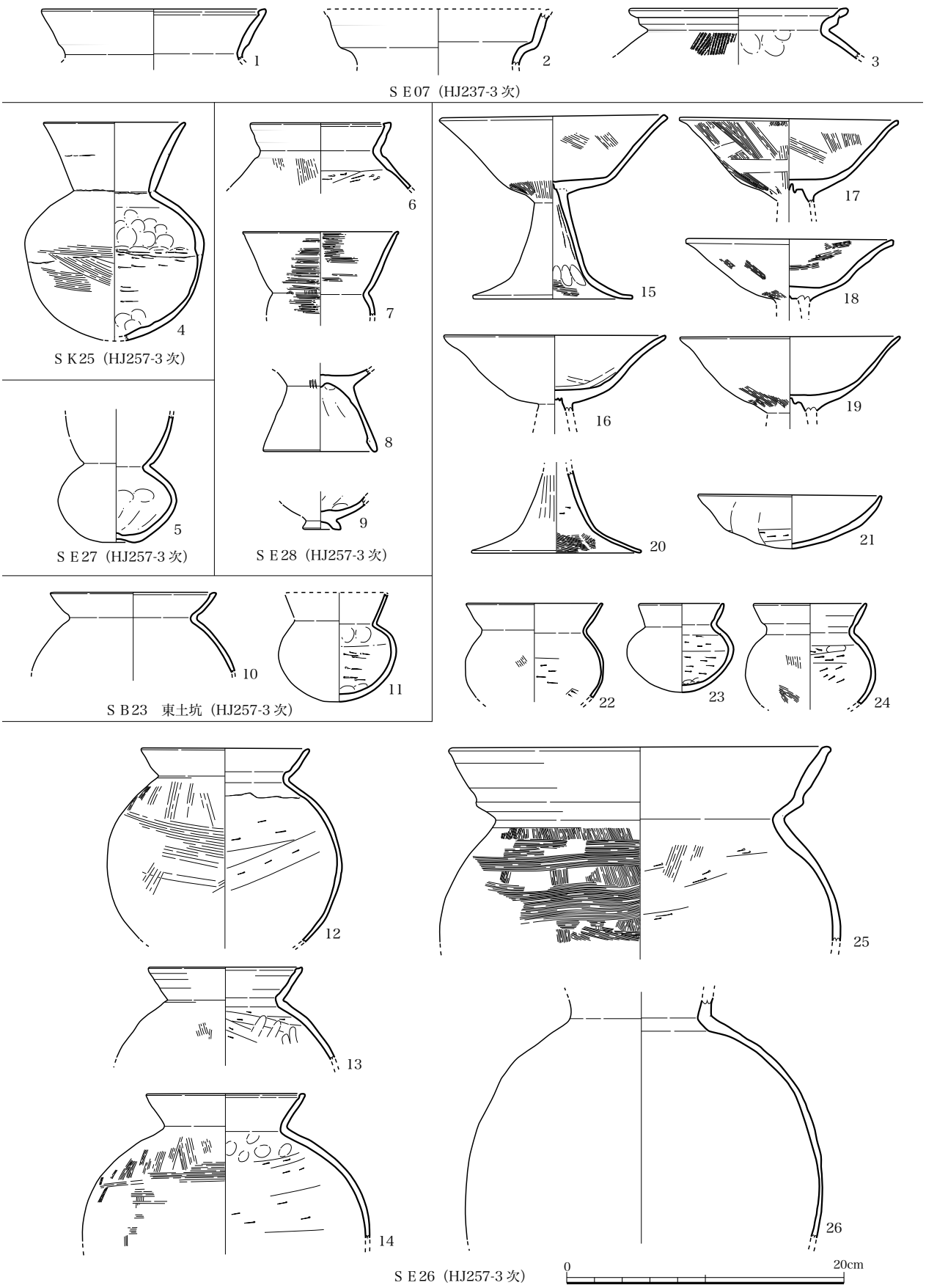
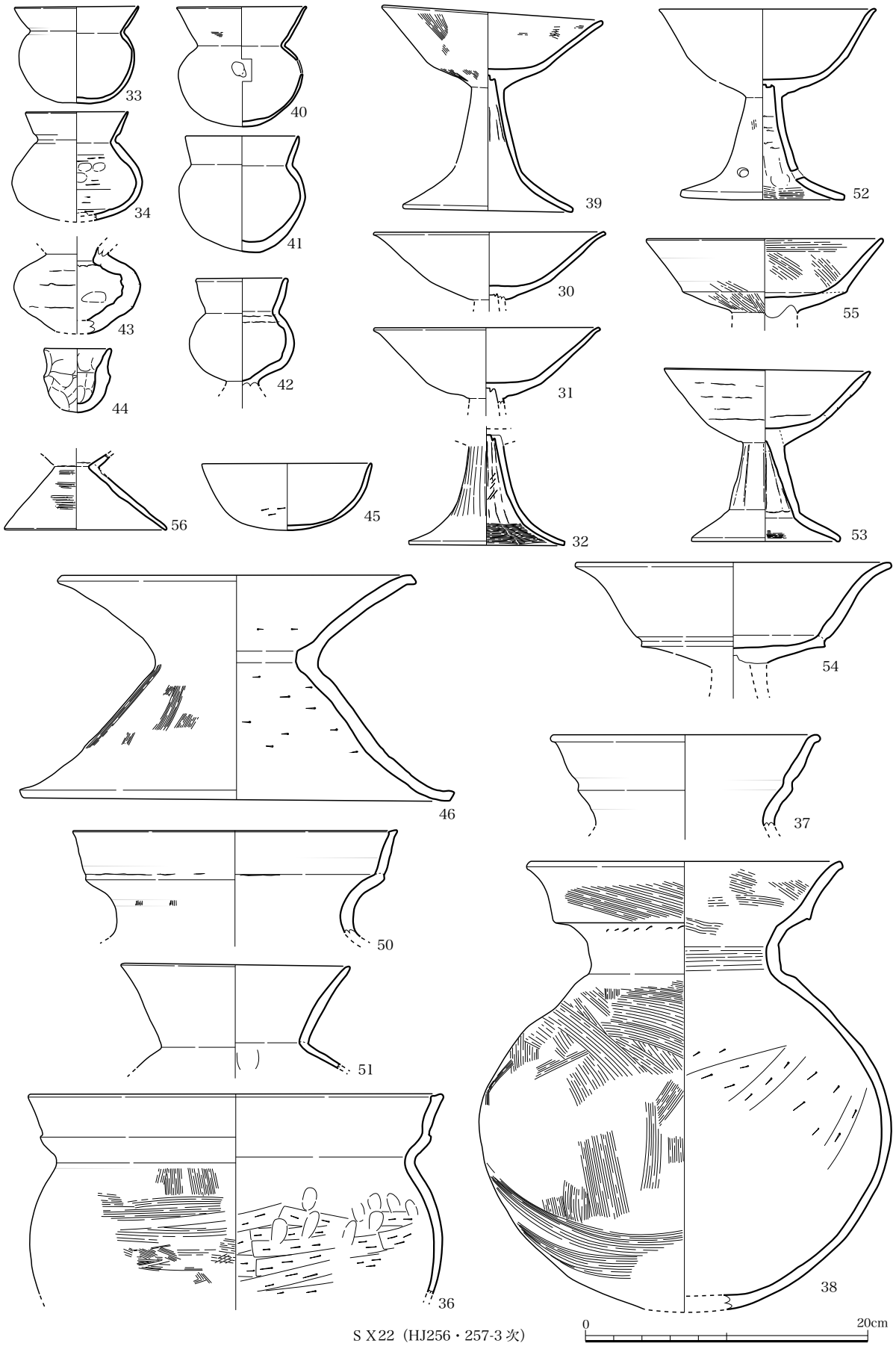


図９　菅原東遺跡出土土器（1/4）（土器番号は（村瀬 2016）の観察表に対応）



S X22（HJ256・257-3 次）

図 10　菅原東遺跡出土土器（1/4）（土器番号は（村瀬 2016）の観察表に対応）

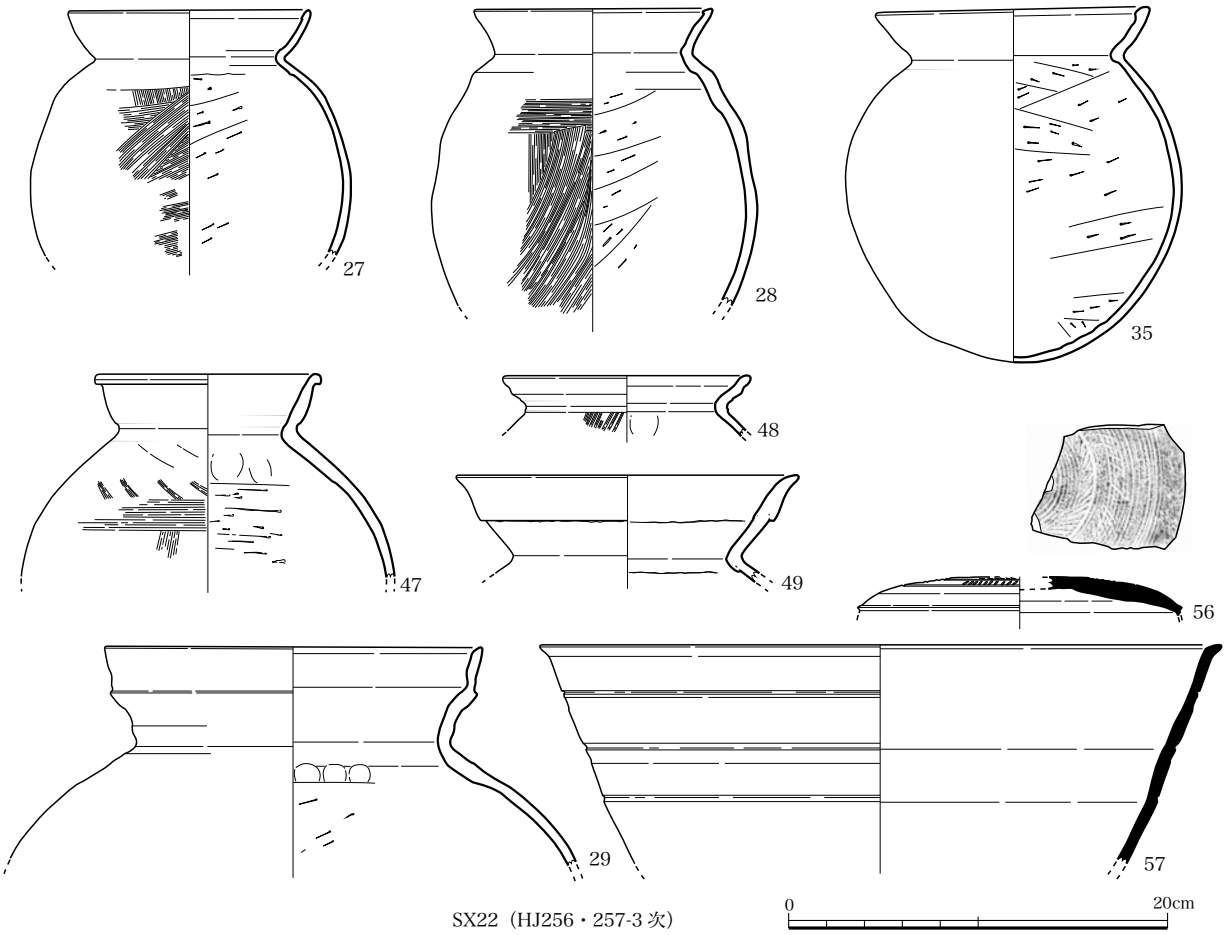


図 11　菅原東遺跡出土土器（1/4）（土器番号は（村瀬 2016）の観察表に対応）

小型器台は中実のものに加え、X 字状のものがあり、ヨコミガキが比較的密で胎土等も精製品である。高杯は杯部と受部の稜が明瞭で、ヨコミガキを施す。壺では、二重口縁壺で加飾のあるものやヨコミガキを施す精製品を含む。また、精製の直口壺を含む。広口壺は比較的多様な形態があり、編年の指標を現状見出し難い。甕は、伝統的第Ⅴ様式系のタタキ甕がわずかながら残存し、庄内系統の口縁部処理をするものも含むが、典型的な布留甕が主体である。ほかに、吉備・山陰・東海系の外来系土器を含むが、いずれも在地の胎土であるものが多い。

大和地域における小型丸底鉢の口縁部の発達、X 字状器台の出現は布留 1 式後半に求められ、精製の有稜高杯や加飾壺の残存、伝統的第Ⅴ様式甕の存在も、寺澤編年における布留 2 式に下らない根拠となる。ただし、寺澤編年における布留 2 式の基準資料には、器種構成の良好な一括資料に乏しく、なおかつ各器種で布留 1 式後半の特徴を継続するとされるものが多くある。したがって、ここではやや幅をもたせ、様相 2 は布留 1 式後半～布留 2 式と設定しておき、今後奈良市域の出土資料整理をふまえて再考したい。とくに豊富な器種構成である SB04 は、様相 2 の基準資料といえる。

様相 3　SE26・SB23 東土坑が該当する。小型丸底土器は、口縁部の発達する鉢を含まず、外面ハケ・内面ケズリ調整の壺が主体となる。高杯は、やや稜を残す個体があるものの、基本的に稜は消失して口縁端部がやや反る形状のものとなる。また、全体の調整はハケ調整が基調となる。菅原東遺跡としてはこの段階で杯がみられる。甕は口縁部が肥厚し肩部ヨコハケを施す布留甕のほか、口縁端部が肥厚しないものもある。

大和地域において精製小型丸底鉢から粗製小型丸底壺が主体となるのは、布留 3 式に位置づけられる。ハケ調整の高杯が主体となるもの、これに呼応するものであり、とくに SE26 は様相 3 の基準資料といえる。

様相 4　SB03 が該当する。小型丸底壺は、様相 3 の外面ハケ調整のものがわずかにあるが、主体はナデ調整のものとなる。器台は、中実で器壁の厚いナデ調整の器種が登場する。SB03 では 8 ～ 10 のように様相 2 で主体となる器種が図示した 3 点含むが、混入とはみられず、この段階でもわずかに含みうる状況であるとみられる。高杯は様相 3 と類似するが、口径に対して杯部が浅くな

表２　遺構別土器分類組成表

	SX09	SB07	SB04	SK23	SE27	SE28	SK25	SX06	SE07	SE26	SB23 東土坑	SD04	SB03	SE05	SD24	SX22
小型丸底土器	①	②	②③		③	③				④	④	④⑤	④⑤		④⑤	④⑤
小型器台		②	①②	①				③				③？	②④			②
有段口縁鉢	①？		①②										②			
高杯	①	②	②							③④		③④	④	④⑤	④⑤	③④⑤
杯										①				②		①
二重口縁壺		②③	①②③④													③
直口壺			①	②			②									
甕（外来系除く）		②	②③？	③？					②	③⑤	③？	③？	③⑤	④⑤	④⑤	④⑤
東海系		甕	甕・壺	甕		甕			甕				甕			
山陰系			甕													甕、器台
吉備系		甕		甕												
初期須恵器																蓋、器台
様相	1	2			2～3					3		3～4	4	5		3～5
寺澤編年	布留１式	布留１式後半～２式			布留２～３式					布留３式		布留３式～４式		布留４式		

る傾向がある。甕は、肩部ヨコハケを施す布留甕を含むものの、特異な形状の口縁部をもつ甕も含まれる。

大和地域において、小型丸底壺のナデ調整化は、これまであまり議論されておらず、概ね布留３～４式の範疇でとらえられている。新たな形態の器台の出現も含めて、菅原東遺跡のなかでは画期となる段階だが、今後周辺資料をふまえて既存編年と比較検討する必要がある。

様相５　SE05・SD24 が該当する。基本的な器種構成は様相４と同様であるが、新たに有稜の大型高杯が出現する。また、甕では肩部ヨコハケの布留甕が消失傾向にあるといえる。補足として SX22 では大型高杯に加えて初期須恵器が数点出土しており、概ね須恵器出現段階に併行するとみられる。様相４の SB03 上面を覆う包含層からも大型高杯が出土しており、実質的に様相４・５は同時期とみなせる可能性がある。

大和地域における大型高杯や初期須恵器の出現は、布留４式に位置づけられる。

Ⅴ．菅原東遺跡の集落動態

以上で報告した土器類をもって、概ね現状における菅原東遺跡の主要な一括資料を提示した。以下では、菅原東遺跡の集落動態についての考察を行う。

ⅰ）既往の研究

菅原東遺跡については、岡田憲一（岡田 2011・2014）、中野咲（中野 2016）、筆者（村瀬 2016・2018）による検討がある。

岡田は、方形区画溝 SX22 とその周辺の区画溝の検討から、１～３期に区分した（岡田 2011）。この検討には橿考研が調査した溝 SD04・24・201・202 出土土器および、概要報告での SX22 出土土器を参考に行われており、第２期（布留３式）～３期（布留４式）の出土土器をもとにした検討に加え、概要報告での文章表記を頼りに、第１期を SX22 設営期として設定した。SX22 出土土器を廃棄年代とみて、その設営年代を遡って設定した点は先見である。その後、これらをまとめ直した後稿（岡田 2014）があるが、基本的には同様の概念に基づき、新たにⅠ～Ⅳ期に段階区分を行った。ただし、いずれもその初期段階の設定は、出土土器が未報告であることから、状況証拠的仮説であり、資料報告が望まれた。

そこで筆者は、岡田の指摘した方形区画溝 SX22 とそこに重複する井戸等の出土土器を報告した（村瀬 2016）。その結果、SX22 からは既往の認識通り布留３～４式段階の土器が主体であり、それを如実に示す大型高杯や初期須恵器の存在を提示した。一方、これに重複する井戸等の遺構のうち、SE27 や SE28 では、口縁部の発達する小型丸底土器が出土しており、SX22 の設営期の状況をより示すとみられるこれらの遺構では、布留２式段階まで遡りうる実態を提示した。

中野は、菅原東遺跡を含めた秋篠川流域の集落動態を検討するなかで、菅原東遺跡は岡田の見解を追認し、秋篠川東岸が布留１式段階に開発が始まることをふまえて、段階的な開発状況を示唆している（中野 2016）。

以上のように、検討は進められつつあるものの、出土資料の報告がないことから、踏み込んだ検証に至れてい

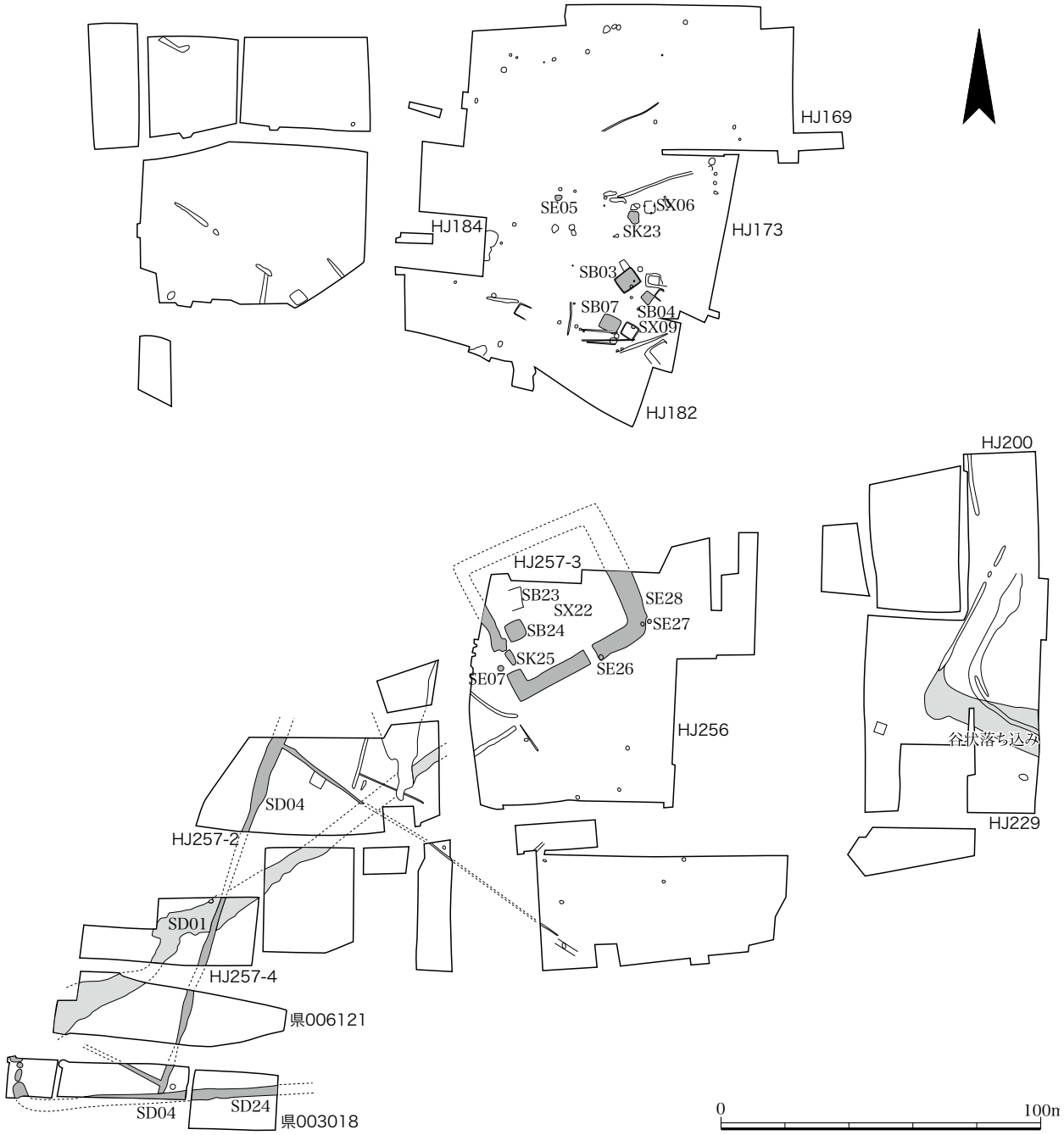


図 12　古墳時代前期における菅原東遺跡の遺構配置（1/700）

ないことが読み取れる。筆者自身が提示した SX22 と周辺出土土器についても、出土量が少なく時期を遡らせることに対し慎重にならざるを得なかった。

ⅱ）出土土器からみた遺構変遷

既往の研究をふまえて、本稿では菅原東遺跡の中心部とみられてきた方形区画溝 SX22 の北側に位置する竪穴建物・土坑群出土土器の報告を行った。その結果、SB04 では確実に布留 1 式後半～ 2 式に遡る一括資料を確認し、菅原東遺跡の開発がこの段階まで遡ることが明らかとなった。以下では、これらをもとにして遺構変遷を段階ごとに確認したい。

第 1 期：萌生期（布留 1 式後半段階）

菅原東遺跡における竪穴建物・土坑群が多く検出された HJ 第 169・173・182・184 次調査の発掘区では、弥生時代中期の方形周溝墓を検出しており、集落としてはこの時期にすでに開発されている。しかし、その後の竪穴建物・土坑群は方形周溝墓と重複する形で開発されているため両者の関連性はなく、古墳時代になってからある契機をもってここに集落が開発されたとみてよい。

開発時期は、SB04 出土土器から布留 1 式後半段階とみられる。土器編年上、これよりやや古い様相を示す SX09 は、SB08 内の小土坑であり、SB08 は SB04 より

やや古い可能性があるが、少なくともこれまでの認識よりさらに遡る布留１式段階に集落開発が始まることがわかる。方形区画溝 SX22 および周辺出土土器は、これらより新しい様相であり、竪穴建物群が造営されはじめる段階に、方形区画溝は未掘削であったとみられる。

第２期：開発期（布留２式段階）

集落の中心部とみられる方形区画溝 SX22、およびそれに接する井戸等が構築される。第１期では竪穴建物等がベースキャンプのように営まれているのみであったが、方形区画溝の掘削は首長居館としての体裁を整備したと評価できる点で画期である。方形区画溝の周辺にも区画溝が交差するように掘削されるが、一部はこの段階に整備が始まったと考えられる。

竪穴建物・土坑群では良好な器種構成をもつ一括資料がこの段階に見当たらない。SX06 は SB01 内の小穴であるが、第１期に比べて粗雑化した小型器台が出土しており、引き続き居住空間としての機能は継続されているとみられる。

第３期：盛行期（布留３式段階）

方形区画溝周辺の区画溝を含めてほとんどの集落整備が完了する段階とみられる。区画溝等の出土遺物は、概ね布留３～４式に位置づけられるものが主体を占め、若干布留２式に遡るものが含まれる状況から、この段階が最も集落として盛行した段階と考えることができる。

竪穴建物・土坑群においても SB03 などの遺構が存在し、第１期から竪穴建物が継続する状況を示す。

第４期：廃絶期（布留４式段階）

方形区画溝 SX22、区画溝 SD04・24 等、竪穴建物・土坑群の井戸 SE05 からは、布留３～４式の土器が埋没年代を示しており、上述した竪穴建物 SB03 も上面を覆う埋土から大型高杯が出土している点からみても、各エリアでこの段階に廃絶する状況がうかがえる。

SX22 では初期須恵器が出土しているが、菅原東遺跡全体でみればほとんど出土はなく、布留４式の比較的早い段階に集落としての機能が失われたとみられる。

ⅲ）佐紀地域としての評価

従来、菅原東遺跡出土土器として報告されてきた遺構は、方形区画溝 SX22・井戸 SE26、区画溝 SD04・24 であった。これらの土器はいずれも布留３式以降に位置づけられるもので、集落の主要な時期を示すものとして評価されてきた。その後、岡田憲一や筆者による補足によって、布留２式段階まで遡りうる可能性を指摘してきた。

しかし、本稿で検討してきたように、菅原東遺跡の中心部（方形区画溝 SX22 等）の開発は布留２式段階であるものの、北側に隣接する竪穴建物・土坑群、つまり菅原東遺跡としての開発は布留１式段階に遡ることが明らかとなった。したがって、秋篠川流域としてみた場合、これまで段階的開発であると評価されてきたが、ほぼ同時期に菅原東遺跡・山陵町遺跡が開発されはじめるものと再評価できる。このことは、佐紀古墳群との関連を検討する上でも重要な集落動態と位置づけ得る。

Ⅵ．菅原東遺跡と佐紀古墳群

菅原東遺跡については、約 500m 南に位置する宝来山古墳との関連が指摘されてきた（岡田 2011・村瀬 2018）。集落と遺跡の時期や位置関係からみても妥当であり、本稿でも対比検討した山陵町遺跡は佐紀陵山古墳を含む佐紀古墳群西群に関連するものとみてよかろう。以下では、このことについて、古墳出土埴輪等と集落出土土器の比較検討から、その妥当性を示したい。

ⅰ）埴輪編年からみた古墳変遷

佐紀古墳群をはじめとする大型古墳群は、陵墓に治定されており、副葬品が不明確である場合が多い。ただし、埴輪については宮内庁による報告等で、若干ながら様相が全体を通して把握できる。以下では、埴輪から大型古墳の前後関係を概観する。

佐紀陵山古墳では、形象埴輪がいくつか知られている。なかでも、蓋形埴輪は肋木を有し、笠部を立体表現するもので、立ち飾りも最古段階の表現である（小栗 2007）。円筒埴輪は良好な資料に恵まれないが、補完資料として、北東側に位置するマエ塚古墳出土埴輪がある（奈良県教育委員会 1969）。黒斑を有する鰭付円筒埴輪で、底部高が突帯間隔の２倍で割り付けられたものや口縁部高が低いものが含まれ、埴輪編年Ⅱ期のなかでも古相に位置づけられる。

佐紀石塚山古墳は、佐紀陵山古墳の西側に接する前方後円墳で、東側周濠が極端に狭く、佐紀陵山古墳に規制されたことが原因と考えられることから、それに後出するとみられる。出土埴輪は段数構成等がわかるものはないが、鰭付円筒埴輪や柵形埴輪、蓋形埴輪の笠部が立体表現であるものを含む（宮内庁書陵部 1996・1997）。時期を特定するのは困難であるが、埴輪編年Ⅱ期のなかでおさまる可能性がある。

宝来山古墳では、これまで埴輪の様相が不明確であったが、加藤一郎による資料報告がなされている（加藤 2012）。それによると、口縁部高 8cm 程度の黒斑を有する円筒埴輪があり、形象埴輪では笠部を立体表現する

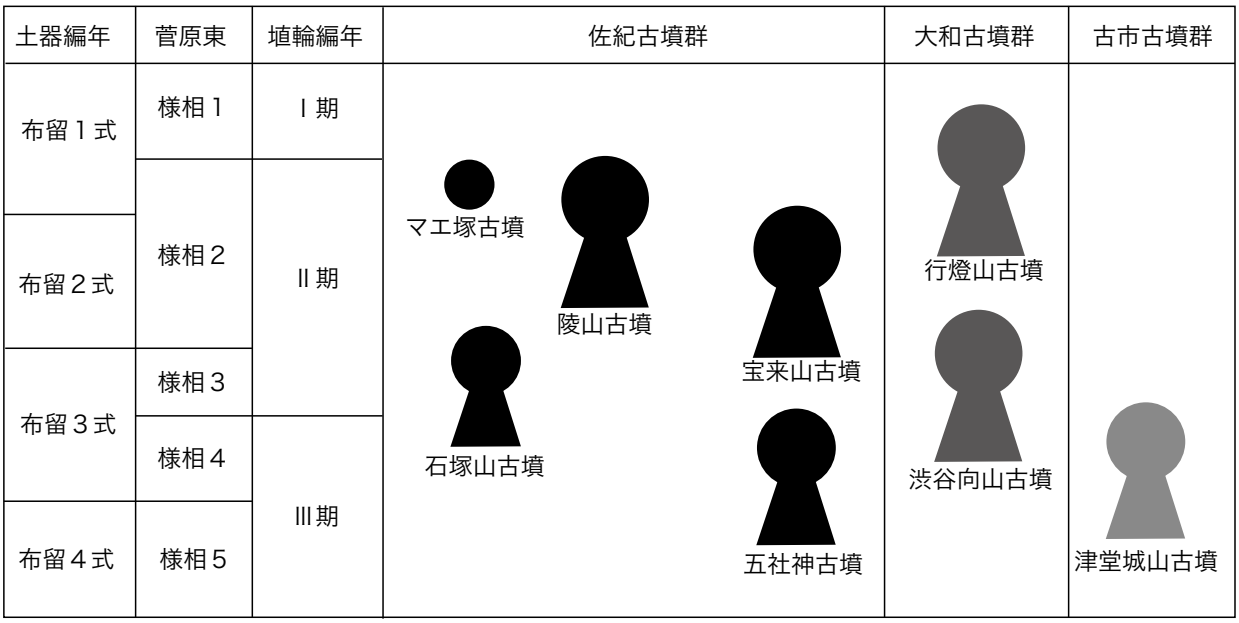


図 13　菅原東遺跡の動態と佐紀古墳群

蓋形埴輪や靫形埴輪の出土が報告されており、埴輪編年Ⅱ期に位置づけられている。

五社神古墳は、墳丘裾の調査が行われ、黒斑をもち二次調整ヨコハケに静止痕のない円筒埴輪が出土している（宮内庁書陵部 2004）。鰭付円筒埴輪も存在するが透孔は円形のものが多く、若干方形のものもある。また、形象埴輪では蓋形埴輪の笠部が線刻表現であるものが出土している。B 種ヨコハケの個体が現状みつかっていないことから、埴輪編年Ⅱ期の範疇であるが、笠部が線刻表現の蓋形埴輪や籠目土器が共伴するのは、Ⅲ期に下る場合が多いことから、時期的に下る可能性を考慮すべきであろう。

以上からみると、佐紀古墳群ではとりあげた４つの古墳がいずれも概ね埴輪編年Ⅱ期の範疇にあり、立地的にみて佐紀陵山→佐紀石塚山古墳、蓋形埴輪や籠目土器の出土からみて、佐紀陵山→五社神古墳であろうと考えられる。宝来山古墳では靫形埴輪が出土しており、佐紀陵山古墳では現状知られていないことから、佐紀陵山→宝来山・佐紀石塚山→五社神古墳の変遷を想定する。

ⅱ）土器との併行関係

上述した４つの古墳からは、築造時期に関わる古式土師器が出土していない。したがって、他地域の大型古墳群との関連を考慮して併行関係を検討する。

大和古墳群では、行燈山古墳と渋谷向山古墳が検討対象となる。行燈山古墳では東側の外堤斜面葺石から小型丸底鉢が出土している（宮内庁書陵部 1976）。口縁部がやや発達するものの、口縁部高＝体部高となるもので、布留１～２式の範疇で検討できるものである。埴輪は良好な資料が見当たらないものの、隣接する櫛山古墳では定型化以前の鰭付円筒埴輪や柵形埴輪が出土しており、埴輪編年Ⅰ–5 期に位置づけられる。

渋谷向山古墳は、宮内庁の調査によって埴輪が確認されており、円筒埴輪は黒斑をもち円形透孔を主体とする（大阪市立大学日本史研究室 2010、宮内庁書陵部 2017）。B 種ヨコハケはなく墳丘に配置されたものの多くは鰭のないものであったと考えられる。形象埴輪でも蓋形埴輪は笠部が線刻表現のものであり、靫形埴輪の出土もみられる。出土土器は前方部周辺から出土しており、口縁部の発達する小型丸底鉢等があり、概ね布留１式後半～布留２式に位置づけられる（宮内庁書陵部 1974）。ただし、これらの土器が墳丘構築前後のいずれを示すかは不明確である。

また、補足として古市古墳群で最古段階にあたる津堂城山古墳では、B 種ヨコハケの埴輪が少量出土することから埴輪編年Ⅲ－１期に位置づけられるが、蓋形埴輪の型式は五社神古墳と同一のものであり、概ねこれらは同時期としてみることができる。

津堂城山古墳外濠の堆積土からは外面ハケ・内面ケズリ調整で口縁部＜体部となる粗製小型丸底壺や、肩部ヨコハケを残す布留甕が出土しており、概ね布留３式の特徴といえる（藤井寺市教育委員会 2013）。内堤外側斜面からは TK73 ～ 208 型式の須恵器が出土しており、以上をふまえても、概ね布留３～４式にかけて外濠の初期堆積があったとみてよかろう。

以上をまとめると、大和古墳群では埴輪からみて行燈山古墳（Ⅰ－５期）→渋谷向山古墳（Ⅱ－２期）であり、

土器併行関係としては補完資料を含めて、行燈山古墳（Ⅰ－５期：布留１式後半）→佐紀陵山古墳（Ⅱ－１期）→宝来山古墳（Ⅱ－１～２期）→渋谷向山古墳・佐紀石塚山古墳（Ⅱ－２期：布留２式後半）→五社神古墳・津堂城山古墳（Ⅲ－１期：布留３式）と考えられる。

ⅲ）菅原東遺跡の動態と宝来山古墳

最後に、改めて菅原東遺跡と宝来山古墳の関連をまとめる。宝来山古墳の築造時期は、埴輪編年Ⅱ－１期に対応する良好な出土土器がないものの、前述の検討により概ね布留１式後半～布留２式前半段階にあたると想定することができた。これをもとに、先に提示した菅原東遺跡の時期区分と比較し、その動態を検討する。

宝来山古墳の築造開始は、概ね布留１式後半～布留２式前半段階のなかで考えられる。これは菅原東第１～２期にあたり、方形区画溝は未整備で、竪穴建物・土坑群が造営され始める時期と概ね合致する。つまり、宝来山古墳の築造開始と菅原東遺跡の開発開始時期が一致する。この段階における菅原東遺跡の様相は、竪穴建物がいくつか存在する程度であり、その存続時期幅も、土器型式でいう一型式分に満たない。だからこそ、竪穴建物ごとの土器様相に一括性が認められるのである。したがって、これらの竪穴建物は、宝来山古墳築造のための仮設キャンプとみることができる。

次に、宝来山古墳の築造が完了する布留２式段階は、菅原東第２期に相当する。この段階になると、方形区画溝などによる区画が整備され、全国的にみられる古墳時代の首長居館としての整備がはじまる。

また、この時期の大型前方後円墳の多くは、一般的に寿陵と考えられることから、菅原東第３期は、宝来山古墳での埋葬が完了した直後の段階に相当するとみられる。この時期には、菅原東遺跡の整備が完全に完了しており、集落としての最盛期を迎えている。

菅原東第４期は、一斉に遺構が廃絶し、集落としても以後古墳時代後期に至るまで遺構がみられなくなる。

つまり、宝来山古墳の築造開始とともに集落が成立した菅原東遺跡は、そこでの埋葬が完了してほどなく廃絶するという様相を示す。つまり、菅原東遺跡は一般的な生活集落とは異なり、宝来山古墳の築造および、その被葬者の動態に関わる集落遺跡であると評価できる。

Ⅶ. おわりに

本稿では、HJ 第 169・173・182・184 次調査出土土器の再整理報告を行い、これまで報告されてきた菅原東遺跡出土土器をあわせて、遺跡内での土器編年を行なった。これをもとに集落動態を４時期区分した。

また、佐紀古墳群をはじめとする大型古墳群出土埴輪・土器からその変遷を明らかにし、菅原東遺跡に近接する宝来山古墳との関係を考察した。

その結果、菅原東遺跡は宝来山古墳の築造時期と消長をほぼともにすることがわかった。このことは、従来報告されてきた布留３～４式の土器類だけでは検証できなかったもので、再整理によって集落の時期幅が明らかになったことで、はじめて動態を検証できたといえる。

引用文献

大阪市立大学日本史研究室 2010『玉手山１号墳の研究』

岡田憲一 2011『平城京右京三条二・三坊　菅原東遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

岡田憲一 2014「奈良市菅原東遺跡の所謂「首長居館」とその周辺整備」『古墳出現期土器研究』２　古墳出現期土器研究会

加藤一郎 2012「垂仁天皇菅原伏見東陵採集の埴輪について」『書陵部紀要』64 宮内庁書陵部

宮内庁書陵部 1974「景行天皇山辺道上陵の出土品」『書陵部紀要』26

宮内庁書陵部 1976「崇神天皇陵外堤及び墳丘護岸区域の事前調査」『書陵部紀要』28

宮内庁書陵部 1996「狭城盾列池後陵整備工事区域の事前調査」『書陵部紀要』48

宮内庁書陵部 1997「狭城盾列池後陵整備工事区域の事前調査 - 第１トレンチの出土品 -」49

宮内庁書陵部 2004「神功皇后 狭城盾列池上陵墳裾護岸その他整備工事区域の調査および墳丘外形調査」『書陵部紀要』56

宮内庁書陵部 2017「景行天皇 山邊道上陵整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』68

寺澤薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

中野咲 2016「奈良盆地北縁における弥生時代から古墳時代への集落動態の実態」『古墳出現期土器研究』４ 古墳出現期土器研究会

奈良県教育委員会 1969『マエ塚古墳』

奈良市教育委員会 1990「平城京右京三条三坊一坪の調査　第 169.173.182.184 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成元年度』

奈良市教育委員会 1992「菅原東遺跡の調査　第 200 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成３年度』

奈良市教育委員会 1993「平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡の調査　第 256 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成４年度』

奈良市教育委員会 1994「平城京右京三条三坊二坪　菅原東遺跡の調査　第 257-3 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成５年度』

藤井寺市教育委員会 2013『津堂城山古墳—古市古墳群の調査研究報告Ⅳ—』

村瀬陸 2016「菅原東遺跡の首長居館出土土器—古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究Ⅰ—」『古墳出現期土器研究』４ 古墳出現期土器研究会

村瀬陸 2018「HJ229・443-7 次出土埴輪からみた菅原東遺跡と宝来山古墳 - 古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究Ⅱ -」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 27 年度』奈良市教育委員会

村瀬陸 2019「菅原東遺跡出土石見型埴輪の検討」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 28 年度』奈良市教育委員会

印刷・製本仕様データ

表　　紙：アートポストカード220kg/㎡・マットpp加工
見 返 し：白色上質紙110kg/㎡
巻頭図版：特アート紙135kg/㎡
本　　文：白色マットコート紙104.7kg/㎡
本文ﾌｫﾝﾄ：ヒラギノ明朝体
製　　本：左開き・糸かがり綴じ

ⓒ2021 by the Nara Municipal Board of Education
No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 30(2018)年度

ISSN 1882-9775

印　刷　令和３（2021)年３月17日

発　行　令和３（2021)年３月27日

編　集　奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135　奈良市大安寺西二丁目 281 番地
ＴＥＬ　０７４２－３３－１８２１
ＦＡＸ　０７４２－３３－１８２２
ＵＲＬ　http://www.city.nara.nara.jp/
E-mail　maizoubunka@city.nara.lg.jp

発　行　奈良市教育委員会
630-8580　奈良市二条大路南一丁目１－１
ＴＥＬ　０７４２－３４－１１１１（代）

印　刷　株式会社 JITSUGYO
630-8144　奈良県奈良市東九条町6-6

ISSN 1882-9775

ANNUAL RESEARCH REPORT OF ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA 2018

CONTENTS

Ⅰ PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN 2018

Ⅱ REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2018

Ⅲ THE REPORT OF ANCIENT RELICS

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION
2021